

鳥取県米子市

ME GU MI  
目 久 美 遺 跡  
VIII

2003. 3

財団法人 米子市教育文化事業団

# 序

米子市は、鳥取県の西部、日本海側に位置し、山陰の商都と称される鳥取県西部の中核都市です。米子市では道路建設等、交通網の整備が急速に進められ、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、この地域の歴史を考えるうえで重要な遺跡が数多く発見されています。

本書は、平成12年度に実施した米子市目久美町に所在する目久美遺跡の第8次発掘調査報告書です。目久美遺跡は、昭和8年に新加茂川の開削工事中に発見され、山陰地方を代表する縄紋、弥生時代の遺跡として周知されています。また昭和57年には山陰地方で初めて弥生時代の水田跡が確認され注目を集めました。このほかにも保存状態のよい遺物が数多く出土し、当時の人々の暮らしを探る上での貴重な資料を数多く提供しています。

今回実施しました第8次調査では、弥生時代の水田跡のほか、縄紋時代にかつてこの地が海であったことを示す資料を得ることができました。これらの成果は、今後の研究における重要な資料になるものと思われまます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたって、多大なご理解とご協力を頂きました、地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました方々、関係各位に心から御礼を申し上げます。

2003年（平成15年）3月

財団法人 米子市教育文化事業団  
理事長 山岡 宏

## 例 言

1. 本書は、鳥取県が計画する、都市計画道路車尾目久美町線道路改良工事に伴い、平成12年度に米子市日久美町内で実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 本書における方位は、全て真北を示し、表記した座標値は、国土座標第V系の座標値である。またレベルは海拔標高を示す。
4. 本書に掲載した第3図は、平成7年8月1日、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」を加筆して使用した。
5. 本書に掲載した第4図の地形図は、昭和63年10月修正米子境港都市計画図（米子市）を複写、縮小して掲載している。
6. 調査の実施に当たって、基準点測量を日本区画に、地形測量業務の一部を株式会社ワールドに、出土石器の実測、トレース業務の一部を岡三リビックに、科学分析を古環境研究所、文化財調査コンサルタントの各社にそれぞれ委託した。
7. 発掘調査によって作成された記録及び出土遺物は、米子市教育委員会が保管している。
8. 本書の執筆、編集は、佐伯が行った。
9. 現地調査及び報告書作成には多くの方々のご指導、ご協力をいただいた。明記して感謝いたします。

(敬称略) 井上智博 W・エドワード 遠藤勝壽 大川泰広 岡野雅則 置田雅昭 国田俊雄 桑原久男 斎野裕彦 下江健太 鈴木康二 竹広文明 辻信広 中川寧 中原斉 中村健二 中森祥 西尾克巳 浜田真人 濱田竜彦 濱隆造 日紫喜勝重 別所秀高 堀口讓 松井一明 柳浦俊一 八峠興 山内紀嗣 山田康弘

## 凡 例

1. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗り、その他の遺物は断面を白抜きで示した。
2. 遺物実測図中の網点は、「顔料」、「焼痕」の範囲を示す。
3. 本文、挿図及び写真図版中の遺物番号は一致する。
4. 遺物番号は、土器、土製品、須恵器、陶磁器にはPoを、石製品はSを、鉄製品はFを、青銅製品はBを、ガラス製品にはGを先頭につけ区別している。
5. 遺跡の略号はME8である。
6. 石器の重量測定には、新光電子社製DJ-3000を使用し、3kgを超える重量のものはアナログ式の台秤を使用した。

# 目 次

序

例 言

凡 例

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	2
第2章 目久美遺跡の位置と環境	3
第1節 目久美遺跡の位置	3
第2節 目久美遺跡の歴史的環境	3
第3節 目久美遺跡の既往の調査	8
第3章 目久美遺跡第8次調査の概要	9
第1節 調査の経過と方法	9
第2節 調査区の設定	9
第3節 調査区内の堆積	10
第4節 縄紋時代の調査	17
1. 概要	17
2. 土層の堆積状況	17
3. 検出遺構	20
4. 遺物の出土状況	20
5. 出土遺物	20
第5節 弥生時代前期の調査	36
1. 概要	36
2. 土層の堆積状況	36
3. 遺物の出土状況	36
4. 出土遺物	36
第6節 弥生時代前期末から弥生時代中期後半の調査	55
1. 概要	55
2. 検出遺構	55
3. 出土遺物	55
第7節 弥生時代中期末の調査（水田面）	73
1. 概要	73
2. 検出遺構	73
第8節 弥生時代中期末の調査（粗砂面）	77
1. 概要	77
2. 検出遺構	77
第9節 古墳時代から平安時代の調査	78
1. 概要	78

2. 出土遺物	78
第10節 古代から近世の調査	80
1. 概要	80
2. 検出遺構	80
3. 出土遺物	82
第11節 遺構外出土遺物	83
第12節 拡張区の調査	89
1. 概要	89
2. 土層の堆積状況	89
3. 検出遺構	90
4. 出土遺物	90
第4章 自然科学分析	93
第1節 目久美遺跡第8次調査における花粉分析	93
第2節 目久美遺跡第8次調査におけるプラント・オパール分析	100
第3節 目久美遺跡における放射性炭素年代測定（AMS法）	104
第4節 目久美遺跡における放射性炭素年代測定（ $\beta$ 線計数法）	105
第5章 考察	
第1節 石錘の検討	106
第2節 弥生前期～中期層の出土遺物	107
第3節 加茂川下流域における水田遺跡の動向	107
第4節 現代の遺物	113
目久美遺跡8次調査出土遺物観察表	115

写真図版

報告書抄録

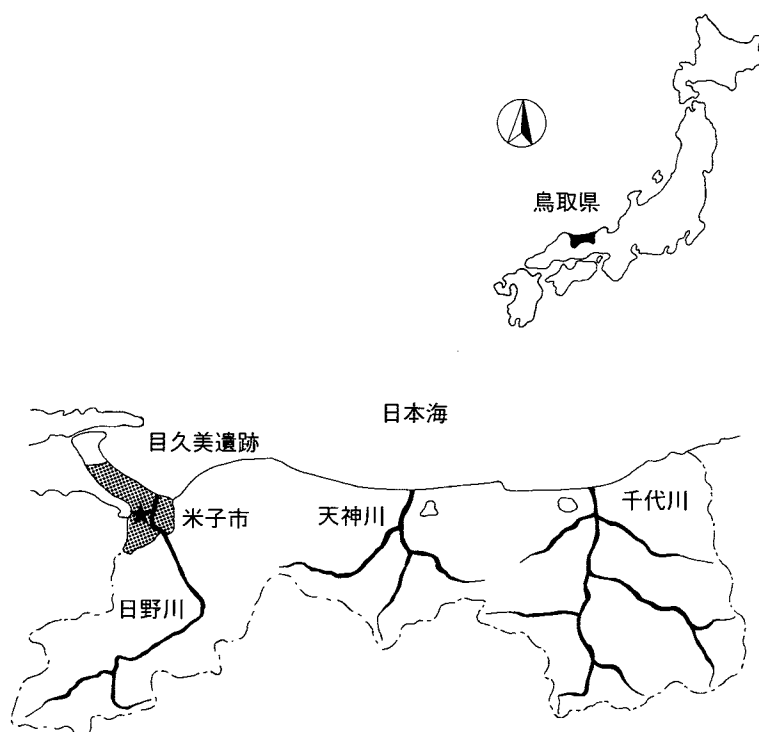
# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県により進められている、都市計画道路車尾目久美町線道路改良工事を原因とする、埋蔵文化財の保護を目的としたものである。

この都市計画道路車尾目久美町線道路改良工事については、これまでに路線上に所在する遺跡について関係機関で協議され、平成7年度より長砂第3遺跡、長砂第4遺跡、目久美遺跡第5次調査、目久美遺跡第6次調査が財団法人米子市教育文化事業団により実施されている。

今回の第8次調査地点については、新加茂川改修工事（第1次調査）、米子市下水道工事（第2次、第4次調査）、車尾目久美町線改良工事（第6次調査）の各地点に隣接する地点で、事前に埋蔵文化財の存在が予想される状況であった。このため鳥取県米子土木は、米子市教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会に提出し、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより、財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が調査を実施することとなった。



第1図 米子市の位置

## 第2節 調査の体制

発掘調査は以下の体制で行われた。

### 平成12年度（現地調査）

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団  
理事長 森田 隆朝（米子市長）  
埋蔵文化財調査室  
室長 古前 勝茂  
次長 矢倉 紀夫  
主任 平木 裕子  
調査担当 調査員 佐伯 純也  
臨時職員 森田静香 森井あづさ  
調査協力 米子市教育委員会

### 平成13年度（報告書作成事業）

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団  
理事長 森田 隆朝（米子市長）  
埋蔵文化財調査室  
室長 妹澤佐智夫  
次長 矢倉 紀夫  
調査担当 調査員 佐伯 純也  
臨時職員 森田静香 森井あづさ

### 平成14年度（報告書作成事業）

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団  
理事長 森田 隆朝（米子市長）平成14年5月28日まで  
山岡 宏（米子市教育長）平成14年5月29日より  
埋蔵文化財調査室  
室長 妹澤佐智夫  
次長 矢倉 紀夫  
調査担当 調査員 佐伯 純也  
臨時職員 遠本富代 篠田明子 福嶋昌子 森田静香 森井あづさ

## 第2章 目久美遺跡の位置と環境

### 第1節 目久美遺跡の位置（第1、3図）

目久美遺跡は、鳥取県米子市目久美町に所在する、縄紋時代から近世の複合遺跡である。米子市は、総面積99.46平方キロメートル、人口約14万人を有する鳥取県西部の中核都市であり、古代の行政区分では、伯耆国会見郡、汗入郡に属する地域であった。

地形的には、米子市の東側に位置する大山（標高1,729m）の造山活動によって形成された火山灰台地と、市の中心を北流する日野川の沖積作用によって形成された米子平野部と弓ヶ浜半島部に大別される。

遺跡は、JR米子駅の東南約500mの地点に位置し、遺跡の南側に位置する行者山（標高128m）から伸びる丘陵裾部一帯に展開しているものと考えられる。調査地の北西部には、足尾山と呼ばれる小規模な独立丘陵があり、山頂には目久美神社が置かれている。明治時代末期に撮影された写真（図版19-3）には、調査地点の東側に行者山から伸びる小丘陵が存在したことや、足尾山の北側にも、同様の小規模な独立丘陵が点在したことを示している。現在の目久美遺跡周辺は、昭和8年に開削された新加茂川や、加茂川放水路、国道180号線などが建設され、写真が撮影された当時とは、全く景観を異にしており、時間の経過を感じさせるものとなっている。

### 第2節 目久美遺跡の歴史的環境（第1～4図）

#### 縄紋時代

目久美遺跡において、人類の生活痕跡が認められるのが縄紋時代早期末以降と推定されている。縄紋海進期には、この目久美遺跡も海に面した集落であったらしく、第1次調査で出土した多量の石錘や石鏃、動物遺体などから、縄紋時代の目久美遺跡周辺は、豊かな自然資源に恵まれた環境に位置していたことが推察される。

米子市内では、旧石器時代から縄紋時代草創期に該当する遺跡は確認されていないが、尖頭器の出土例が奈喜良遺跡（25）、陰田第6遺跡（18）、橋本徳道西遺跡（24）などで確認されており、断片的ながら目久美遺跡の周辺で、狩猟を基盤とする人間の活動があったことを窺わせる。縄紋時代早期には、大山の西麓、標高75m付近の微高地上に位置する上福万遺跡（37）や、泉中峰・泉前田遺跡（30・31）新山山田遺跡（21）で押型紋土器が確認されており、これらが米子市内最古の集落遺跡と考えられる。前期の遺跡は、目久美遺跡のほか、陰田第9遺跡（17）、吉谷銭神遺跡（23）、中期には目久美遺跡、陰田第7遺跡（19）、後期には目久美遺跡、喜多原第4遺跡（34）、古市河原田遺跡（22）があり、これらの遺跡から土器や石器などの遺物が出土している。縄紋時代の遺構に関する資料は、落し穴状の土坑以外は数が少なく、配石・集石遺構、貯蔵穴などが見つかったに過ぎない。縄紋時代の住居跡については、明確な時期がはっきりしないものの、平地式住居と見られる遺構が岡成第9遺跡（33）、喜多原第4遺跡（34）で確認されているほか、泉中峰遺跡（30）から周囲に小ピットが巡る竪穴が見つかり、形態的な特徴から住居跡の可能性が指摘されている。この他に報告されていない目久美遺跡の資料では、山陰歴史館に3点の縄紋土器が収蔵されており、第2図にこれを図示した。第3図Po1は、外面に縄紋を施し波状の口縁にミミズバレ状の突帯を貼り付けるもので、長山式並行の深鉢とみられる。第1次調査では、長山式の資料は出土しておらず、菱根式から西川津式の間を埋める資料である。Po2、Po3は、外面縄紋地の深鉢で、Po3は、口縁端部外面を肥厚させ縄紋が施紋される、いわゆる波子式の資料である。これらの遺物が採集、収蔵された経緯については不明であるが、昭和8年に開削された新加茂川の工事中に出土したものか、護岸工事前の新加茂川土手断面から採取されたものと考えられる。

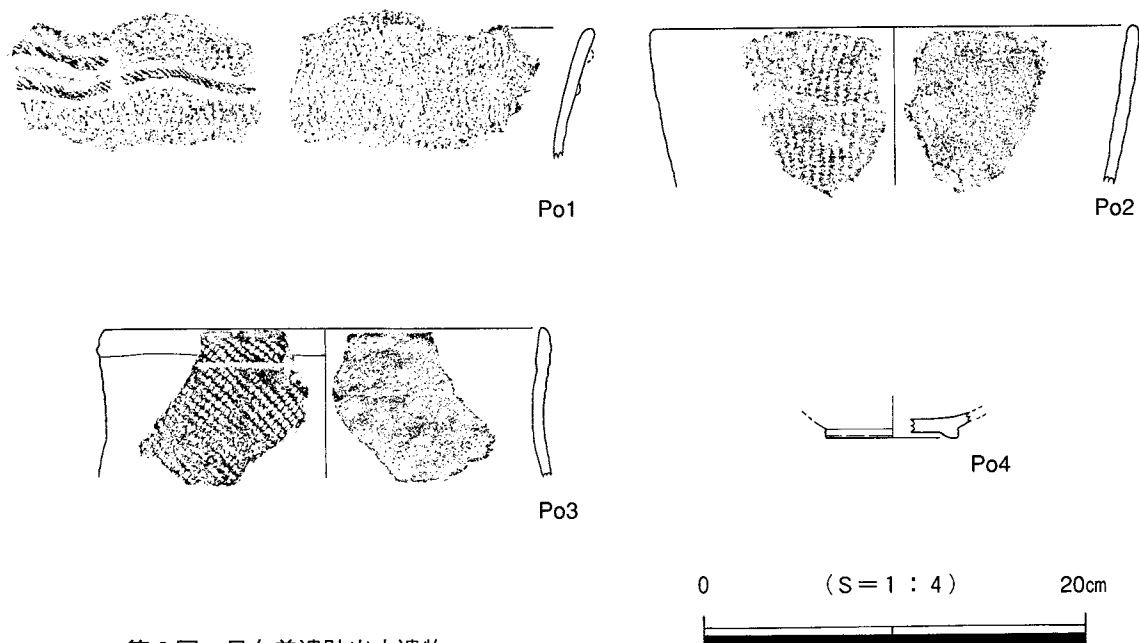


## 弥生時代

縄文時代晩期から弥生時代前期には、海退によって生じた低湿地を利用した農耕が行われていたらしく、目久美遺跡をはじめとして、長砂第4遺跡(3)、米子城跡第21遺跡(15)などの低湿地遺跡で弥生時代前期の粘土層から、プラントオパール(植物化石)の検出例が見られる。また、このころから急激に集落の数が増加しており、集落の選地にあたって、低湿地に隣接する地点が好んで選ばれたためと考えられる。こうした遺跡数の増加も、各地に分散する低湿地の開発に伴って進行した現象であろう。中期には、前葉段階の資料は少なく、目久美遺跡、長砂第1遺跡(1)、古市河原田遺跡(22)などにみられるが。中期中葉から後葉にかけて、集落の規模が拡大する一方で、陰田第6遺跡(18)や、青木遺跡(27)のように、丘陵部に集落を形成する動きが見られる。後期には、日野川右岸の尾高浅山遺跡(35)、日下寺山遺跡(36)のような丘陵の高所に環濠を巡らす遺跡が出現し、政治的な緊張状態のあったことが推察される。今のところ日野川左岸地域では、こうした環濠遺跡は見つかっていないものの、集落の立地や規模が縮小するなどの変化が起こっており、政治的な様相についても興味を持たれる。

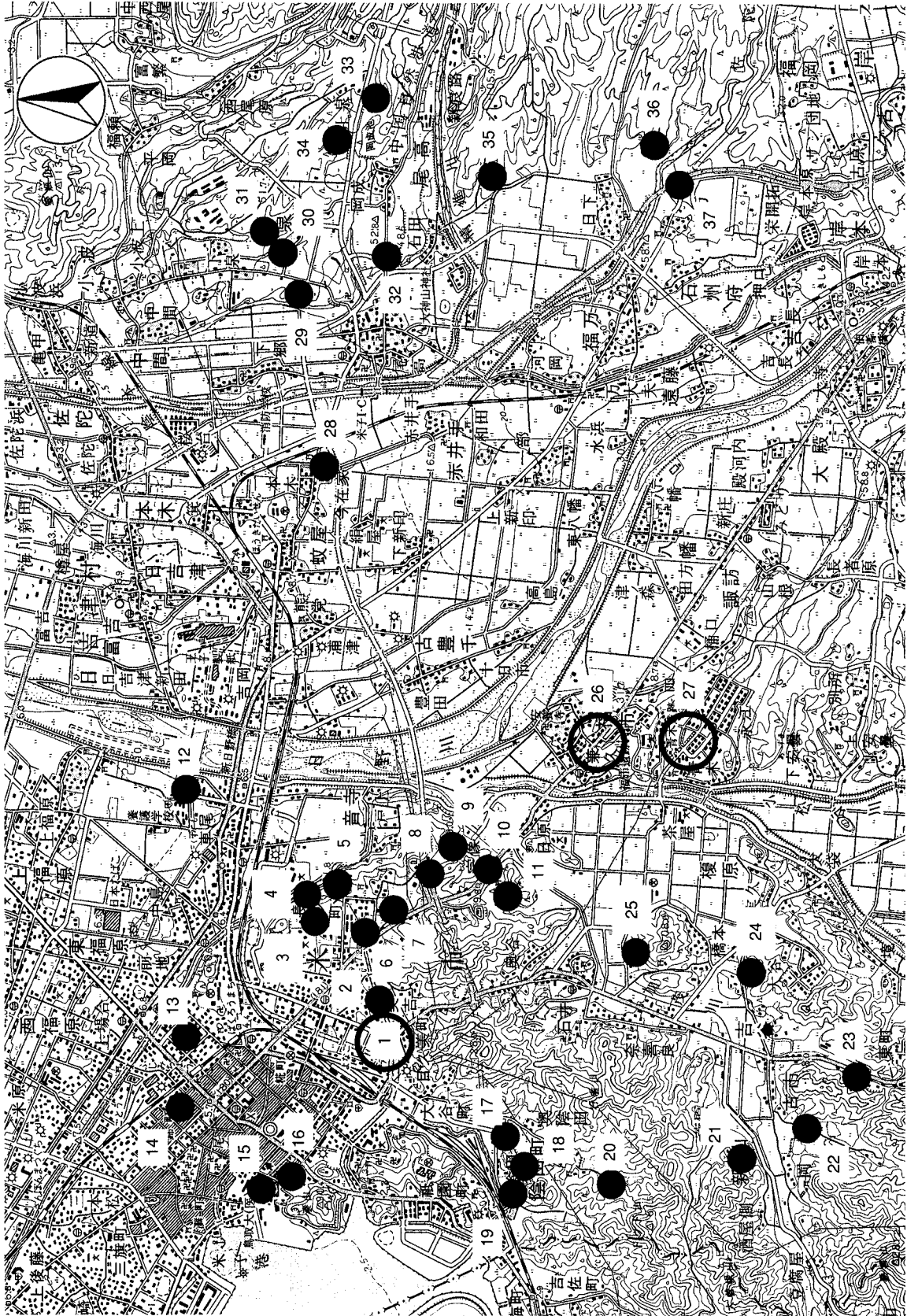
目久美遺跡で本格的な水田遺構が形成されるのが弥生時代中期以降である。第1次調査では、3時期にわたって耕作された水田が確認されたほか、木製の耕作具、石包丁、石鍬などの遺物が出土している。しかしながら、後期に入ると、遺物の出土量は減少し、水田も放棄される。第6次調査では弥生時代中期末までに堆積した洪水砂層とそれを掘り込んだ幅6m、深さ3mの水路跡が出土しており、その水路もその後の洪水で埋もれている状況が確認されている。また目久美遺跡の東側に隣接する池ノ内遺跡(2)では、弥生時代後期より水田の耕作が始まっており、耕作地が目久美から池ノ内へ移動しているものと考えられる。このような状況から、弥生時代後期初頭段階の中海沿岸の地において、何らかの自然災害が起り、集落の移動を余儀なくされた可能性が考えられており、陰田第6遺跡(18)などの中期集落の多くが丘陵部に立地している事実とも関連があるものと考えられる。

また加茂川中流域に位置する宗像前田遺跡(10)では、川の流れを管理するために作られたと見られる大規模な堰が見つかり、東宗像遺跡(8)の水源に関わる施設と考えられる。また東宗像遺跡より下流の加茂川流域には、目久美遺跡を始めとして、長砂第1遺跡(6)、米子城跡21次調査(15)などがあり、これらの集落間関係についても一考を促す資料である。



第2図 目久美遺跡出土遺物

- 1・日久美遺跡
- 2・池ノ内遺跡
- 3・長砂第4遺跡
- 4・長砂第3遺跡
- 5・水道山古墳
- 6・長砂第1遺跡
- 7・長砂第2遺跡
- 8・東宗像遺跡
- 9・東宗像古墳群
- 10・宗像前田遺跡
- 11・宗像古墳群
- 12・上福原上新田遺跡
- 13・博芳町遺跡
- 14・錦町第1遺跡
- 15・米子城跡21次
- 16・米子城跡33次
- 17・陰田第9遺跡
- 18・陰田第6遺跡
- 19・陰田第7遺跡
- 20・陰田広畑遺跡
- 21・新山山田遺跡
- 22・古市河原田遺跡
- 23・古谷銭神遺跡
- 24・橋本徳道西遺跡
- 25・奈喜良遺跡
- 26・福市遺跡
- 27・青木遺跡
- 28・今在家下井ノ上遺跡
- 29・尾高御建山遺跡
- 30・泉中峰遺跡
- 31・泉前田遺跡
- 32・尾高城跡
- 33・岡成第9遺跡
- 34・喜多原第4遺跡
- 35・尾高浅山遺跡
- 36・日下寺山遺跡
- 37・上福万遺跡



第3図 周辺遺跡分布図

## 古墳時代以降

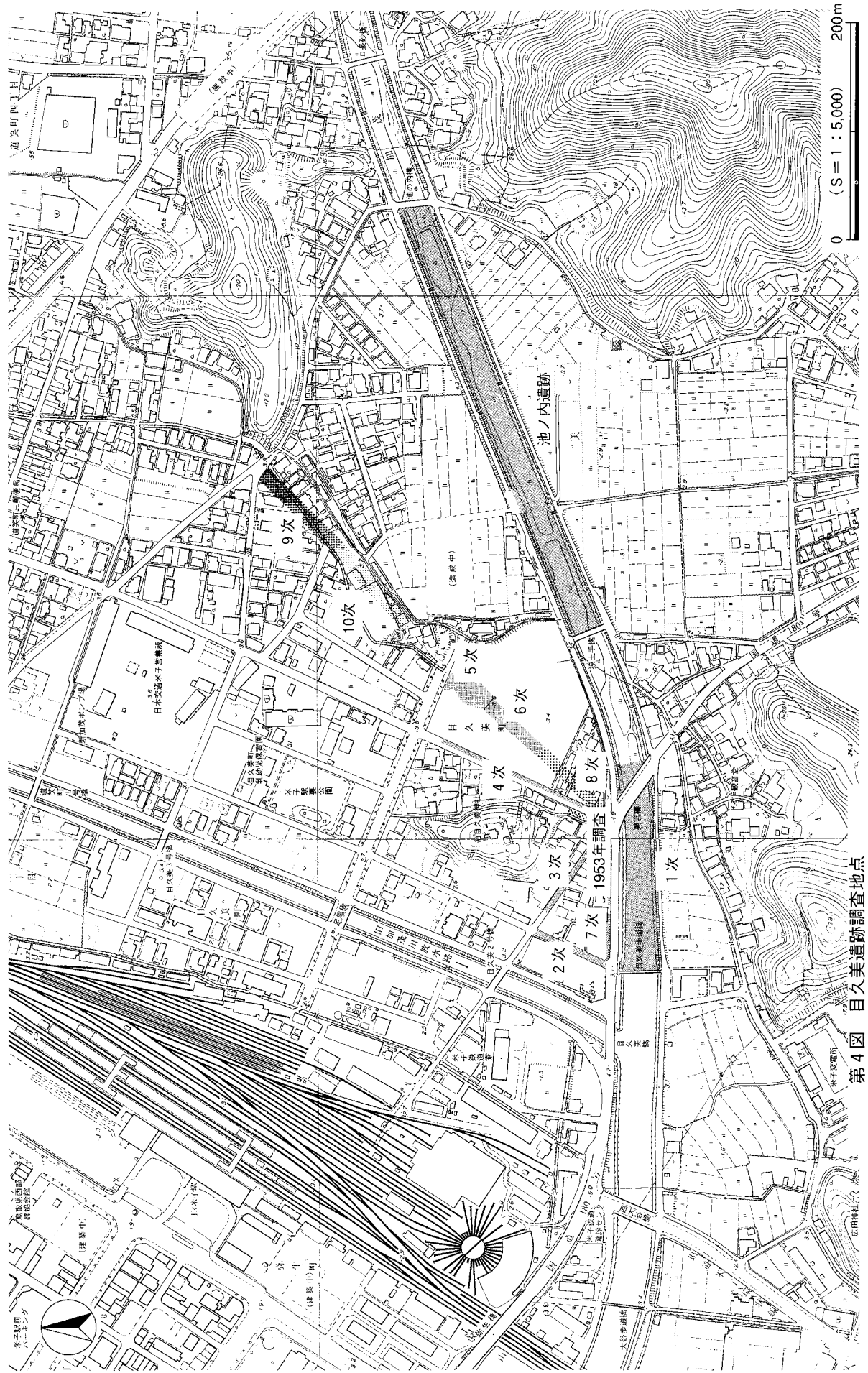
目久美遺跡では、古墳時代前期から後期にかけての遺物は、少量ながらも各次調査で出土しており、付近に集落が存在するものと考えられる。周辺には、弥生時代後期から古墳時代後期の水田遺構が検出された池ノ内遺跡(2)、古墳時代中期の集落が長砂第3遺跡(4)で見ついている。古墳については、八神鏡が出土した水道山古墳(5)のほか、後期には、宗像古墳群(11)、東宗像古墳群(10)がある。

古代には、目久美遺跡の所在する米子平野西部は、和名抄に記載のある「会見郡半生郷」に属する地域と考えられている。ただし、これまでに半生郷の存在を裏付ける直接的な資料は得られておらず、その範囲については不明である。遺跡の動向としては、飛鳥・奈良時代の遺跡は、米子市内各所に散在しているが、特に奈良時代後半期に集落の数、規模とも増加する傾向が示されている。また製鉄に関連する遺跡が陰田広畑遺跡(20)などで見つかり、この時期の集落の特色と言える。目久美遺跡では、第5次調査で墨書土器が出土しているほか木簡、人形などが見つかり、近隣に奈良・平安期の施設が存在しているものと考えられる。また平安時代後期段階の資料はあまり見つかりおらず、遺跡としての連続性が掴みにくい状況である。しかしながら、今回の調査に関連して、第4次調査出土遺物を再検討した結果、緑釉陶器が1点出土していることを確認した(第3図Po4)。近隣では、米子城跡21次調査で出土例があるが、鳥取県内でも類例の少ない資料であり、その存在は注目される。「日本三代実録」などの平安期に書かれた史料には、伯耆国の飢饉の記事が頻繁に見られることから、混乱した世相や、疲弊した庶民の姿が想像されるのだが、実際の様相については、まだ言及できる段階ではなく、今後の調査に委ねる所が大きい。

中世の様相は、西伯耆に関連する文献史料が少なく不明な部分が多いが、尾高城跡(32)の調査で、鎌倉時代の在地領主の屋敷とみられる遺構が見つかり、室町時代には、伯耆国守護代の山名氏一族がこの地を代々支配していたが、応仁の乱以降の戦火は山陰にも飛び火しており、大永4年には、出雲の尼子氏が西伯耆に侵入し、さらなる混乱が続いていた。16世紀末に至って、吉川広家が西伯耆の領主として港山に米子城の築城を始めるが、朝鮮出兵や大阪夏の陣など、社会的に不安定な状況が続いていたことから、築城はなかなか進展しなかったようである。

近世には、1600年に中村一忠が西伯耆の領主となり、この地を支配したが、1610年から加藤貞泰、池田由之(1617年)へと国替えが続いた後、1632年に鳥取藩主となった池田光仲の家老荒尾氏が米子城預かりとなり、以後明治維新まで荒尾氏によって統治された。また18世紀以降は、米子城郭内の空屋敷や海浜部などの砂丘地が新田開発され、農業生産の基盤が整備された。長砂から目久美にかけての地域でも、地元の豪商、大寺屋による新田開発が行われ、整然とした水田風景が広がっていたものと考えられる。

近代には、廃藩置県により、鳥取県が設置されたものの、明治9年には、島根県と合併され、明治14年には、再び鳥取県が再設置された。この頃には、鉄道の敷設、国道の建設などが急速に進められており、現代に至る経済発展の基盤がこの頃に成立したと考えられる。この時期の資料は少ないものの、明治時代後期の生活資料が米子城跡33次調査(16)で見出されており、当時の様相を探る手がかりが得られている。



第4図 目久美遺跡調査地点

### 第3節 目久美遺跡の既往の調査

目久美遺跡は1933（昭和8）年に行われた新加茂川開削工事中に、地元目久美町在住の清水安造氏によって土器が発見され、世に知られるようになった遺跡である。1934（昭和9）年には、京都大学教授梅原末治氏によって発掘調査が行われ、縄紋時代から弥生時代の土器が層位的に堆積している状況が確認された。1953（昭和28）年には、県道の路線変更と拡幅工事のため、佐々木古代文化研究室により新加茂川右岸の一部が調査された。この調査では、縄紋時代前期の土器、フナクイムシの生痕のある流木、弥生時代前期、中期の土器、石器、木器が多数出土した。1973（昭和47）年には、国道9号線米子バイパス建設に伴う遺跡分布調査が鳥取県教育委員会によって実施され、目久美遺跡、池ノ内遺跡の試掘調査が行われた。この報告で、豊島吉則氏により地形、地質に関する考察が行われた。1973（昭和48）年には、鳥取県による新加茂川放水路計画の事業着工に伴う計画線上のボーリングと試掘による埋蔵文化財調査が鳥取県遺跡調査会によって行われた。試掘調査では、遺跡の存在は確認されなかったものの、ボーリング調査により、目久美町および東山町の地形が豊島氏により検討されている。

1982年には、新加茂川改良工事に伴う調査（第1次調査）が、1984年には池ノ内遺跡の調査が行われた。目久美遺跡の調査では、縄紋時代前期初頭から後期に至る時期の遺物包含層や、弥生時代の水田遺構などが検出され、目久美遺跡の具体的な様相が判明した。

1988年以降は、1次調査地点の北側で下水道工事に伴う調査が実施され、2次調査、3次調査、4次調査、7次調査の各調査が行われている。これらの調査は、面積的に小規模なものであるが、第2次、3次調査では水田遺構が、第4次調査では弥生前期の土器を多く含む遺物包含層が確認されており、集落の範囲の広がりを示すものとなった。

平成8年からは、車尾目久美町線道路の建設にかかる調査が行われ、第5次調査、第6次調査が今回の調査地点北側で実施されている。特に第6次調査では、洪水によって埋没した弥生時代の水路跡や水田遺構を検出したほか、縄紋時代に形成されたと見られる海成層とサルボウ、ハイガイの自然堆積層を確認し、縄紋海進期には、足尾山東側の地点にまで海が入り込んできていたことが判明している。

# 第3章 目久美遺跡 8次調査

## 第1節 調査の経過と方法

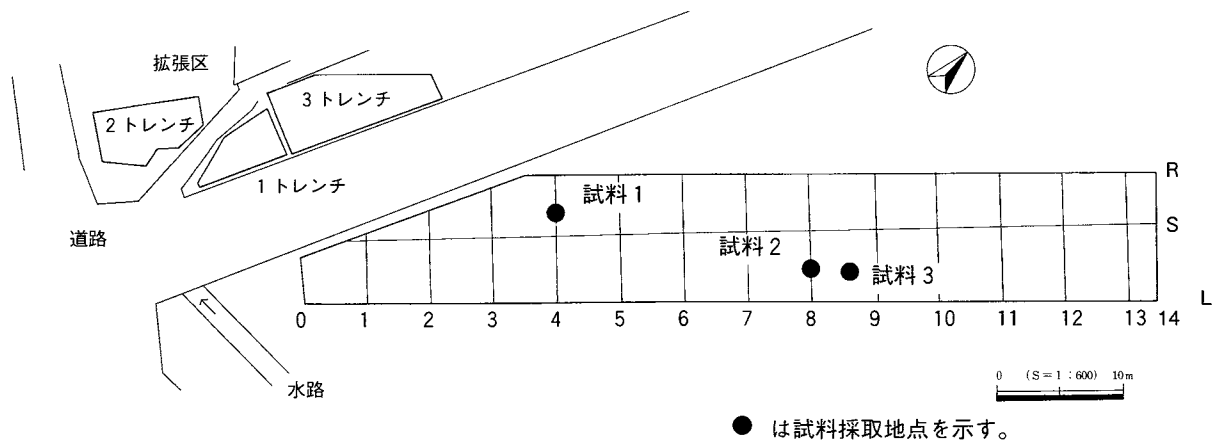
現地調査は、平成12年5月30日に開始し、平成13年3月23日まで行った。調査面積は、800㎡である。調査は、拡張区と名付けた道路西側の地点より着手し、3つのトレンチを順次掘削、埋め戻しを行いつつ進めた。拡張区の地点は、調査前までは畑や駐車場として利用されていたが、足尾山への参道へと取り付く小道が作られていて、地盤は周囲の水田面よりも高い位置にあたる。

道路西側の本調査地点は、軟弱な地盤に位置しており、遺構面が標高の低い地点にあること、一部の調査区が道路と接することから、調査区の周囲に鋼矢板を打ち込み、H鋼で上部を補強する措置を取った。調査区内は、個人住宅の跡地にあたり、宅地以前には水田として利用されていた。

表土の掘削は、重機にて行い、排出土の搬出にはダンプカーを用いた。表土層以下の調査は、全て人力にて行い、一輪車、ベルトコンベアーを用いて土砂を排出した。遺物の取り上げは、一辺が5m、乃至1mのグリッド単位で行い、必要に応じて光波測距機を用いて出土地点の記録を取りつつ進めた。縄紋時代の土坑に関しては、排出された土を全て持ち帰り、水洗洗浄して微細な遺物の発見に努めた。また、水田遺構に関しては、高さ2cmのコンターラインを設定し、測量を実施した。自然科学分野においては、水田層の存在を確かめるために、プラントオパール分析を、出土層の年代推定のために放射性炭素年代測定を、縄紋時代の環境を推定するための自然科学分析を実施している。調査は、H鋼設置工事の都合から3つの工区に分けて進めた。また、平成12年11月25日には一般市民を対象とした現地説明会を実施し、遺跡の概要や調査成果について説明した。現地調査終了後は、平成13年度、平成14年度の二ヶ年を費やして、出土した遺物の整理作業を進め、平成14年度末に調査報告書を刊行した。

## 第2節 調査区の設定

調査区は、道路西側の地点と東側の地点に分けて行った。道路西側の部分は、全長67m、幅10mの範囲を調査区と定めた。また、道路東側の地点に関しては、拡張区として取り扱い、3つのトレンチを設定して調査した。道路西側の調査区は、H鋼の設置工事の都合から、1区から4区までを第一工区。5区から8区までを第二工区。9区から14区までを第三工区として区分し、一つの工区で表土掘削から縄紋時代層の調査までを行った。このため、水田遺構などは、全面を検出した状態での記録が出来ず、写真などは分かりにくいものとなった。



第5図 トレンチ・グリッド配置図

調査区は、5 mの正方形グリッドを14区までの範囲に設定した。このため、道路と接する地点は変則的な形状となったが、地形を無視してグリッドを割り付けた。また弥生時代前期～中期の遺物が濃密に分布していた地点では、さらに1 mグリッドに細分して、遺物の取り上げを行った。

### 第3節 調査区内の堆積（第6～8図）

道路西側の調査区は、住宅と鉄道学園の跡地に当たる地点で、約1.5 mの厚さで盛土がなされていた。調査区内の基本層序は盛土層、灰色粘土（1層）、暗灰色粘質土（2層）、暗灰色粘土（3層）、淡茶灰色粘土（4層）、洪水堆積（5層）、黒色粘土・暗灰色粘土（7・8・9層）、濃黒色粘土（11層）、褐色粘土（12層）、青灰色粘土（13層）、淡茶灰色粘土層（地山）に分けられる。以下に、その特徴を述べる。

**盛土層**・・・個人住宅、及び鉄道学園造成時に客土された土砂で、明黄褐色の砂質土が主体を占める。調査地点の東側に存在した小丘陵（図版19-3）を削平した際に生じた土砂と見られる。この層からは、現代の遺物以外は出土しなかった。

**灰色粘土（1層）**・・・近世から近代の水田耕作土とみられる。この層から淡茶灰色粘土（4層）までの出土遺物は、細片化したものが多く、水田耕作による攪乱を受けているものと考えられる。

**暗灰色粘質土（2層）**・・・近世の水田耕作土と見られる。

**暗灰色粘土（3層）**・・・中世から近世の水田耕作土と見られる。

**淡茶灰色粘土（4層）**・・・古墳時代から平安時代までの遺物を含む層で、直上では、足跡、土坑を検出した。出土した遺物から、この層が形成された時期は、平安時代後期以降と考えられる。

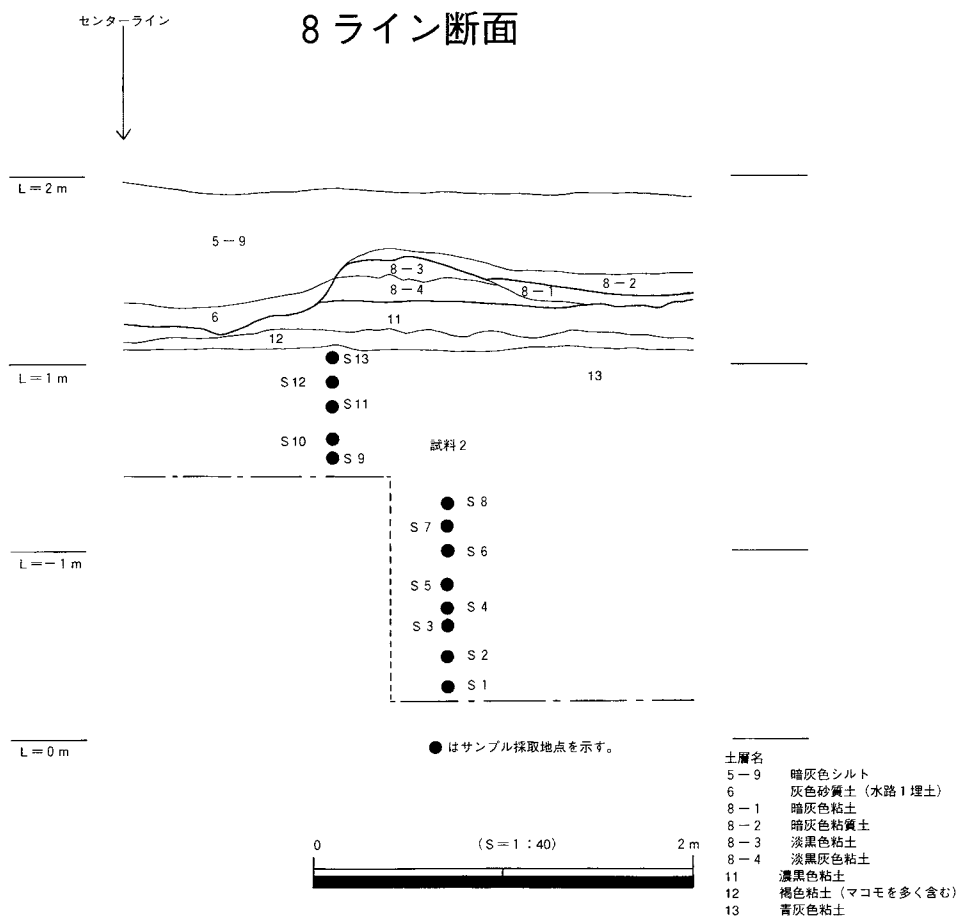
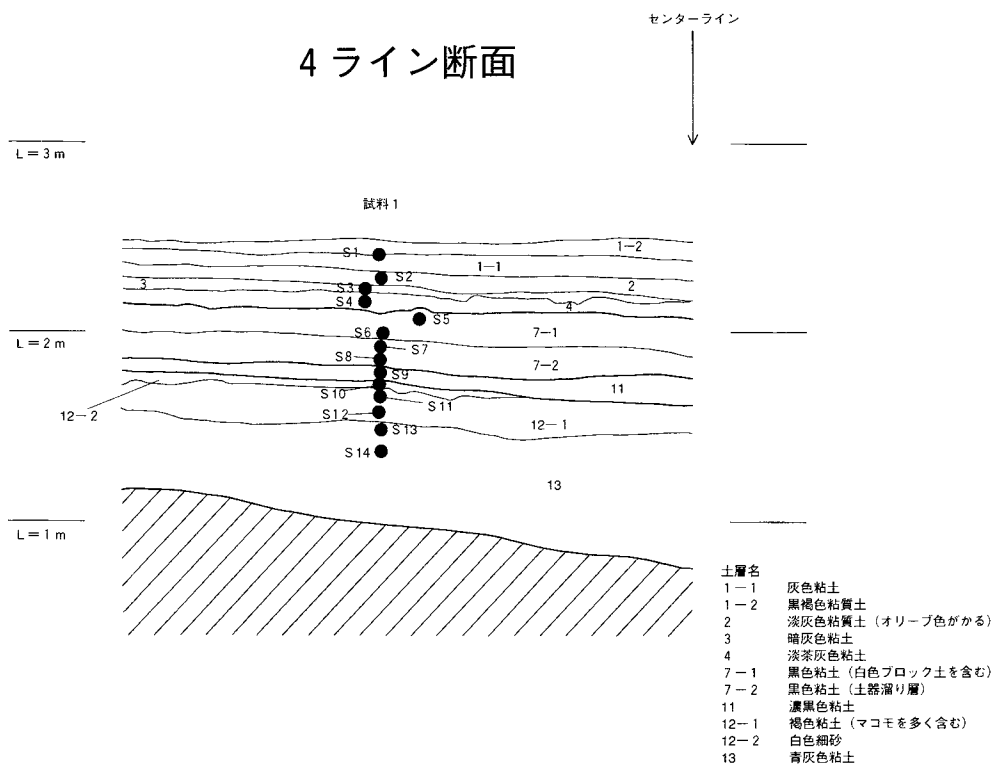
**洪水堆積（5層）**・・・灰色系のシルト、砂、粘土がラミナ状に堆積するもので、洪水による堆積層と見られる。色調からグライ化の傾向を示すものとみられ、この層までは地下水の影響を受ける環境にあったことがわかる。

**黒色粘土・暗灰色粘土（7・8・9層）**・・・黒色粘土層は、1区から7区までの範囲で検出した、白色のプロック土を含む層で、粘質傾向がかなり強い。土器溜りを被覆する層で、直上には、畦畔が構築されている。水路1を超えて、暗灰色粘土層へと変化しているが、水路1の西側には、黒色の粘土を畦芯とする大畦畔が作られており、一連の堆積と判断した。

**濃黒色粘土（11層）**・・・植物の腐食を含む粘質傾向の強い層である。突帯紋系土器のほか、弥生前期の遺物を多く出土している。第1次、第6次調査でも確認されている。またプラントオパールも微量ながら検出されており、耕作土であった可能性がある。

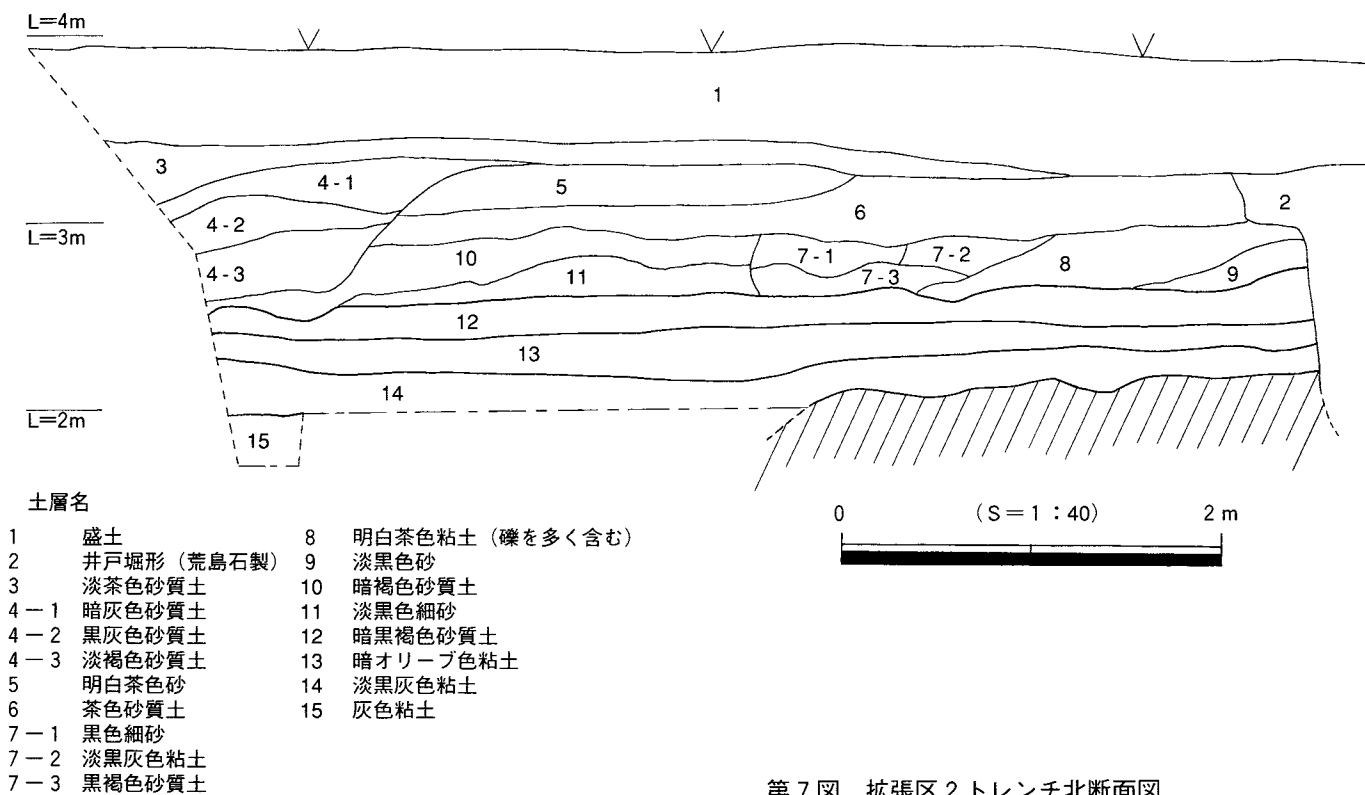
**褐色粘土（12層）**・・・植物の腐食を多く含む粘土層で、通称マコモ層と呼ばれ、目久美遺跡のほか、池ノ内遺跡でも確認されている。この層中からは、出土遺物が少なく、時期を決しがたいが、図22のPo119が出土しており、縄紋時代後期～晩期の時期に堆積したものと考えられる。

**青灰色粘土（13層）**・・・縄紋海進以降に堆積した海成層と見られる。この層中には、土器、石器類のほか、



第6図 4・8ライン断面図





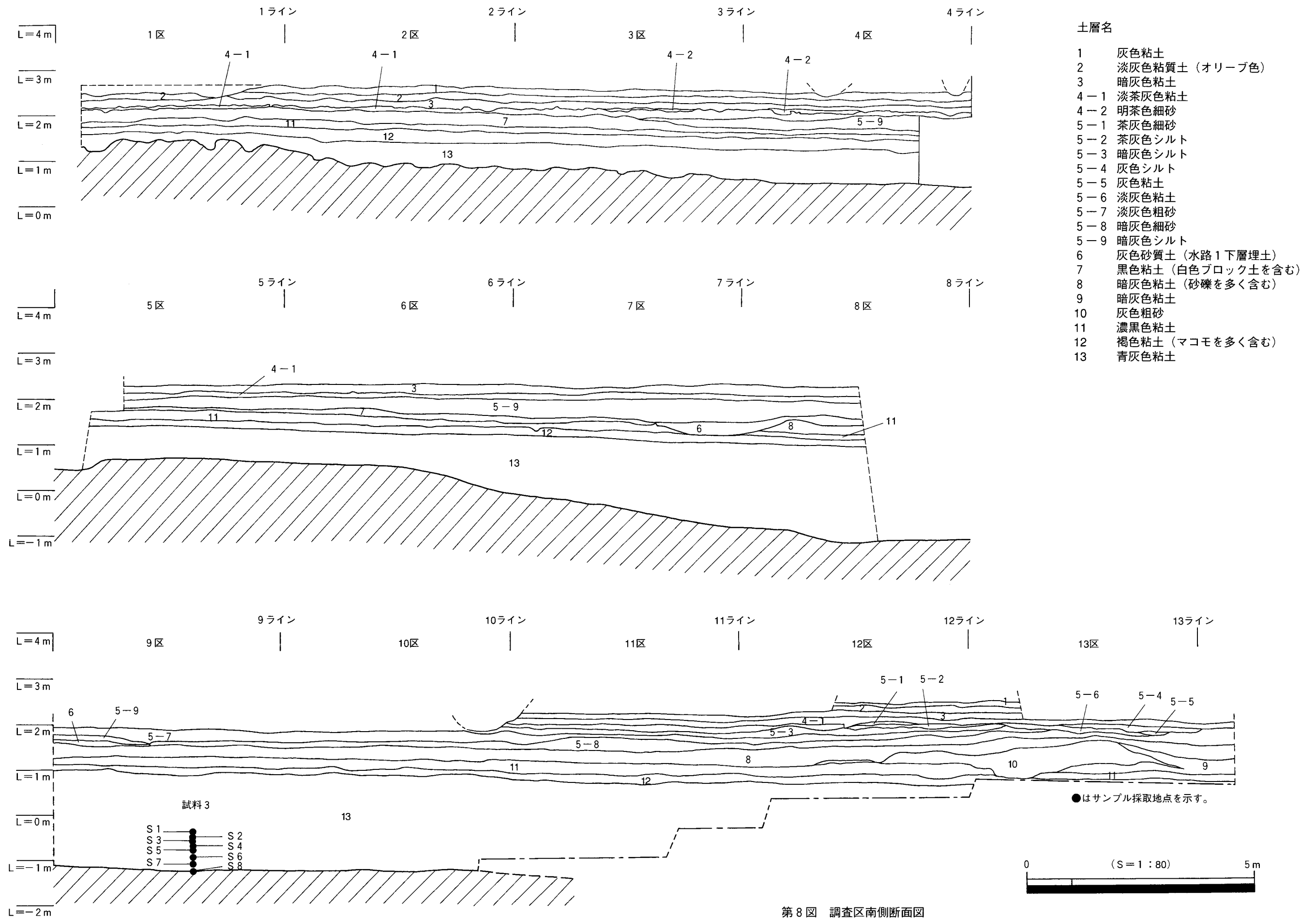
第7図 拡張区2トレンチ北断面図

流木片、動物骨などが含まれていた。また下層では、甲殻類の生痕化石とみられるもののほか、土層断面にも生痕による攪乱が見られた。また貝類の堆積層は確認できなかったが、第6次調査では、サルボウ、ハイガイの自然堆積層が確認されている。

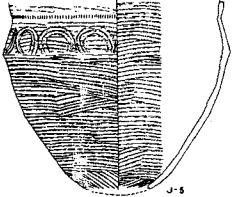
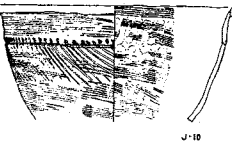

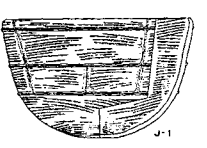
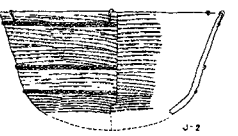


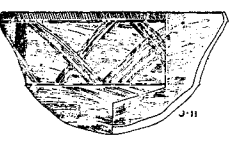
**淡茶灰色粘土層（地山）**・・・1区から11区までの範囲で検出した、洪積層とみられる。土質は、砂質傾向がやや強く、礫を多く含み、かなり軟質である。10区のセンターライン中央部にて断ち割りをした結果、この層中には、遺物は含まれていないことを確認した。

拡張区は、足尾山の丘陵端部に当たり、地盤が高くなっている。一部は、近代の水田によって攪乱されており、古代の遺構は確認されなかった。各トレンチの土層堆積状況は、2トレンチの状況と同様の傾向を示す。2トレンチの土層断面図を第7図に示す。大まかに分けると、標高2.5m付近に近代の水田面が存在し、その下層に、弥生時代から近世までの遺物を含む第13層（暗オリーブ色粘土層）、第14層（淡黒灰色粘土）が堆積している。水路跡以外の遺構は、第15層（灰色粘土）、および地山である明黄灰色粘土上面において検出した。遺物の出土状況は、各時代の遺物が混在して出土しており、また細片化したものが多かったことから、新田開発や水田耕作などによってローリングを受け、攪乱されたものと考えられる。

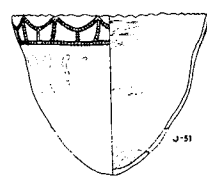




自然科学分析用の試料は、第5図に示した3地点にて採取している。試料1地点において実施された、古環境研究所による分析の結果は、第4章に掲載している。また文化財調査コンサルタント社の分析結果については、平成14年度刊行予定の目久美遺跡第10次調査報告書に掲載される予定である。



第8図 調査区南側断面図

分類		特徴
A	1	 刺突による 円・斜行紋様帯
	2	 刺突による平行紋様帯
	3	 調整は条痕のみ 口縁に貼付縁帯
B	1	 隆帯のみ
	2	 隆帯に刻目
	3	 口縁外面に縦位の 細隆帯貼付する
	4	 隆帯無し 条痕がB類と共通するもの
C	 胴部で外反し 口縁は内傾する 丸底の浅鉢 条痕状の斜行沈線	
D	 沈線により、斜行幾何学紋を施す	
E	1	胎土に繊維を含み縄紋地のもの
	2	胎土に繊維を含み条痕地のもの

分類		特徴
II	A	1  D字状で2～3連の 刺突紋が巡る
		2  貝殻状工具による2 ～3連の刺突紋が巡る
		3  D字状で1連単位の 刺突紋が巡る
		4  幅広ヘラ状工具による 刺突紋が巡る
		5  調整は条痕のみ
III	A	1  D字状の爪形紋が巡る
		2  条痕調整のみで 口縁に刺突紋を施す
	B	 C字状の爪形紋が巡る

分類		特徴
IV	A	 口縁に爪形紋を施す 下半部は調整痕無し
	B	 半裁竹管やヘラで 格子・円紋様を描く
	C	 全面に縄紋を施す 横位に羽状紋を施す
V	 条痕地に押引の刺突 紋を施す	
VI	 縄紋地に細い突帯を 施す	

土器のスケールは1:12

第9図 目久美遺跡出土縄紋時代前期土器(Z類)分類図

(目久美遺跡第1次調査、縄紋土器分類を基に作成)

## 第4節 縄紋時代の調査

### 1. 概要

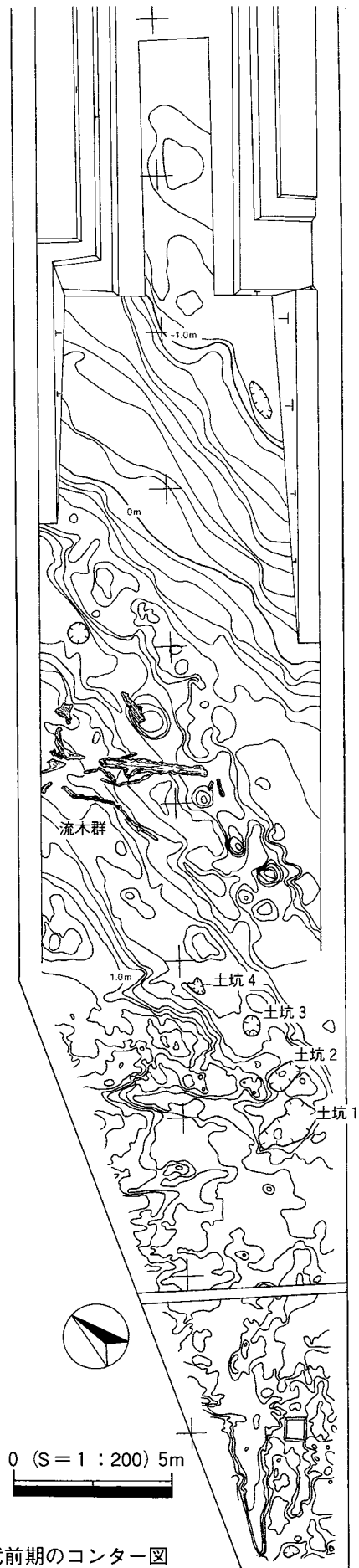
調査区の1区から10区までの範囲について、縄紋時代の堆積層（青灰色粘土層・13層）の調査を行った。調査は、安全上の問題から、7区から10区までの最下層の部分については、犬走り状の段を残して調査を行った。掘削深度は、調査区の最も深い地点で、現地表面から約5m下、標高マイナス1mまでにとどめた。11区から14区までは、ベルトコンベアーによる廃土作業を行うため、調査できなかった。

調査では、標高マイナス1mからプラス1.5mの範囲にかけて、縄紋海進期（縄紋時代前期初頭以前）に形成されたとみられる波蝕台と、縄紋時代中期の貯蔵穴とみられる土坑を1基と性格不明の土坑3基を検出した。遺物は、縄紋時代前期から中期の土器が出土したほか、石錘などの石器類、流木などの自然遺物を検出している。また文化財調査コンサルタント社に科学分析を依頼し、古環境の推定を試みた。

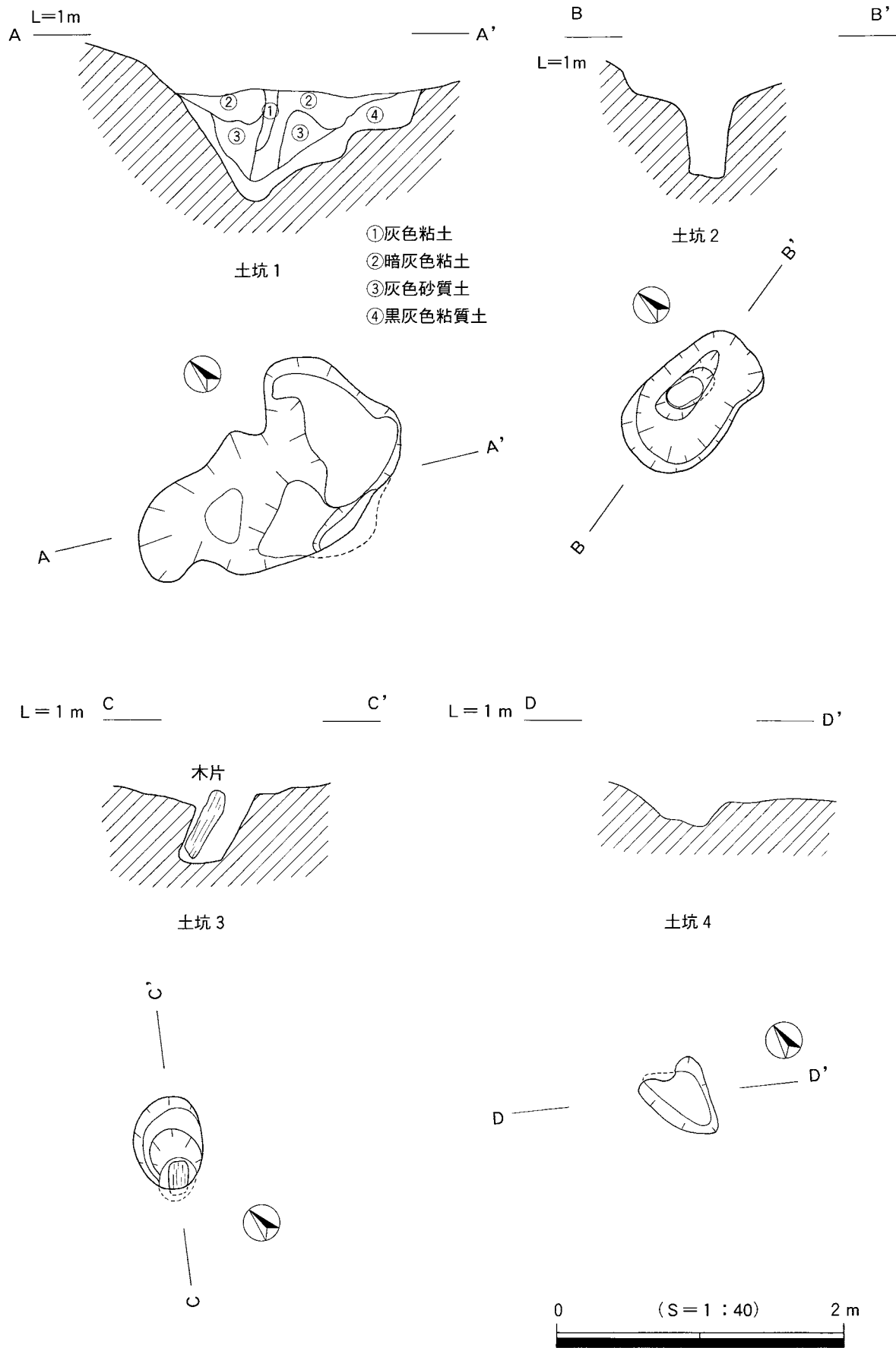
### 2. 土層の堆積状況

標高1.8m付近には、調査区の全域に植物の腐食を多く含む褐色粘土層（12層）が堆積しており、さらにその下層に青灰色の粘土が堆積していた。縄紋時代の遺物は、この青灰色粘土層中に多数含まれていた。また青灰色粘土の下層には、茶灰色を呈する軟弱な基盤岩があり、これを地山として認識した。検出した基盤岩は、標高1m付近までなだらかに傾斜しながら北側へ下り、標高0.7m付近から急激に落ち込んでいた。また-1m付近から再びなだらかに傾斜し、第6次調査で検出された基盤岩へつながるものと考えられる。落ち込み付近にはノッチ状の盛り上がった部分も見られることから、海進期に形成された波蝕台の痕跡と見られる。

縄紋時代の堆積層は、色調は青灰色を呈する粘土が一層のみ堆積している状況であった。この青灰色粘土層は、肉眼では観察しにくく、細分層が出来なかった。なお、1997年に実施された第6次調査では、岩盤上面にて自然貝層を検出しているが、今回の調査では検出することが出来なかった。



第10図 縄紋時代前期のコンター図



第11図 縄紋時代前期の遺構図



### 3. 検出遺構（第10・11図）

4区において、4基の土坑を検出した。また、縄紋時代前期以前に形成されたとみられる波蝕台を検出した。

**土坑1（第11図）** 長径2m、短径1.2m、深さ0.8mの不整形な土坑である。内部からはドングリの種子が出土しており、貯蔵穴の可能性が高いものと考えられる。時期は土坑内から出土した土器片から縄紋時代中期に相当するものと考えられる。

**土坑2（第11図）** 長径1.1m、短径0.7m、深さ0.8mの楕円形を呈する土坑で、内部から遺物は出土しなかった。遺構の時期、性格とも不明である。

**土坑3（第11図）** 直径0.5m程度の円形の土坑で、内部には木片が残されていた。一見すると柱穴らしいが、これに対応するものが見られないため土坑とした。この遺構からは木片以外の遺物は出土しなかった。

**土坑4（第11図）** 長辺0.6m、短辺0.4m、深さ0.2mの三角形を呈する土坑で、人為的な遺構か判断できなかった。出土遺物は無く、時期、性格とも不明である。

**波蝕台（第10図）** 人為的な遺構ではないが、縄紋海進期に形成されたと見られる波食台である。出土遺物の上限が、縄紋時代早期末から前期初頭に推定される菱根式から西川津式段階であることから、この波蝕台の形成時期は、縄紋時代前期初頭以前のものと考えられる。

### 4. 遺物の出土状況（第12, 13図）

遺物は、1区から6区にかけて検出した基盤岩上面に集中して出土している。出土レベルは標高0.5mから1.3m付近にあり、南から北へ緩やかに傾斜して出土している。

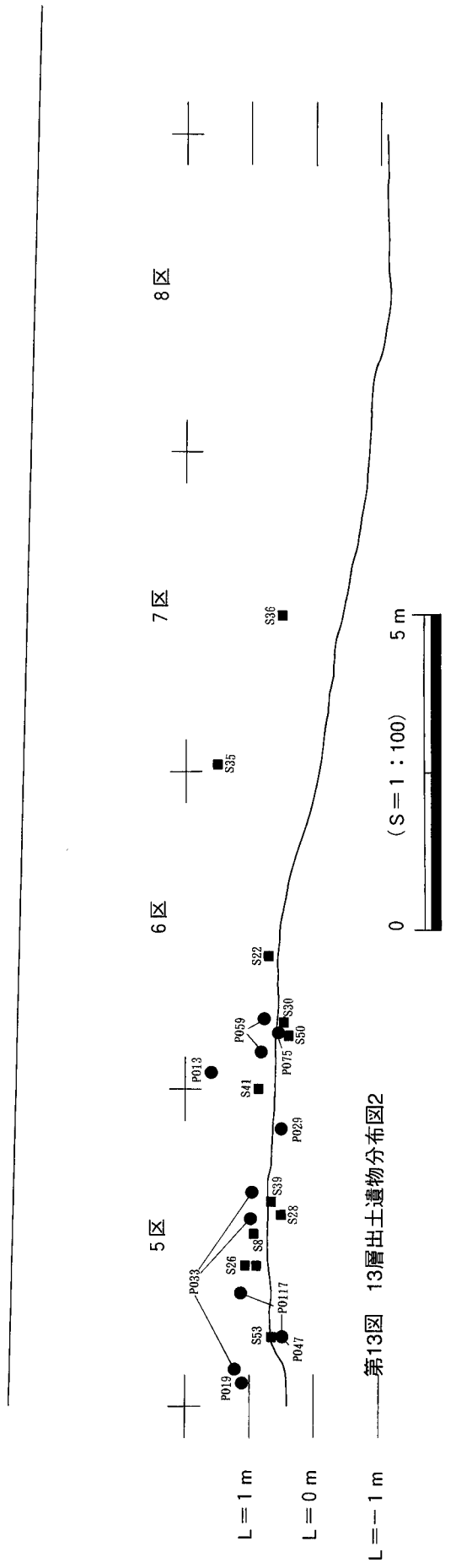
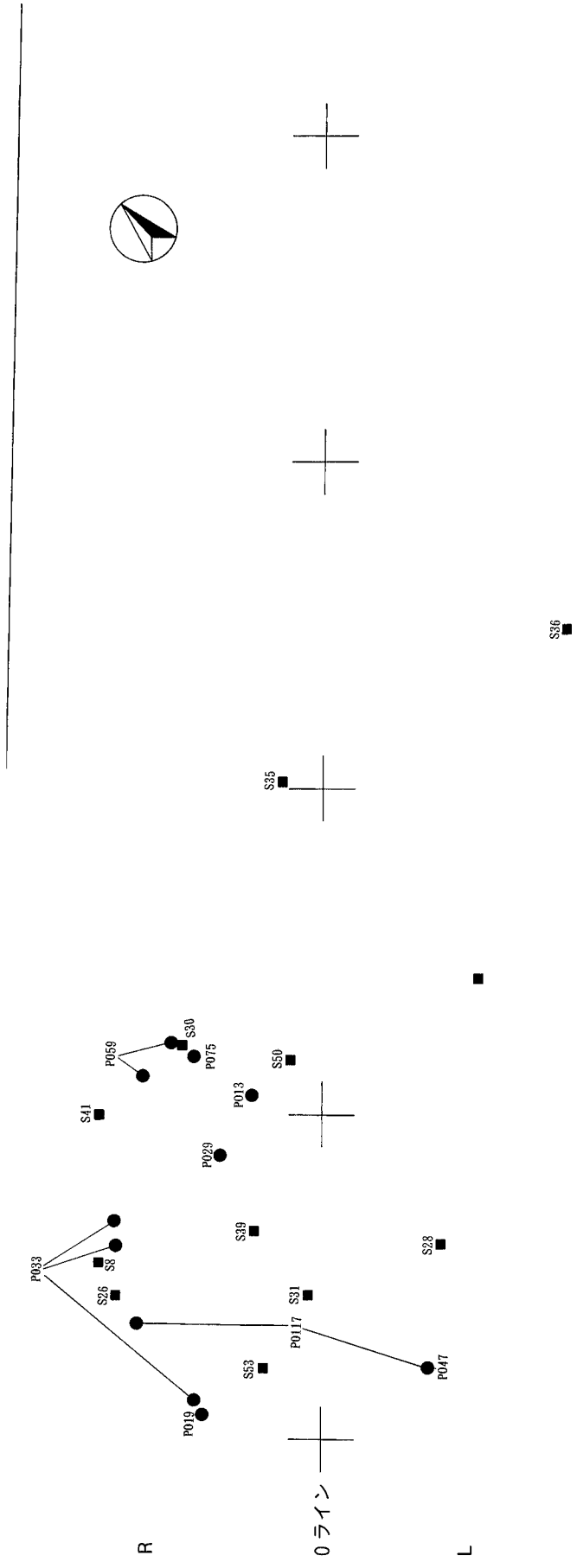
土器の出土するレベルは、基盤岩の直上から20~30cm程度浮いた地点に集中している。今回大量に出土した石錘も、土器と同じく平面的にはまとまった出土傾向を示さないが、レベルとしては土器に準じて出土している。こうした状況から、潮の満ち引きによる潮位の変化で生じた干潟の上面に遺物が放置され、徐々に埋没していった状況が考えられる。ただし土器の垂直分布からは、時代ごとの海水面の変動を示すような兆候は見られず、第1次調査で確認されたような層位的な土器の堆積状況も認められない。

時期的には、前期前半段階の資料が多く出土していることから、それ以降に浸食と堆積を繰り返しながら、中期中頃までに完全に埋没し、前期から中期の土器が混在する遺物包含層を形成しているものと考えられる。自然遺物のうち大形の流木については、6区の波蝕台縁辺の基盤岩直上に散在していた。

### 5. 出土遺物（第14~27図）

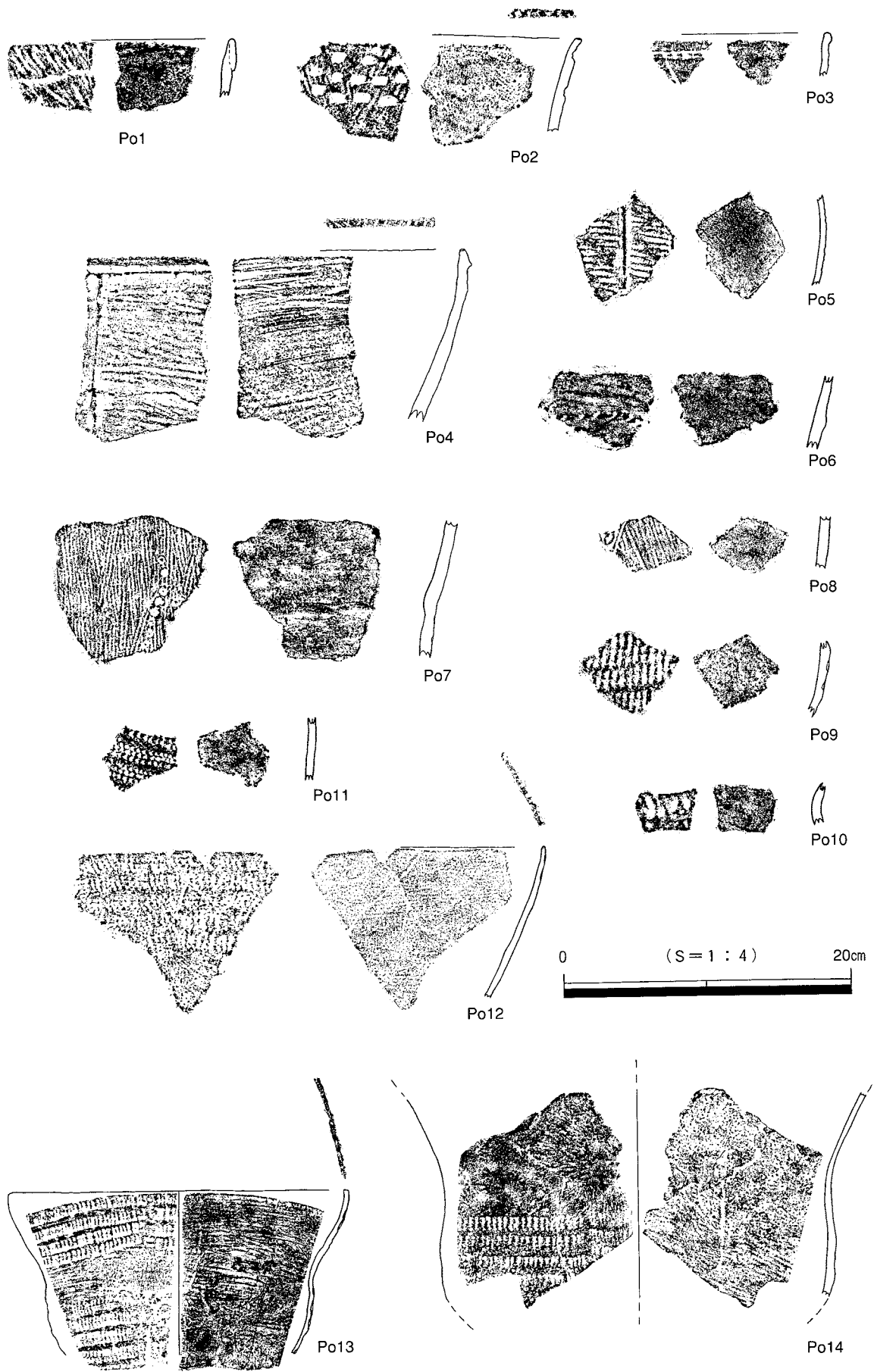
検出した遺物は、土器、石器、植物遺体、動物骨である。目久美遺跡出土の縄紋土器は、第1次調査報告書で分類が試みられており、今回もその分類を踏襲する。第1次調査では、縄紋時代の土器は、前期から晩期まで4期18群に分けられている。前期は6群13類に分けられ、中期は6群14類に分類されている。なお、第8次調査では、前期、中期の資料が主体であるため、後期、晩期の土器分類については割愛している。分類の詳細と、各型式は第9図に記した。

ZI類は、第1次調査の最下層から検出された土器群で、A~Eの5類に分けられている。このうち第8次調査では、Po3がZIA2類に相当する。またPo2もZIA2類に属するものと考えられる。ZIB1類は、粗い条痕に外面に縦位と横位の細い隆帯が貼付されるもので、Po4とPo5がこれにあたる。ZIB2類は隆帯に刺突状の刻目を施すもので、Po6がこれに相当する。ZIA類、ZIB類は、井上智博氏により西川津A、B式が提唱され、前期初頭段階の標識資料とされている。

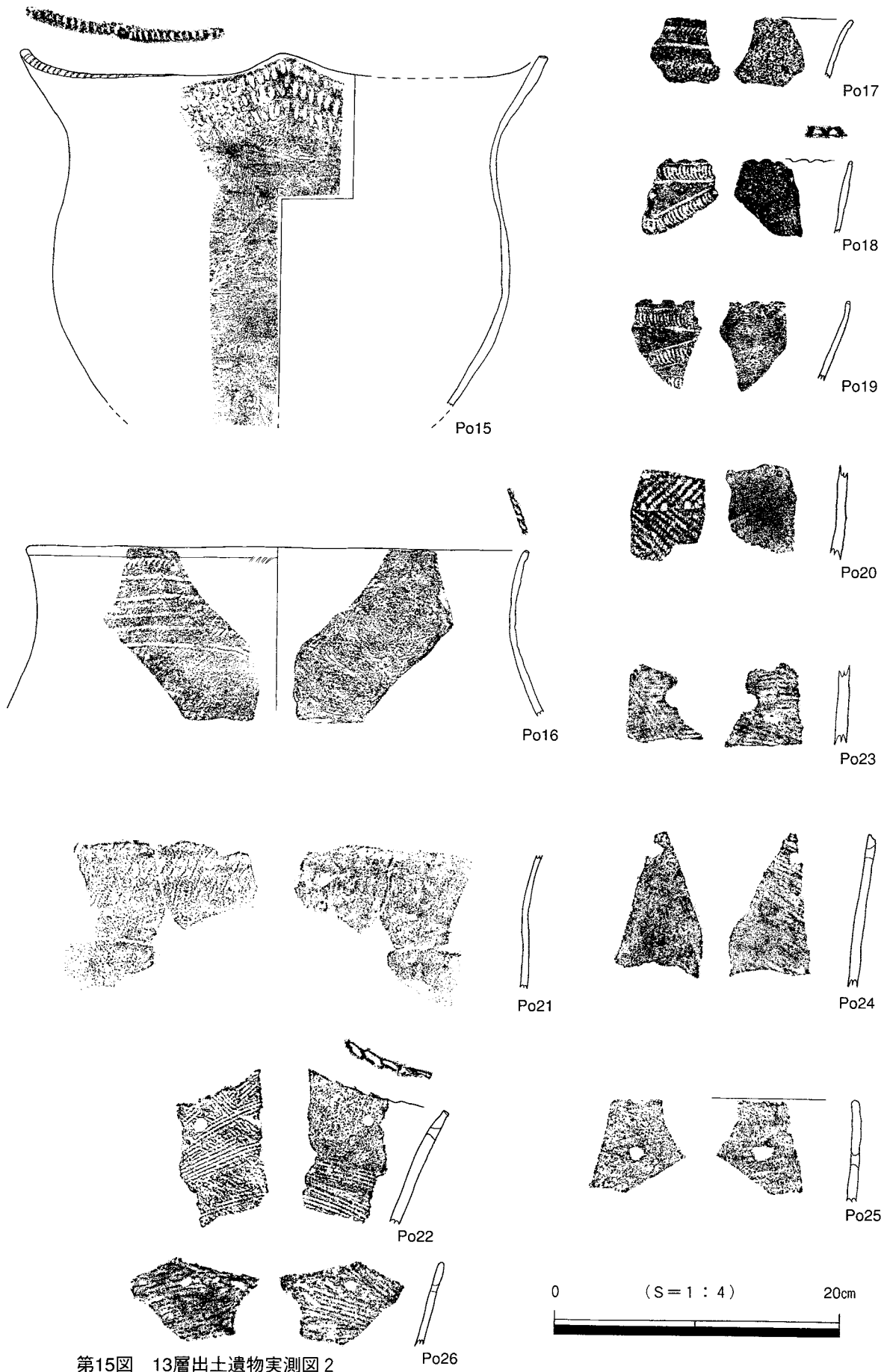


第13図 13層出土遺物分布図2

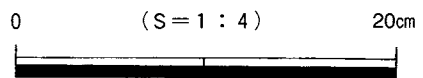
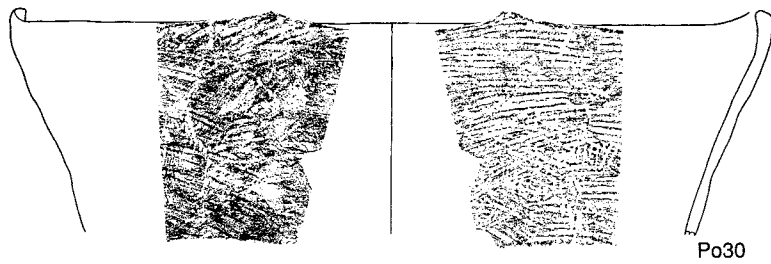
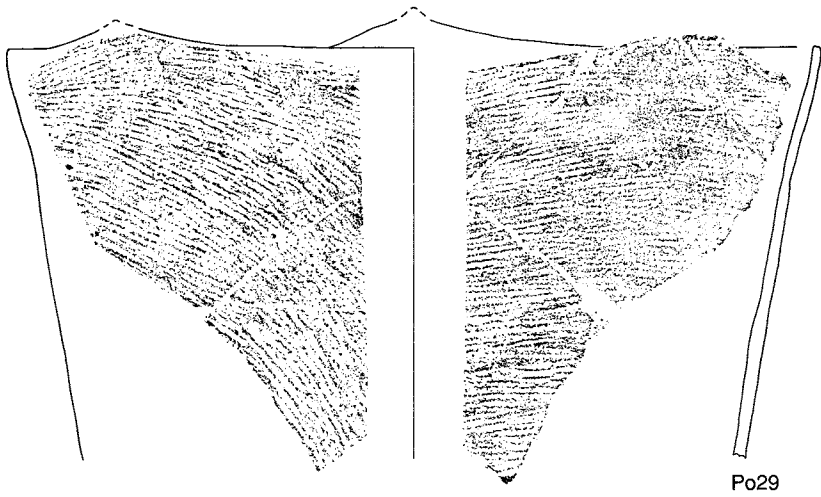
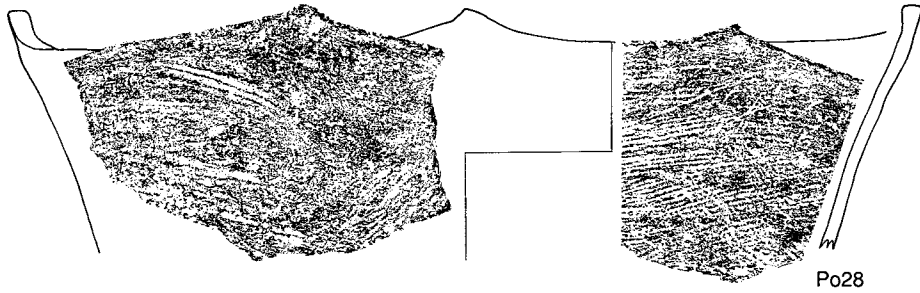
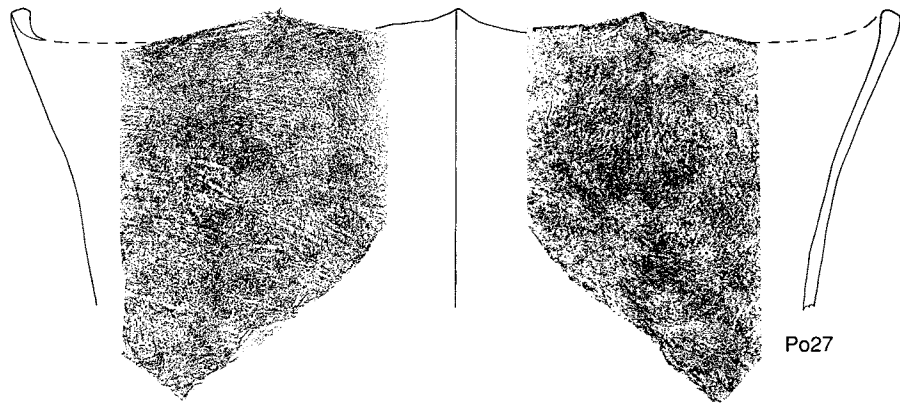




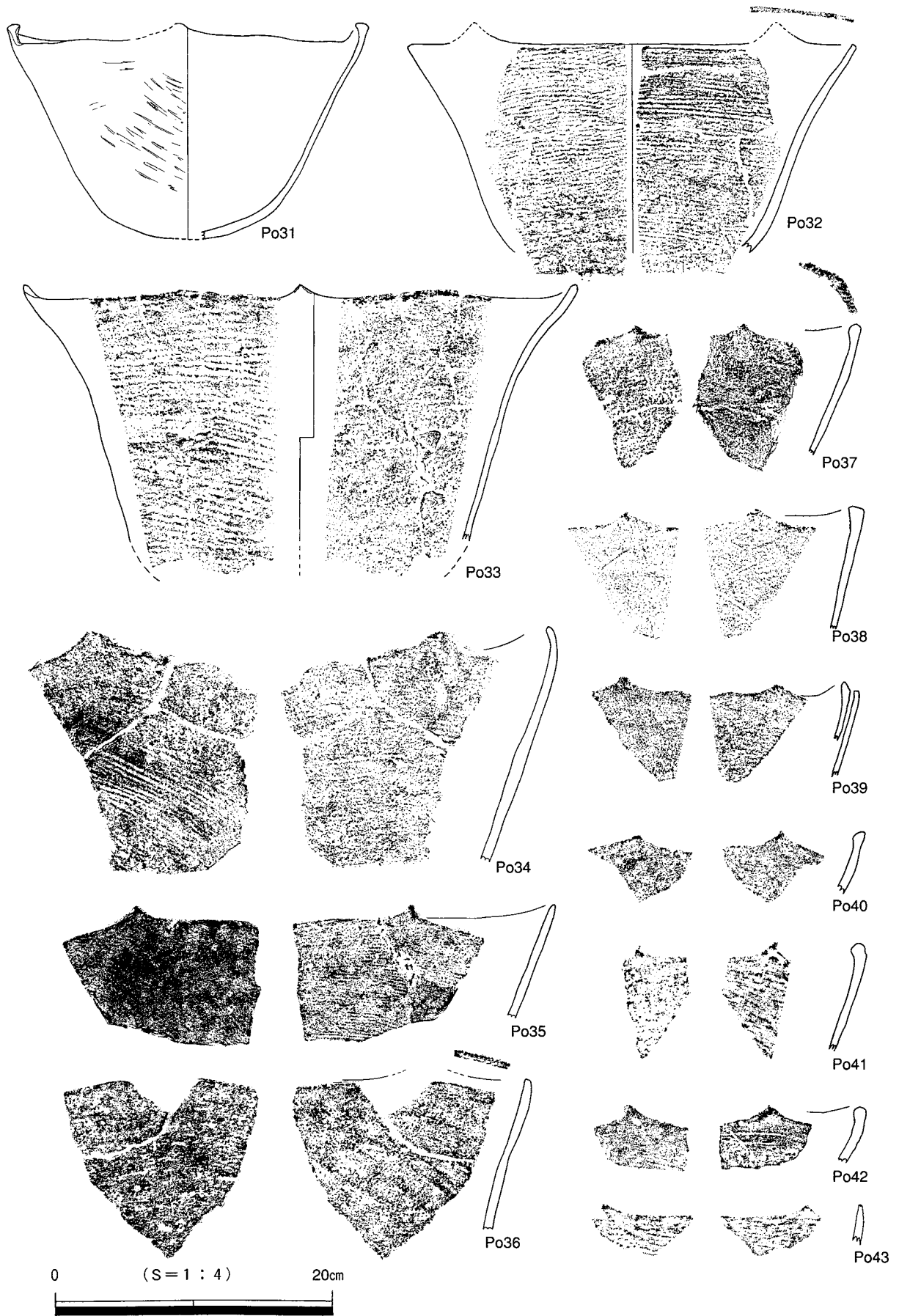
第14図 13層出土遺物実測図1



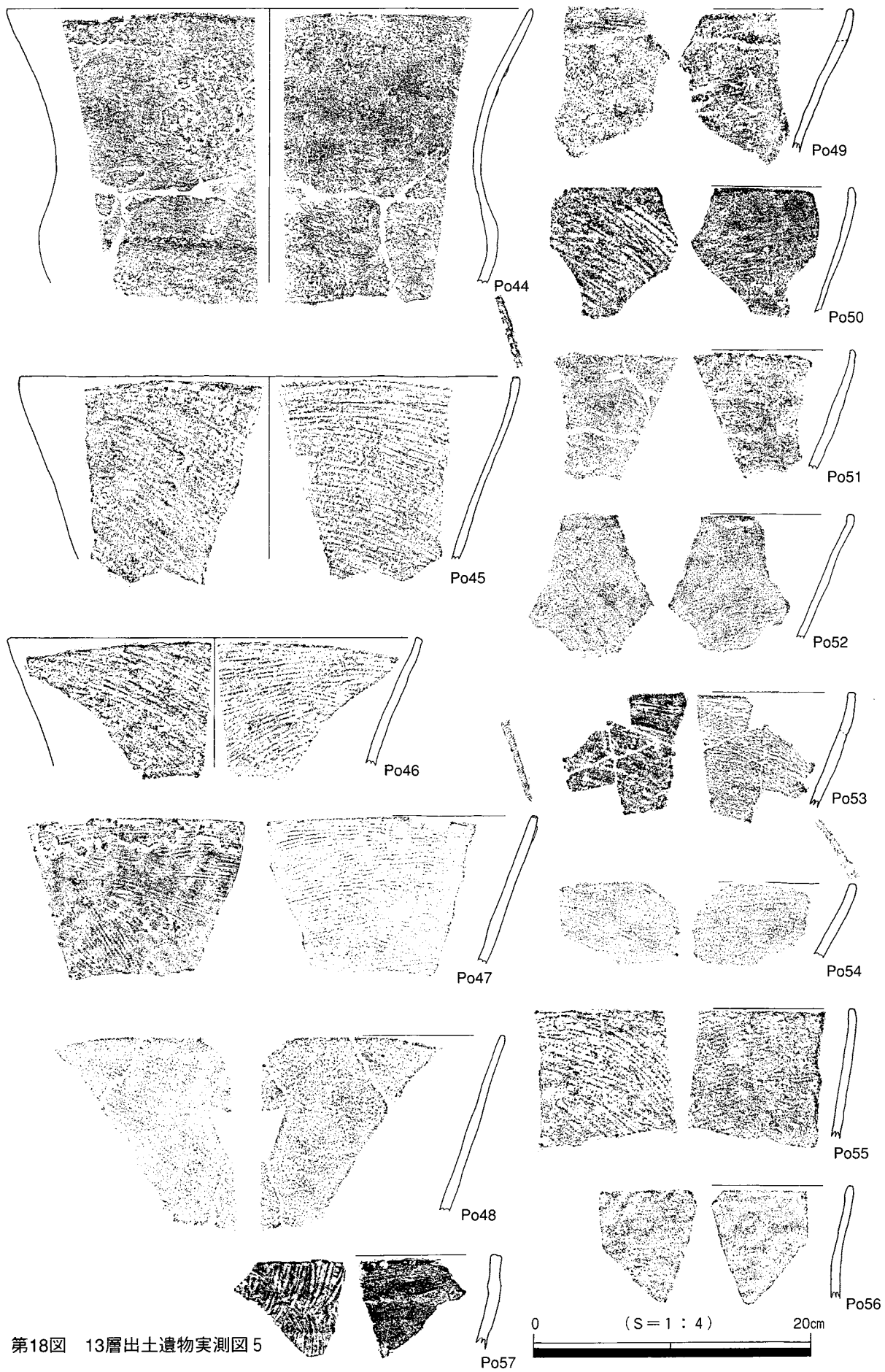
第15图 13層出土遺物実測図 2

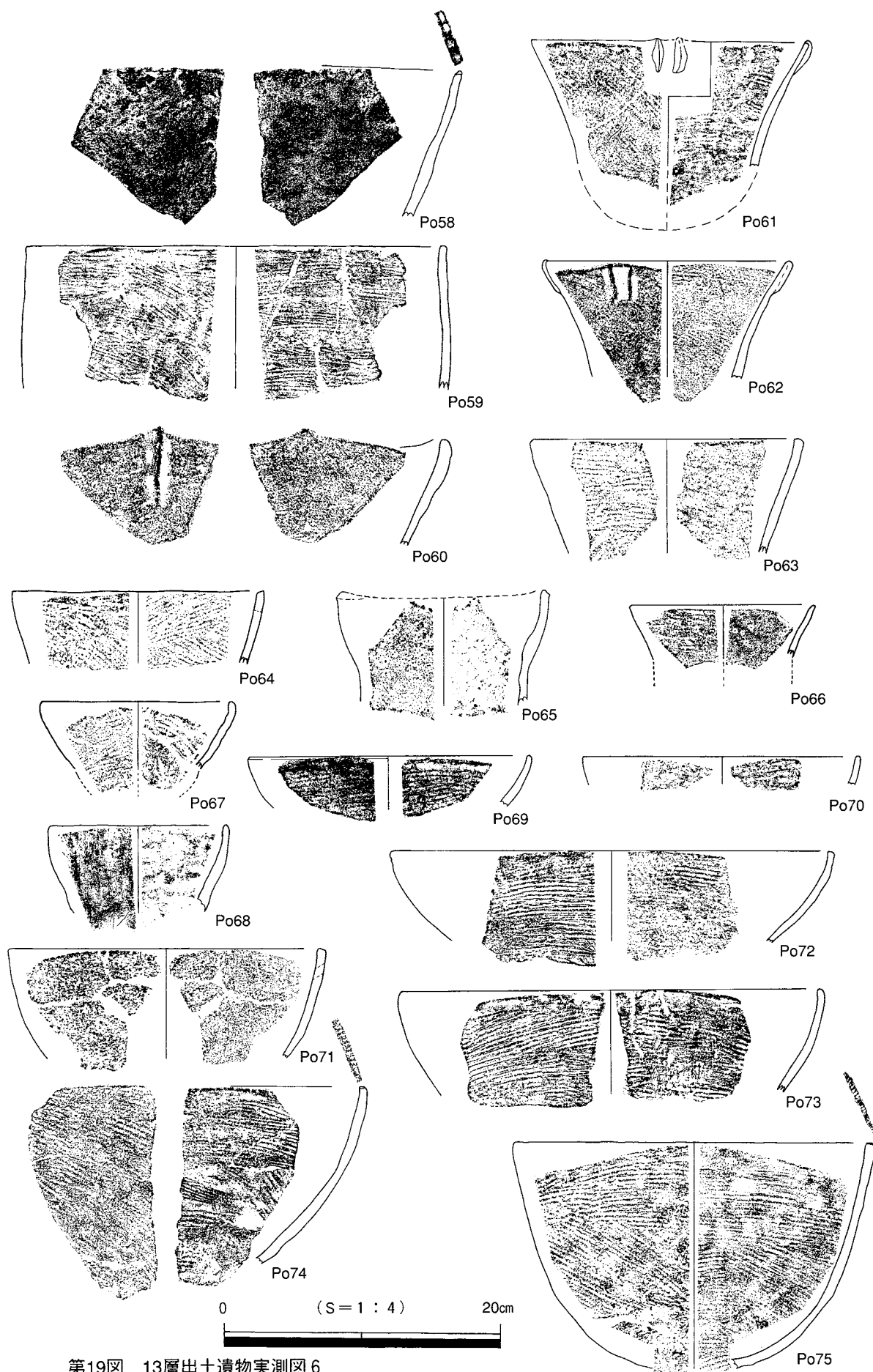


第16図 13層出土遺物実測図3

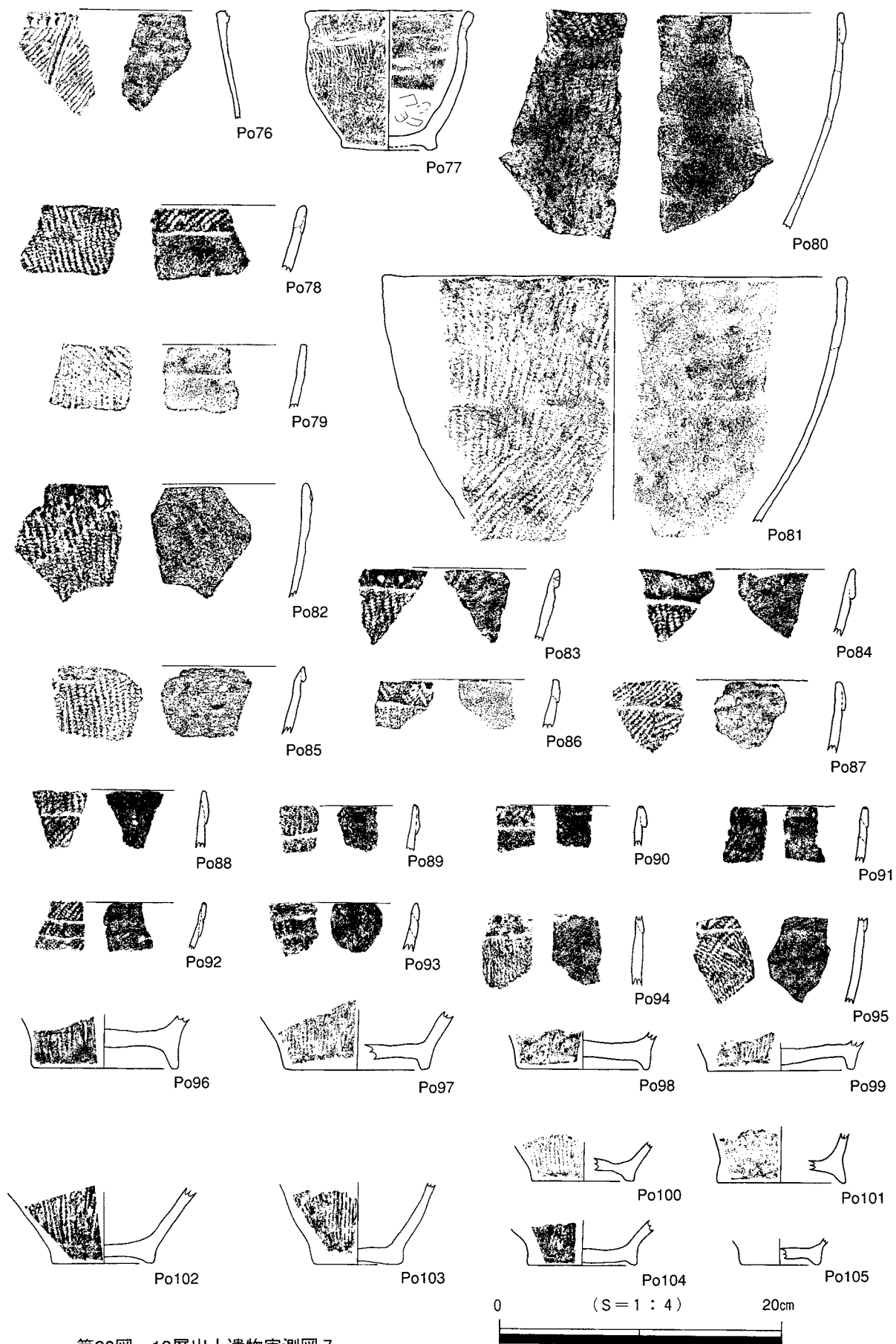


第17図 13層出土遺物実測図4

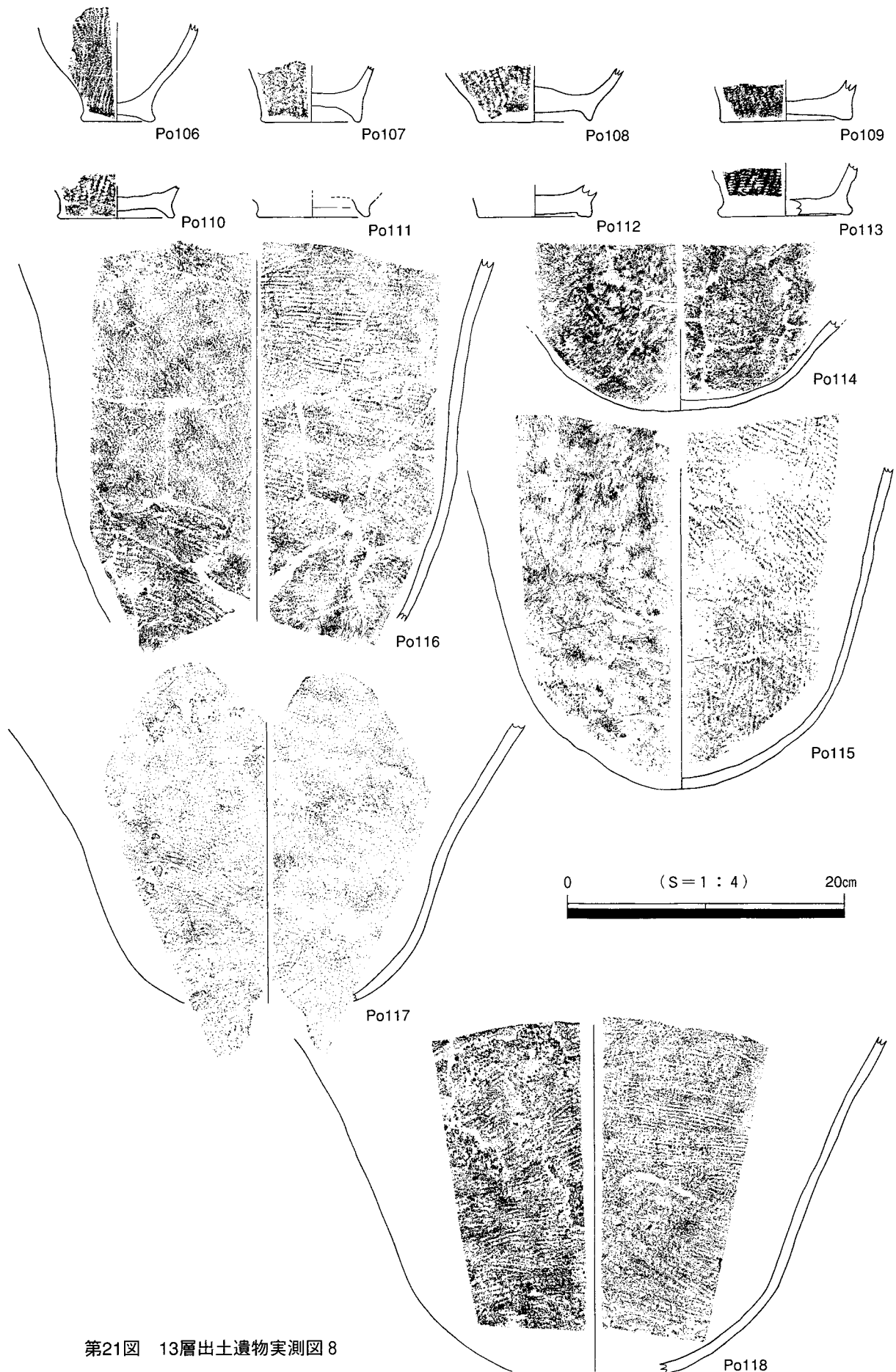




第19図 13層出土遺物実測図6

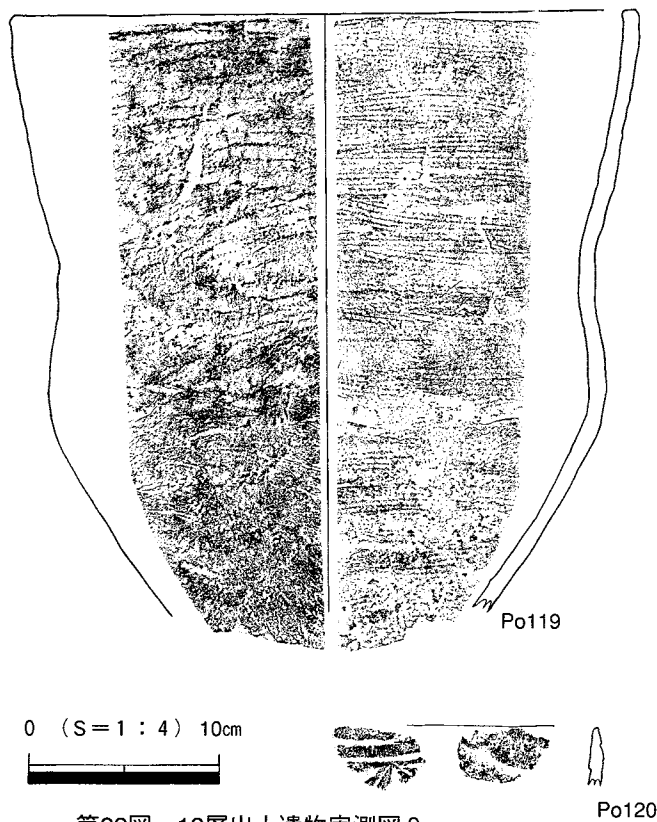


第20图 13層出土遺物実測図7



第21図 13層出土遺物実測図8





第22図 12層出土遺物実測図9

ZIE類は、菱根式に比定される、胎土に繊維を混入する深鉢形土器である。これに該当するものはPo117である。これは早期末の資料である可能性があり、今回の資料中、最も古相を示す遺物である。第1次調査では、縄紋地のものと条痕地のものに細分されているが、こうした変化が菱根式から島根大学構内遺跡1次調査出土土器との過渡的な変化を示す可能性が小林青樹氏により指摘されている。

ZII群土器は、瀬戸内の羽島下層式、福井の鳥浜貝塚第3群土器に並行するものと考えられる一群で、第1次調査の下層出土前期土器として一括されたグループである。Po11は、3字状刺突紋を施すもので、羽島下層II式の典型資料と考えられる。ZIIA1類は「D」字状刺突紋が巡る。ZIIA2類は、貝殻状の工具により施紋されるグループで、Po12、Po13、Po14がこれに相当する。ZIIA3類は、「D」字状の一連単位の刺突紋が巡るタイプ。ZIIA4類は、ヘラ状

工具による刺突紋を持つタイプで、Po15がこれに相当する。ZIIA5類は条痕調整のみで終わる一群で、ZIII群土器との区別が困難であるが、プロポジションなどから設定された一群。

ZIII類は北白川下層I式に並行するものと考えられているもので、第1次調査の前期土器の層位では、上位から出土しているとされるものである。ZIIIA1類は「D」字状。ZIIIA2類は条痕調整のみの一群。ZIIIB1類は「C」字状の刺突紋が巡るタイプで、Po16、Po17がこれに相当する。

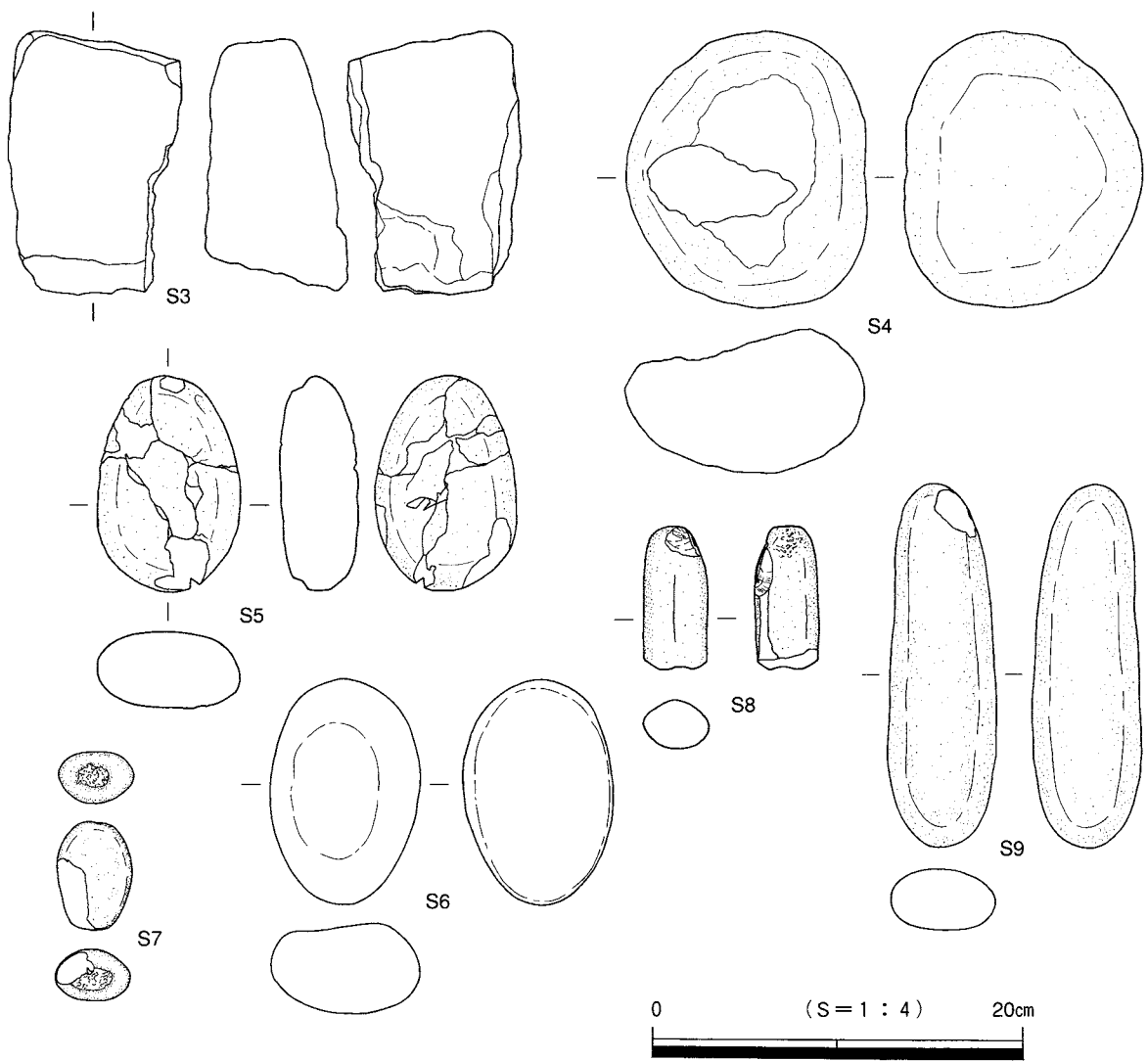
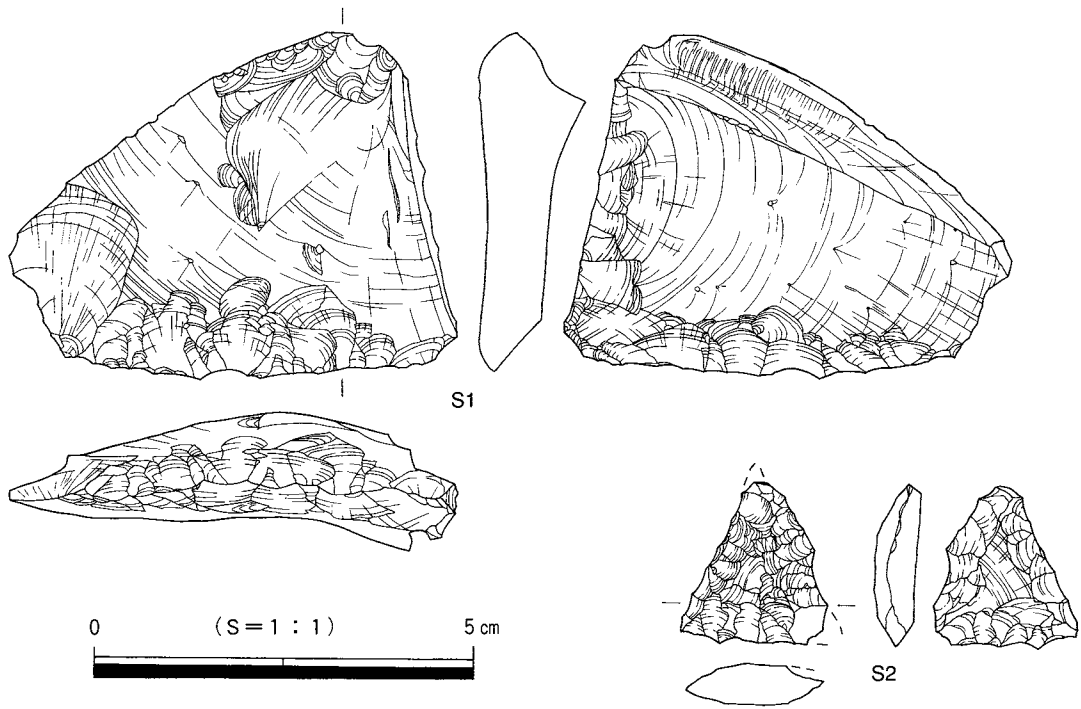
ZIV類は、瀬戸内の磯の森式、北白川下層II式に並行するものと考えられる。ZIV A類は口縁部片がPo18、Po19である。ZIV B類。ZIV C類は、横位に帯状施紋された斜縄紋、羽状縄紋のグループで、Po20がこれに相当する。

ZV群は、彦崎ZI式に並行するグループであるが、今回の調査では、確認できなかった。

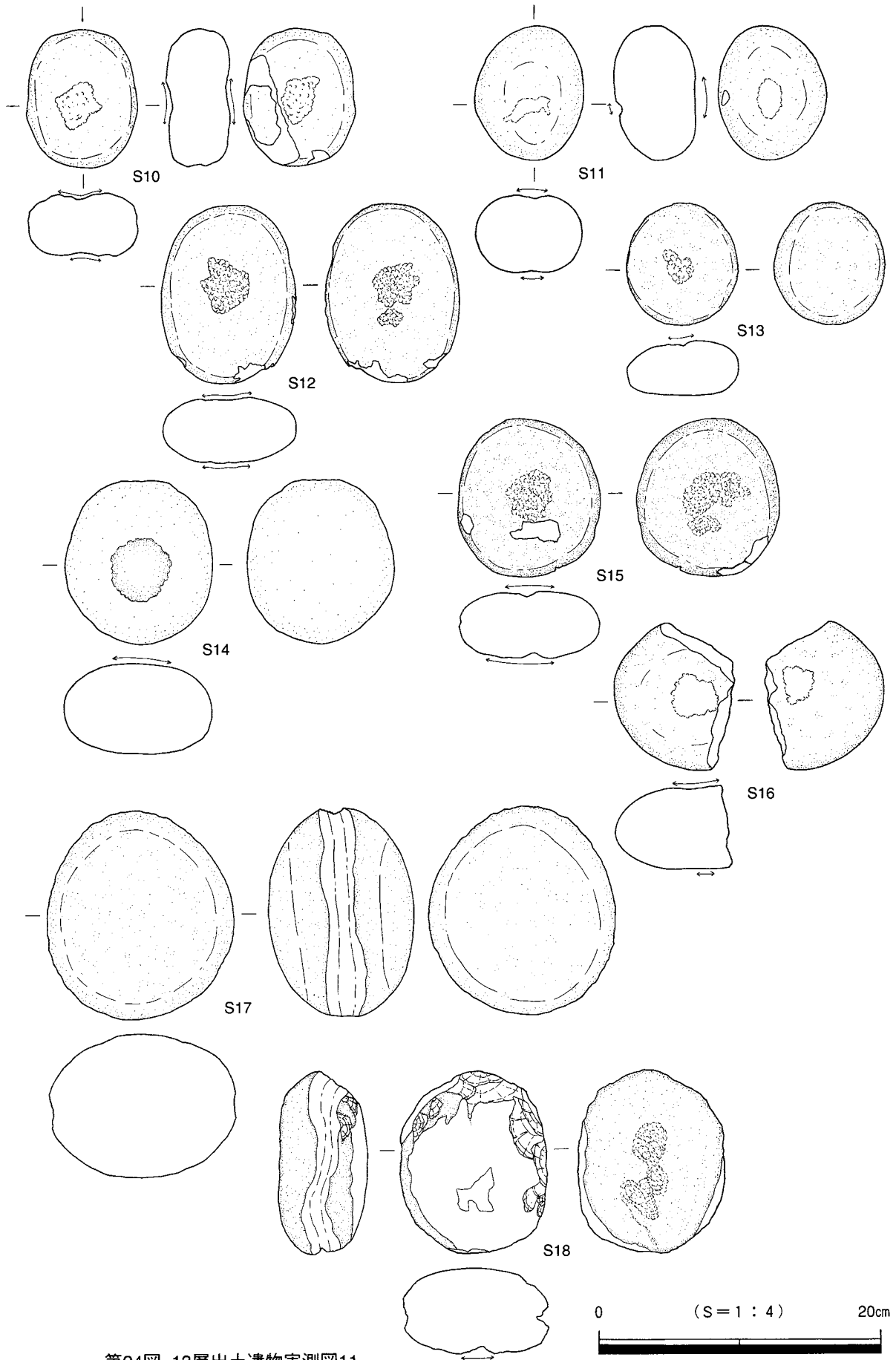
ZVI群は里木I式に並行する。Po76は縄紋地に突帯を貼り付けるもので、はみ出した粘土が明瞭に観察できる。

中期は、船元I式が見られるほか、東山陰に集中して分布する波子式が多く出土しており、中期土器の大半を占める。今回の調査では、後期の資料はほぼ完全に欠落しており、全く認められない。晩期前半には、縄紋層の直上の12層から檀原文様を施す土器片(Po120)が出土している。また帰属時期がはっきりしないものの、褐色粘土層中から表裏に条痕紋を施す土器(Po119)が出土しており、後期末から晩期初頭頃の年代が考えられる。第1次調査の資料と比べると欠落する型式が多く、数量的にも少なくなっているが、こうした原因は、調査地点の環境の違いに起因するものと考えられる。

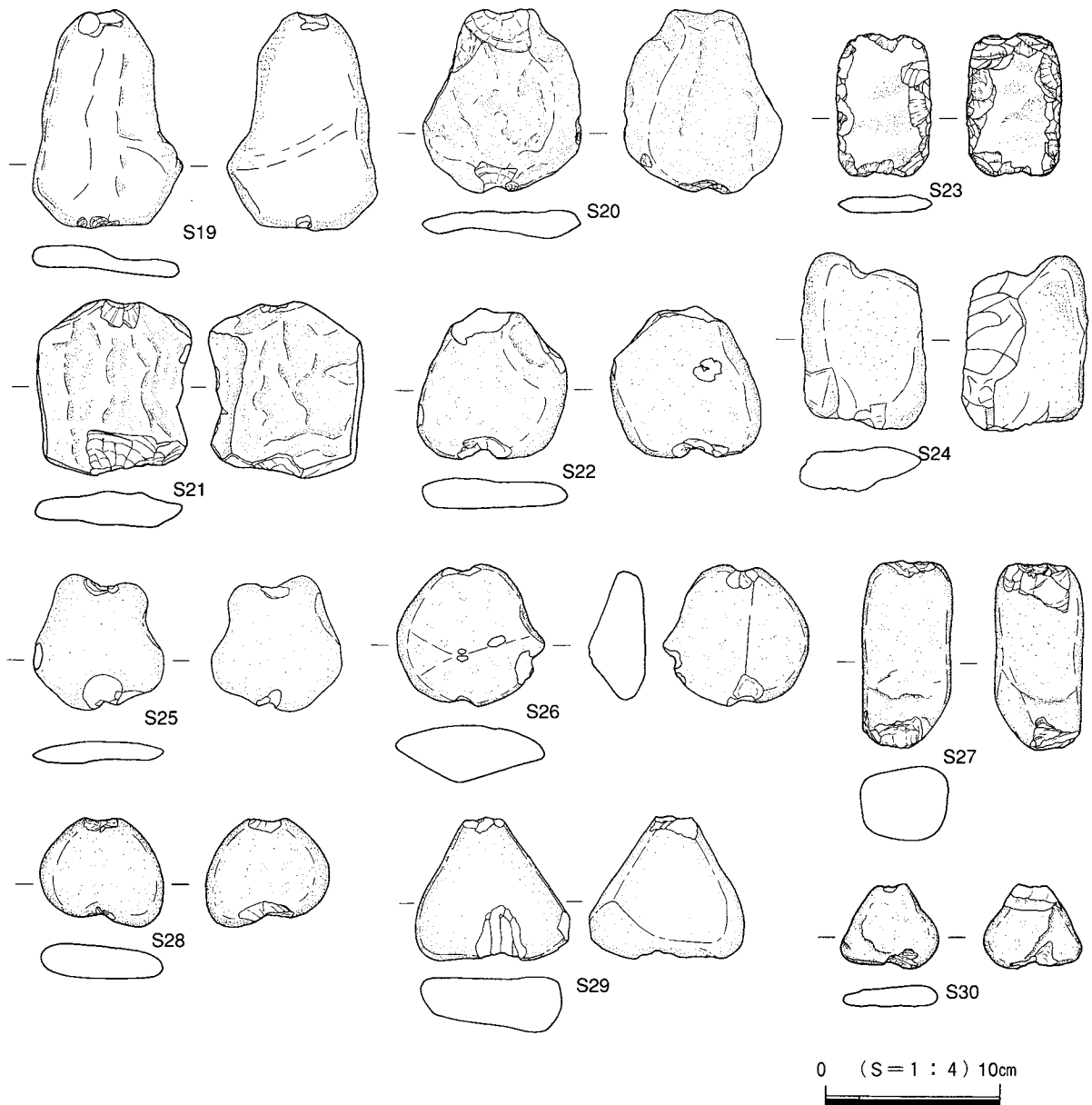
石器は、石錘、石皿、叩石、凹石、黒曜石製石鏃などが出土している。またS9のような河原石が出土している。このような自然石は、表面に加工した痕跡は見られないものの、出土点数が少ないことと、大河川から離れた地点にあたることから、何らかの理由で人為に持ち込まれたものと考えられる。石錘は、周縁を掘り込んで作るもの(S17、S18)と、円礫の対角する二点を打ち欠き、縄かけの部分を作るもの(S19～S74)、の2種類がある。後者の打ち欠きタイプは、長楕円形のもの、三角形のもの、薄い自然石を利用したものなどがある。また



第23図 13層出土遺物実測図10



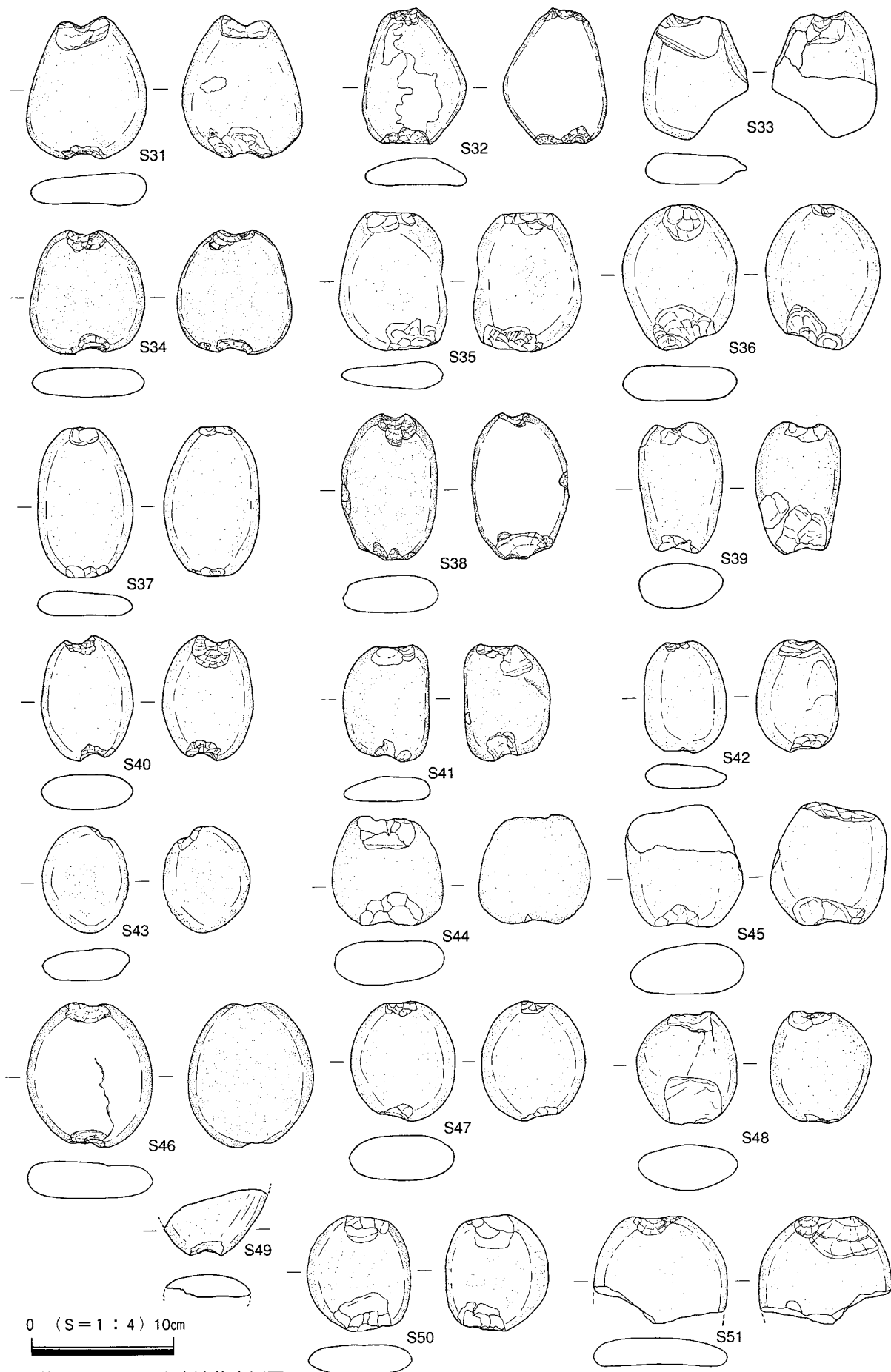
第24図 13層出土遺物実測図11



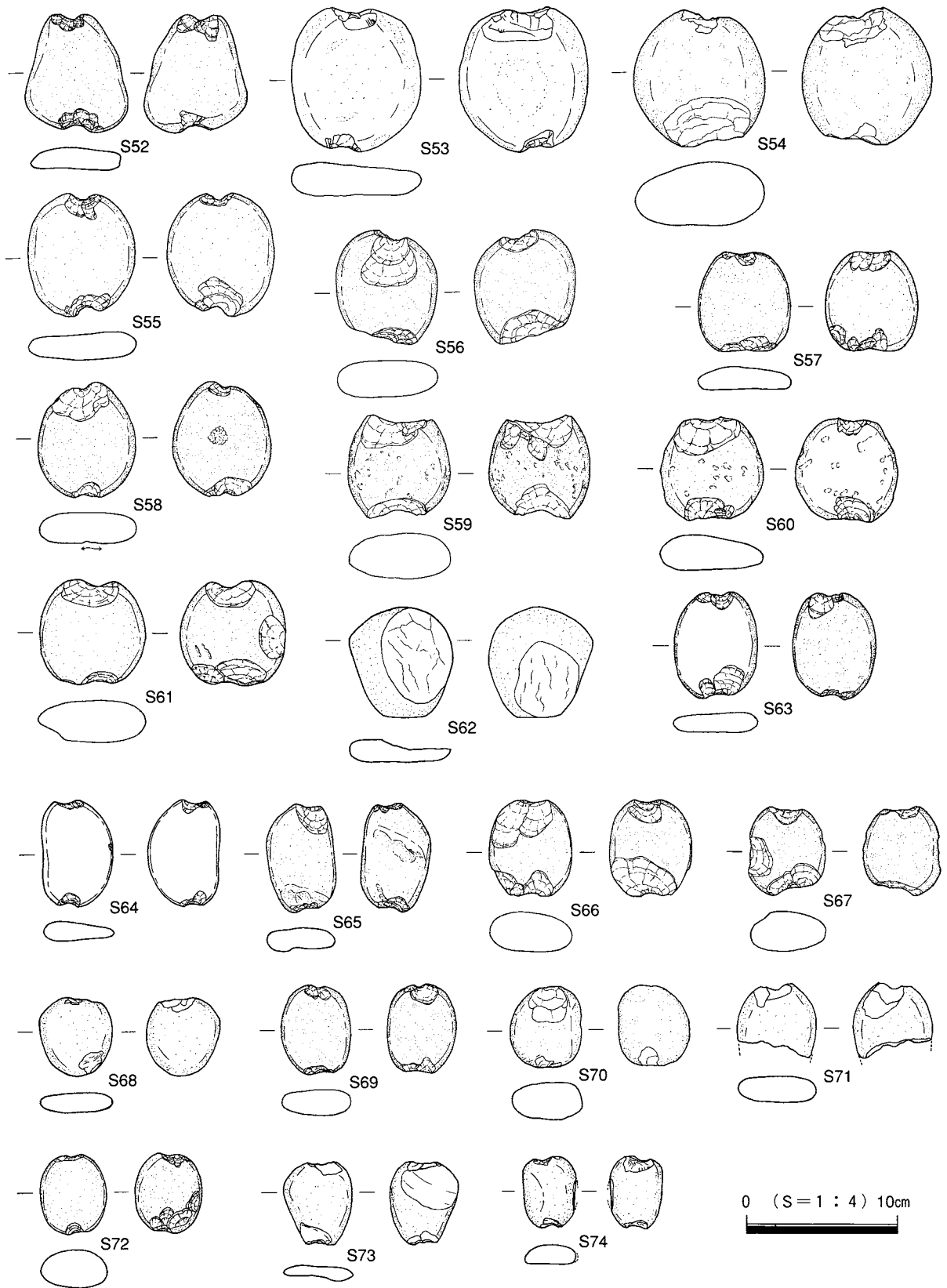
第25図 13層出土遺物実測図12

安山岩製のものは硬く加工に不向きとも考えられるのだが、一部に黒くすすけた痕跡が残るものがあるため、加熱した後に加工した可能性も考えられる。

動植物遺体は、波食台縁辺の地山直上に、現存する長さ3.5メートルの大木や木片が散布していた。また包含層中からイノシシの下顎骨片が出土しており有機物の堆積した地点があったものと考えられる。また直接的なものではないが、青灰色粘土の下位から砂管型の生痕化石が出土しており、これらは甲殻類の巣穴と考えられる。また散布していた木は表面が風化し、フナクイムシの生痕があったことから、周辺の海域に漂流していた流木が打ち上げられたものと考えられる。木の下から縄紋前期前半の土器が出土していることや、大木の放射性炭素年代測定の結果から、縄紋時代前期前半から中期中頃までの期間に堆積した植物遺体群と考えられる。また土坑1の埋土中からは少量の種子が出土した。土坑埋土を水洗洗浄して得られたもので、貯蔵穴内に取り残したものと考えられる。



第26図 13層出土遺物実測図13



第27図 13層出土遺物実測図14

## 第5節 弥生時代前期の調査

### 1. 概要

縄紋時代層の上面、標高1.6mから1m付近の調査区全面にわたって、濃黒色の腐食を多く含む粘土層が堆積しており、この層中から、突帯紋系土器、遠賀川系土器、石器、木器類が多数出土した。この層は、第6次調査で検出された第13層に相当する層で、出土遺物も同様の傾向を示している。また、この層からは、プラントオパールが微量ながらも検出されており、水田遺構の存在が推定されている。今回の調査では、畦畔や水路などの直接的な水田遺構の資料は得られていないが、石鍬が出土しており、何らかの耕作遺構が存在した可能性が高いものと考えられる。また東日本系の土器が出土しており、遠隔地との交流を窺わせる資料も得られている。

### 2. 土層の堆積状況

弥生時代前期の遺物を含む層は、濃黒色粘土層の単一土層で、調査区の全面にわたって、深さ10cmから20cm程度の厚さで堆積している。1区では標高1.6m、14区では標高1mに分布しており、南から北へ緩やかに傾斜しているものと見られる。この粘土層中には、腐敗がそれほど進行していない植物の繊維が多く認められる。また濃黒色粘土は砂粒をあまり含まず、強い粘性を持つ。この層を検出した上面においては、遺構を検出することが出来なかったが、出土遺物の中には、弥生時代中期の遺物が少量含まれており、何らかの遺構が存在した可能性も考えられる。

### 3. 遺物の出土状況（第28～30図）

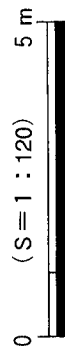
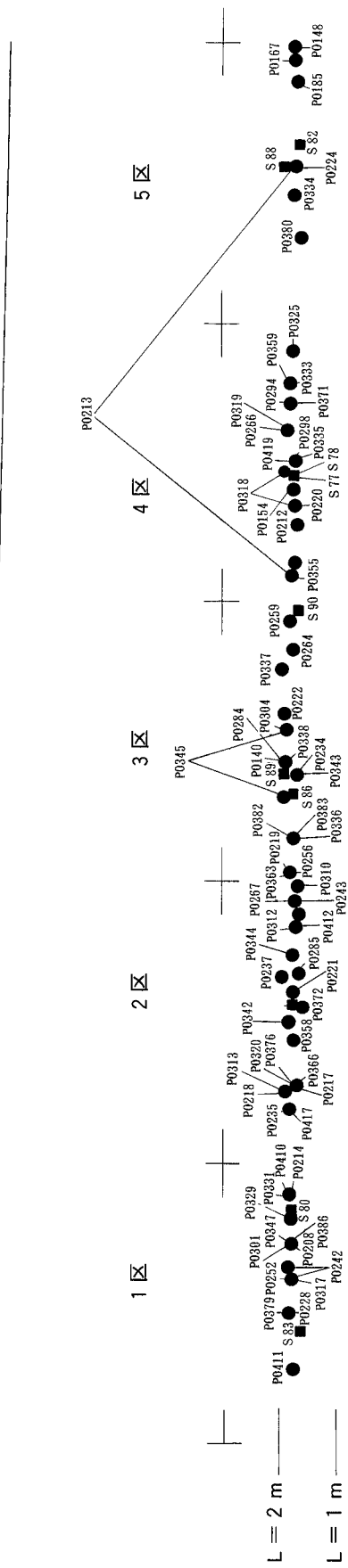
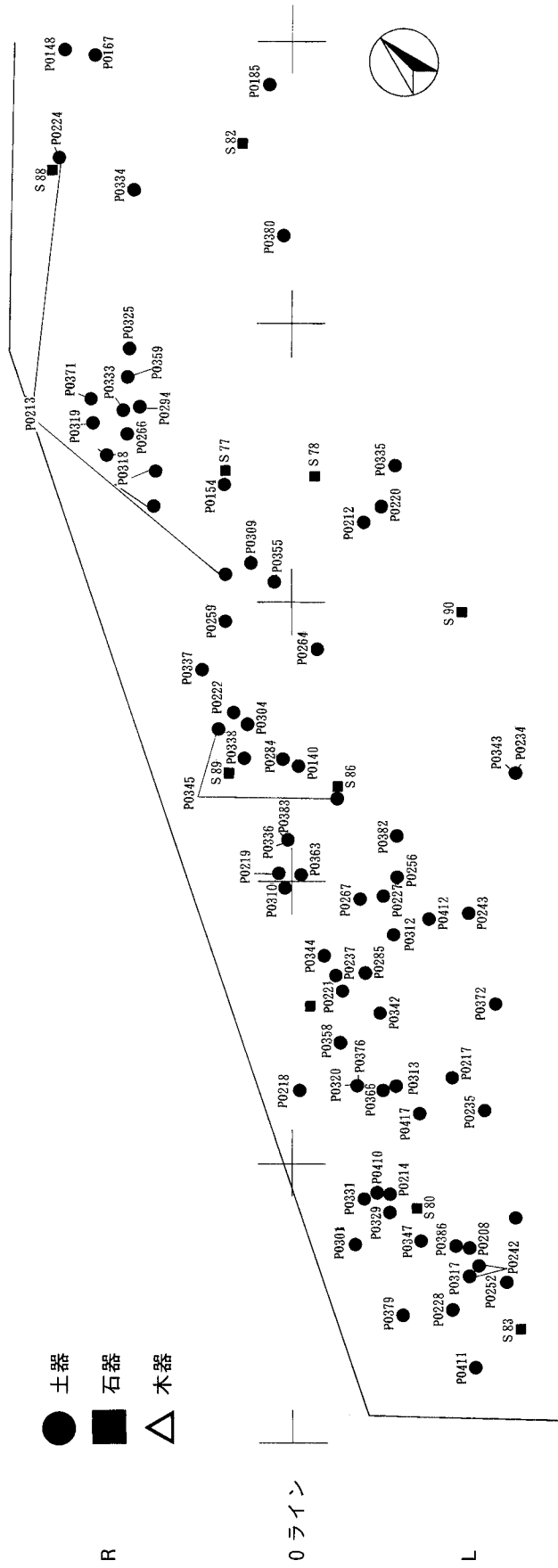
遺物は、調査区のほぼ全域に分布しているが、1区から4区にかけての範囲には、より多くの遺物が含まれていた。またこれとは逆に、弥生時代中期の水路跡と重なる部分は、出土点数が少なくなっている。おそらく水路の構築によって、大半の遺物が流出してしまったためと考えられる。遺物の取り上げは、特に密集して出土する地点は、1メートルの小グリッドを設定し、グリッド単位で取り上げている。弥生中期の水田下層の遺物と比較すると、細片化した遺物が多く、あまり接合しない点に違いが見られる。

### 4. 出土遺物（第31～44図）

図化できた遺物は、土器、石器、木器である。

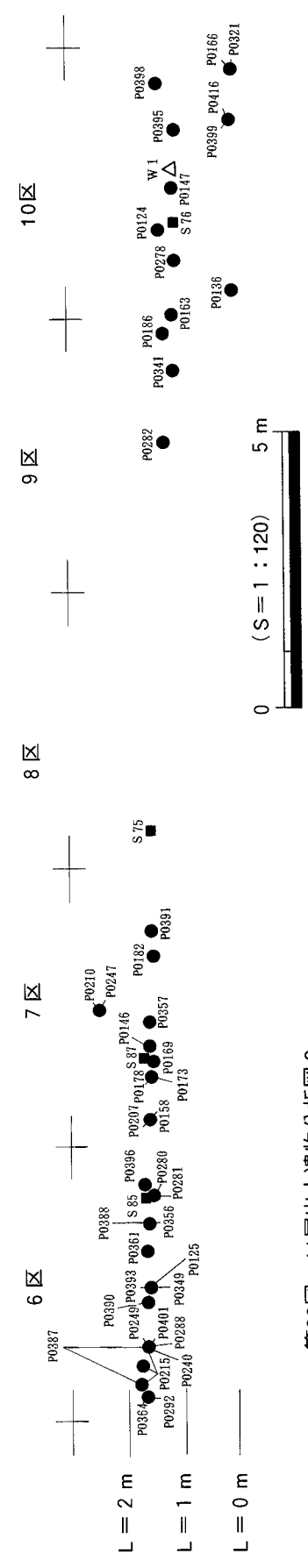
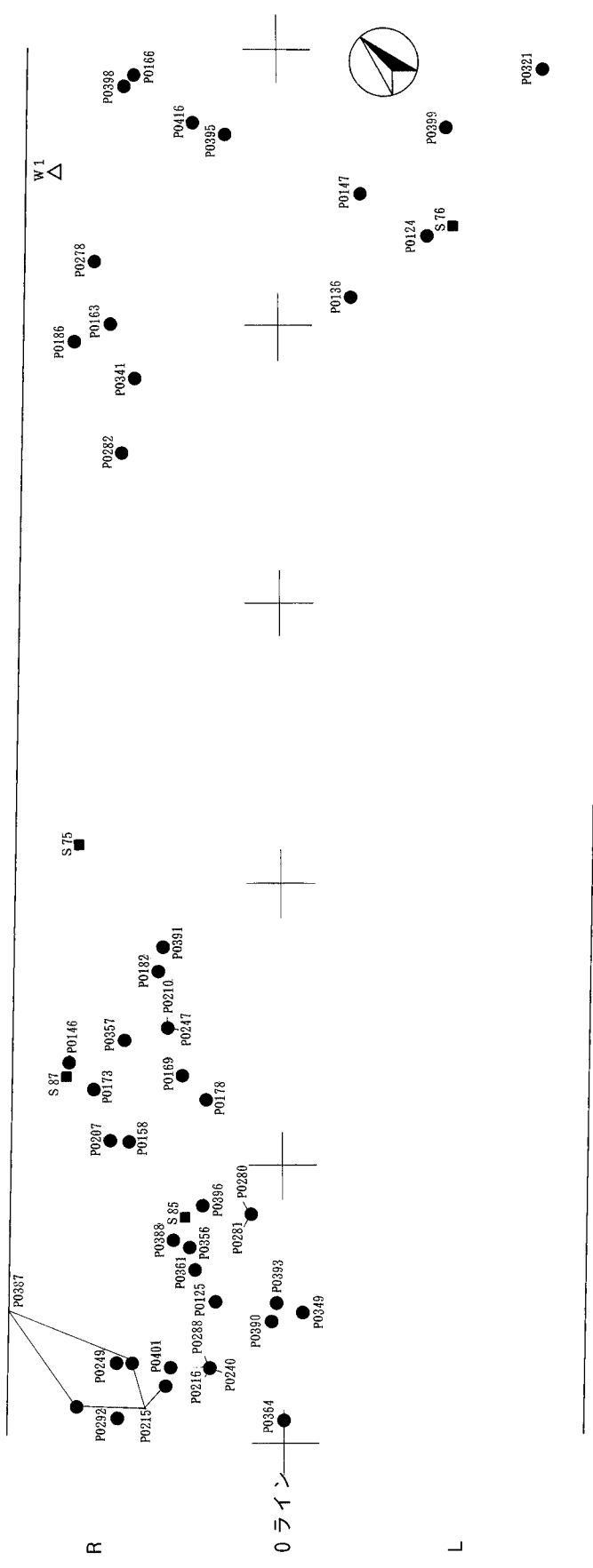
第31、32図は、突帯紋系土器である。突帯の刻目の有無で分類した。Po121からPo129は、突帯に刻目を持つグループである。今回の調査で出土した刻目を持つものは、ここに図示したものと、その他の包含層、排水溝出土のものがあるが数量的には少ない。Po130からPo150は、口縁端部に接して突帯が付くもので、突帯の断面形は下がり気味の三角形となる。Po151からPo156は、突帯が口縁端部からやや下がった位置に施されるもので、突帯の断面形は、三角形を呈する。Po157からPo167は、口縁端部からやや下がった位置に突帯が巡り、口縁端部が外反するもの。Po168からPo171は外面をハケ調整するものである。Po183は突帯が分岐し2条突帯となるもので、波状口縁形の深鉢として図化した。Po184は、浅鉢形土器と見られるもので、内湾する口縁の下に突帯が巡り、体部の屈曲部と共に刻目を施す。Po185、Po186は壺形の器形を呈するもので、Po185は口縁端部に刻目のある突帯を巡らす。Po187からPo195は、粗製深鉢形土器である。第33図、Po196からPo204は、粗製の浅鉢形土器である。口縁部は直線的に立ち上がるものと、内湾気味に立ち上がるものの二種がある。Po205は補修孔を持つ土器片で、内外面とも粗い条痕調整が残る。

第33～42図は弥生土器である。第33図Po206から第36図Po288は壺形土器である。Po206は、内湾気味に伸びる頸部から口縁部は短く屈曲して外反する。胎土は黒色で、ミガキを施している。Po215は頸部内面に突帯が巡る。Po251からPo253、Po257からPo265は頸部、ないし胴部に突帯が巡るものである。装飾を施すものは第36図に示

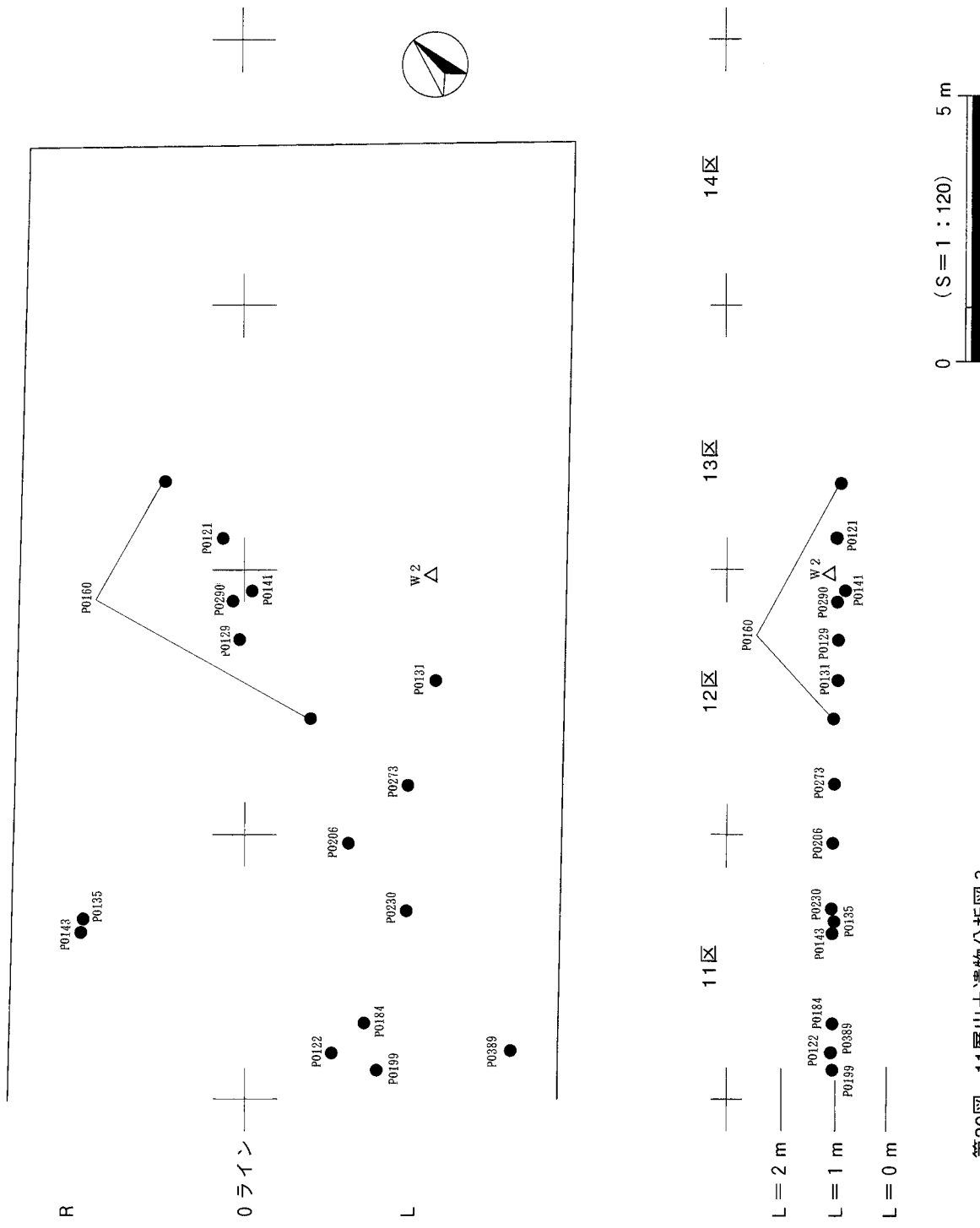


第28図 11層出土遺物分析図1





第29図・11層出土遺物分析図2



第30図 11層出土遺物分析図 3

した。Po266、Po267は木葉紋。Po268からPo274は綾杉紋。Po275、Po276は細片のため紋様が不明瞭である。Po277は鋸歯紋か。Po278は斜格子紋と櫛描紋の組み合わせに2条の突帯が巡る。また突帯には縦位に粘土紐を貼り付けている。Po279からPo281は貝殻の腹縁部を右上がりに刺突したものである。Po282、Po283は櫛状工具による波状紋を施す。Po286からPo288は無頸壺である。

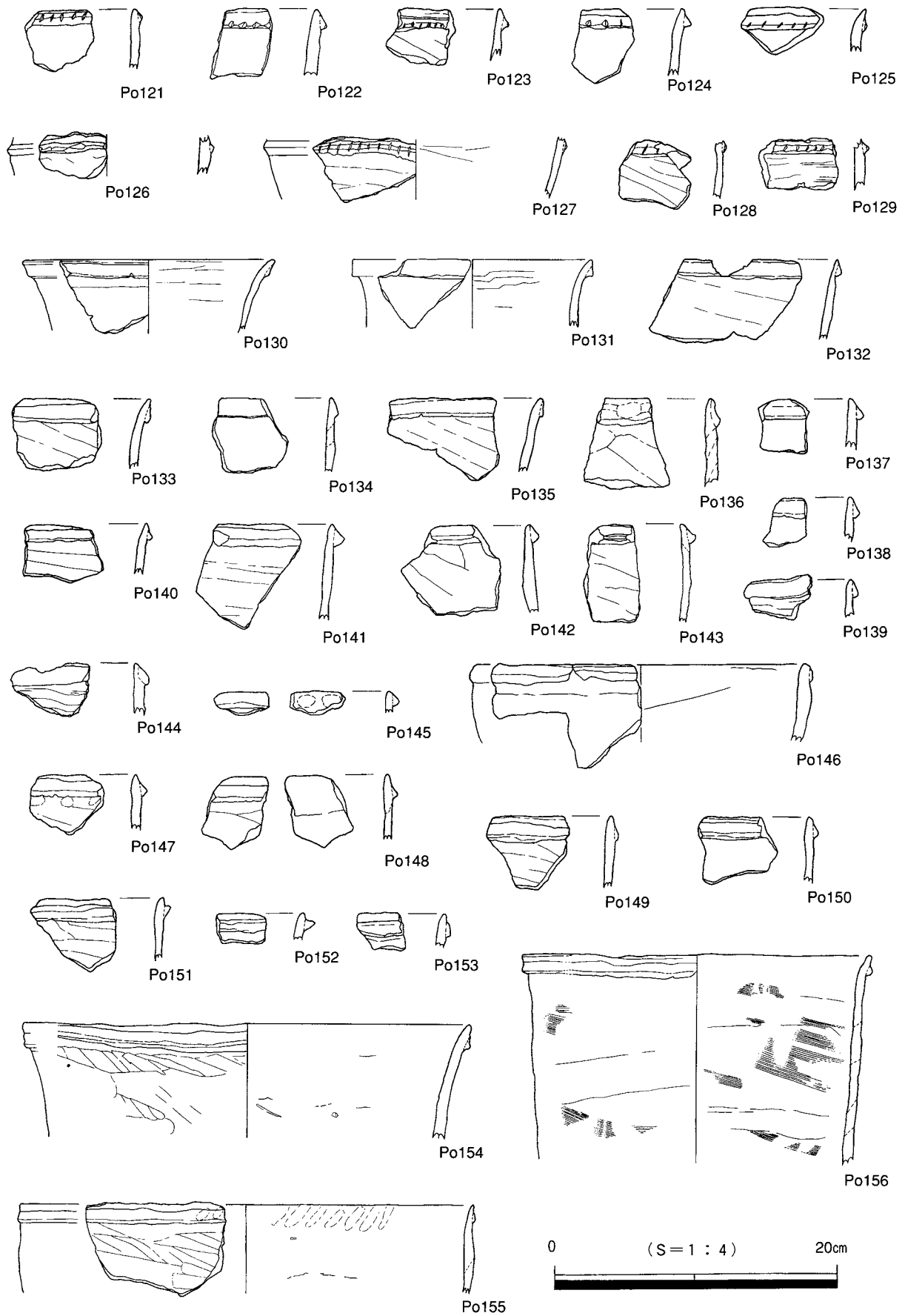
第36図Po289からPo293は鉢形土器である。Po289は口縁端部が肥厚し外方に伸びる。Po291は、口径が10cmに満たない小形品である。

第37図Po294からPo388は甕形土器である。口縁端部の刺突の有無によって分類した。Po294からPo297は頸部下に段を持つものである。Po358からPo388は口縁端部に刻目を持つもので、プローションや口縁部の形態、沈線の有無などで分類が可能である。Po388は、刻目を持つL字状口縁で、口縁端部直下に5条の沈線が巡る

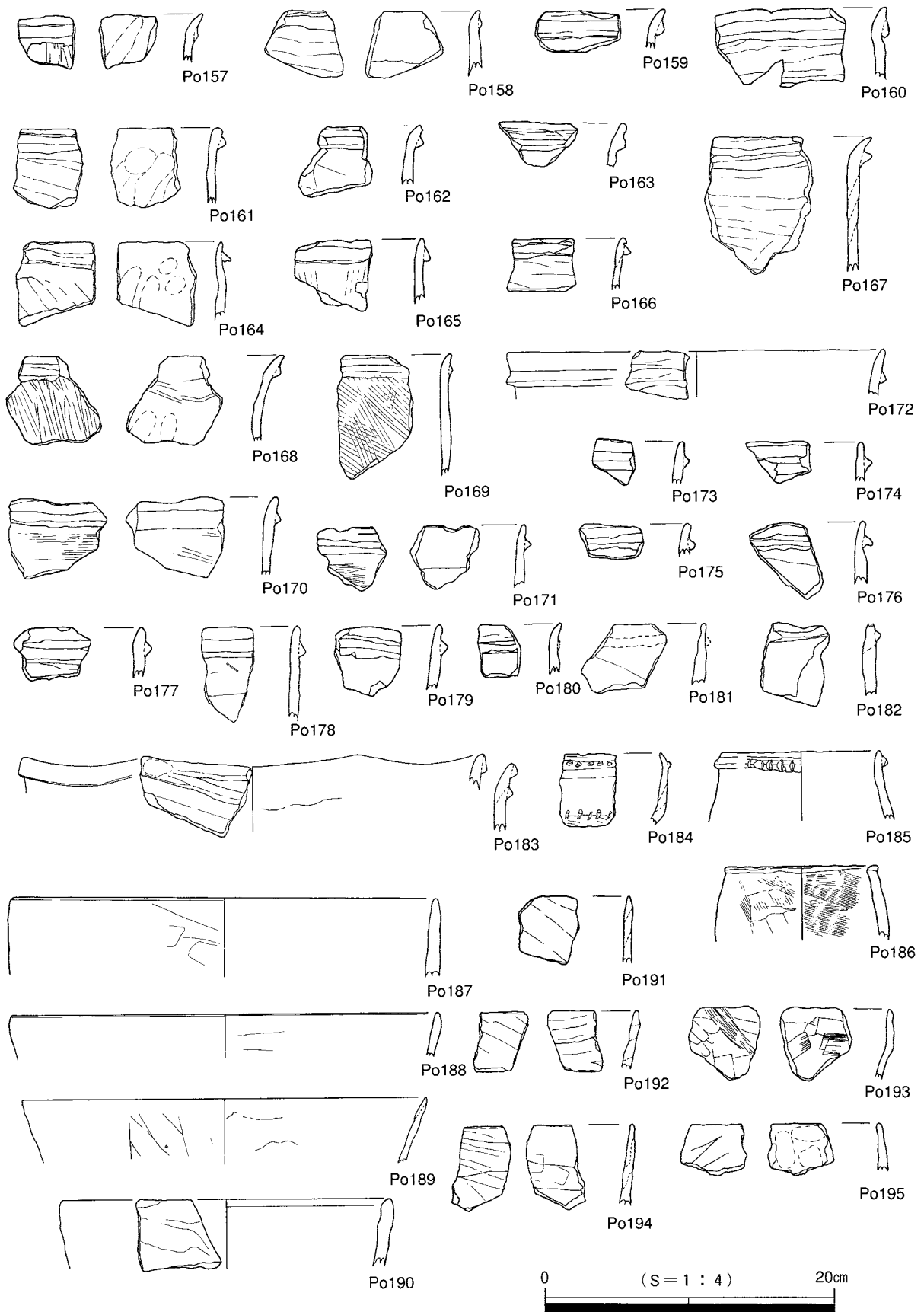
第42図Po389からPo398は、高坏形土器である。Po389Po393は、脚柱部で、沈線を巡らす。Po395は、右下がりの斜線紋を施す。Po399からPo402は、蓋形土器。図化したものは、全て小口径のものである。Po404は、土器片を円盤状に加工したもので、裏面中央部に穿孔しかけた痕跡が残る。紡錘車の未製品であろう。Po405からPo408も土器片を加工した円盤である。Po409は、土器片錘である。Po410、Po411は、管状土錘。Po412は、匙状土製品。Po413、Po414は体部に穿孔を施すもので、土笛と考えられる。Po415は、内外面に黒色の漆を塗布したもので、甕形土器の体部片と見られる。Po416は黒色の胎土に同心円状の線刻が施されるもので、浅鉢形土器の破片か。北陸・東日本系土器の影響を受けたものと考えられる。Po417は壺形土器の肩部片で、粘土を貼り付けた突起を持つ。Po418は平底の土器底部で、内面に粗い条痕が残る。

第43図は石器である。S75からS79は、いわゆる石鍬で、S75は長さ19cm、幅9cm、厚さ2cmで、板状に剥離しやすい石材を用いている。また刃部は使用のため摩滅している。その他のものも同様の形態を呈するものと考えられる。またS80、S81は、打製の土掘具で、刃部は使用により摩滅している。S82は、大形の石包丁の破片である。S83は、石斧の断片か。S84は、柱状を呈する石斧である。S85は、サヌカイト製の石槍状石器である。S86は、直径6cmの紡錘車形石製品で、表面を平滑に研磨して整形している。鳥取県内では、目久美遺跡、長瀬高浜遺跡に類例があるほか、島根県でも数例が認められる。S91は長楕円形礫の側面に窪みのついたもので、石錘として機能したのだろうか。

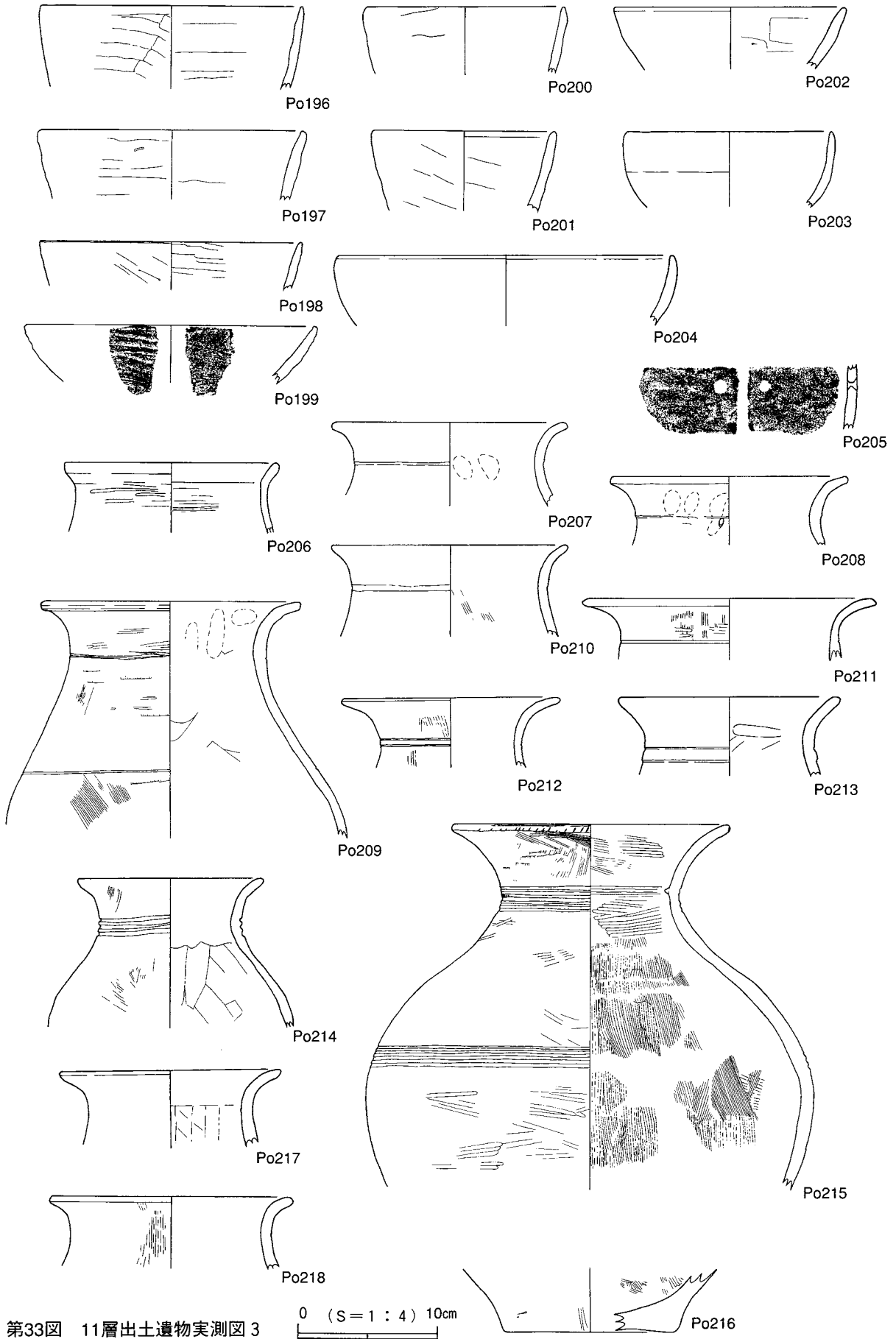
第44図W1は、丸木舟の舳先と見られる部材である。スギの丸太を削り貫き、段をつけている。また側面に穿孔がある。先端部は、鋼矢板で切断されていたため形状が不明だが、平坦なまま伸びるものと考えられる。また、胴部には切り取られたような痕跡が残ることから、廃棄する際に解体され、この地点に放置されたものと考えられる。放射性炭素年代測定では、交点がBC520年の年代値が得られている(106頁)。W2は、長さ55cmの長方形板材の両端部に切り込みを入れたもので、大足の部材か。W3は、長さ11cmの針状木器である。



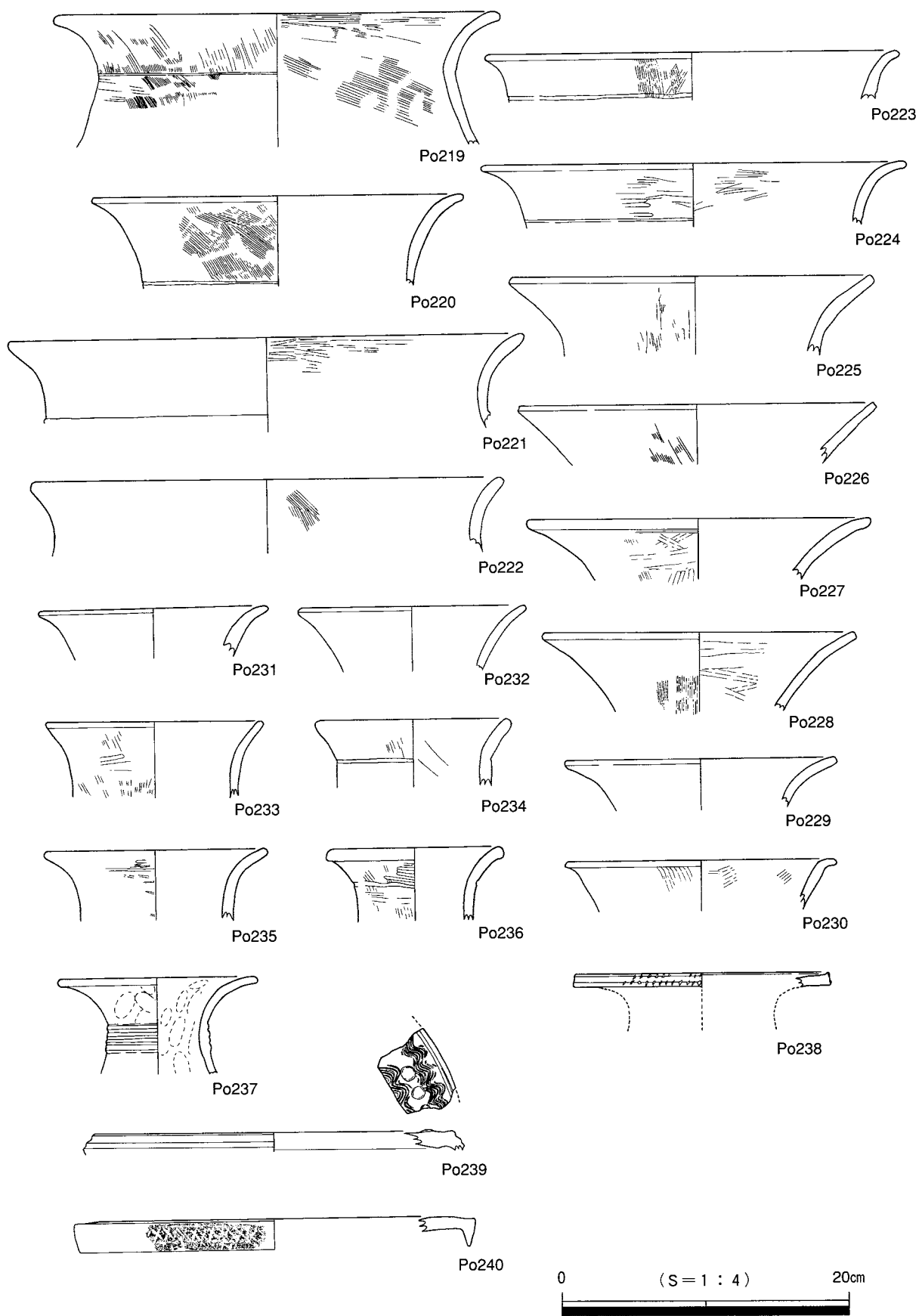
第31图 11層出土遺物実測図1



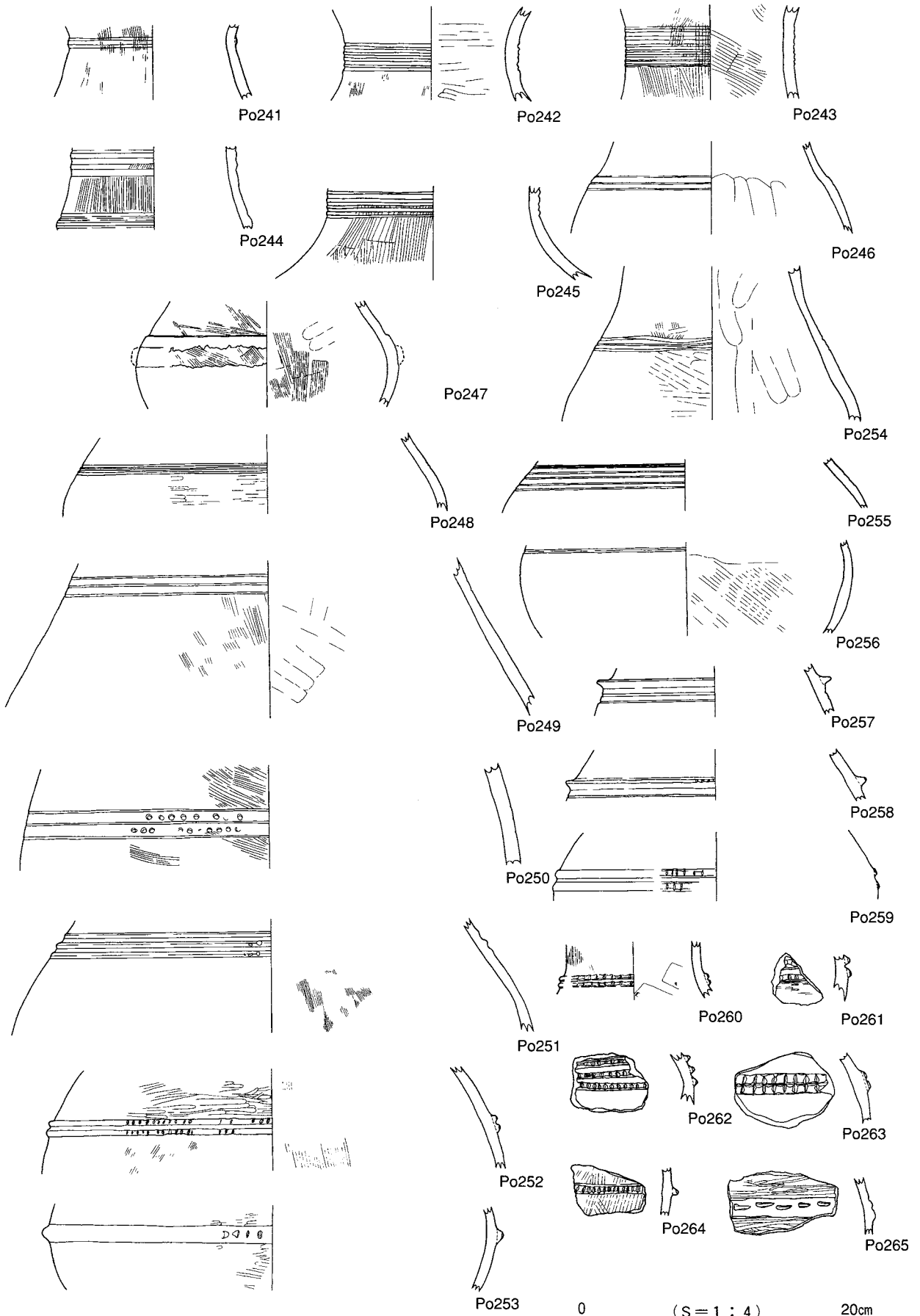
第32図 11層出土遺物実測図2



第33図 11層出土遺物実測図3

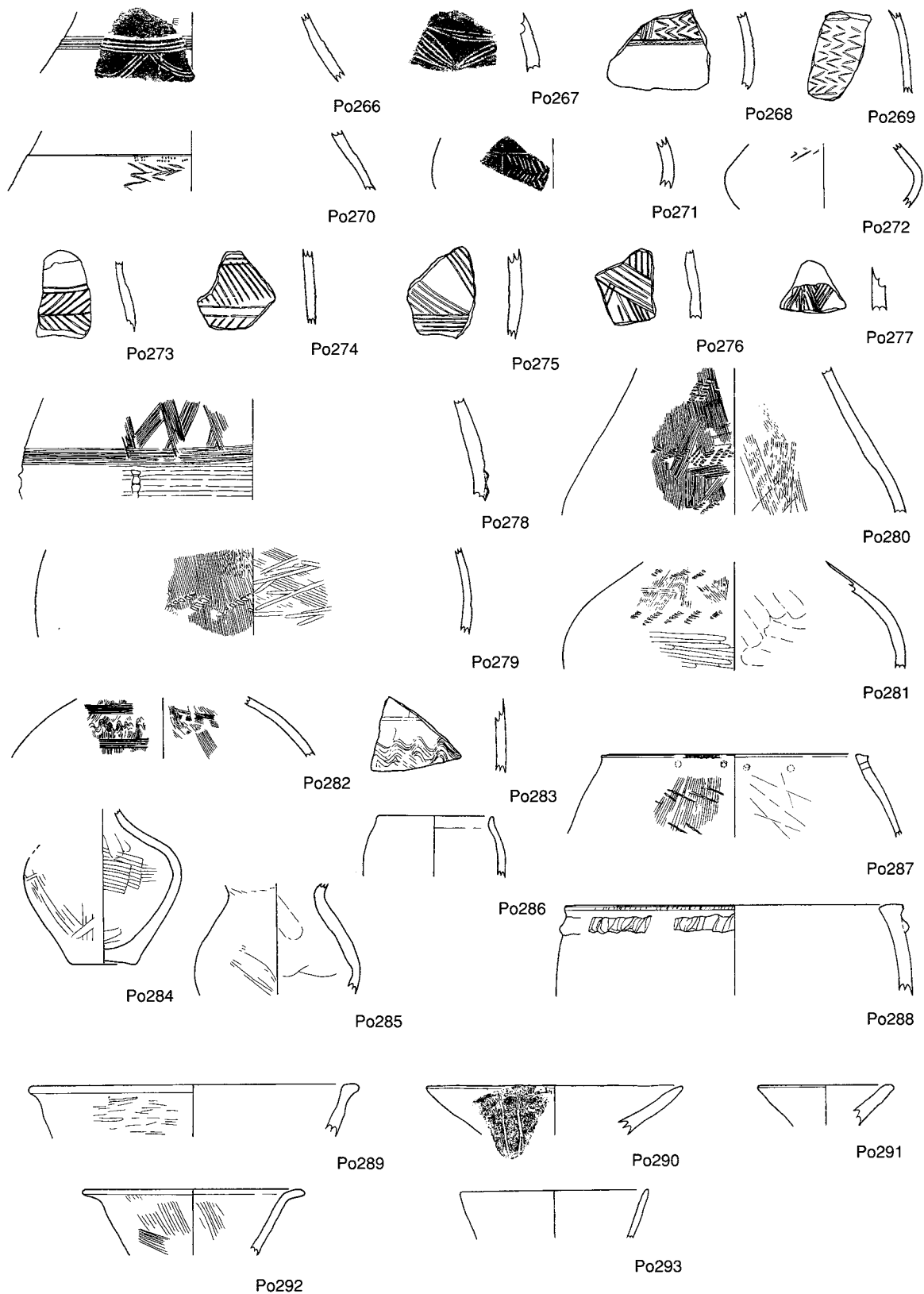


第34図 11層出土遺物実測図4

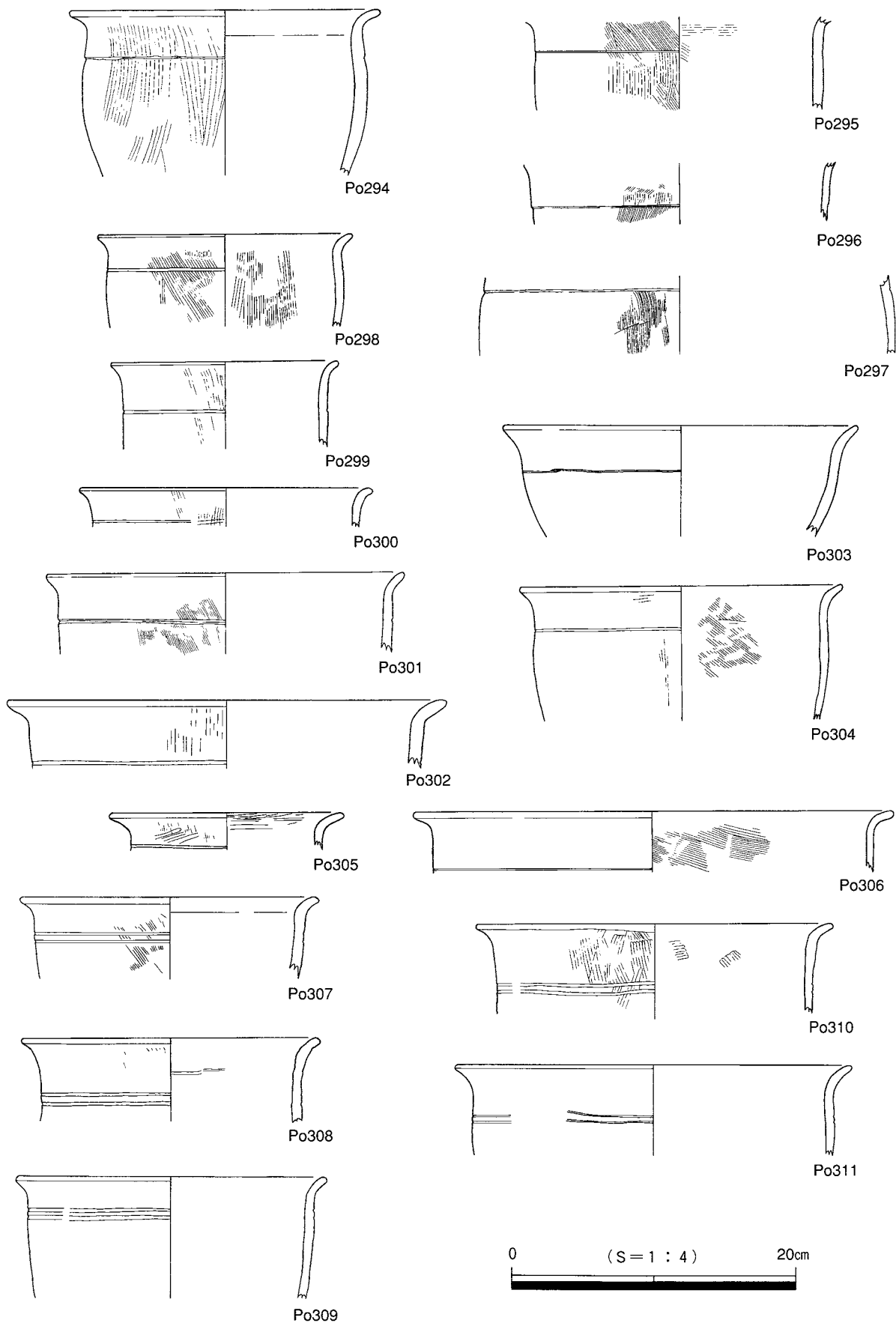


第35图 11層出土遺物実測図5

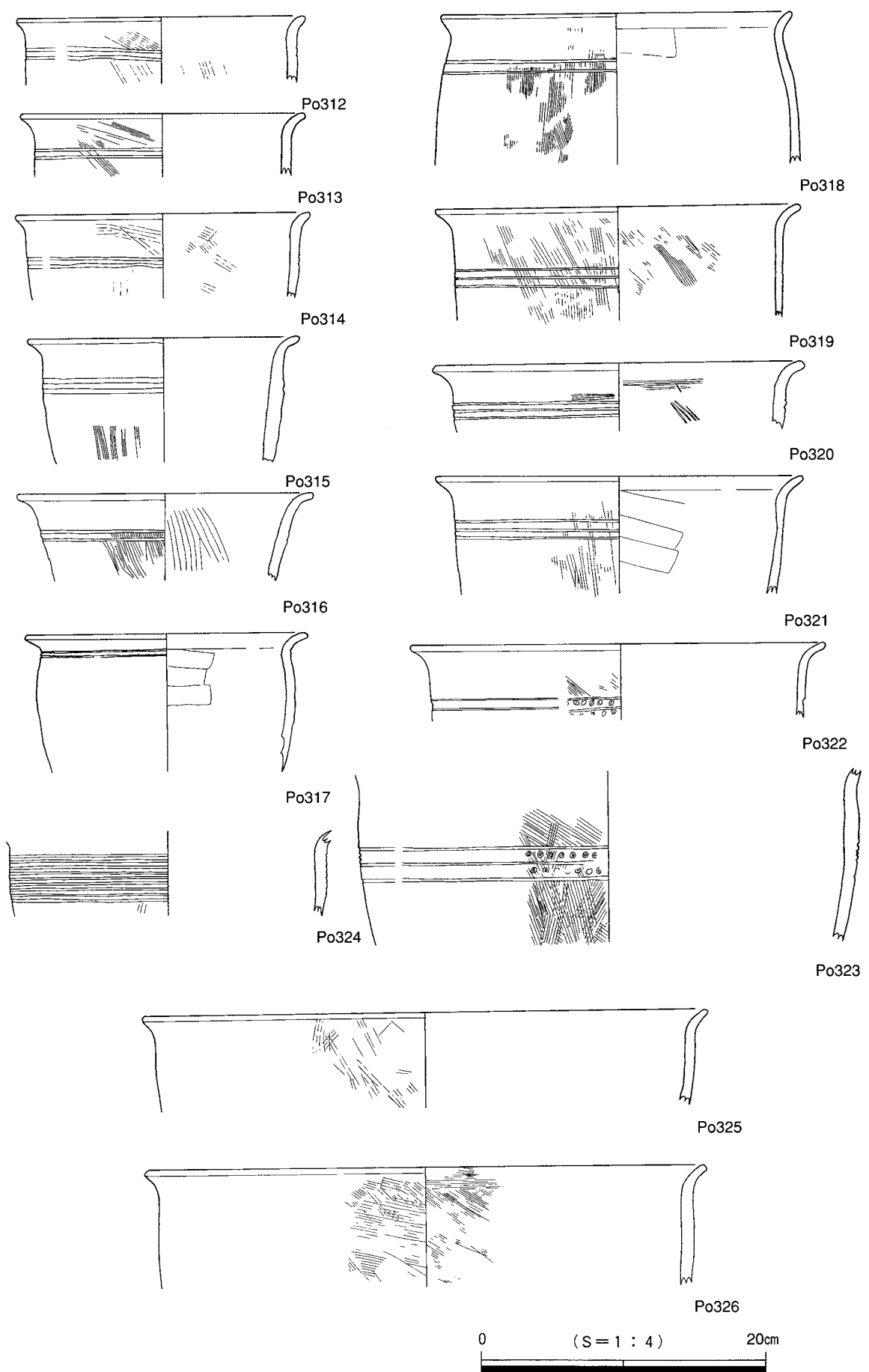




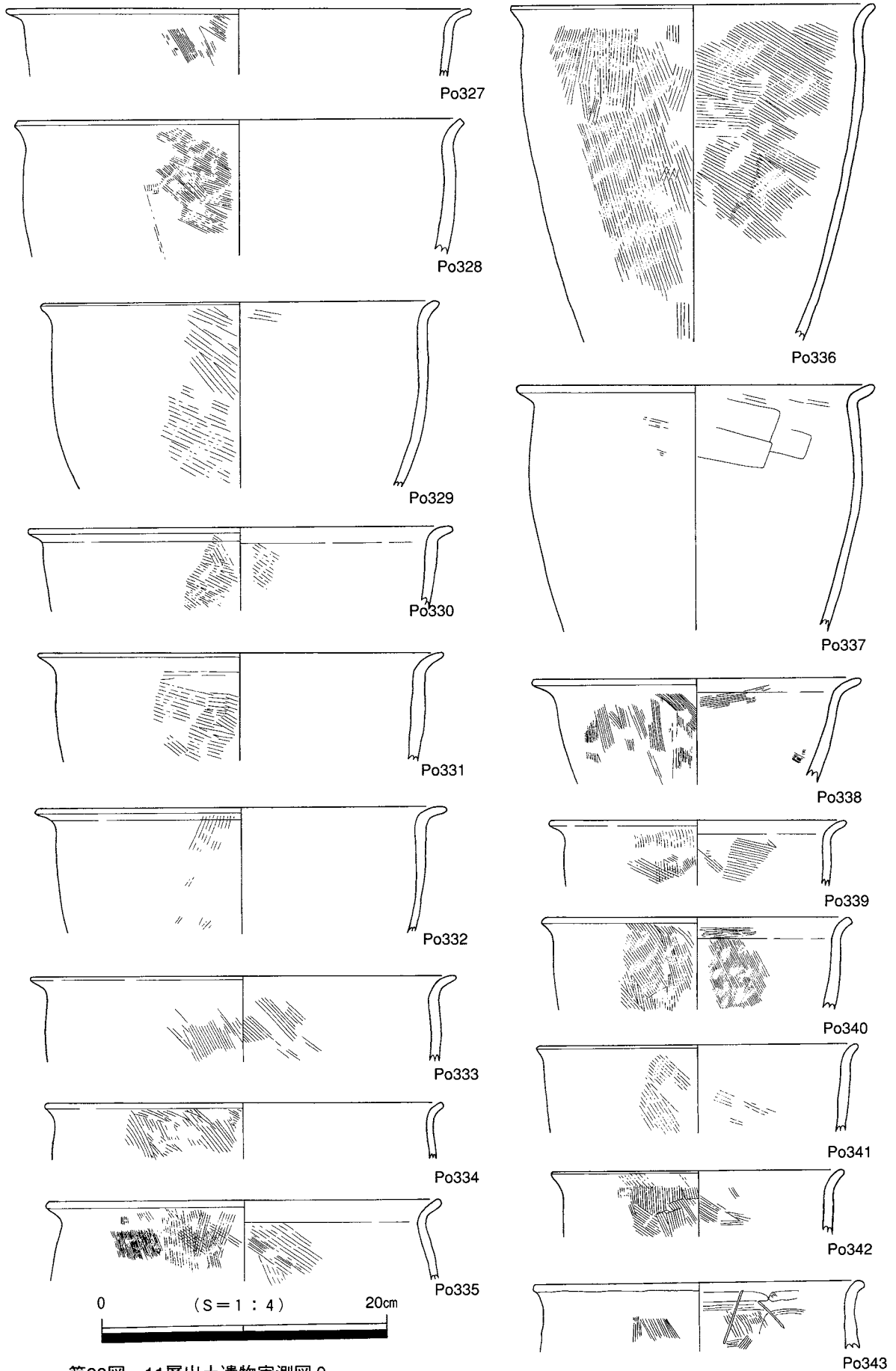
第36図 11層出土遺物実測図6



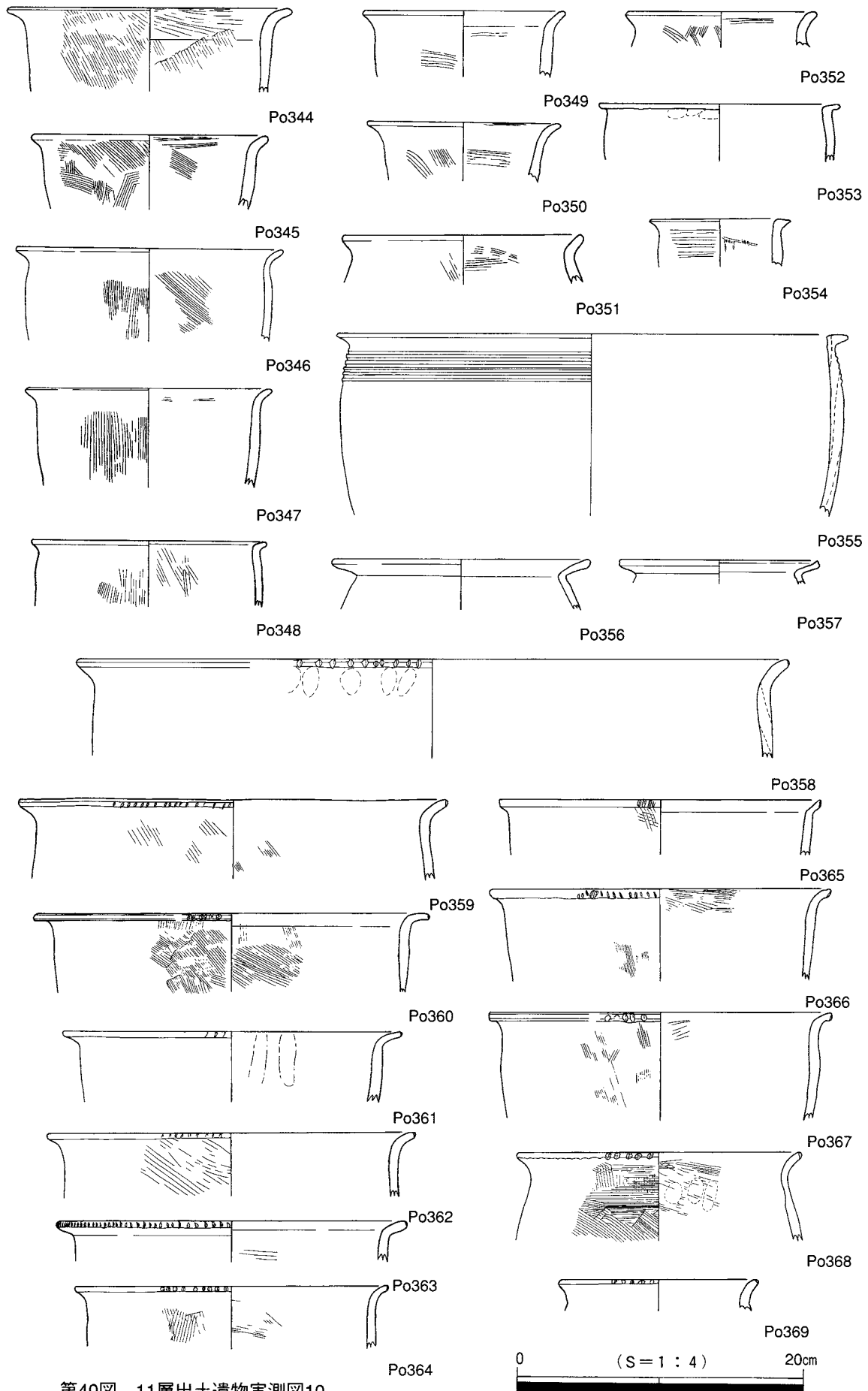
第37图 11層出土遺物実測図7



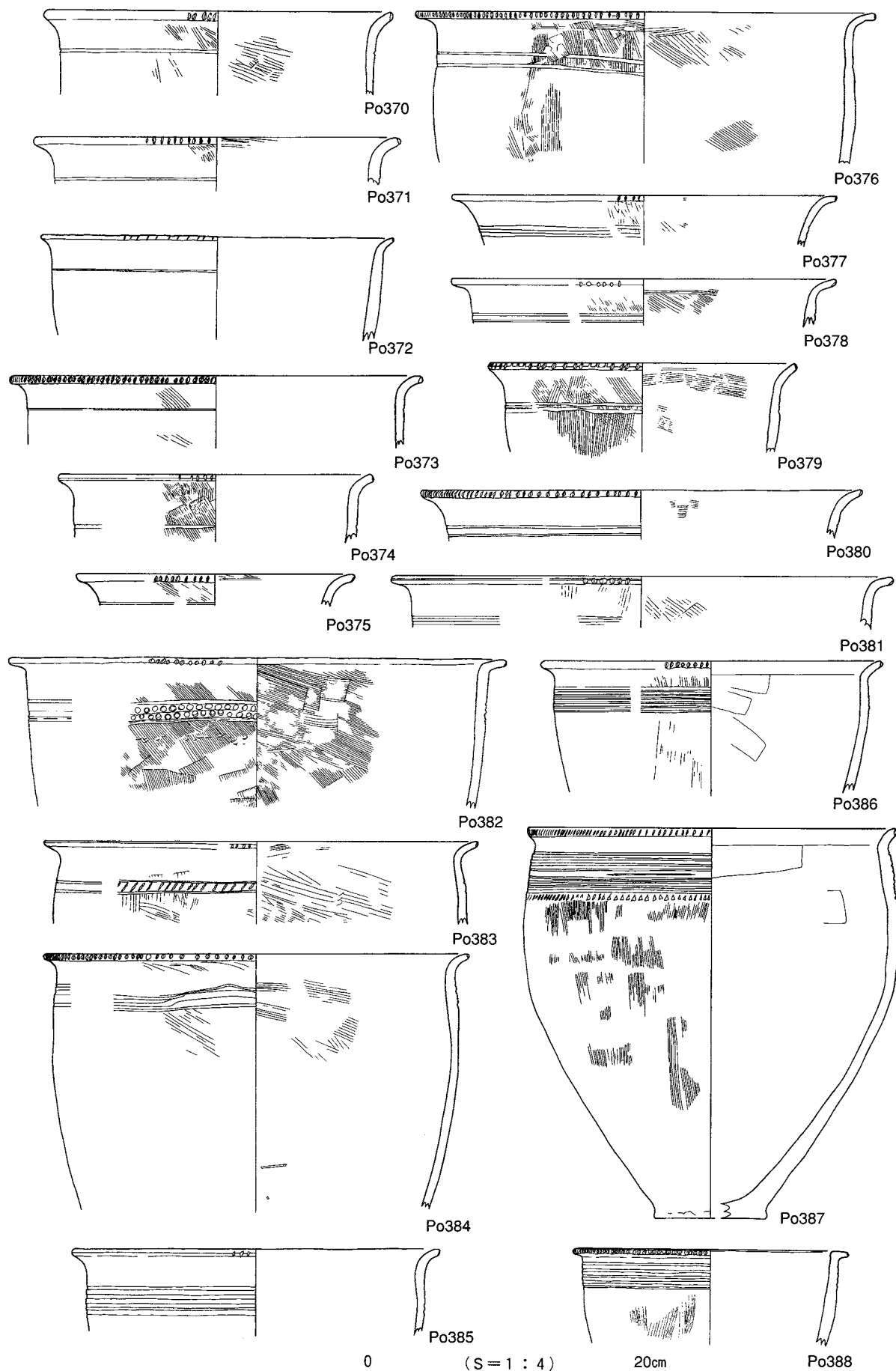
第38図 11層出土遺物実測図8



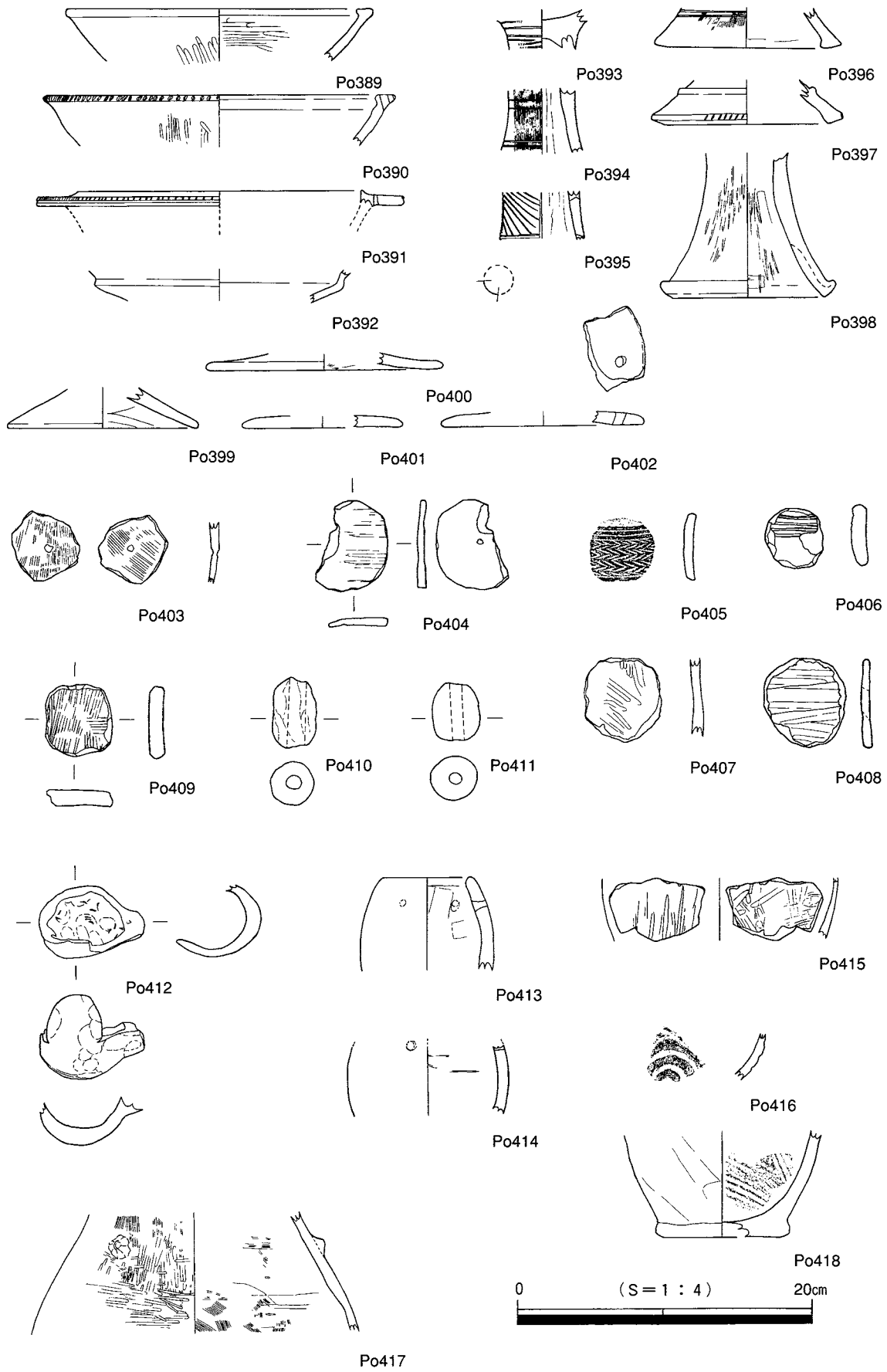
第39図 11層出土遺物実測図9



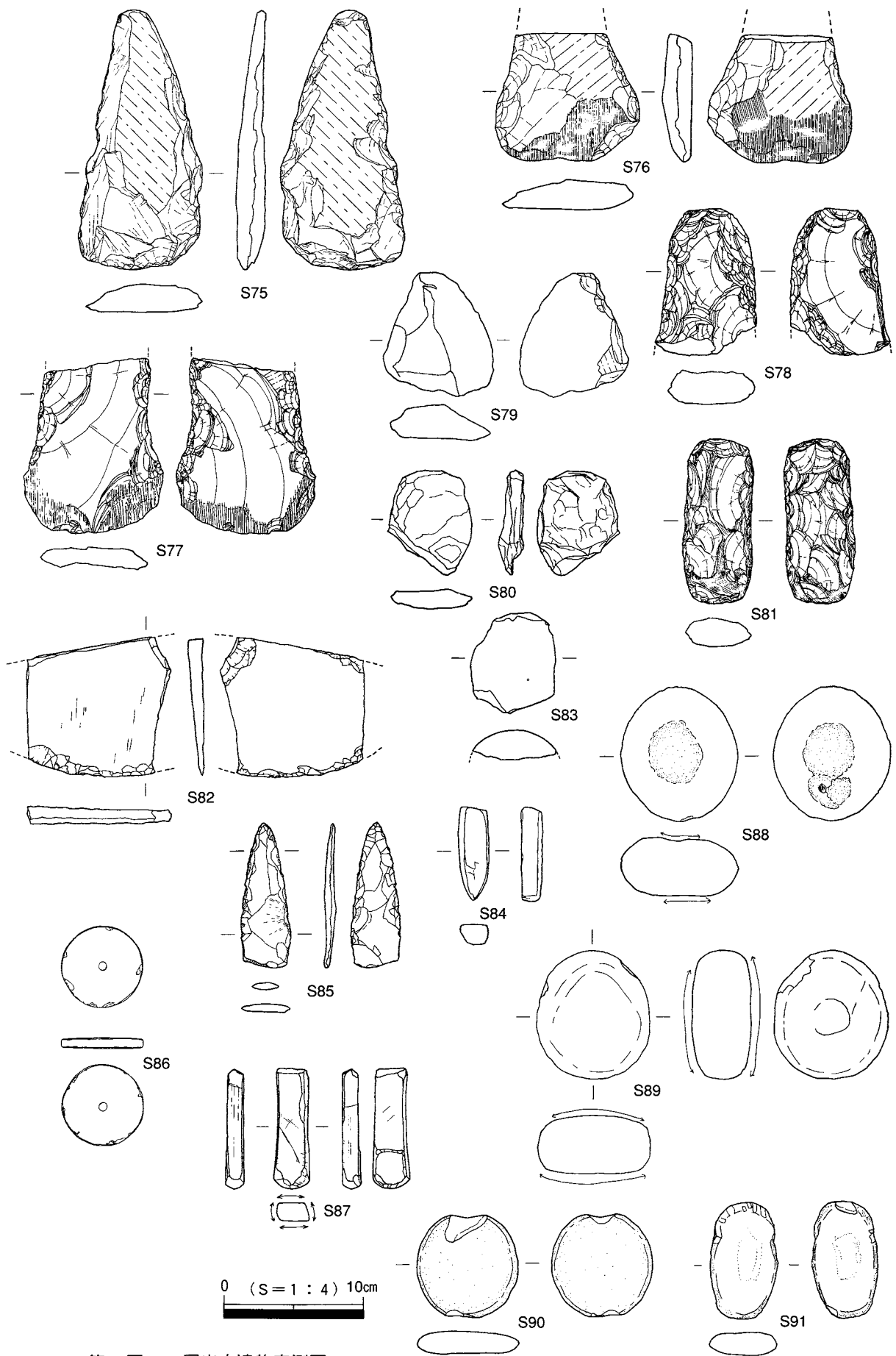
第40図 11層出土遺物実測図10



第41図 11層出土遺物実測図11

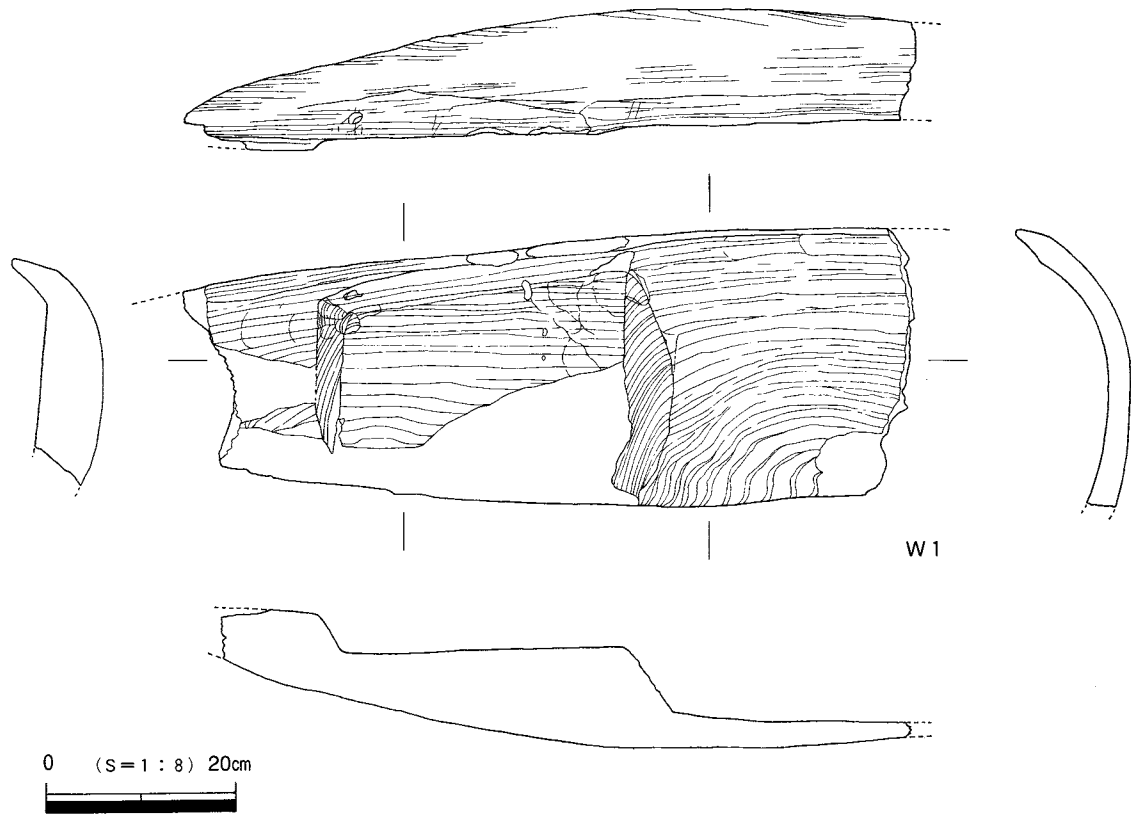


第42図 11層出土遺物実測図12



第43図 11層出土遺物実測図13





第44図 11層出土遺物実測図14

## 第6節 弥生時代前期末から弥生時代中期後半の調査

### 1. 概要

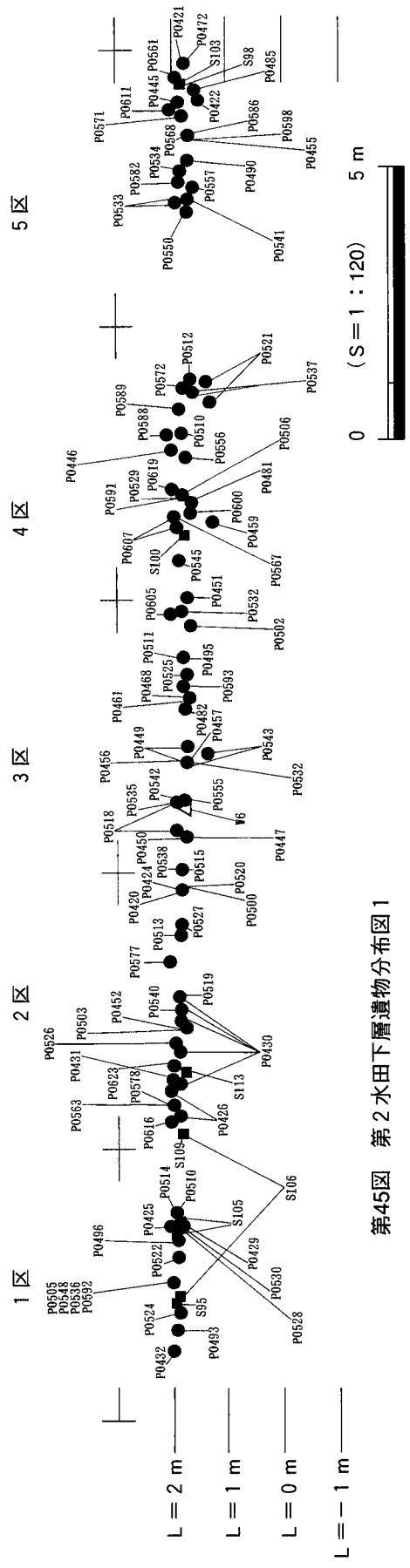
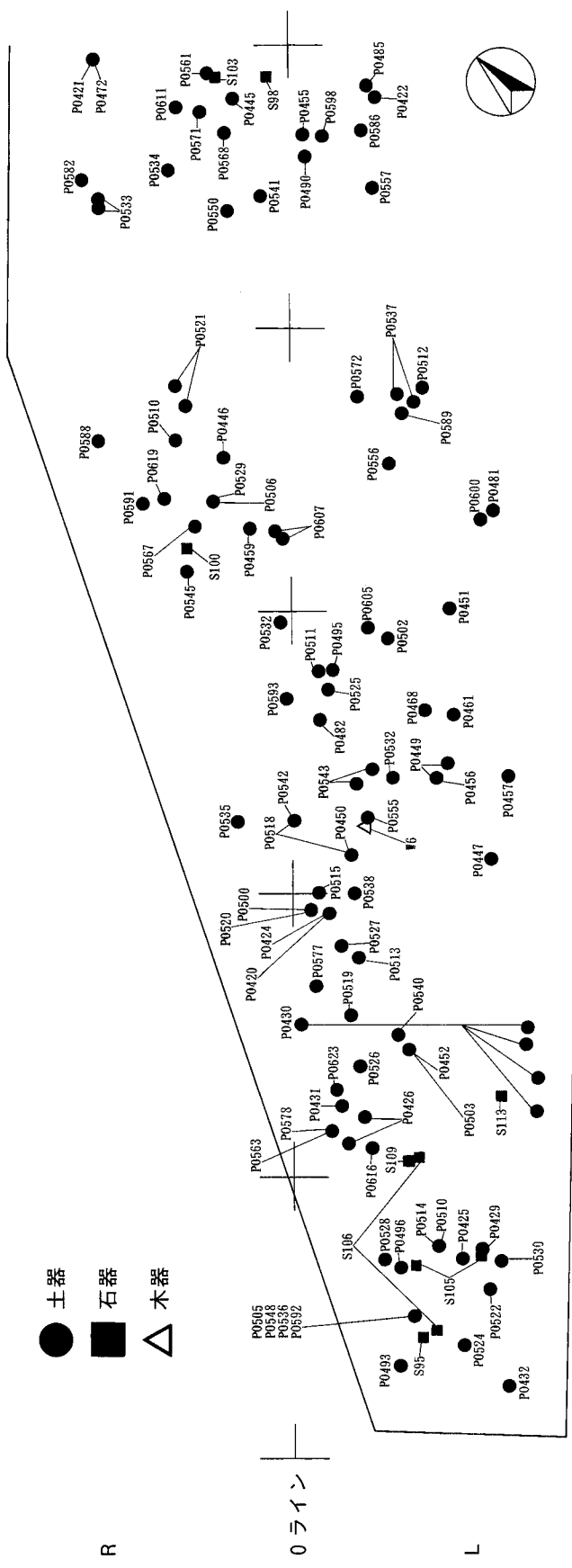
弥生中期末の水田遺構が検出された1区から7区の範囲にかけて、水田の下層にはおびただしい土器の堆積層があり、この土器の堆積後に、水田が構築されたものと考えられた。土器は弥生前期から弥生中期後半までのものを含み、石器や木製品も出土している。

### 2. 検出遺構

**土器溜り（第45・46図）** 1区から7区にかけて分布している。調査では、水田遺構の調査後に断ち割りを行い、下層における遺物の分布状況を確認した。上層では細片化した土器片が多いものの、下層には完形品に近いものまでそれほど攪乱を受けず分布している。弥生前期末頃から中期後葉にかけての時期に微高地側から湿地帯へ投棄されて形成されたものと考えられる。土器溜りの範囲ははっきりしないものの、第1次調査でもこの土器溜りと同様の状況で大量の土器が確認されており、こうした微高地の縁辺部が、長期間に渡って集落のごみ捨て場となっていたことを示すものと考えられる。

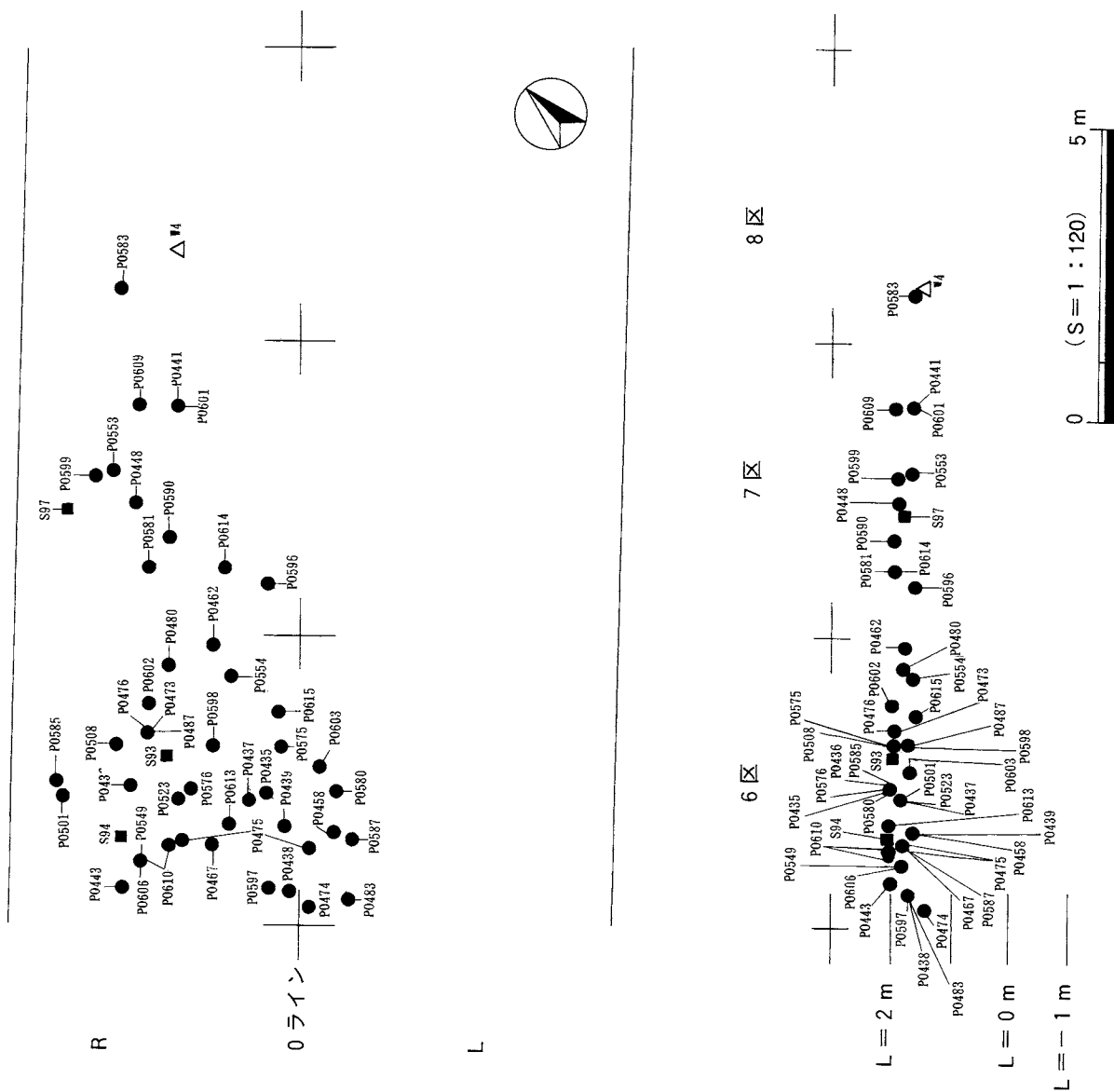
### 3. 出土遺物（第47～61図）

Po419から482は壺形土器である。Po419は口径40.5cm、胴径67.2cm、底径15.7cm、高さ68.5cmの大形壺で、頸部と肩部に段を持ち、体部には黒班が付着する。Po420からPo422は頸部に段を持つ壺形土器である。Po423は頸部に1条の沈線が巡るもの。Po424からPo426は頸部に多数条の沈線が巡るものだが、Po424、Po426は帯状に肥厚させ施紋している。Po427は頸部に1条の突帯を貼り付け、肩部には沈線が巡る。下膨れの形態を呈するものか。Po429は口縁部の破片のみだが、ラップ状に大きく外反する口縁を持ち、内面をミガキ、外面をハケ調整するものである。蓋形土器の可能性も考えられる。Po430は頸部が大きくすぼまる壺で、口縁端部に円形浮紋を貼り付け、外面に4条の突帯が巡る。口縁端部と突帯には刻目が施される。肩部外面には、ハケ状の工具で波状紋が施されるほか、体部下半はミガキ調整される。鳥取県溝口町の下山南通遺跡からも類似したものが出土している。Po431からPo445は壺の口縁部を載せた。端部の形態や装飾のタイプで分類可能と考えられる。Po447からPo453は壺の頸部である。貼り付け突帯を巡らせるものや、凹線紋が巡るものがある。Po454からPo463は壺の体部である。ハケ状工具により、波状紋を施すものや、貝殻腹縁部による刺突紋が巡るものがある。Po464からPo466は壺の口縁部である。Po466、Po467は頸部の短いものと考えられる。Po468は小形壺の胴部に斜格子紋が巡る。Po469はヘラ状工具により綾杉紋が施される。Po470は壺の肩部で、沈線により紋様が施される。Po471は口縁部を欠くが、胴部のそれほど張らないタイプの壺である。Po473からPo482は無頸壺で、加飾されるものが多いが、Po481やPo482のように装飾を持たないものも存在する。Po483からPo490は突帯紋土器である。Po483は2条突帯で、細かな刻目を施す。Po491からPo493は口縁端部が突出するもので、Po493は頸部に穿孔がある。形態的には朝鮮系無紋土器の影響も考えられる。Po494は頸部直下に段を持つ甕である。Po495からPo499は口縁の断面形が「く」の字形を呈する甕で、凹線紋、刻目を持たないものを示した。Po500からPo515は、口縁の断面形が「く」の字形を呈する甕で、頸部直下に1条ないし複数条の凹線が巡るものである。Po516からPo518は、口縁の断面形が逆「L」字形になるもので、口縁直下に櫛描紋が施されている。Po519からPo550は口縁端部に刻目が施されるものである。Po551からPo590は中期中葉から後期前葉の甕である。小破片から反転復元したものが多く、全形の分かる資料は少ない。Po591からPo594は鉢形土器。Po595からPo615は高坏形土器である。Po616は土錘。Po617からPo620は土器片を丸く円盤状に加工したもので、両端部に切り込みを入れたものは土器片錘として利用されたものと考えられる。Po621からPo625は破損したものが多く、全てミニチュアの模造品とみられる。Po621とPo624は高坏か器台を模したものの、Po622は蓋を模したものであろう。Po623は上部に穿孔がある

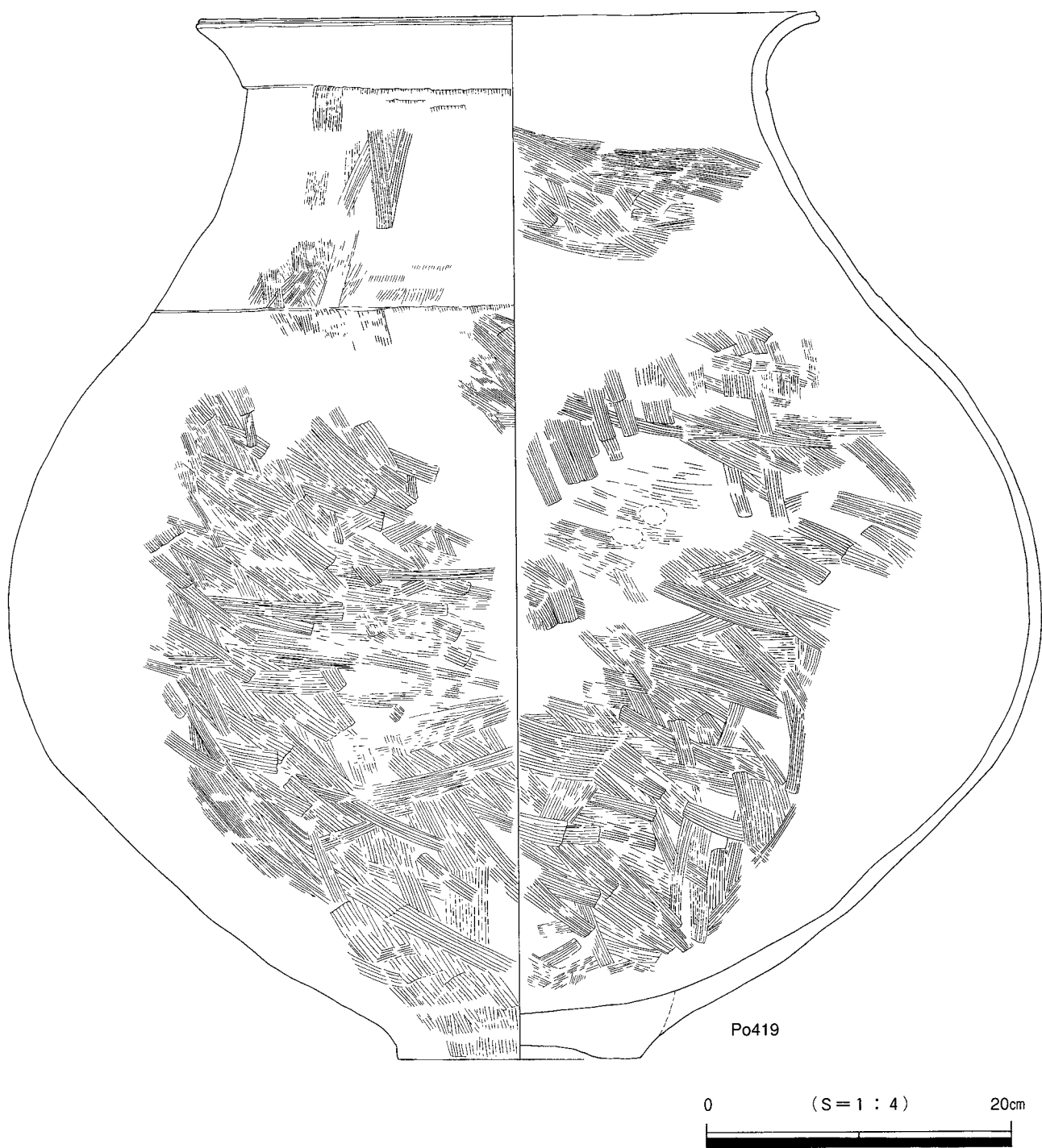


第45図 第2水天下層遺物分布図 1

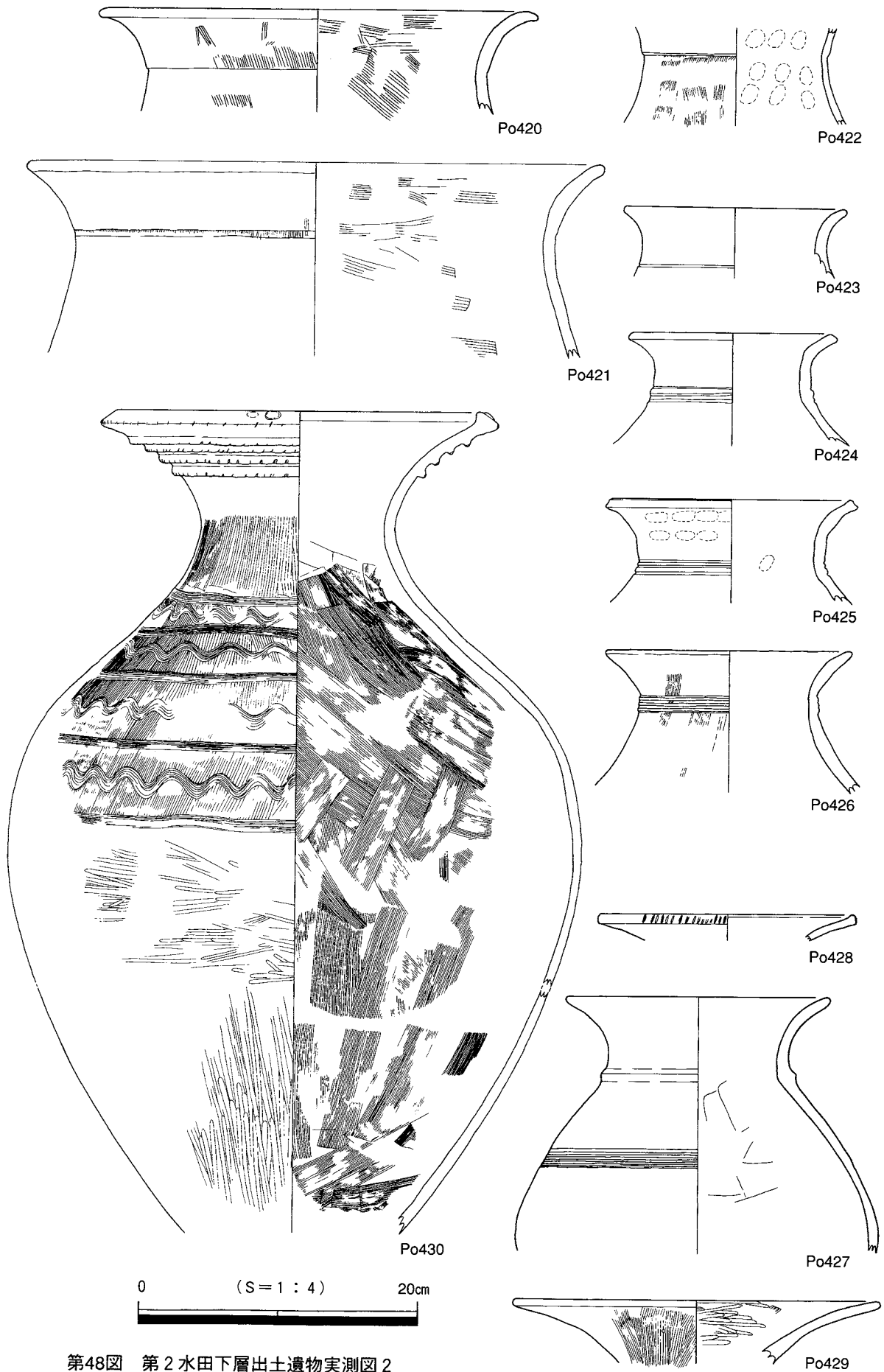
ことから、鏡形土製品の可能性が考えられる。Po625は容器を模したものと考えられるが、小破片であるため器種は不明である。Po626は楕円形の粘土板を焼成前に穿孔したもので、用途は不明である。鳥取県岸本町の久古第3遺跡（口別所地区）から同様の製品が出土している。Po627は底部を尖らせ、紋様が施されるもので、土笛の断片か。A92からS95は石鍬である。S97は石鍬。S98、S99は打製の土掘具。S101、S102は剥離したサヌカイトの縁辺を加工する。S103、S104は凹石。S105は擦石か。S105は欠損した石皿。S106は砥石である。S110からS113は楕円形の礫の端部に打ち欠きを持つもので、石錘として用いられた可能性がある。S114は人物を模したと思われる石製品で、体部に放射線状の擦痕が見られる。S116は砥石である。W4はアカガシを用いた板材で、鍬の断片と見られる。W5は断面が円形を呈する木鍬である。W6は外面に赤色の漆を塗布したもので、木部は腐食して遺存していなかった。器種は不明だが櫛の断片であろうか。



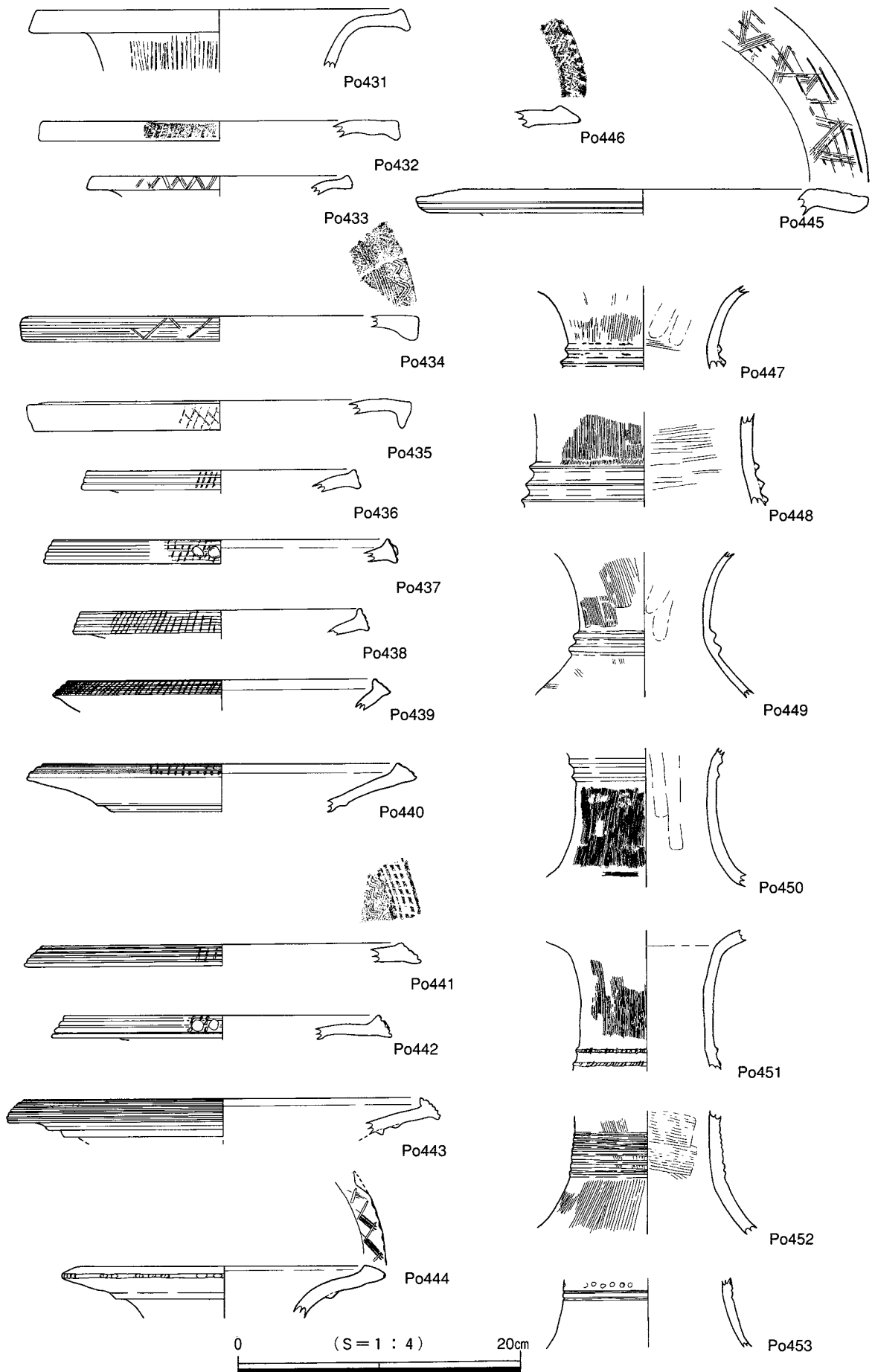
第46図 第2水田下層遺物分布図2



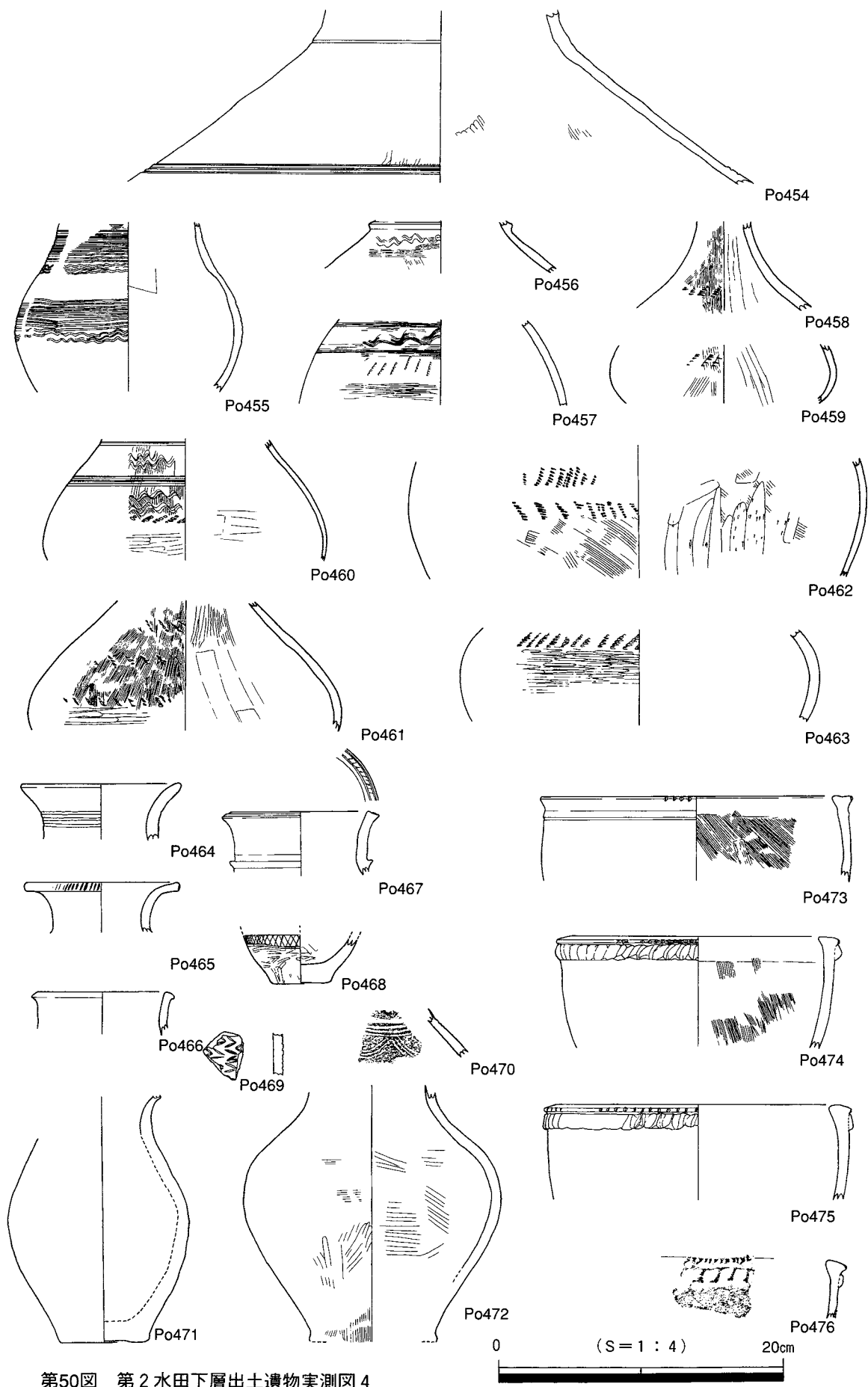
第47図 第2水田下層出土遺物実測図1



第48図 第2水田下層出土遺物実測図2

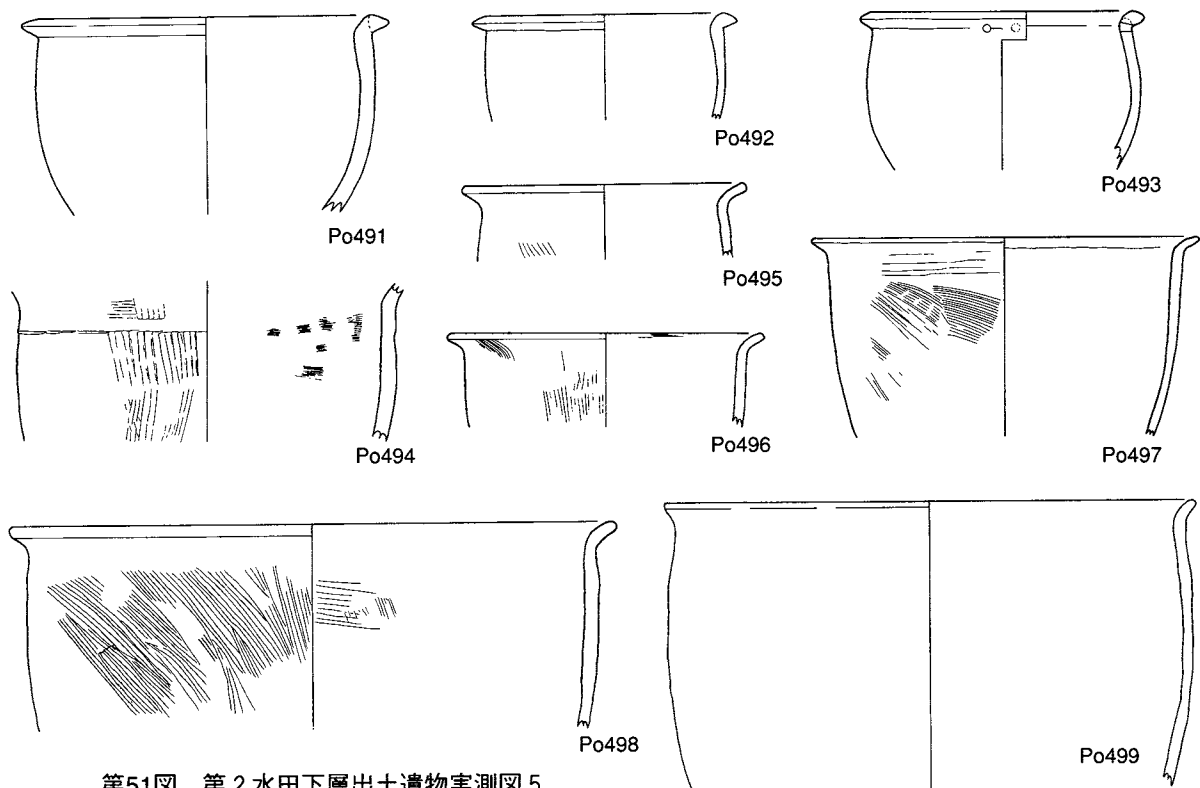
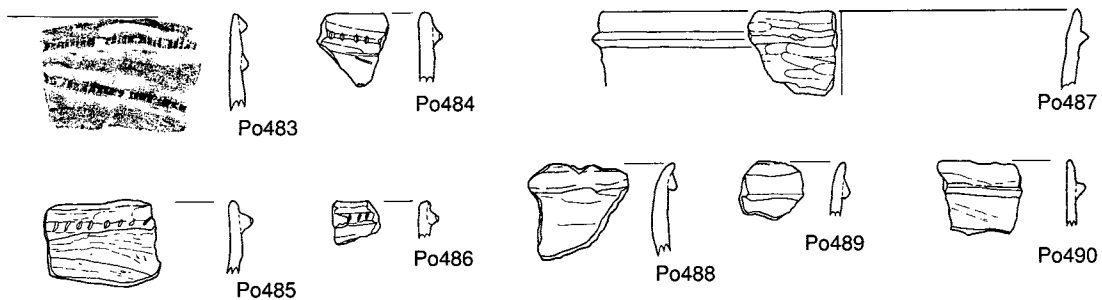
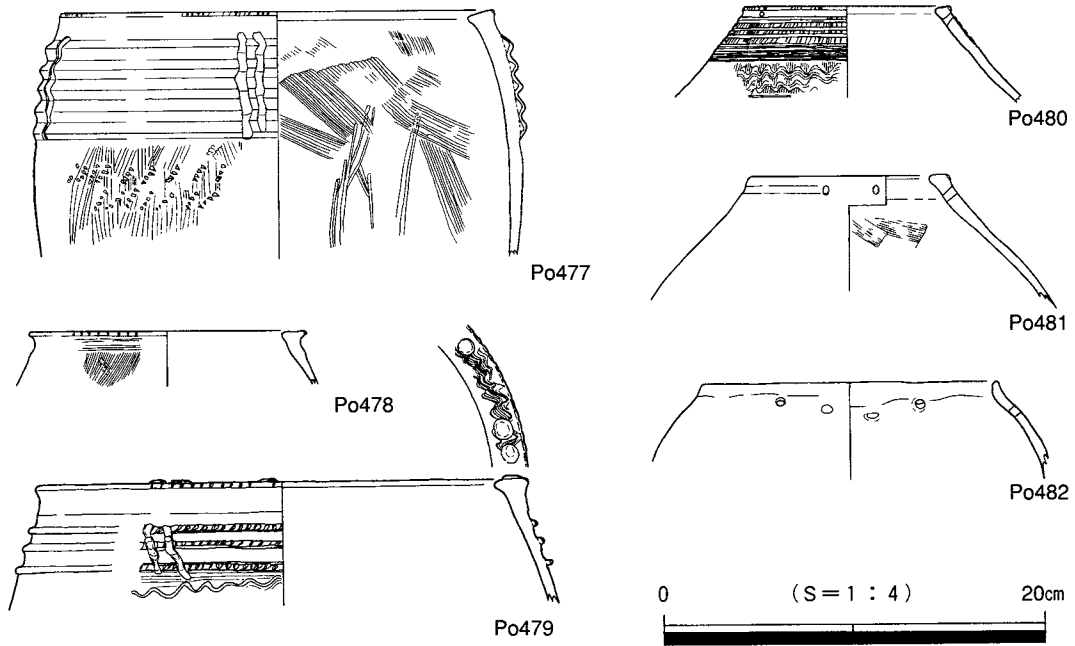


第49図 第2水田下層出土遺物実測図3

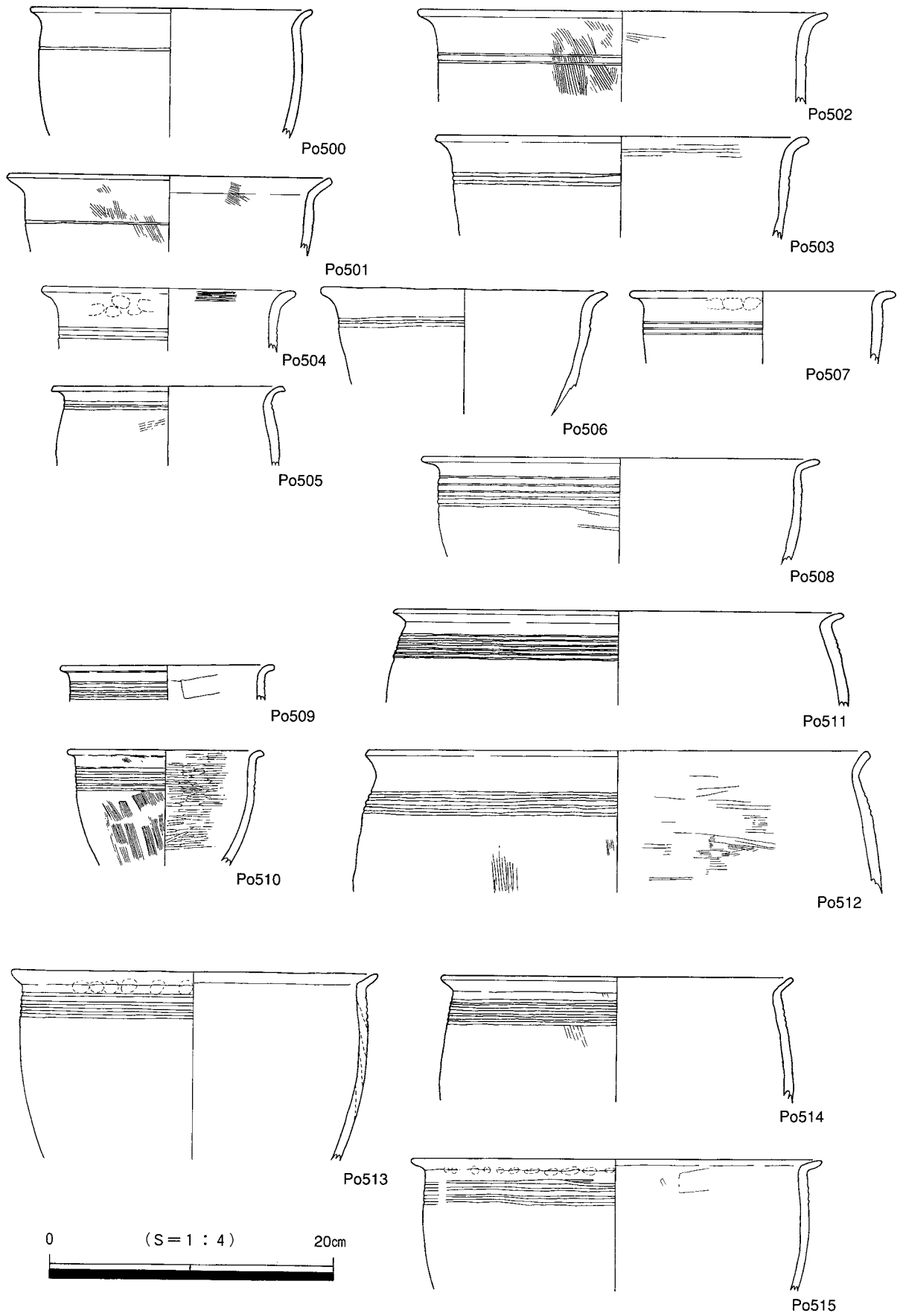


第50図 第2水田下層出土遺物実測図4

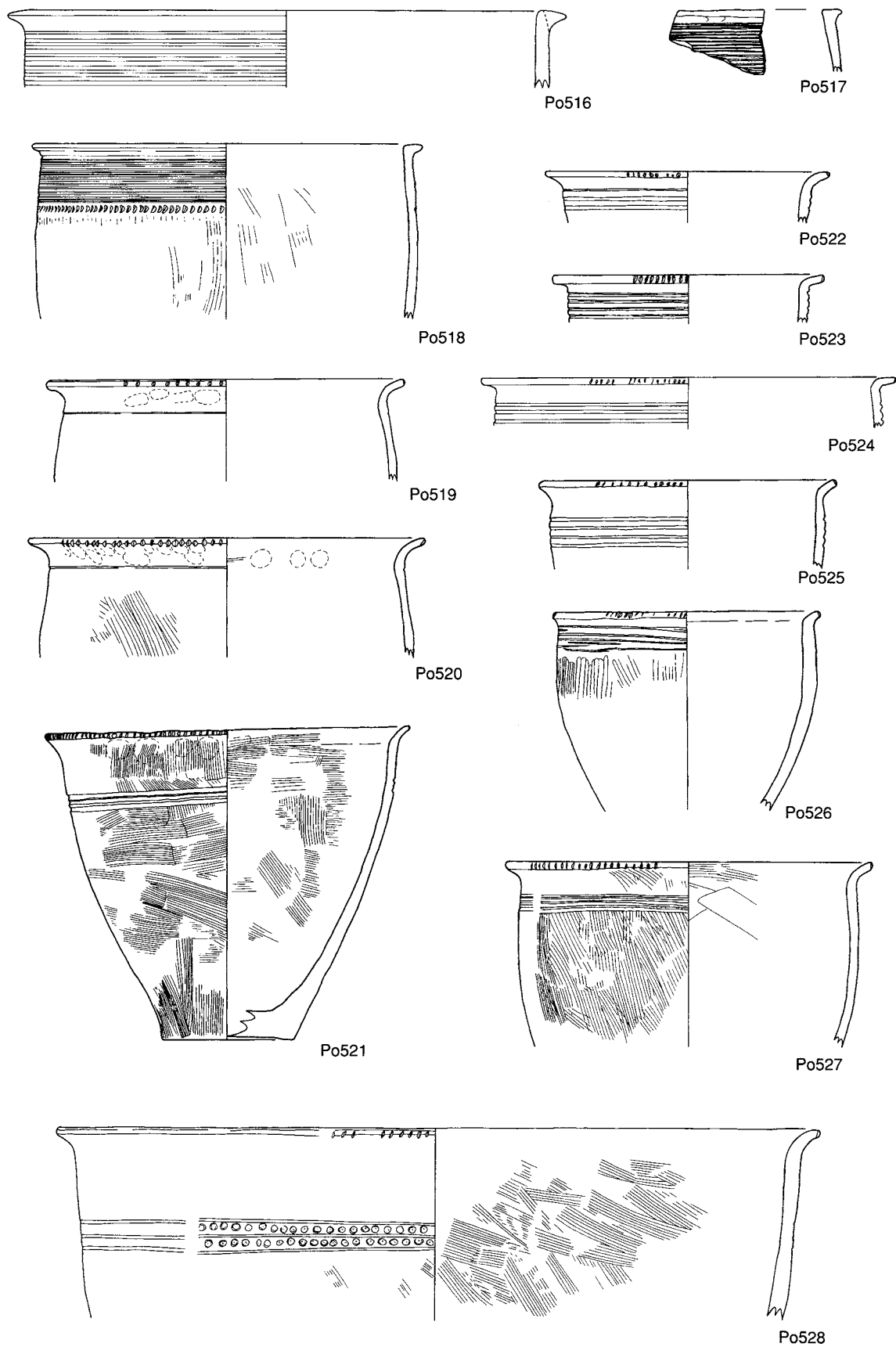




第51図 第2水田下層出土遺物実測図5

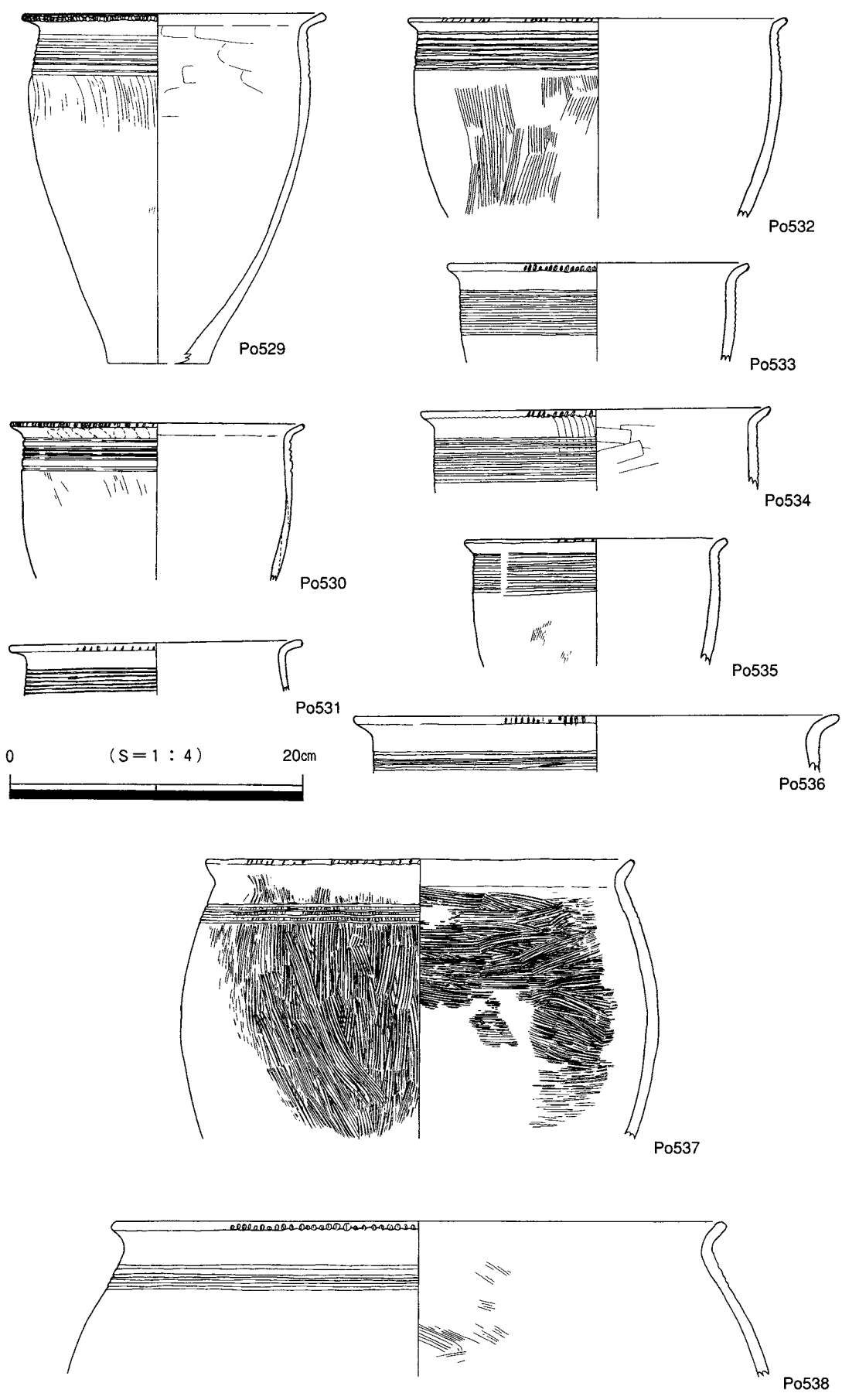


第52図 第2水田下層出土遺物実測図6

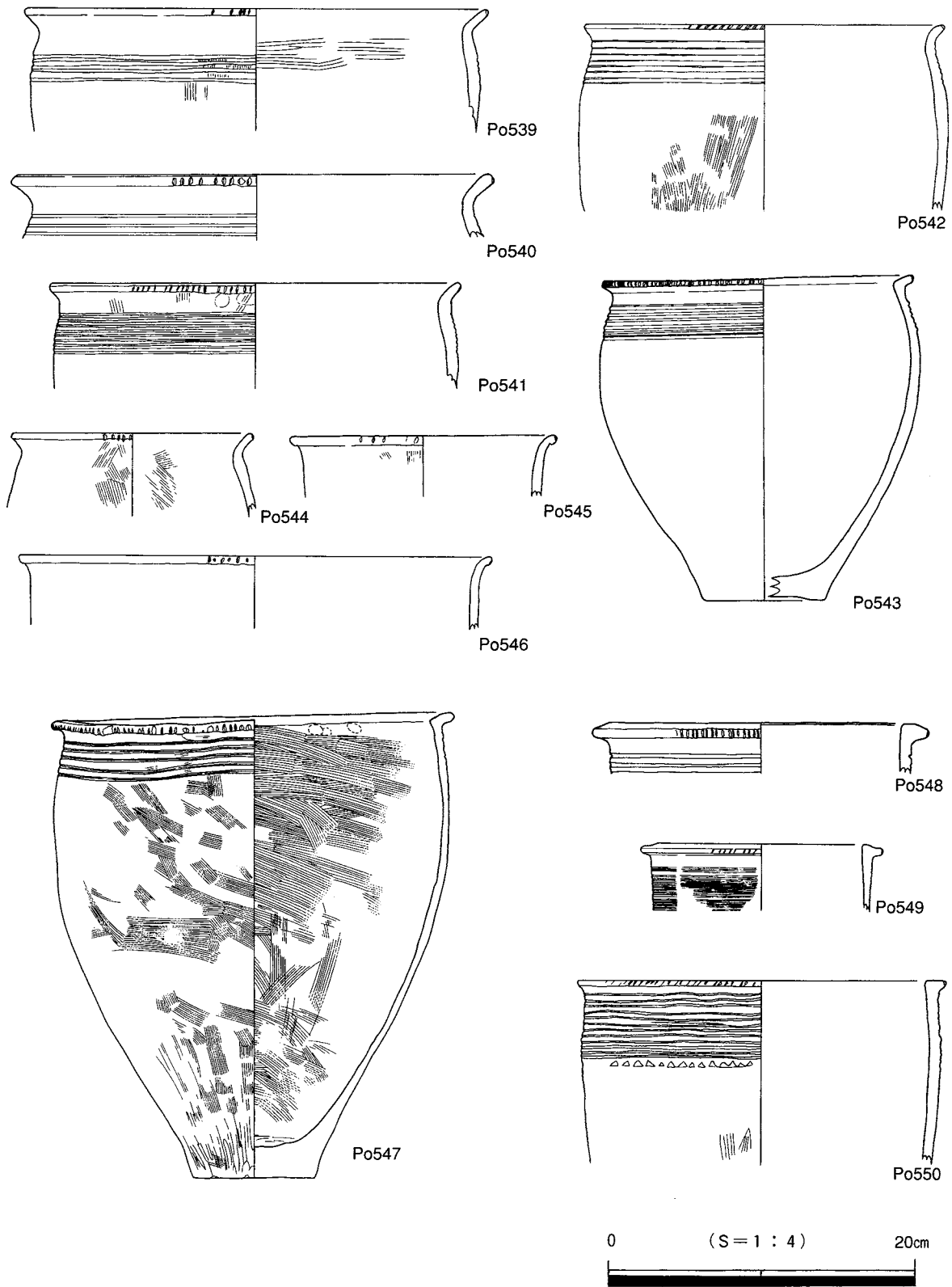


第53図 第2水田下層出土遺物実測図7

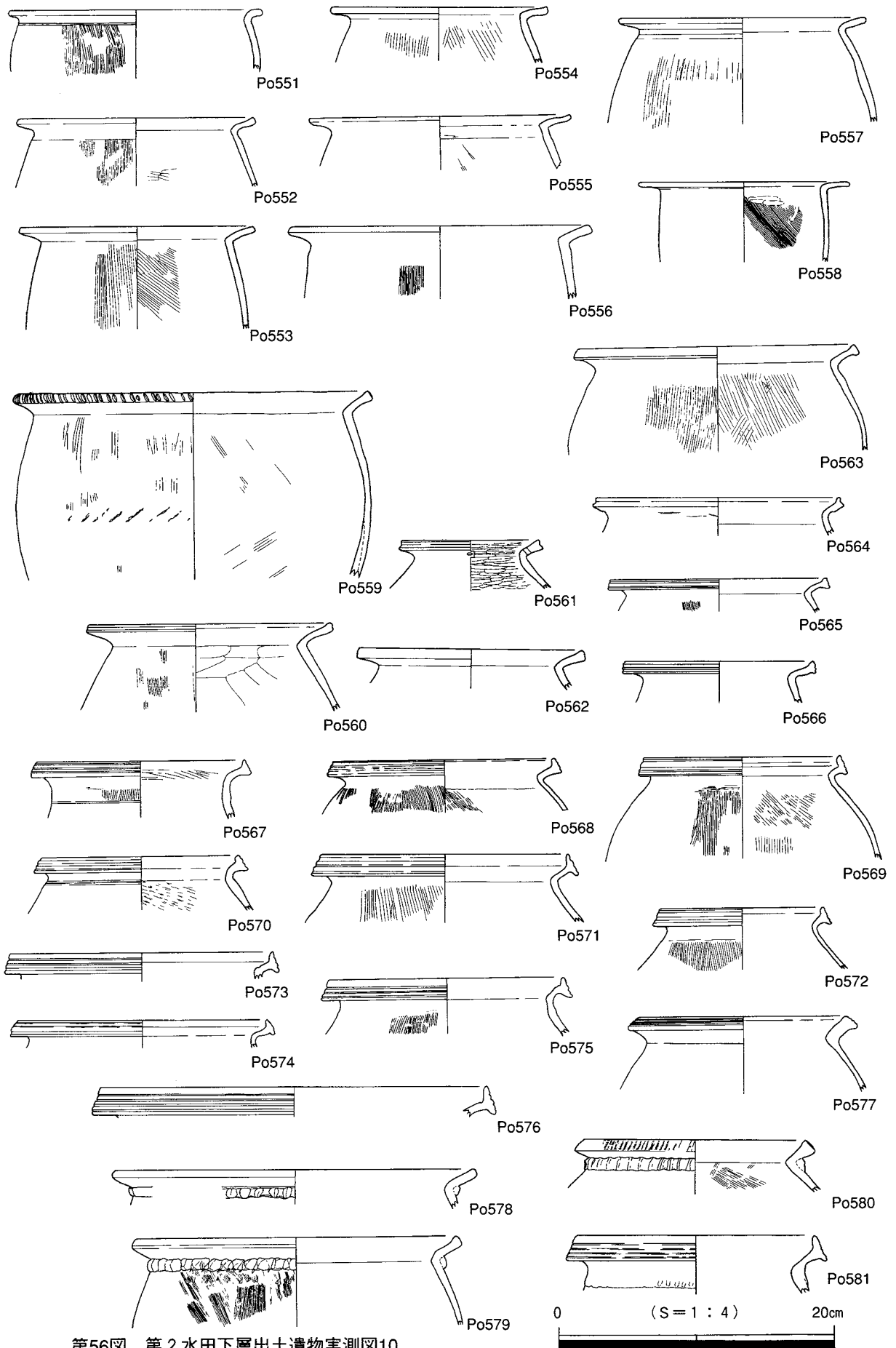
0 (S = 1 : 4) 20cm



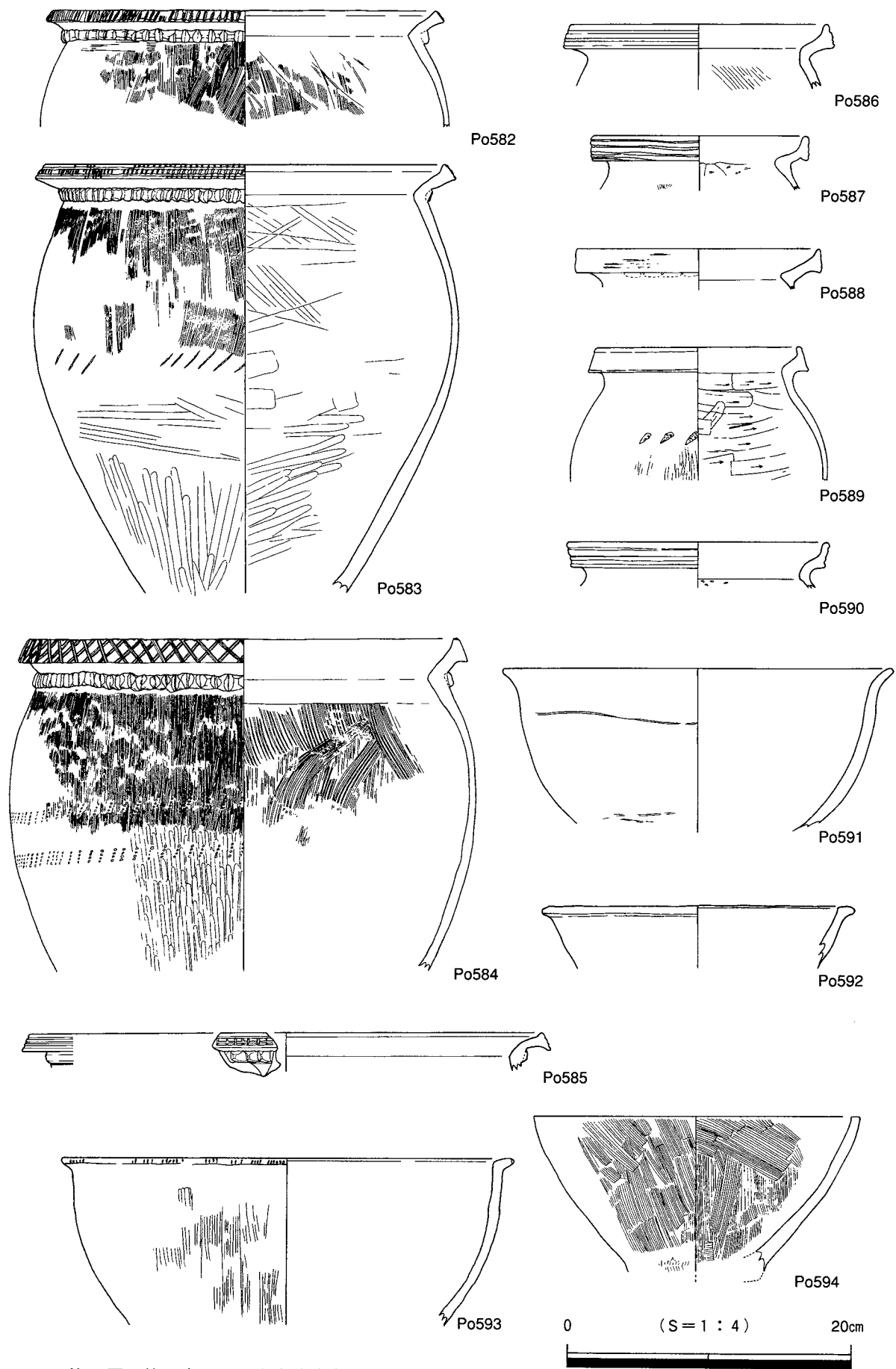
第54図 第2水田下層出土遺物実測図8



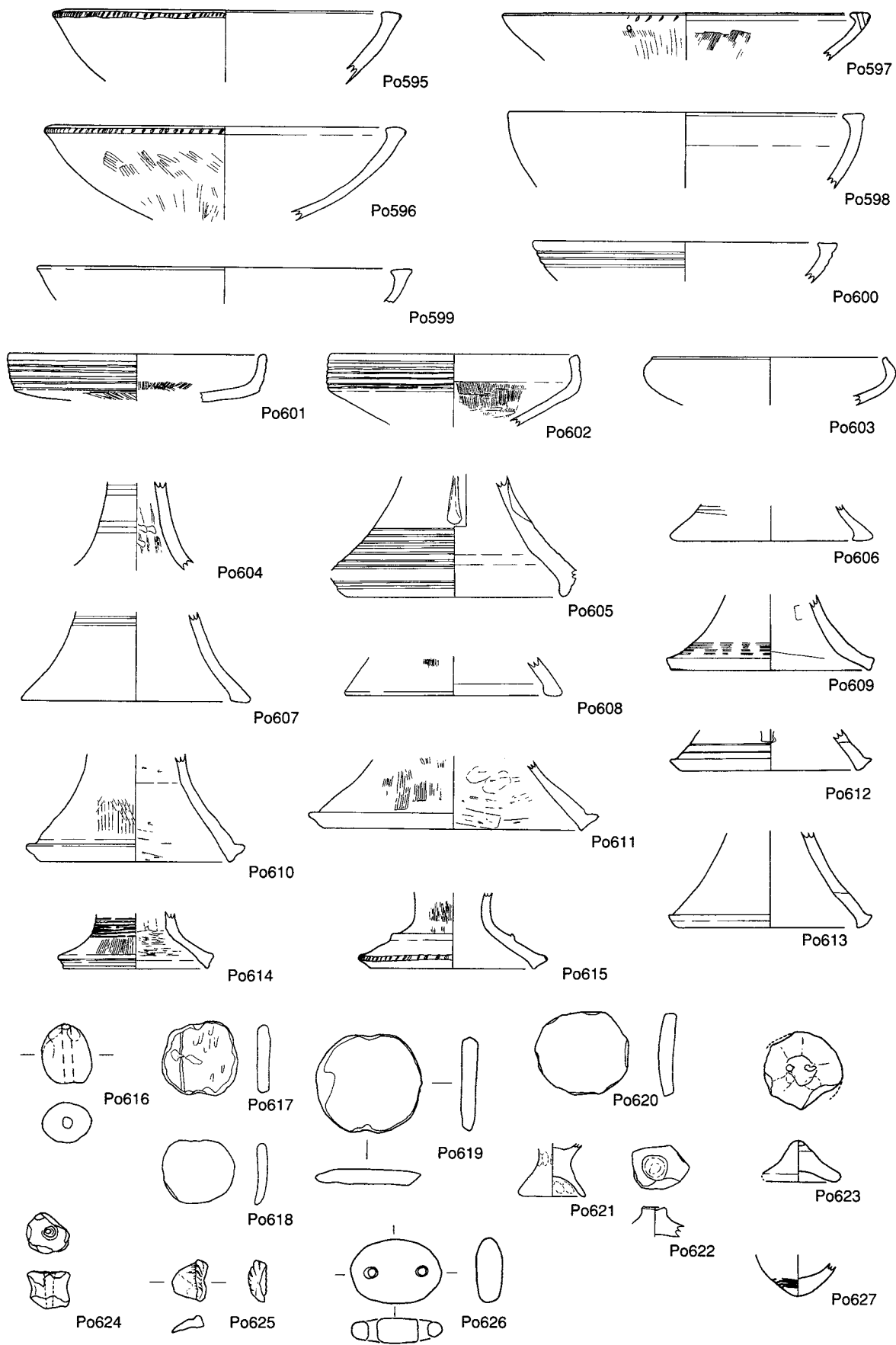
第55図 第2水田下層出土遺物実測図9



第56図 第2水田下層出土遺物実測図10



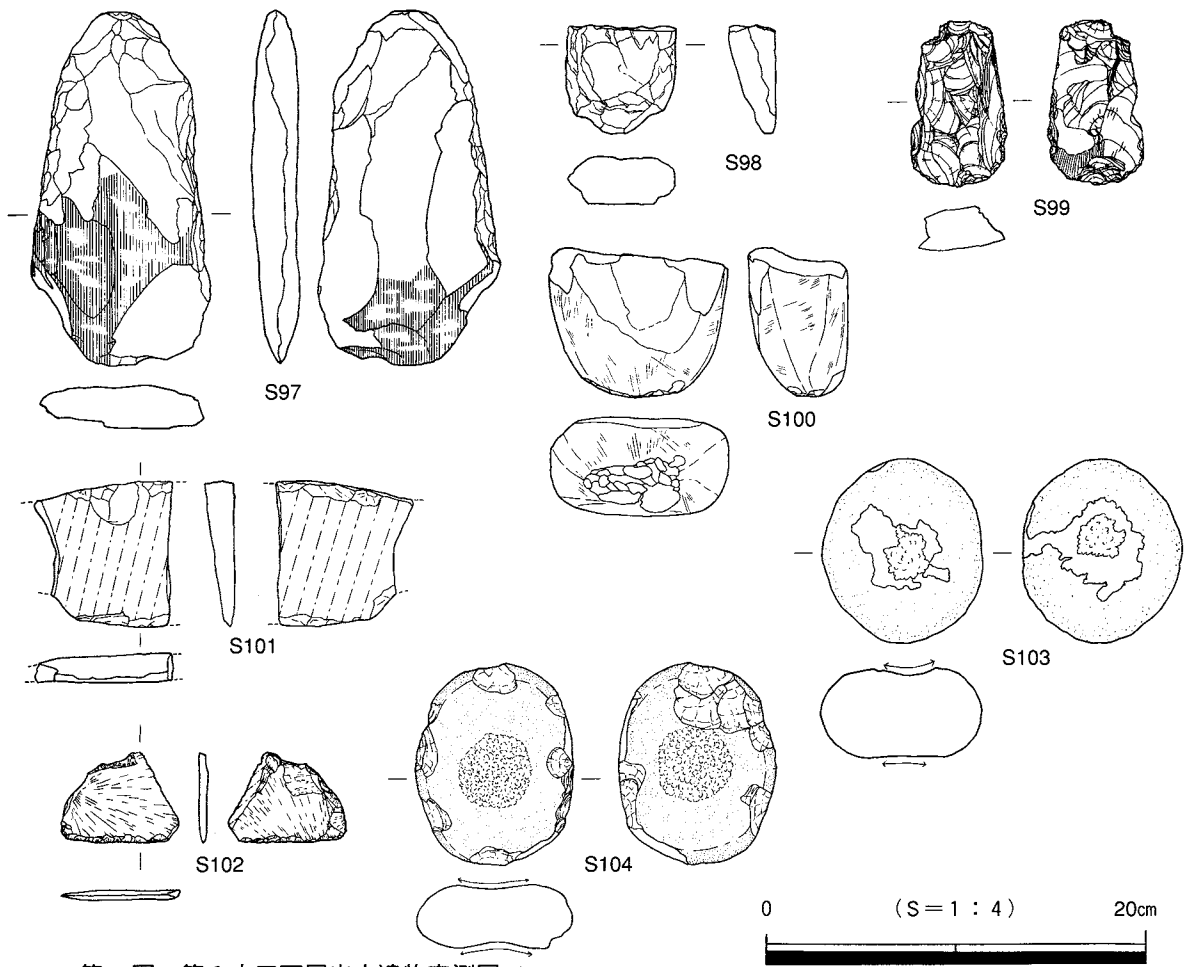
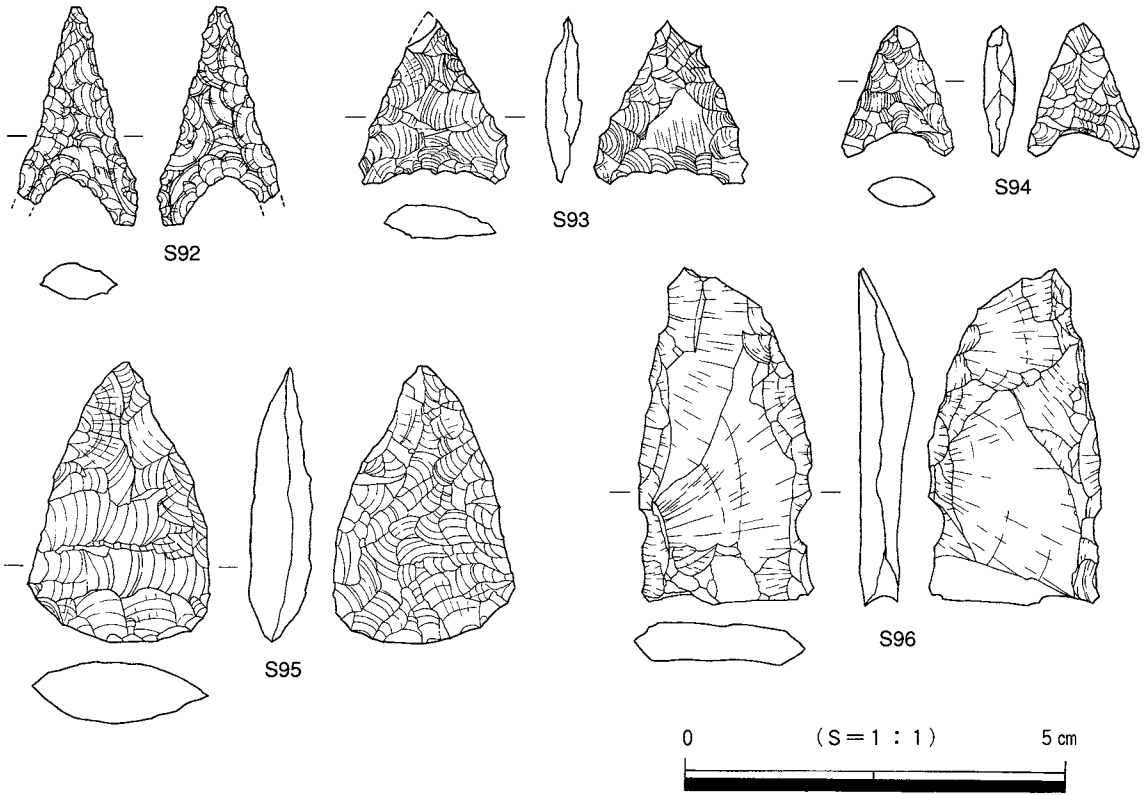
第57図 第2水田下層出土遺物実測図11



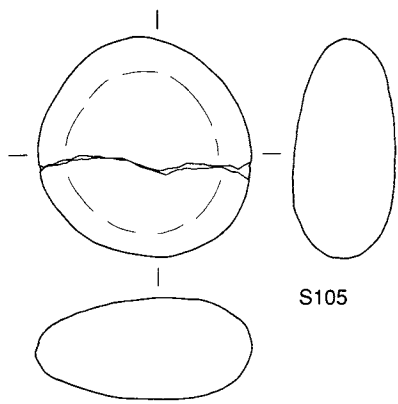
第58図 第2水田下層出土遺物実測図12

0 (S = 1 : 4) 20cm

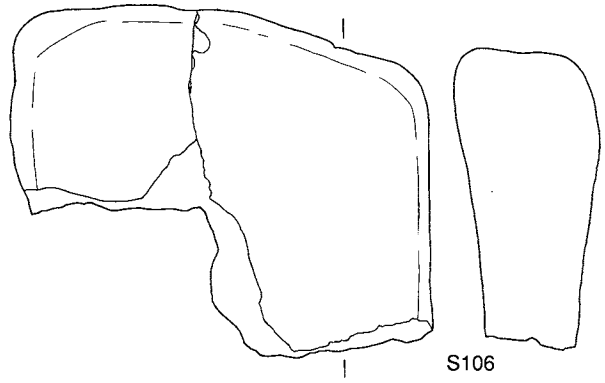




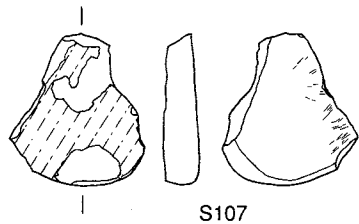
第59図 第2水田下層出土遺物実測図13



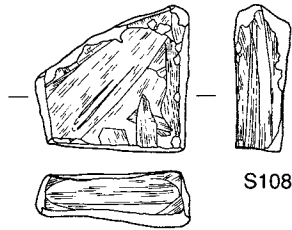
S105



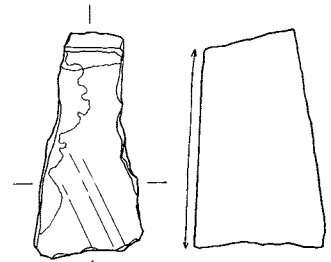
S106



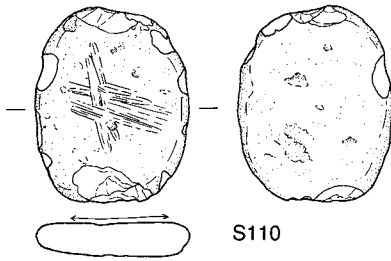
S107



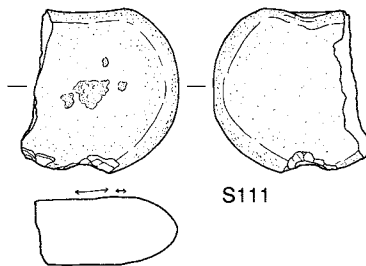
S108



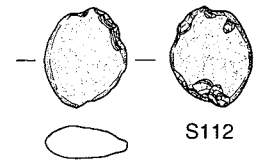
S109



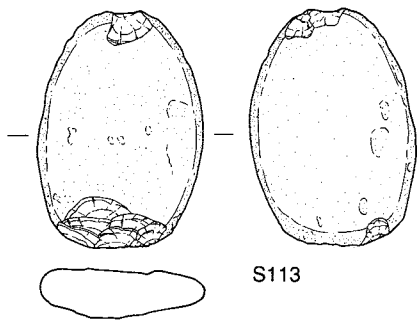
S110



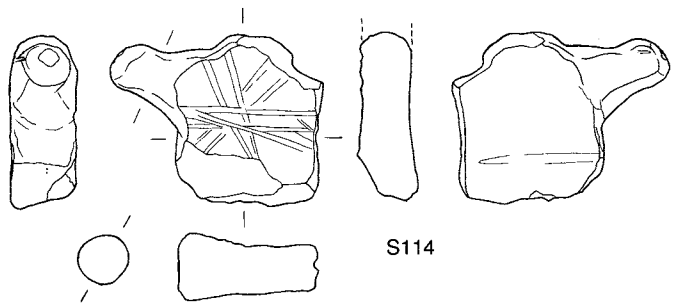
S111



S112

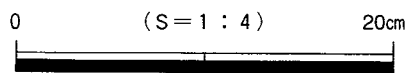


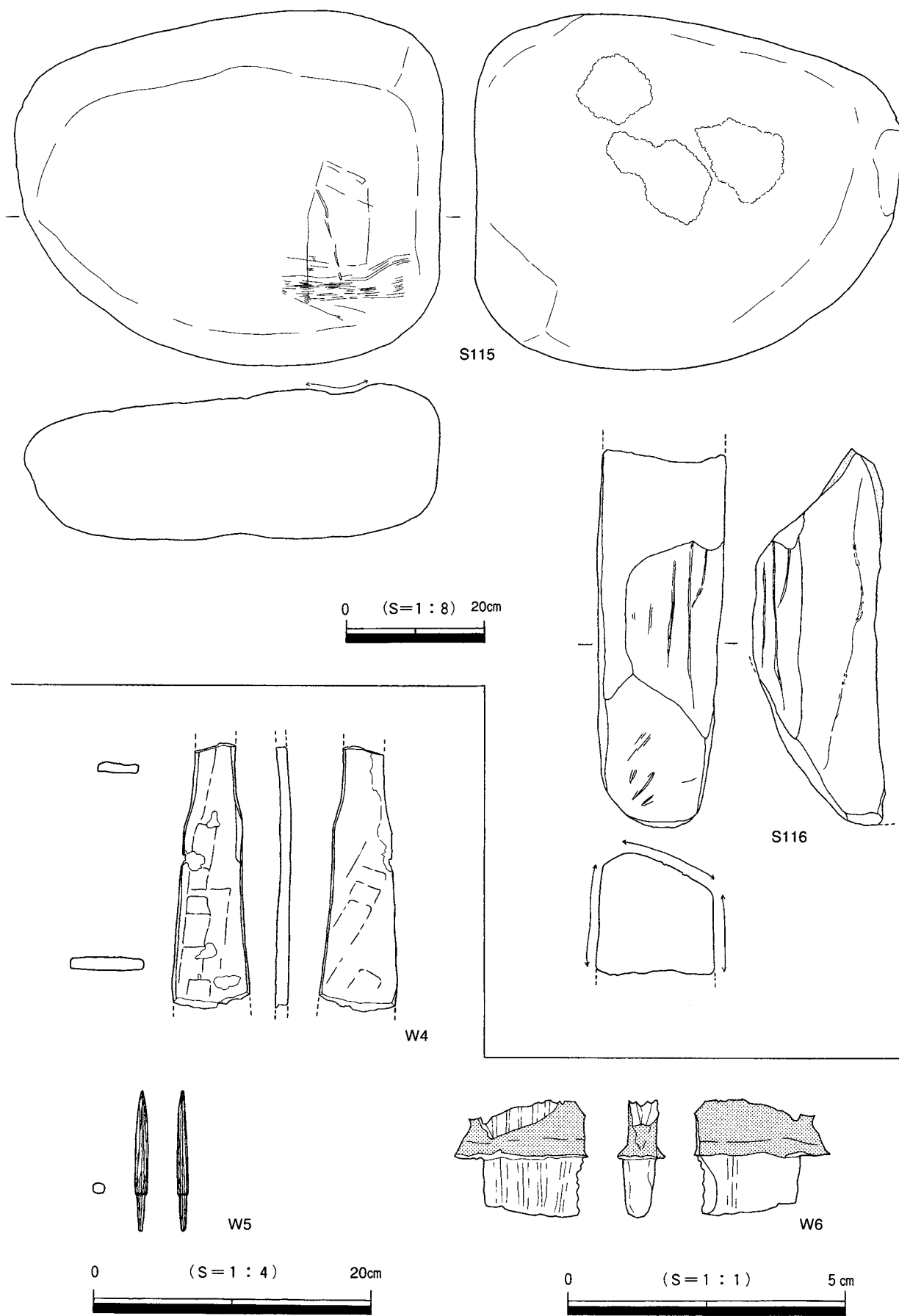
S113



S114

第60図 第2水田下層出土遺物実測図14





第61図 第2水田下層出土遺物実測図15

## 第7節 弥生時代中期末の調査（水田面）

### 1. 概要

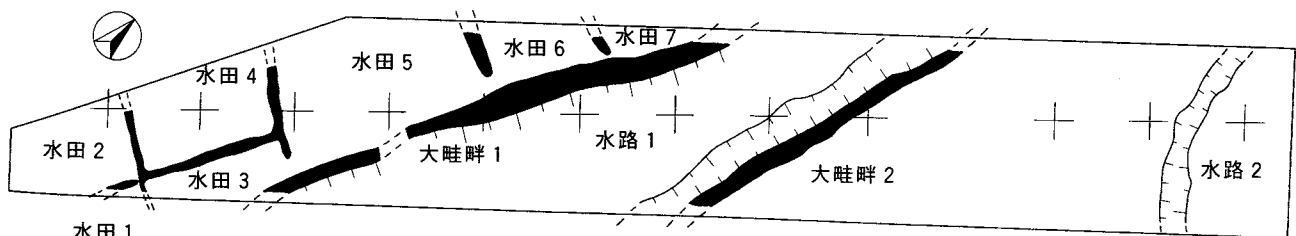
4—1層の下層において、白色ブロックを多く含む黒色の粘土層を検出し、断面観察を行った結果、畦畔状に盛り上がった地点を確認したため、検出作業を行い、水田遺構を検出した。この水田下層に存在する土器溜り出土土器の下限が、弥生時代中期後半であり、水田検出面での遺物が中期末から後期初頭と見られる。また水田の上層には、ラミナ状に厚く堆積したシルト層があり、これらは洪水による堆積層と見られる。なお、第6次調査でもこの洪水層を検出し、堆積時期を弥生時代中期前半から後期までと推定したが、今回の調査で、この層の洪水堆積が弥生時代後期以前には遡らないことが判明した。

### 2. 検出遺構

水田を7面と水路2条を検出した。

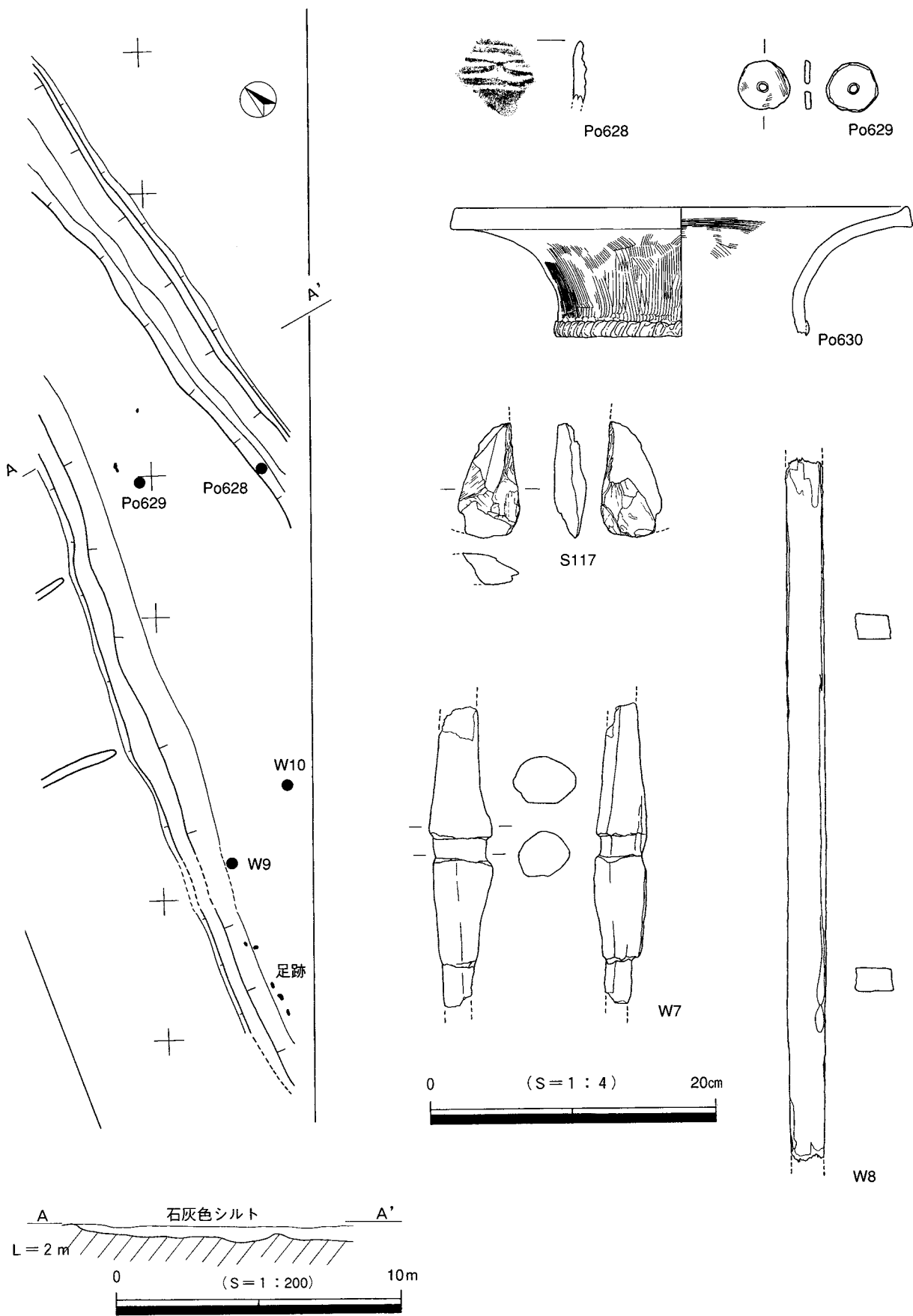
**水田（第83図）** 調査区の1区から8区までの範囲において検出した。全部で7面検出したが、一部分のみの調査であるため、全体の規模は不明である。恐らく一辺8m程度の小区画水田と考えられる。畦畔は幅30cm、高さ5cm程度の大きさで、断面形はカマボコ形を呈している。また畦畔の一部には切れたところがあり、水口の位置を示すものと見られる。畦畔は、水田の耕作土である黒色粘土と同じ土で盛られているが、畦畔の内部には畦芯となるような木材は埋め込まれていなかった。この水田面からは遺物の出土は少なく、図化できるものはなかったが、水田下層の土器溜りの年代と、水路1を被覆する砂層の年代が後期初頭頃とみられることから、弥生中期末から後期初頭の段階に埋没したものと考えられる。

**水路1（第63図）** 検出した長さ30m、幅7m、深さ40cmで、水路の東側は、幅2m、深さ70cmでより深くなっている。水路の東端は、高さ40cm、幅1mの大畦畔によって区画されている。水路内は、灰色のシルトが堆積しており、ラミナが明瞭に観察できる。この遺構からは、土器、石器、木器が出土した。Po628は、口縁部外面に紋様帯が施されるもので、浮線紋土器と見られる。Po629は土器片を丸く加工し、中央部を穿孔したもので、土器片を転用した紡錘車と見られる。Po630は弥生中期の壺の口縁部で、頸部に指頭圧痕貼付突帯を巡らせるものである。S117は、破損した石斧の刃部片である。W7は、中央部を削り出した棒材で、両端部は細くなる。W8は、残存長50cmの角棒状に加工されたもの。W9、W10は、焼痕が残る板材で、表面は風化が著しい。W11は有頭棒の断片と見られるもので、切込みを入れる。樹種はシイである。W13は丸太材を半裁したもので、端部に加工痕が残る。建築材か。

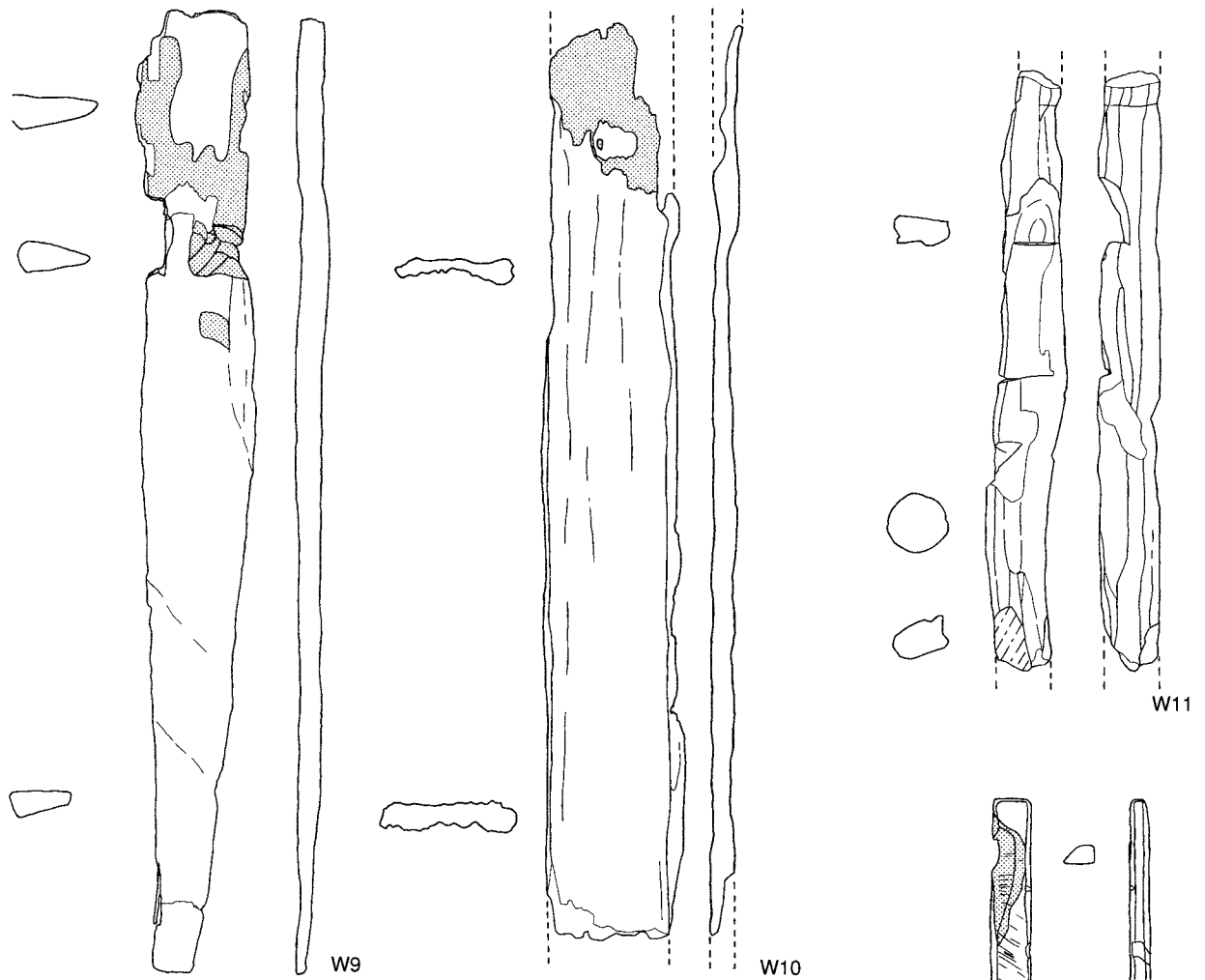


第62図 弥生時代中期末の遺構面（水田内）

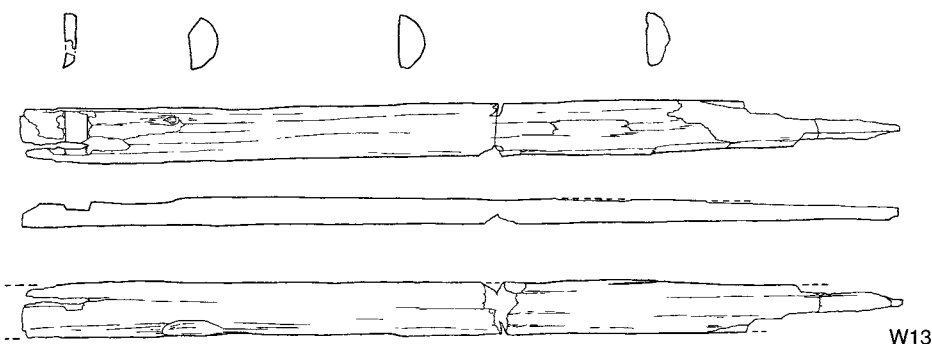
0 (S=1:400) 10m



第63図 水路1遺構図、出土遺物実測図

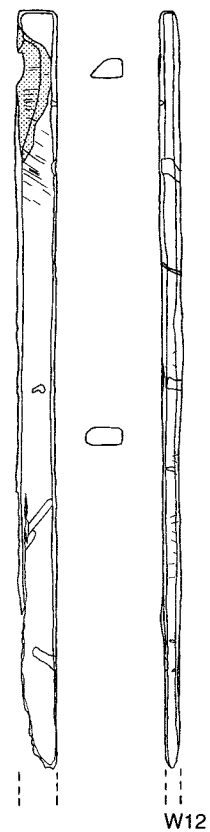


0 (S=1:4) 20cm



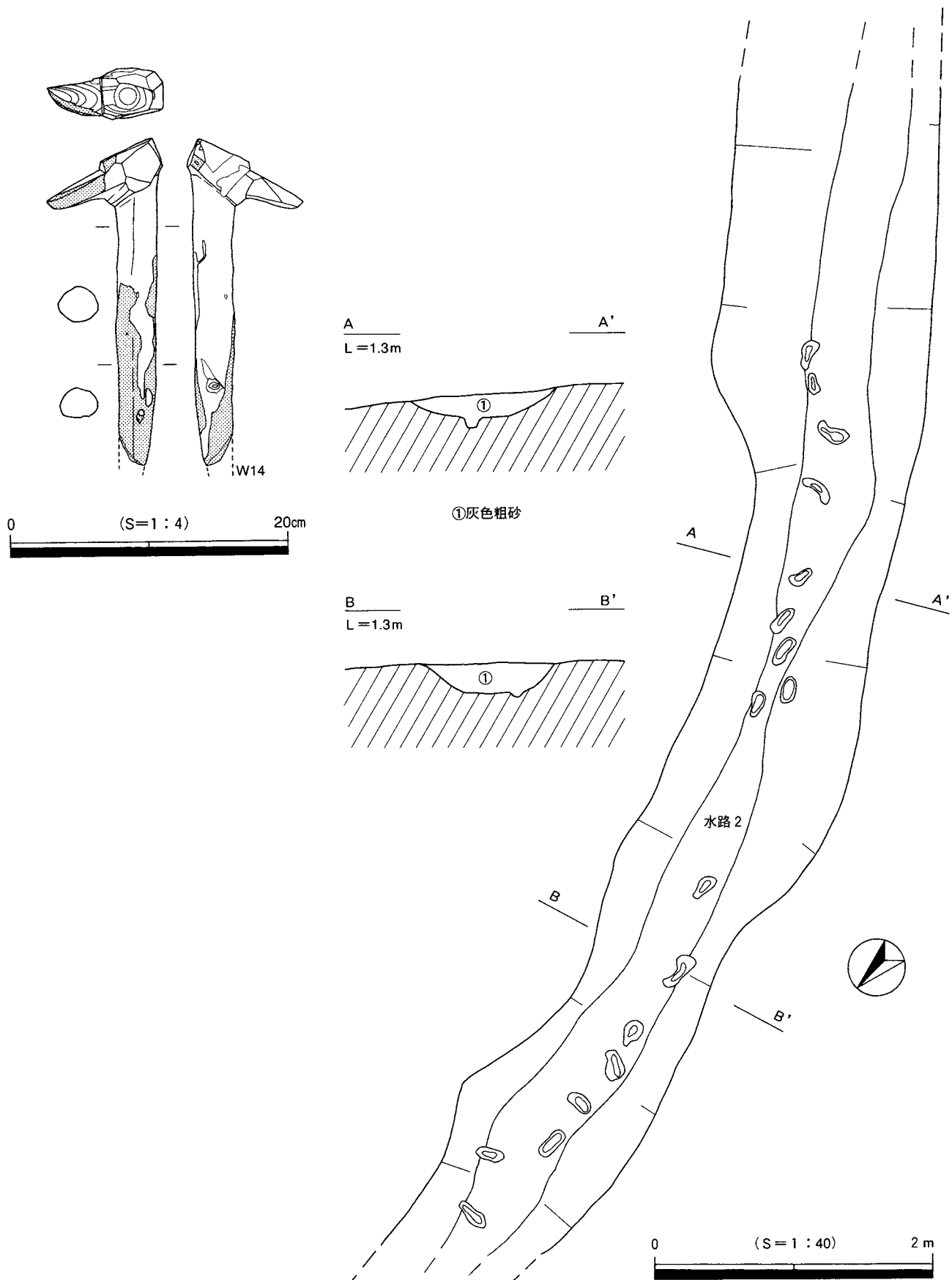
0 (S=1:20) 1m

(網点は焼痕を示す)



0 (S=1:8) 20cm

第64図 水路1 出土遺物実測図



第65図 水路2遺構図、出土遺物実測図

水路2（第65図） 検出した長さ9m、幅1m前後、深さは30cmで、断面は「U」字形を呈し、東へ緩やかにカーブして伸びている。水路内の埋土は、灰色粗砂で満たされていた。また底面には、17点の足跡状のくぼみが遺存しており、人間が水路内を歩行した痕跡と考えられる。この水路内からは、斧柄状の木製品W14以外は出土せず、遺構の時期は不明であるが、水路内に堆積していた粗砂は、隣接する第6次調査地点で検出した、弥生中期の水田を被覆していた粗砂と同様の砂であるため、この水路は水田と同時期に埋没したものと考えられる。

## 第8節 弥生時代中期末の調査（粗砂面）

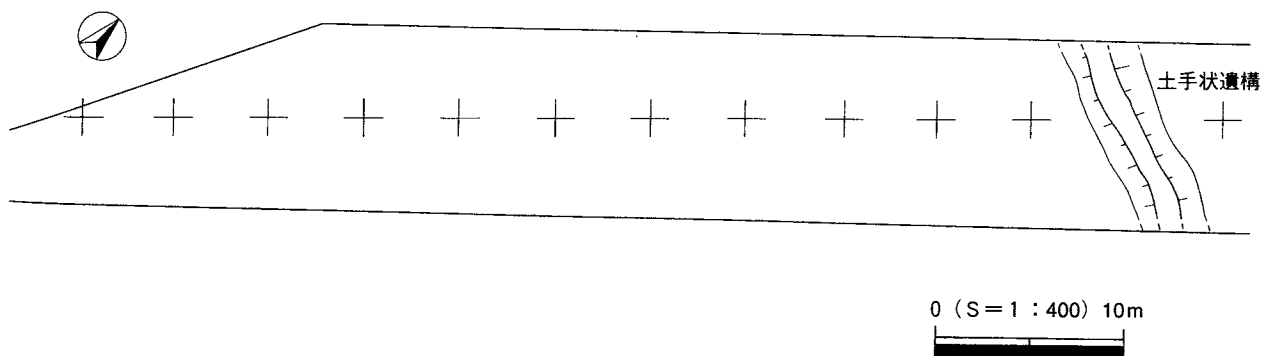
### 1. 概要

暗灰色粘土層を除去する際に、水路2の埋土である灰色の粗砂層が、盛り上がり土手状の遺構をなしている地点を確認したため、この遺構の検出作業を行なった。状況としては、水路2を埋没させた洪水がオーバーフローして形成されたものと考えられる。またこの土手状遺構が形成された時期については、水路2が埋没した直後で、それほど時期差の無いものと考えた。

### 2. 検出遺構

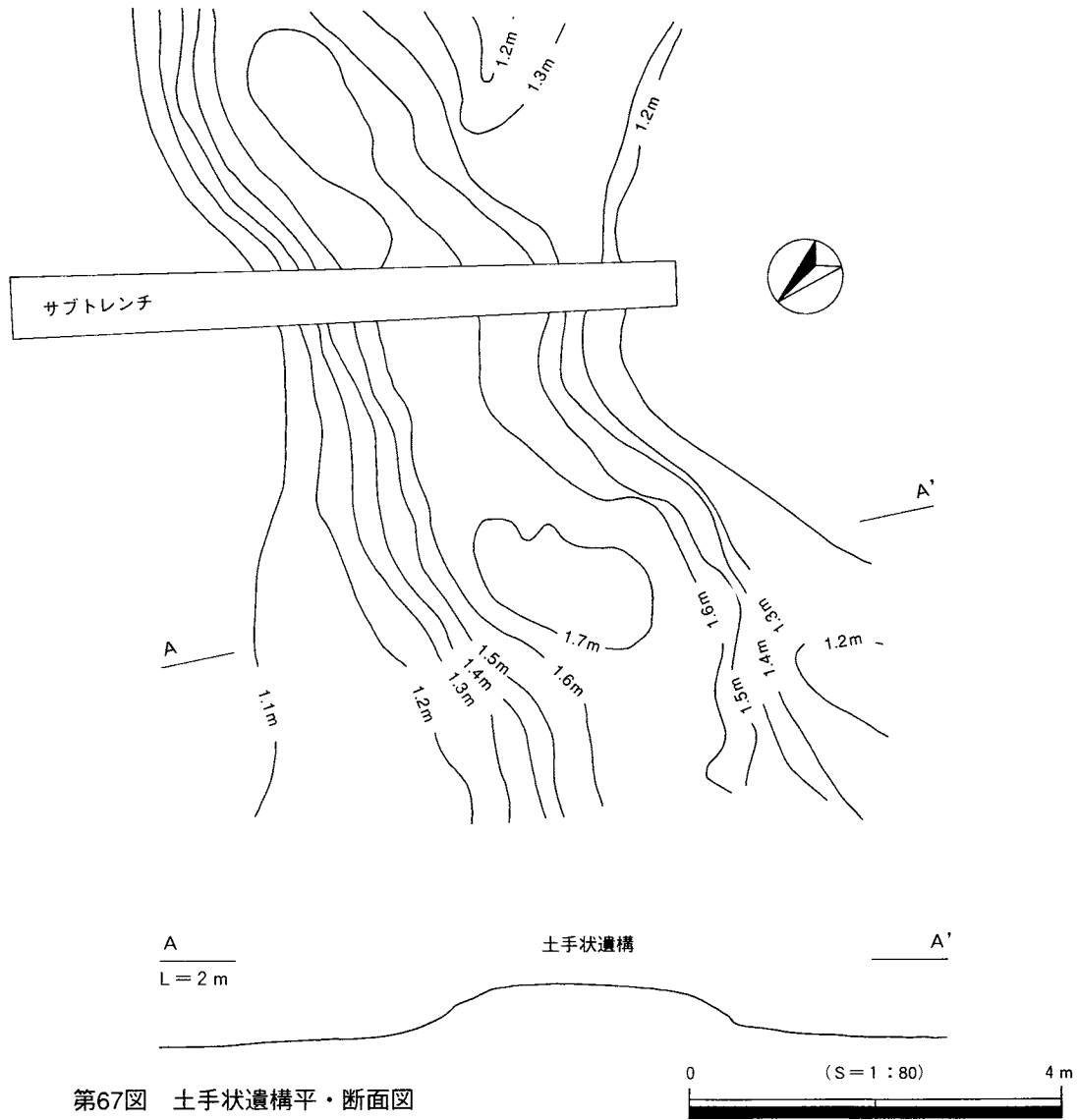
12区において、粗砂が土手状に盛り上がった遺構を検出した。

土手状遺構（第67図） 水路2の埋土中からオーバーフローしたような状況で盛り上がった土手状の遺構である。検出した長さ9m、幅4mで、高さ0.6mの緩やかな台形を呈する。土層は粗砂の純層だが、断面にラミナが観察できるため、水成堆積によって形成されたものと考えられる。



第66図 弥生時代中期末の遺構面（粗砂面）





第67図 土手状遺構平・断面図

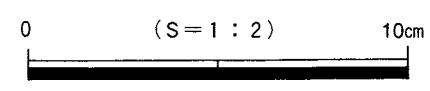
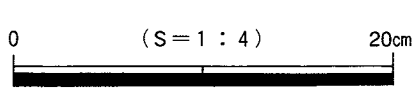
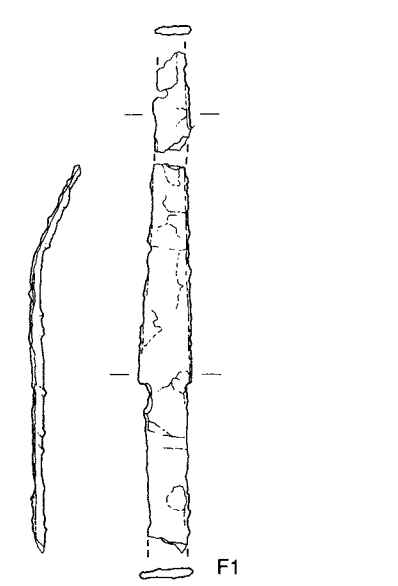
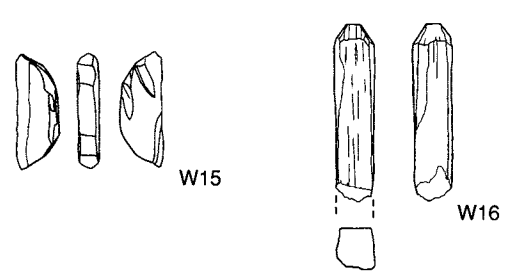
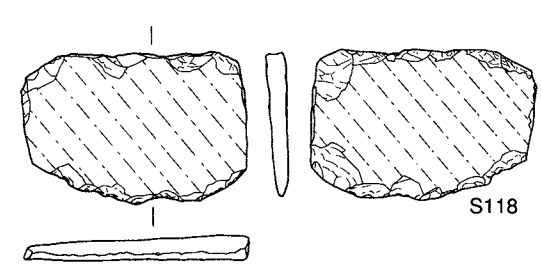
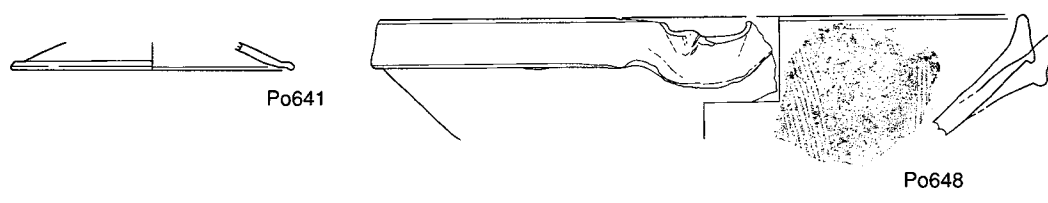
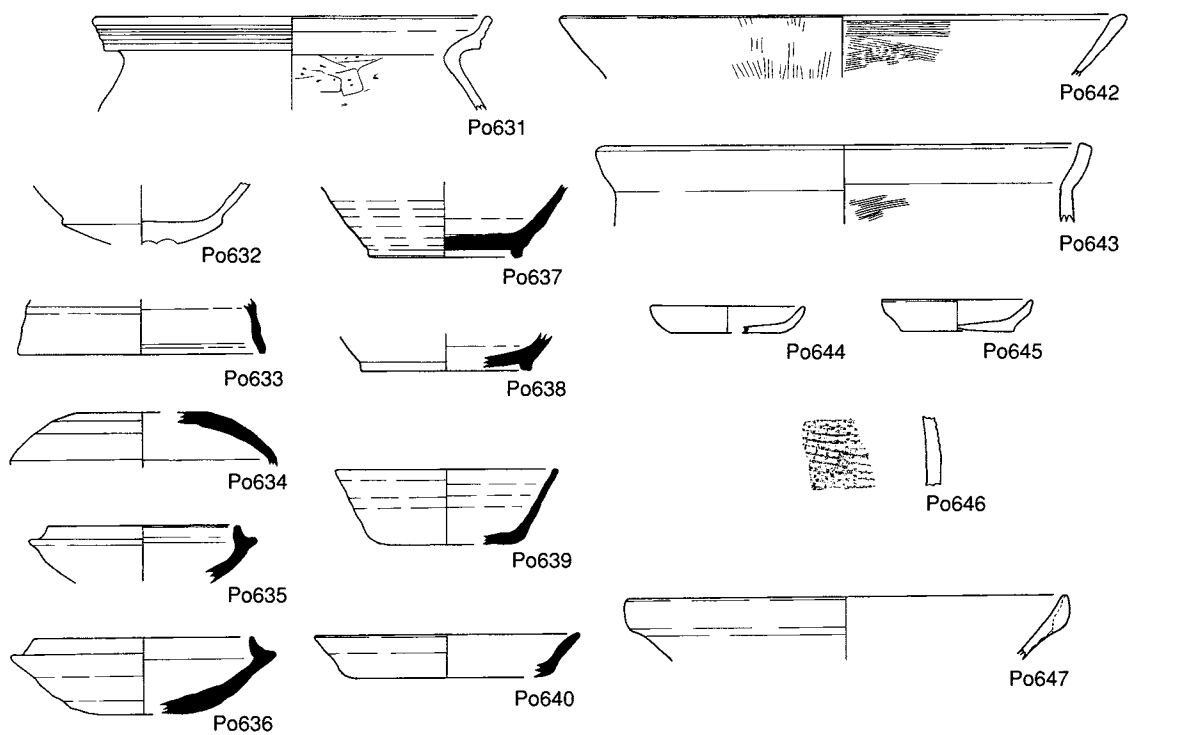
## 第9節 古墳時代から平安時代の調査

### 1. 概要

第1水田の耕作土である4-1層中より、弥生時代後期から中世後半にかけての遺物が出土した。大半の遺物は、細片化しており、水田耕作により攪乱を受け、埋没したものと考えられる。出土遺物には時期幅があるものの、上層水田の耕作時期が中世前半に収まるものと考えられるため、この段階までの遺物を多く含むものと考えられる。

### 2. 出土遺物 (第68図)

Po631は外方に拡張する口縁に凹線が巡り、内面は頸部までへら削りする。弥生後期前半の甕である。Po632は、土師器高坏の坏部。Po633からP640は須恵器である。Po641は土師器の坏蓋で端部に返りを持つ。Po643は土師器鍋。Po644、Po645は土師器皿。Po647は、口縁部が玉縁状に肥厚する白磁碗である。Po648は備前焼播鉢。S118は板状に剥離した石材の端部を加工した石器である。W15は半月状に加工した木片。W16は先端を鈍く尖らせた木片である。F1は刃部が折れ曲がる刀子状の鉄器である。



第68图 4-1层出土遗物实测图

## 第10節 古代から近世の調査

### 1. 概要

調査区のほぼ全域において、水平堆積する淡茶灰色粘土層（4—1層）を検出し、その上面において、土坑、足跡群を検出した。調査では、明確な畦畔や水路遺構は検出できなかったものの、粘土が水平堆積していることと、1、2区で検出した足跡の分布状況から、この面を第1水田面と名付けた。また、水田の下層には、炭酸鉄の集積が所々見られた。また、この層を被覆する、暗灰色粘土層中では、木材を束ねて溝状に埋設した遺構を検出した。形態的には、枝材とスギ葉がまとめられ、直線状に埋められており、規則性を示すものであった。この遺構からは遺物が出土しなかったものの、近世以降に水田の排水を目的として作られた暗渠と見られる。こうした遺構の類例については、滋賀県内の水田でショウズヌキと称される施設が知られており、湿田の排水を目的として作られた遺構であるという。この事例も同様の施設の可能性が考えられる。

### 2. 検出遺構

土坑6基と、足跡の密集する地点を検出した。

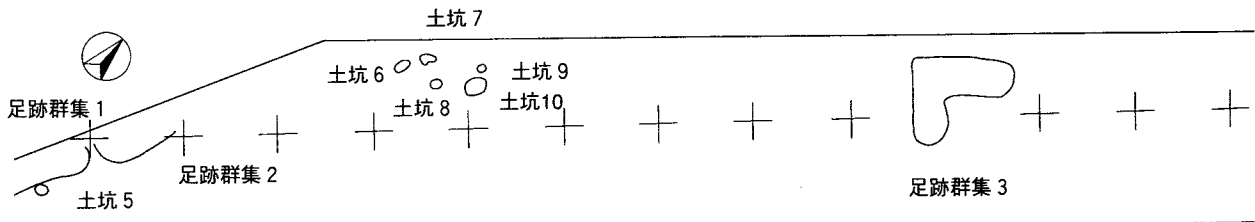
**土坑5（第70図）** 1区において検出した。長径70cm、短径50cm、深さ10cmの楕円形土坑である。この土坑内からの出土遺物は無く、時期、性格とも不明である。

**土坑6（第71図）** 長径80cm、短径50cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。土坑内からは、土器片が少量出土しているが、時期性格とも不明である。

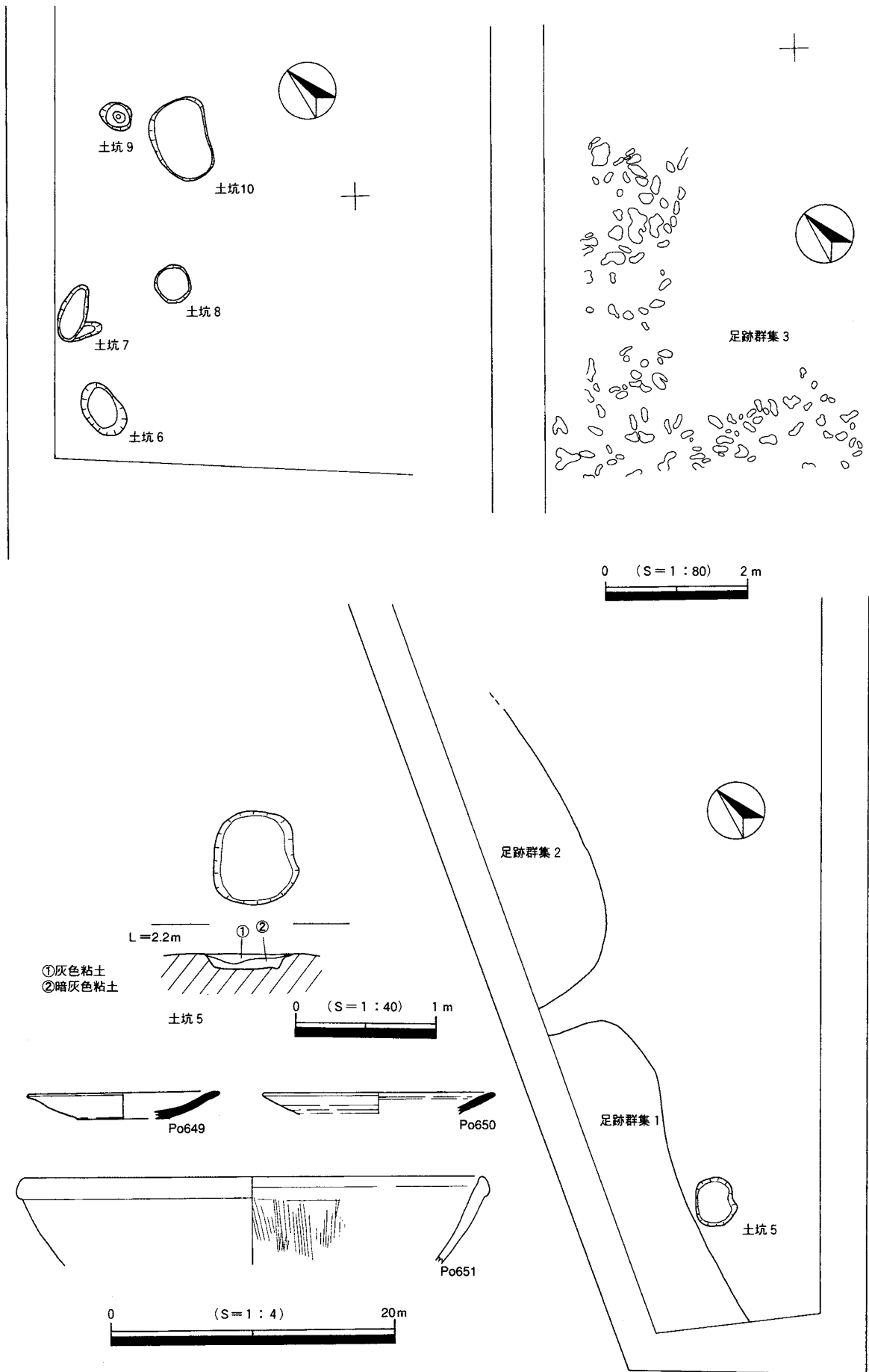
**土坑7（第71図）** 長径80cm、短径30cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。この土坑内からの出土遺物は無く、時期、性格とも不明である。

**土坑8（第71図）** 直径50cm、深さ5cmの円形の土坑である。この土坑内からの出土遺物は無く、時期、性格とも不明である。

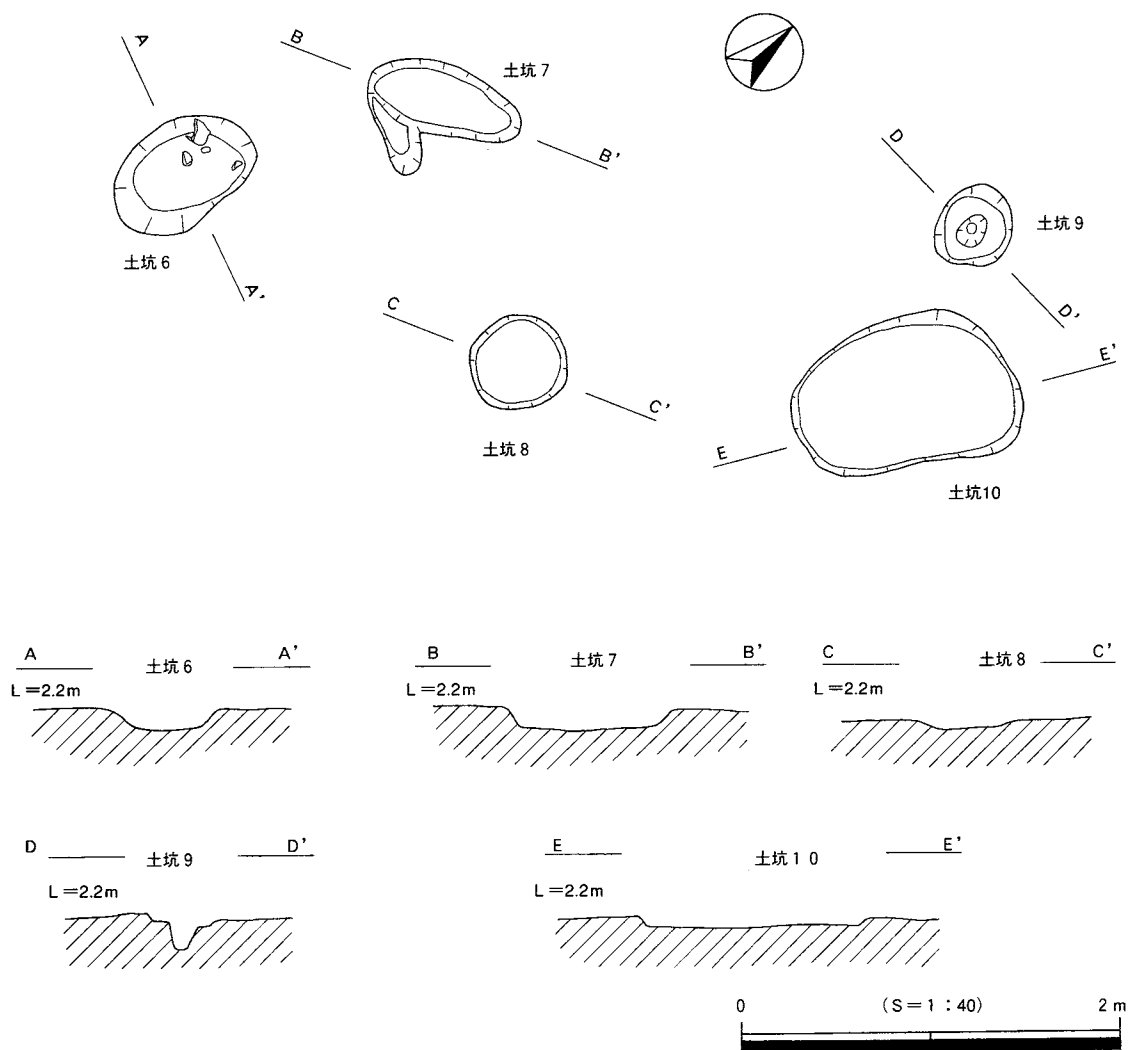
**土坑9（第71図）** 直径45cm、深さ15cmの円形の土坑である。土坑内は二段に掘り込まれている。形態的には柱穴状を呈しており、土坑8がこれに対応する可能性も考えられたが、さらに続く柱穴を検出することが出来なかったため、土坑とした。この土坑内からの出土遺物は無く、時期、性格とも不明である。



第69図 古代から近世の遺構図



第70図 土坑、足跡群集遺構図、出土遺物実測図



第71図 土坑6～10遺構図

**土坑10 (第71図)** 直径120cm、短径75cm、深さ5cmの円形の土坑である。この土坑内からの出土遺物は無く、時期、性格とも不明である。

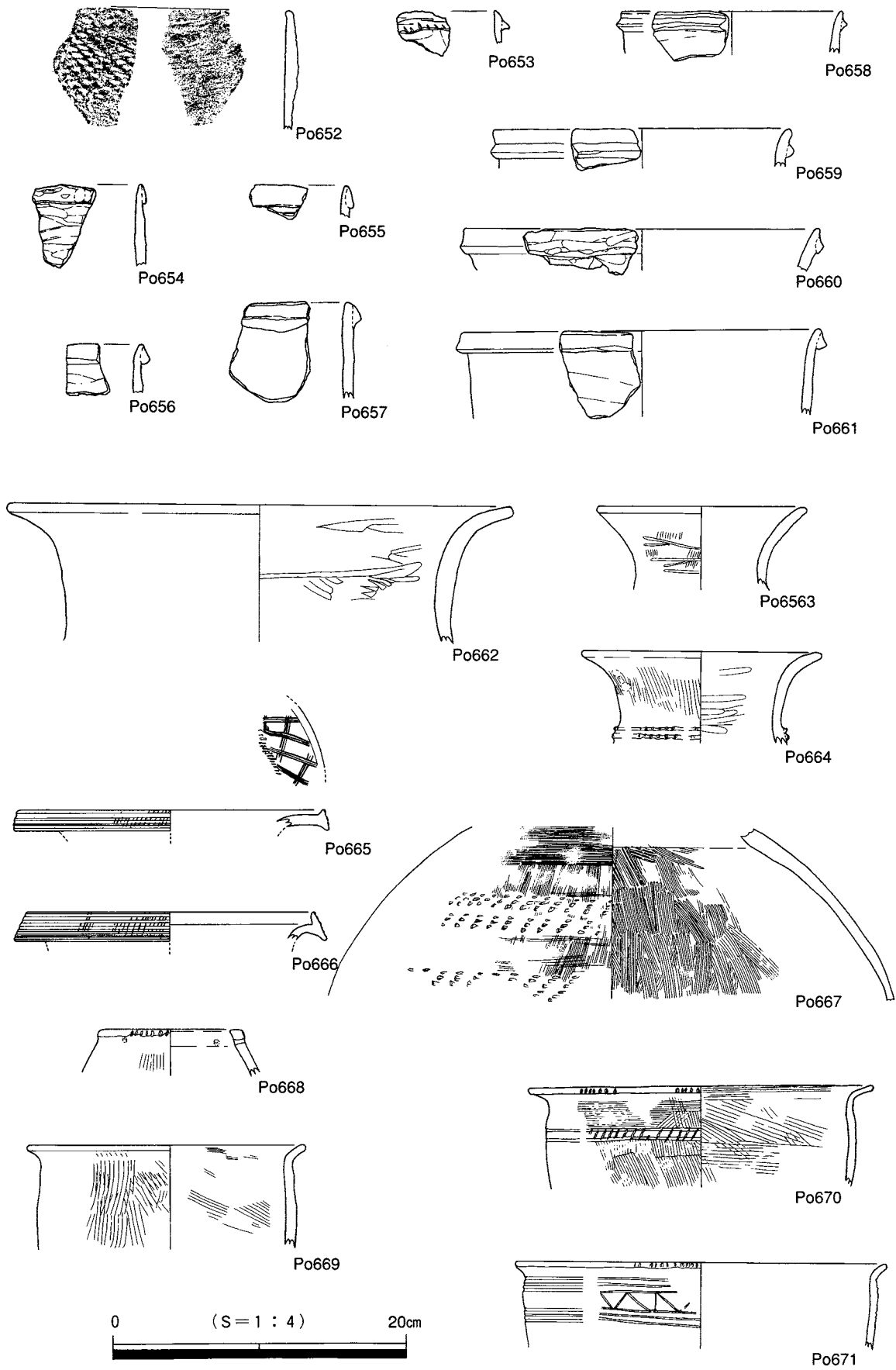
**足跡群集 (第70図)** 1区、2区、11区にて検出した。1区、2区のものは、密に切り合った状態で群集しており、検出範囲の記録しか作成できなかった。この足跡群集1、2の間は、一部切れており、この部分に畦畔が存在した可能性も考えられる。足跡群集3も同様に、足跡が切り合った状態で検出されたが、足跡群集1、2よりも疎らである。

### 3. 出土遺物 (第70図)

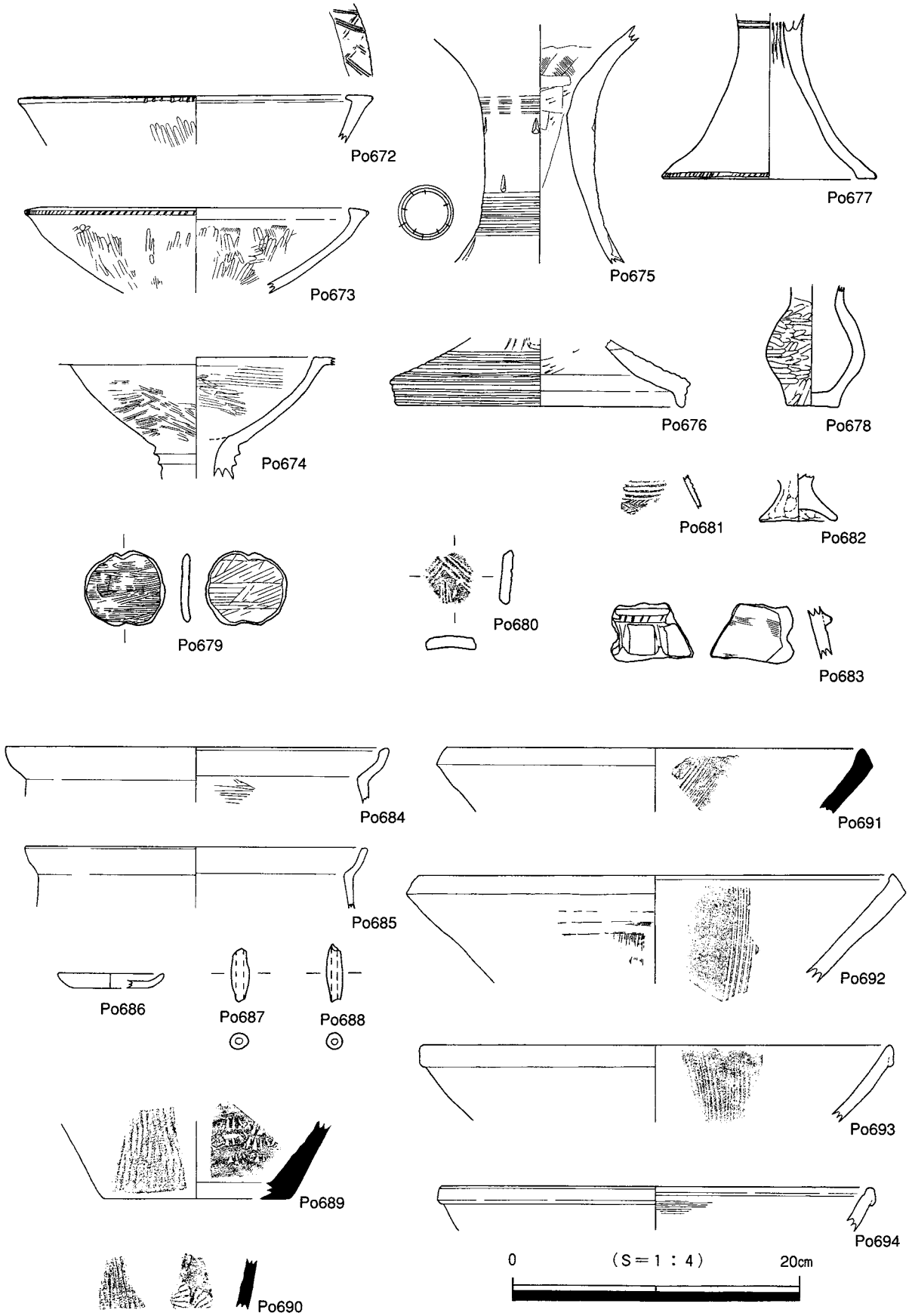
ここでは、遺構面の直上から出土した遺物を図化した。Po649、Po950は須恵器皿である。Po651は、瓦質の鉢形土器である。口縁端部は外面に肥厚し、内面には卸目が刻まれる。形態的な特徴から播鉢と考えられる。こうした瓦質播鉢は、目久美遺跡を初めとして、宍道湖岸地域の遺跡でも散見されるが、いわゆる防長系の播鉢との関係などはまだ明らかにされておらず、注意を要する遺物である。

## 第11節 遺構外出土遺物（第72図～第76図）

包含層から出土した遺物や、調査区の周囲に巡らせた排水溝の掘削中に出土した遺物を72図から第76図に示した。Po652は縄紋土器である。Po684、Po685は、口縁が受け口状を呈する土師質土鍋。Po686は土師皿。Po688は土錘。Po689、Po690は内面に放射状の当て具痕跡を残す須恵器甕片。Po691は須恵質の擂鉢。Po692～Po694は瓦質擂鉢。Po695は、瓦質鉢形土器。Po696は備前焼の擂鉢口縁部。Po697は白磁碗。Po698は青磁碗。Po699は青花皿。Po700は、陶器の擂鉢で、須佐唐津系の製品か。Po701～Po702は、砂目積の痕跡を残す唐津皿。Po703は肥前磁器で器種は碗か。焼継による補修痕が残る。焼継の磁器が米子城跡以外の遺跡で見つかる事例は稀である。S119は石匙。S120は石鏃。S121～S124は石鍬。S125は円礫の端部を打ち欠いたもので、叩石か。S126～S128は凹石。S129～S139は石錘。S140は石製紡錘車。火を受けているらしく、表面は剥離し、煤が付着している。S141、S142は砥石。W17は箸。W18は、薄い板を杓子形に加工する。どちらも樹種はスギである。F2は、取っ手状に加工した鉄製品である。端部を巻返し蕨手状に処理している。B1～B3は銅銭である。B1は「景祐元寶」（初鑄1034年）である。B2は「天聖元寶」（初鑄1023年）。B3は「紹聖元寶」（初鑄1094年）。B4はキセルの雁首部で、火皿を欠損している。

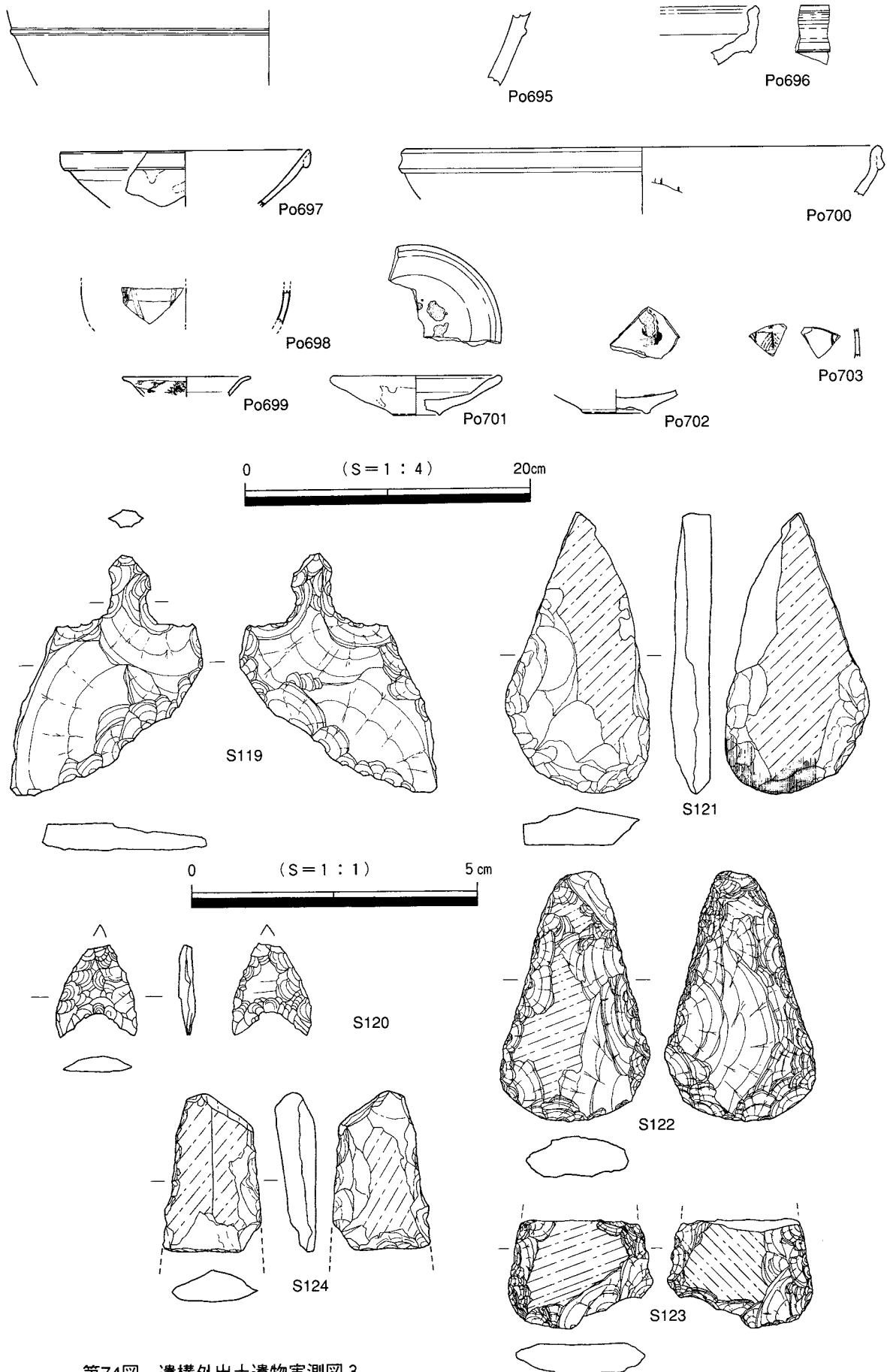


第72図 遺構外出土遺物実測図1

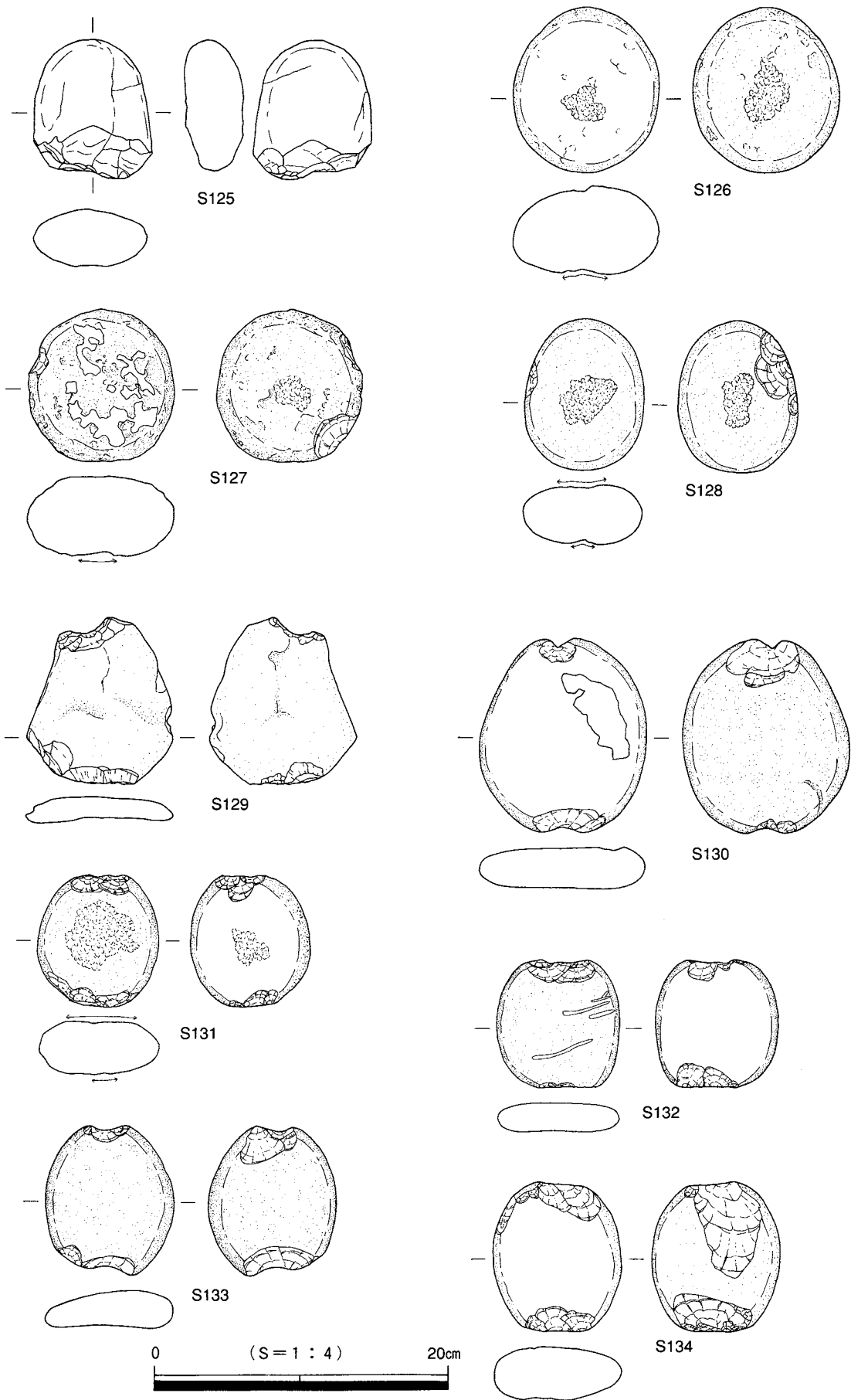


第73図 遺構外出土遺物実測図2

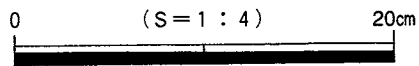
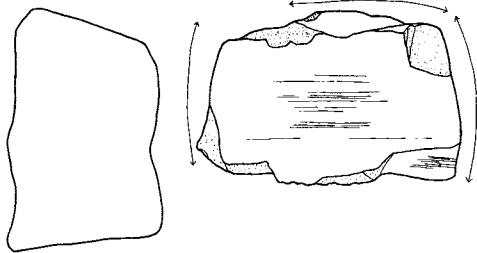
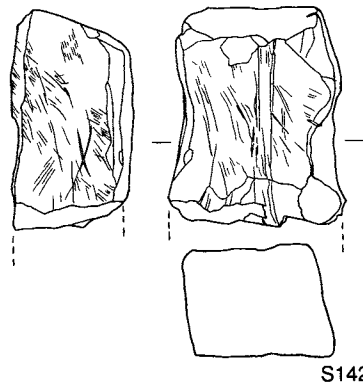
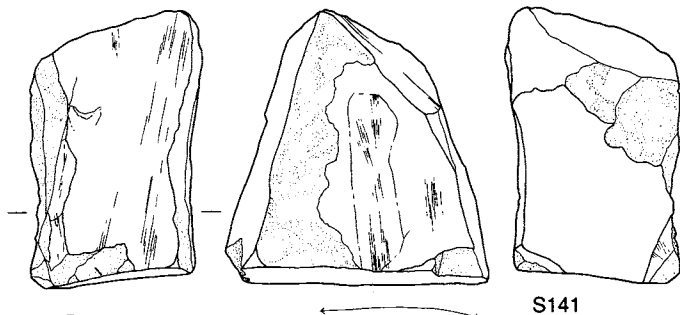
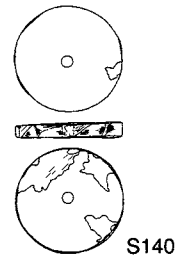
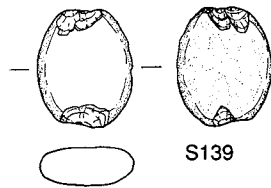
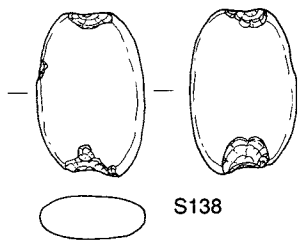
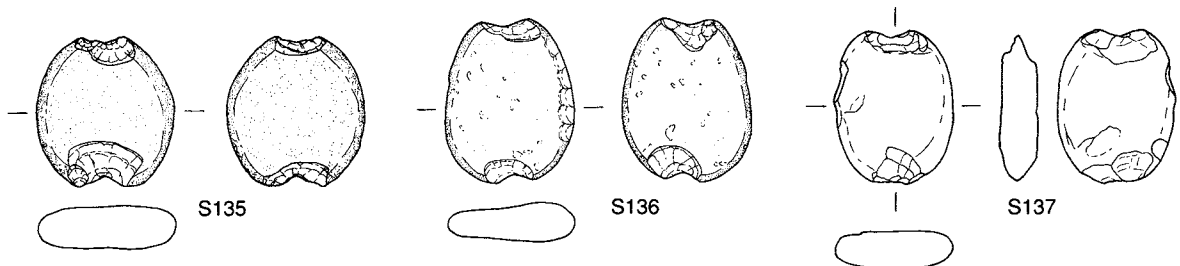




第74図 遺構外出土遺物実測図3



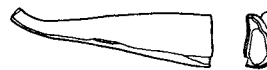
第75図 遺構外出土遺物実測図4



B1

B2

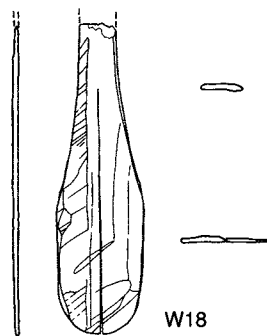
B3



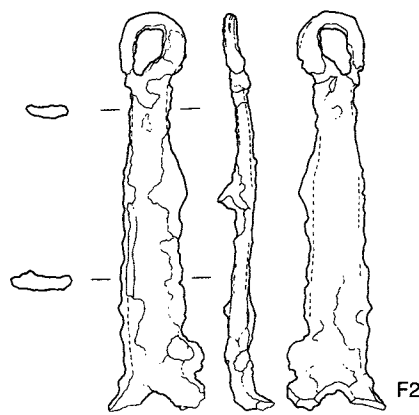
B4



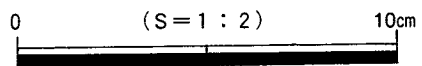
W17



W18



F2



第76図 遺構外出土遺物実測図 5

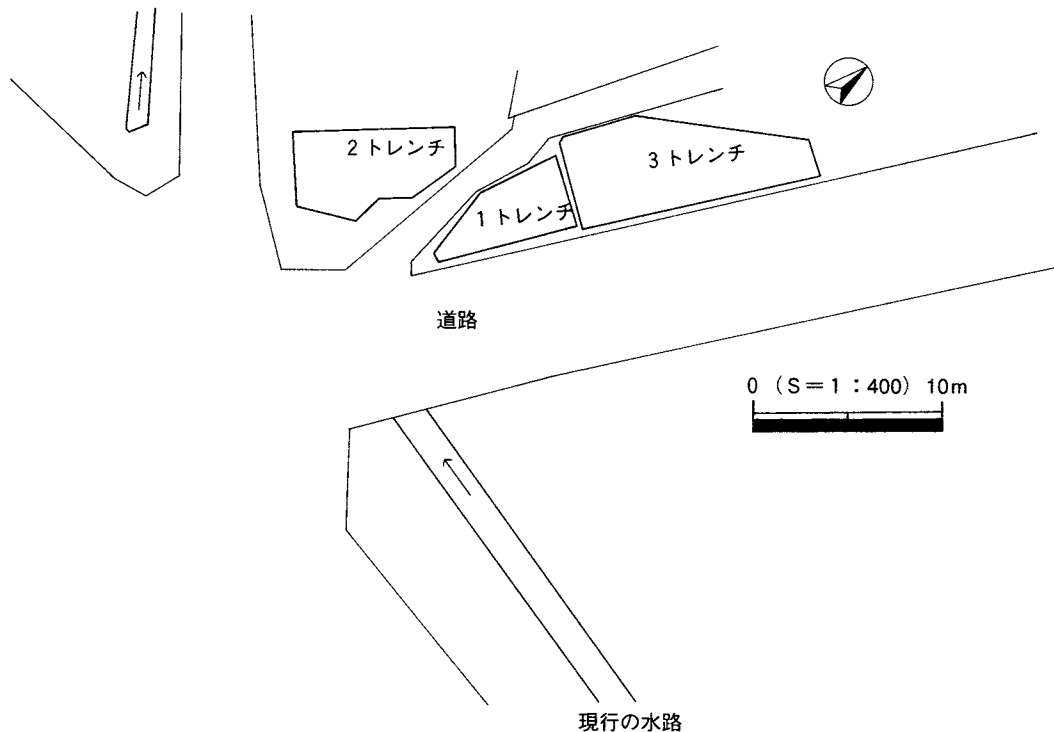
## 第12節 拡張区の調査

### 1. 概要

拡張区は、本調査トレンチ西側の道路工事予定地内を対象としたもので、この地点に隣接している第1次調査地点、第4次調査地点では、標高2m前後で岩盤を検出していることから、事前に遺構深度が浅いものと考えられたので、鋼矢板は用いず、全面素掘りにて調査を行った。また現地は、歩道の部分にガス管が埋設されていたため、歩道部分を調査範囲から除外し、3個所のトレンチ分散して調査を行った。1トレンチは長さ7.5m、幅4m。2トレンチは長さ9m、幅4m。3トレンチは長さ13m、幅5mで、地形的な制約から3つのトレンチとも不整形なものとなった。調査の結果、近現代の遺構を検出したほか、弥生時代以降の遺物が多数出土した。また、1トレンチと2トレンチの間を通る小道は、かつては目久美神社の参道に至る道であった。この目久美神社は、昔は足尾さんとも呼ばれ、足の病気に効くと言うことで、よく下駄が供えられていたという。凶化していないものの、3トレンチから近代の下駄が1点出土しており、こうした信仰を裏付けるものであったと考えられる。

### 2. 土層の堆積状況（第7図）

各トレンチの土層の堆積状況は、第7図に示した2トレンチの状況と同様の傾向を示す。大まかに分けると、標高2.5m付近に近代の水田面が存在し、その下層に、弥生時代から近世までの遺物を含む第13層（暗オリーブ色粘土層）、第14層（淡黒灰色粘土）が堆積している。水路跡以外の遺構は、第15層（灰色粘土）、および地山である明黄灰色粘土上面において検出した。遺物の出土状況は、各時代の遺物が混在して出土しており、また土器の中には摩滅したものや、細片化したものが多かったことから、近世に行われた新田開発や近代以降の水田耕作などによってローリングを受け、攪乱されたものと考えられる。



第77図 拡張区トレンチ配置図

### 3. 検出遺構

各トレンチにおいて、溝状遺構や土坑を検出したが、遺構に伴う遺物などは少なく、時期や性格は明確にすることが出来なかった。ただし、近代に作られた水田によって、大半の遺構が失われているものと考えられるため、ここでは、遺構の時期、性格が明らかな、石製水槽、水路跡について述べる。

#### 石製水槽（第77図）

3トレンチの北側で3基が並んで検出された。水溜め状の石製水槽である。周囲には、土坑状の掘り形が巡っており、上部10cm程度を地上に露出させた状態で埋設されていたものと考えられる。水槽は、長さ1m、幅80cm、高さ80cmで、内法は長さ85cm、幅60cm、深さ70cmである。内面は平滑に加工されているが、外面は雑な仕上げのままである。石材は、島根県安来市に産出する「荒島石」（あらしまいし）を用いており、極めて脆い。また水槽内部は、有機物を多く含む黒色粘質土で満たされていた。この水槽内からは、磁器（Po720）、汽車土瓶（Po721）、ビール瓶（G1）が出土した。この遺構の性格については、周辺住民の証言や埋土の状況から、昭和前期頃まで使用されていた肥溜めと考えられる。

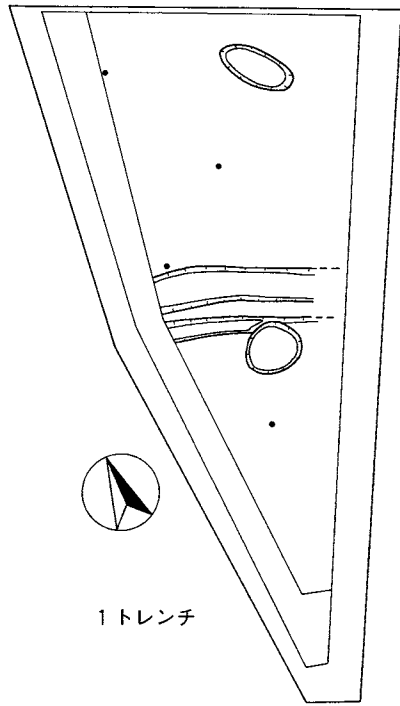
#### 溝（第77図）

3トレンチの平坦面の落ち込み部で検出した溝状の遺構である。検出した長さ約13m、幅80cm程度、深さ15cmで、弧状に伸びる。溝の北側には、土留のためと見られる木杭が打ち込まれており、断面形は「U」字形を呈する。検出した面や埋土の状況などから、水田に伴う水路として利用された溝と考えられる。遺構内からは遺物が出土しなかったものの、下層より出土した遺物から、近代以降に使用されたものであろう。

### 4. 出土遺物（第78図）

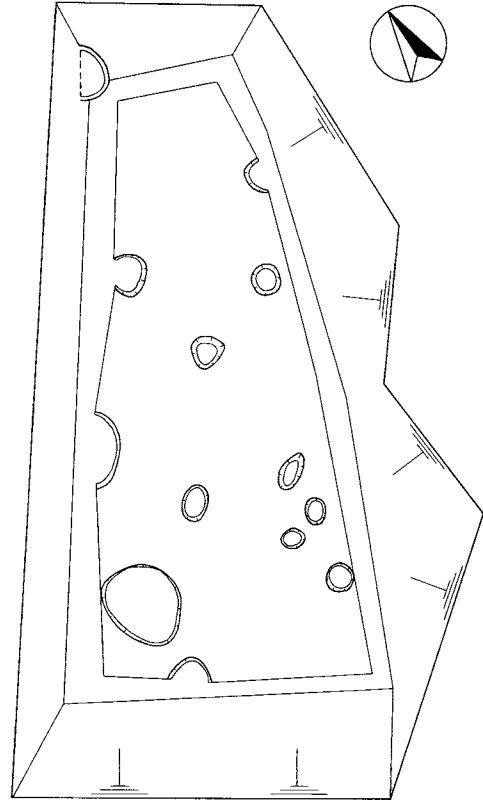
Po704は、弥生土器である。内外面ともハケ調整を施し、口縁端部に2条の凹線が巡る。Po705からPo716は須恵器である。器種は坏身、蓋、皿、高坏、甕などがある。Po717、Po718は土師器坏底部である。Po719は、ミニチュアの磁器皿で、瀬戸産か。Po720も磁器で、花の紋様を描く湯呑み茶碗である。Po721は、四角形の汽車土瓶である。側面に「御茶」の文字や山、花などの文様を描く。型作りの製品で、側面には合わせ目が確認できる。白色の胎土に白釉を掛ける。底部は露胎で、ややピンク色を呈する。

S143は板状の石材の端部に叩打痕が残る。S144は磨製石斧の刃部片。G1は、陽刻の「nippon☆beer」銘をもつビール瓶で、文字は摩滅していない。ガラスは、薄茶色を呈し、ガラス内には、気泡を含まない。栓は王冠式である。現サッポロビール社の前身である、日本麦酒社（昭和24年～32年）の製品と見られる。Po720とPo721、G1は、石製水槽内から出土しており、一括遺物と考えられる。

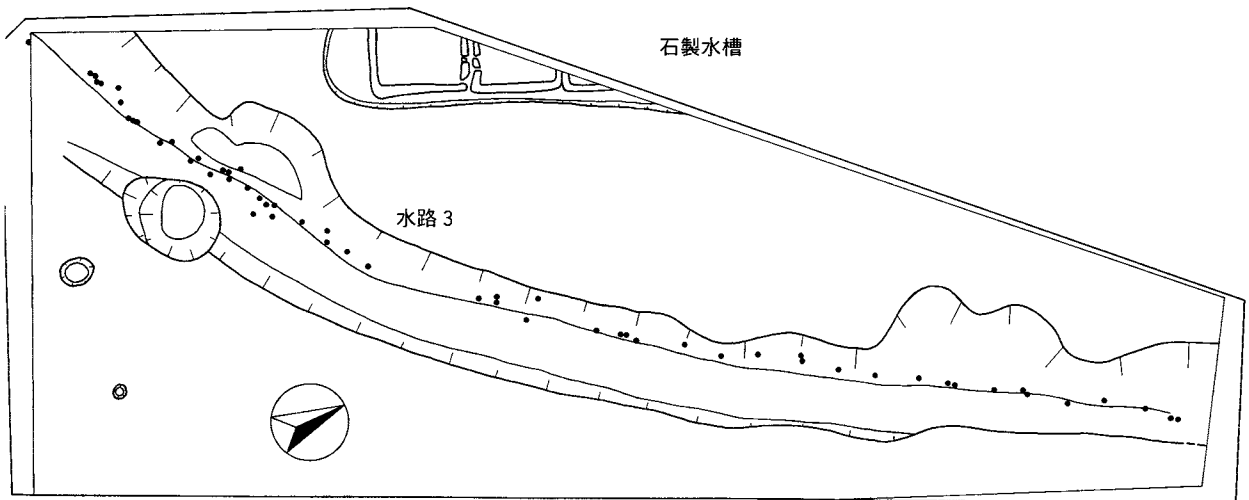


1トレンチ

0 (S=1:80) 5 m



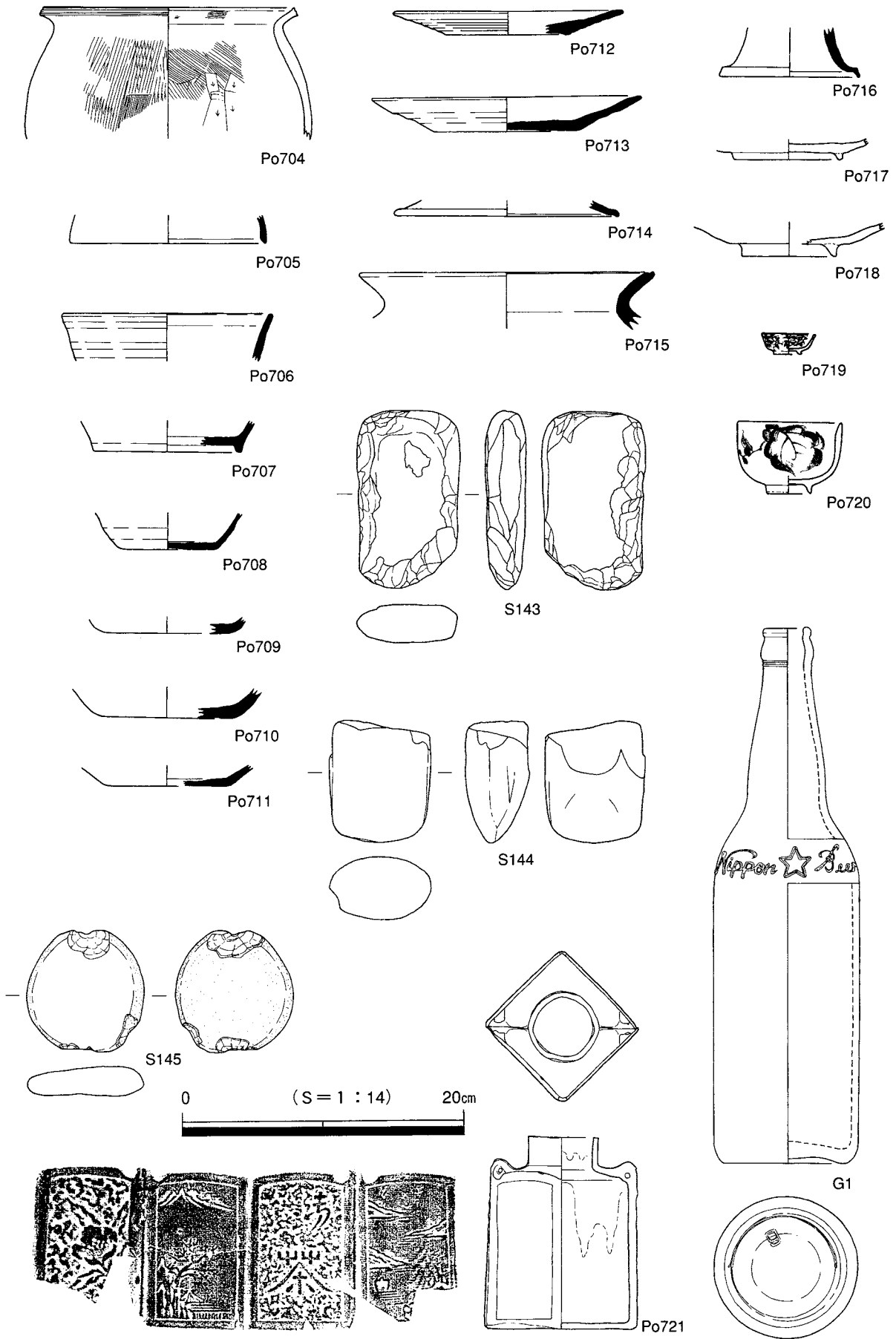
2トレンチ



3トレンチ

(●は杭を示す)

第78図 拡張区トレンチ遺構図



第79図 拡張区出土遺物実測図

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 目久美遺跡第8次調査における花粉分析

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解して残存していない場合もある。

#### 2. 試料

試料は、4ライン北断面から採取された14点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

#### 3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え、15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて、30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製する。
- 7) 検鏡・計数を行う。

各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

#### 4. 結果

##### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉36、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉24、シダ植物孢子2形態の計66である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。以下に出現した分類群を記す。

##### 〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、グミ属、ミズキ属、ハインキ属、モクセイ科、ツツジ科、ニワトコ属-ガマズミ属

##### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕



クワ科ーイラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ササゲ属、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属ーフサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

## (2) 花粉群集の特徴

花粉群集の変遷から、下位よりⅠ帯、Ⅱ帯、Ⅲ帯、Ⅳ帯、Ⅴ帯の花粉分帯を設定した。以下に、花粉分帯に沿って花粉群集の特徴を記す。

### 1) Ⅰ帯 (試料10~14)

樹木花粉の占める割合が極めて高く、シイ属、コナラ属アカガシ亜属(カシ類)が優占して出現する。他に、コナラ属コナラ亜属(ナラ類)、マツ属複維管束亜属(マツ類)、クリ、クマシデ属ーアサダ、ブナ属などが伴われる。上部に向かってシイ属が減少し、マツ属複維管束亜属が増加傾向を示す。草本花粉の出現率は低く、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが低率に出現する。

### 2) Ⅱ帯 (試料8・9)

樹木花粉の占める割合が草本花粉よりもやや高い。樹木花粉ではクリが増加し、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属、シイ属が比較的高い割合を占める。草本花粉ではイネ科が急増し、優占する。他に、クワ科ーイラクサ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が伴われる。試料8ではササゲ属が出現する。

### 3) Ⅲ帯 (試料4~7)

草本花粉の占める割合が樹木花粉よりも高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属、シイ属、クリなどがやや低率に出現する。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)の出現率が高く、カヤツリグサ科が上位に向かって増加している。他に、ヨモギ属、アカザ科ーヒユ科、アブラナ科、ミズアオイ属、イボクサ、オモダカ属などが伴われる。

### 4) Ⅳ帯 (試料2~3)

樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が高く、上位に向かって草本花粉の出現率は増加傾向を示す。樹木花粉群集は、下位と変化はないが、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、スギが減少傾向を示し、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属が引き続き出現する。草本花粉ではイネ科の出現率が非常に高くなり、イネ属型の占める割合も増加する。他に、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科などが多く、ソバ属が伴われる。

### 5) Ⅴ帯 (試料1)

イネ科(イネ属型を含む)が優占し、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属がやや低率に出現する。

## 5. 花粉分析から推定される植生と環境

縄文時代前期~中期の遺跡周辺は、シイ類やカシ類などの照葉樹を主体としてナラ類、マツ類、クリ、クマシ

デ属-アサダ、ブナ属なども生育する森林に覆われる状況であったと推定される。草本は少なく、河川沿いなどの森林の切れ目などにイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが生育していたと考えられる。

その後、弥生時代中期末にかけては、イネ科を主にクワ科-イラクサ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが分布する草原的な環境が拡大したと推定される。また、ササゲ属（アズキ、リョクトウ、ササゲ）などのマメ栽培が行われていた可能性も認められた。周辺地域ではシイ類やカシ類などの照葉樹林が減少し、二次林性のクリ林が増加したと推定される。

弥生時代中期末から古代にかけては、周辺で水田稲作が営まれていたと考えられ、周囲にはイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが分布していたと推定される。また、周辺地域には、スギ、マツ類、カシ類、ナラ類、シイ類、クリ林などの森林が分布していたと考えられる。

中世～近世から近世～近代にかけては、集約性の高い水田稲作が営まれていたと考えられ、ソバ属やアブラナ科などの畑作も行われていたと推定される。また、周辺地域には、マツ類、ナラ類、クリ林などの二次林が分布していたと考えられる。

#### 文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.



表1 目久美遺跡第8次調査における花粉分析結果

学名	和名	4ライン北断面													
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
Arboreal pollen	樹木花粉														
<i>Podocarpus</i>	マキ属										1				
<i>Abies</i>	モミ属	1	1	1	4	1	2	2	4	6	20	3	8	7	2
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	1	2				1							1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属榎維管束亜属	20	42	25	21	19	23	17	17	26	80	44	28	25	26
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	30	27	31	33	40	26	19	28	14	11	10	12	5	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	3	8	2	1	2	1							
<i>Salix</i>	ヤナギ属						1								
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	1								2	1	2	1	1	1
<i>Juglans</i>	クルミ属							1				1		1	2
<i>Prerocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	1	1	1	1	1	2								
<i>Platycarya strobilacea</i>	ノグルミ				1				1						
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	1	1	8	5	4	9	4	7	8	9	8		4
<i>Betula</i>	カバノキ属	3	1	5	4	3	2	5			2	2	5	2	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属			1						1	2	5	7	3	2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシラ属-アサダ	1	9	9	6	5	4	5	1	1	21	18	5	7	16
<i>Castanea crenata</i>	クリ	5	3	11	40	12	7	13	37	66	11	14	18	22	7
<i>Castanopsis</i>	シイ属	1	7	21	25	23	16	22	12	33	42	98	115	134	125
<i>Fagus</i>	ブナ属	6	6	3	3	3	1			2	12	8	8	5	4
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	12	14	26	27	16	19	28	30	51	39	41	31	24	18
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属カガシ亜属	2	28	63	59	28	20	47	27	51	101	121	108	116	84
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	3	1	5	5	6	1	8	3	10	9	8	12	6	1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	1	8	3	4	4		3		2	11	14	6	7	14
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ	1													
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1									1				
<i>Phellodendron</i>	キハダ属			1											
<i>Rhus</i>	ウルシ属	1													
<i>Ilex</i>	モチノキ属	1							2	1	1	1	1	1	1
<i>Acer</i>	カエデ属							1	3				1	2	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ			1	3	1	3	2		1	1	2	3	1	1
<i>Vitis</i>	ブドウ属	2		3											
<i>Elaeagnus</i>	グミ属										1		1	1	
<i>Cornus</i>	ミズキ属										1				
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属	1	1	1											
Oleaceae	モクセイ科	1										1		2	1
Ericaceae	ツツジ科														
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	3		2											
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉														
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	8	11	6	9	9	16	18	63	9					
Rosaceae	バラ科														1
Leguminosae	マメ科	1			2	2	2	2	2	2	1	1	3	1	
Araliaceae	ウコギ科				1			1							
Nonarboreal pollen	草本花粉														
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属			2		2	1	2		2		1	2		
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	1	1												
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	2	2	6	6		1	1							
Gramineae	イネ科	174	178	118	86	109	109	90	102	109	17	7	4	1	
<i>Oryza type</i>	イネ属型	49	35	5	10	1	10	15						1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	11	14	46	43	73	41	29	20	12	5	1	3	1	
<i>Ancilema keisak</i>	イボクサ				1	2		1							
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	8	2	1	2	2	1	3							
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	1			5	1	2	1	4		1			
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	2	1	1											
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	4		1	5	6	10	3	1					
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	5		1		1	1							
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	1		1											
Cruciferae	アブラナ科	11	16		2	10	4	2	1						
<i>Vigna</i>	ササゲ属									1					
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属									1	2				
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属	1													
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科	5	8	3	1	6	5	1	1						
Apiodeae	セリ亜科	1	2	1	3	3	5	2	3	2					
<i>Plantago</i>	オオバコ属	1													
Lactucoideae	タンポポ亜科	1					1	3	1						
Asteroidaeae	キク亜科	1	1	1	3	1	3	1	1	2	1				
<i>Xanthium</i>	オナモミ属														
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	11	27	29	21	30	35	24	23	29	7	1	2	2	4
Fern spore	シダ植物孢子														
Monolate type spore	単条溝孢子	3	16	4	16	20	33	16	9	7	4	0	0	1	1
Trilate type spore	三条溝孢子	2	8	4	2	7	14	5	4	4	1	3	0	0	0
Arboreal pollen	樹木花粉	53	168	217	248	160	148	194	158	286	383	409	382	381	320
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	8	12	6	10	11	18	19	65	11	1	3	1	3	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	276	296	220	181	245	224	191	159	166	30	11	12	5	4
Total pollen	花粉総数	337	476	443	439	416	390	404	382	463	414	423	395	389	325
Unknown pollen	未同定花粉	3	1	2	5	3	5	2	1	3	0	4	4	4	4
Fern spore	シダ植物孢子	5	24	8	18	27	47	21	13	11	5	3	0	1	1
Helminth eggs	寄生虫卵														
Ascaris	回虫卵														
Total	計	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

時 期	花粉帯	推定される主要植生の変遷	
近世～近代	V	水田の集約化とソバ属やアブラナ科の畑作	
中～近世	IV	二次林ないし造林	
古代	III	水田が営まれる (イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、イネ属型、ミズアオイ属)	
弥生時代 中期末		森林の減少、カシ類、ニヨウマツ類、スギ、コナラ類、シイ類の優占種のない森林	
		イネ科の増加と人為環境の拡大 ササゲ属の畑作の可能性	森林の減少 二次林性のクリ林の増加
縄文時代 前期～中期	I	草本 カシ林とシイ林を主とする照葉樹林 シイ林の減少、マツ林の微増	カシ林とシイ林を主とする照葉樹林

第81図 目久美遺跡第8次調査の花粉分析から推定される植生の変換

## 第2節 目久美遺跡第8次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山，2000）。

目久美遺跡第8次調査の発掘調査では、古代および弥生時代中期末とされる土層から水田跡が検出された。ここでは、これらの同層における稲作の検証を主目的として分析を行った。

### 2. 試料

試料は、4ライン北断面から採取された14点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{g}$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科は0.48である。

### 4. 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および第82図に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

### 5. 考察

#### (1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密度が3,000個

/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

4ライン北断面では、近世～近代とされる暗灰色粘質土（試料1）から縄紋時代前期～中期とされる青灰色粗砂（試料14）までの各層について分析を行った。その結果、暗灰色粘質土（試料1）から濃黒色粘土層（試料9）までのすべての試料からイネが検出された。このうち、古代の水田層とされる暗灰色粘土層（試料4）では密度が3,800個/g、弥生時代中期末の水田層とされる黒色粘土層（試料5、6）でも3,000個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。近世～近代とされる暗灰色粘質土層（試料1）、中世～近世とされる淡灰色粘質土層（試料2）、弥生時代中期末とされる黒色粘土層（試料7）では、いずれも密度が5,000個/g以上と高い値である。したがって、これらの層でも稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

濃黒色粘土層（試料9）では、密度が1,500個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

## （2）堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。イネ以外の分類群では、ほとんどの層準でタケ亜科が比較的多く検出され、ヨシ属も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねタケ亜科が優勢であるが、黒色粘土層ではヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、弥生時代中期末とされる黒色粘土層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。また、調査区周辺には竹笹類も多く生育していたと考えられる。

## 6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、古代および弥生時代中期末とされる水田層からはイネが比較的多量に検出され、これらの層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、近世～近代、中世～近世、弥生時代中期末より下位の各層でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

### 文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

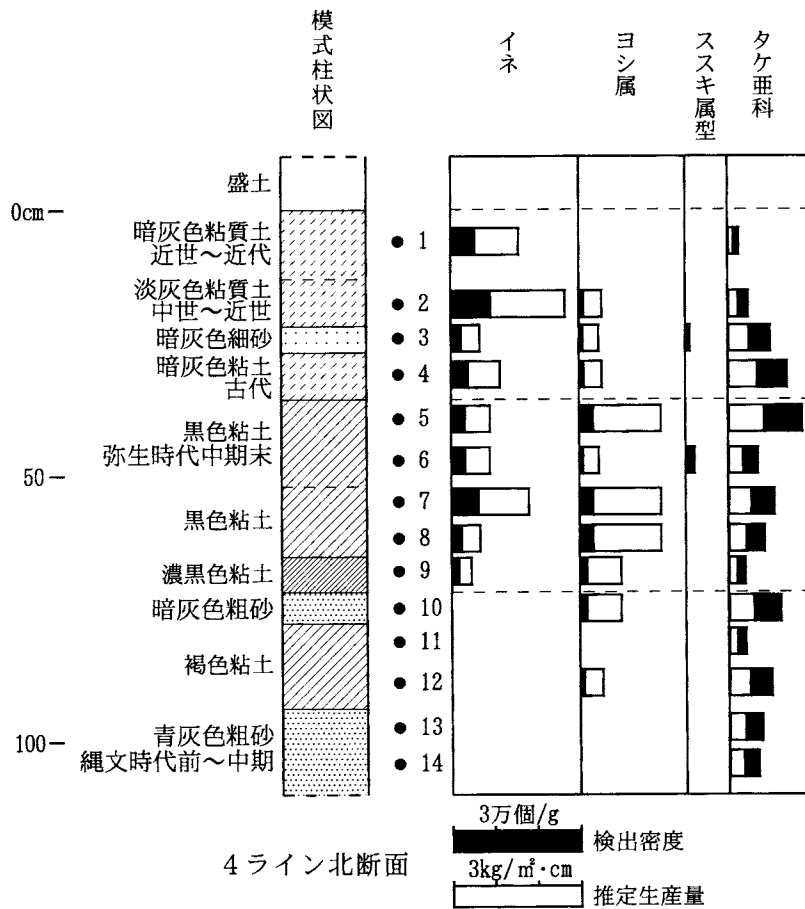
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表2 目久美遺跡第8次調査におけるプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		4ライン北断面													
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
分類群	学名	地点・試料													
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	53	90	22	38	30	30	61	22	15					
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		8	7	8	30	7	30	30	15	15	8			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type			7			15								
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	23	45	97	136	172	67	106	82	37	120	38	98	75	67
推定生産量 (単位: kg/m <sup>2</sup> ・cm)															
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.55	2.65	0.66	1.11	0.88	0.88	1.78	0.66	0.44					
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		0.47	0.47	0.48	1.89	0.47	1.91	1.89	0.94	0.95	0.48			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type			0.09			0.19								
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.11	0.22	0.47	0.65	0.83	0.32	0.51	0.40	0.18	0.58	0.18	0.47	0.36	0.32

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。





第82図 目久美遺跡 8次調査におけるプラント・オパール分析結果

### 第3節 目久美遺跡における放射性炭素年代測定（AMS法）

株式会社 古環境研究所

#### 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	丸木船（W1）	木材	酸-アルカリ-酸洗浄，セルロース抽出 石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.2	有頭棒（W11）	木材	酸-アルカリ-酸洗浄，セルロース抽出 石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

#### 2. 測定結果

試料名	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	δ <sup>13</sup> C (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代（西暦）	測定No. (Beta-)
No.1	2380±50	-21.4	2440±50	交点：cal BC 520 1σ：cal BC 760～640, 560～410 2σ：cal BC 780～400	153032
No.2	2030±50	-26.6	2000±50	交点：cal AD 10 1σ：cal BC 50～AD 60 2σ：cal BC 110～AD 100	153033

##### 1) <sup>14</sup>C年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

##### 2) δ<sup>13</sup>C測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

##### 3) 補正<sup>14</sup>C年代値

δ<sup>13</sup>C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

##### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40 (3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）および2σ（95%確率）は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

## 第4節 目久美遺跡における放射性炭素年代測定（β線計数法）

株式会社 古環境研究所

### 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.3	流木	木材	酸-アルカリ酸洗浄，セルロース抽出 ベンゼン合成	β線計数法
No.4	建築材（W13）	木材	酸-アルカリ酸洗浄，セルロース抽出 ベンゼン合成	β線計数法

### 2. 測定結果

試料名	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	δ <sup>13</sup> C (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代（西暦）	測定No. (Beta-)
No.3	5630±130	-27.6	5590±130	交点：cal BC 4440 1σ：cal BC 4540～4330 2σ：cal BC 4710～4220	153034
No.4	2200±80	-26.9	2170±80	交点：cal BC 200 1σ：cal BC 370～100 2σ：cal BC 390～10	153035

#### 1) <sup>14</sup>C年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

#### 2) δ<sup>13</sup>C測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

#### 3) 補正<sup>14</sup>C年代値

δ<sup>13</sup>C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

#### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）および2σ（95%確率）は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

## 第5章 考察

### 第1節 石錘の検討

石製品については、縄紋時代層から多量の打欠石錘が出土しており、第1次調査時の状況とよく似た様相を呈している。今回、縄紋時代の層から出土した石器、全74点中56点がこの打欠石錘であり、打欠石錘の出土量が8割近くを占めていることから、調査地点は海にごく近い位置にあり、漁労活動が活発に行われていた場所であると推定される。表3に石錘の重量比を示している。これを見ると、石錘の重量は、50gから200gのものが多く、軽いものでは30g程度のものであり、重いものでは400g近いものまでである。また石錘の具体的な使用方法については不明であるが、第1次調査の際に、魚骨が採取されており、その中には、マダイやマグロなどの大形魚類の骨片が認められることから、これらの石錘を用いた網漁法の存在を示すものと考えられる。また第6次調査では、海成層中に人頭大の礫が点在している状況が確認されており、海中に角礫を投げ込み、追い込み漁法を行っていた可能性も指摘されている。やはりこれも網漁法の存在を示すものとして注目される。また大型の円礫の側縁部を研磨して、溝状のくぼみをつけたS17のようなものも出土しており、これは丸木舟を固定する際の礎ではないかと推察される。

石錘の石材には、安山岩を主体としたものと、蛇紋岩を主体としたものがあり、形態的にも違いが認められる。ただこうした違いが生じる原因が、時期的なものなのか、あるいは石材を獲得する場所の違いなのかは出土状況から読み取ることができなかったため、明らかにすることは出来ないが、注意する必要がある。また、製作技法については、硬い石を正確に打ち欠く技術が必要であり、難しい部類に属するものと考えられる。今回の出土品の中には、被熱痕跡を留めるものが見られたことから、一度火にかけてから、打ち欠くような技法があったかも知れない。見過ごされやすい遺物であるが、先述した魚骨の多彩な種類などから、当時の漁労活動の活発さを示す資料となろう。山陰地方では、縄紋時代早期段階から石錘が用いられ、弥生時代前期まで、同様の形態で使用されている。また弥生時代中期頃から、錘型製品の小型化が進行し、切目石錘、有溝石錘、管状土錘、土器

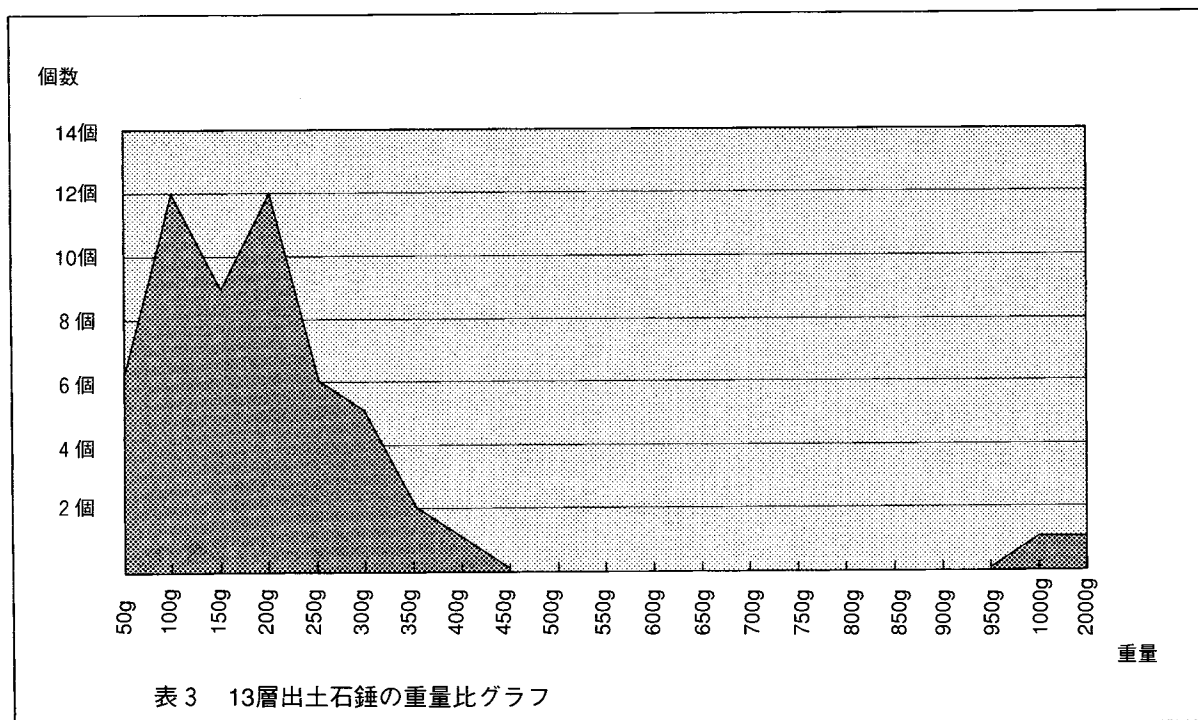


表3 13層出土石錘の重量比グラフ

片転用錘などが加わりバリエーションが豊富になる。この頃に打欠石錘はほぼ消滅すると考えられる。こうした変化の背景には、漁法の変化や、環境変化に伴う、獲得魚種の交替などの原因が考えられるが、漁業技術の解明についてはまだまだ理解不足の観が否めず、今後、土壌洗浄により、微細な魚骨をも見逃さずに採取するなどの努力を行うことで、より具体的な様相が明らかになるものと考えられる。

## 第2節 弥生前期～中期層の出土遺物

今回の調査では、濃黒色粘土層中から、多数の突帯紋系土器や弥生土器の資料を得ることができた。また63図のPo628のような東日本系の土器が出土している。目久美遺跡ではこれまでの調査でも、東日本系土器の出土がみられることから、目久美遺跡において、こうした土器を持つ人々との交流があったことを窺わせる。また42図のPo416も黒色の胎土に渦巻状の紋様が施されるもので、外来的な要素を持つ土器と考えられる。突帯紋系土器については口縁部の破片が出土しており、それらを見ると、突帯に刻みを施すものは出土量が少ない。また32図のPo183や51図のPo483のように突帯が2条に分岐するものが見られる。このうち51図のPo483は突帯に細かい刻みを施すもので、第1次調査でも類似したものが出土している。壺については、高さ70cmにもなる大型のもの(47図Po419)が出土した。こうした弥生前期の大型壺の出土例は、鳥取県内では長瀬高浜遺跡などに見られるが、完形品にまで復元できるものは少なく貴重な資料を得ることができた。甕については、器形や調整手法などにかかなりのバリエーションがみられ、今後検討すべき課題と考えられる。土製品については、土笛や土器片転用錘や土器片転用紡錘車、匙などが見られる58図のPo626は楕円形の土製円盤に2箇所穿孔するもので用途については不明である。岸本町久古第3遺跡の口別所地区から類似したものが出土している。また58図Po623は蓋状の器形で、頂部に横方向から穿孔する。鏡形土製品であろうか。

木製品は、濃黒色粘土層中から丸木舟断片、針状木器などを検出しているが、数は少ない。また水田の下層にある土器溜り中からは、漆塗り木製品の断片と、木鏃、鍬の断片が出土した。丸木舟はスギを使用しており、舳先側に段を設けている点に特徴がある。また漆塗り製品は木部が腐食しており、漆の部分しか依存していなかった。このためどのような製品であったのか不明であるが、おそらく装身具のようなものではなかったかと考えられる。

石器は、石鍬の出土が目立つほか、短冊状に加工した打製土堀具、磨製石斧、大形石包丁、石製紡錘車、人形石製品、砥石などが出土している。このうち石製紡錘車は緑色の石材を加工したもので、表面には擦り跡が確認できる。弥生前期の遺跡から出土する事例は、タテチョウ遺跡、西川津遺跡、目久美遺跡、長瀬高浜遺跡などにあり、いわゆる大陸系磨製石器の影響が大きいものと考えられるが、紡織技術の変革が背景にはあるようだ。また石槍状の石器は、サヌカイト製で、長さ10cm程のものである。これまでの目久美遺跡の調査では、石製武器類の出土はあまり顕著ではなかったため、珍しい資料であると考えられる。

人形石製品は、胴体の部分と右手と見られる部位が残っており、頭部や足部は欠損している。安山岩製で全体に研磨した痕跡があり、体の中央部には放射線状に擦痕が残る。こうした擦痕が残っていることから骨角器などの製作に関連した砥石であるという可能性も考えられる。全国的に見ても弥生時代の石製偶像は検出例が少なく、断定的なことは言えないが、今後の出土類例の増加を待って結論を出すべきであろう。今回は偶像としての可能性を提示することで注意を呼びかけたい。

## 第3節 加茂川下流域における水田遺跡の動向

1982年に実施された目久美遺跡第1次調査において水田遺構が検出されてから、早や20年もの歳月が流れた。その間に山陰地方では、鳥取県会見町口朝金遺跡、米子市長砂第1遺跡など、周辺での水田検出事例が増え、また最近では、プラントオパールや花粉などを手がかりとした自然科学分析を実施する機会が増加し、水田遺構に

対する認識は、この20年で大いに高まったと言えるだろう。しかしながら、そうした調査にしても、水田に付属して作られる畦畔、水路、堰などの構築物の検討や、集落間の動向からみた水田経営のあり方などを明らかにする取り組みについては、あまり積極的にはなされていなかった。今回実施した第8次調査をはじめ、最近の調査では目久美遺跡の所在する加茂川下流域において、堰や木製農具を出土する遺跡が見つかり、この地域の弥生遺跡が点から線へとつながり始めている。ここでは、こうした遺跡を概観し、米子平野に分布する水田遺跡の実態と、そこから明らかになった問題点について述べる。

**時期区分**・・・弥生時代を前期、中期、後期の3期に区分し、中期を前葉、中葉、後葉に細分する。年代の決定は出土した土器により、土器の編年は、清水編年に依拠しているが、様式内での細分にはこだわっていない。本稿で扱う水田遺構は、一般に出土する遺物が少なく、細かな時期区分を設けることは混乱を生ずる可能性があるため、大まかな区分にとどめている。基本的に報告書に記載された年代と相違するものではない。

**目久美遺跡の水田遺構**・・・第1次調査で検出された水田は、弥生前期末から中期末までの時期に計3面の水田が築かれている。上層にある中期末段階の水田は、48枚の小区画水田が検出され、水田直上は氾濫砂層によって被覆されていた。中層の水田は中期末水田の下層に部分的に被覆砂層があり、この層を鍵層として検出した。下層にある前期末段階の水田は水平堆積する粘土層を耕作土としているが、畦畔は検出されていない。ただ少量ながらプラントオパールが検出され、足跡の群集があることから、人為の活動が認められ、水田跡の可能性が高いものとされている。第1次調査での水田遺構は、中期末の水田が最も残りがよく、水路や畦畔の構造などが判明している。また微高地に面する水田の下層において、帯状に分布する土器溜りが形成されている。これは、集落で生じた廃棄物が微高地縁辺の湿地に投棄されたため、帯状に分布する結果となったためと考えられる。このため上層は水田を構築するために埋め立てられているものと考えられる。これまでに目久美遺跡は土器の出土が多い水田であると言われていたが、水田の一部が土器溜りの上に作られているためである。

第6次調査では、弥生中期、後期初頭の畦畔を検出した。この調査では、弥生前期のプラントオパールを少量含む黒色粘土層が水平堆積しており、1次、8次調査でも検出されている層と同一のものと考えられる。また弥生中期に堆積した洪水層を切って、幅6m、深さ3mの大規模な水路が構築されており、ボーリング調査の結果、全長1km以上の長さになるものと考えられる。位置的な関係から、池ノ内遺跡からの水流もここに接合するものと考えられるので、この水路の規模はさらに大きくなるものと考えられる。

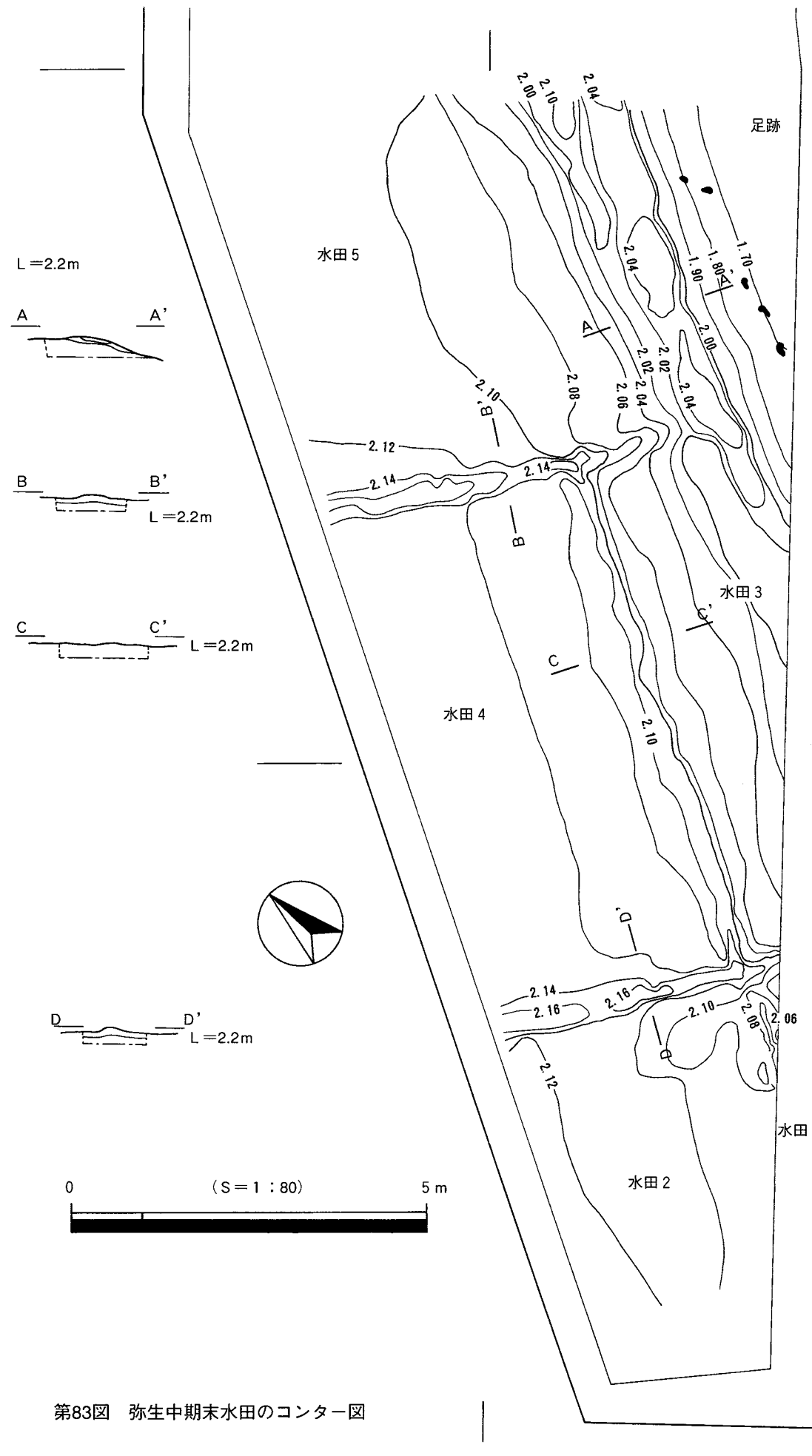
第8次調査では、弥生中期末の水田と水路を検出した。第84図に平面図を示している。検出した水田は7面で、畦畔の形状は第1次調査で検出された畦畔と同様のカマボコ形を呈する。長方形の区画が水路に沿って並ぶようで、配列も第1次調査の水田と類似しており、第1次調査の弥生中期末の水田と同時期に洪水砂によって埋没したのと考えられる。

**水田の下部構造**・・・目久美遺跡の水田は、炭酸鉄の集積が水田下層に見つかる事例はあるものの、マンガン、鉄分の集積層が検出される事例はまれである。水田土壌の下層はグライ化が進行しており、また水田雑草の分析からも、湿田か半湿田であったと考えられる。こうしたことや、低湿地に立地していることから、水田に付属して作られている水路は、排水を主目的として作られていたもので、潤沢に水が供給されていたと考えられる。

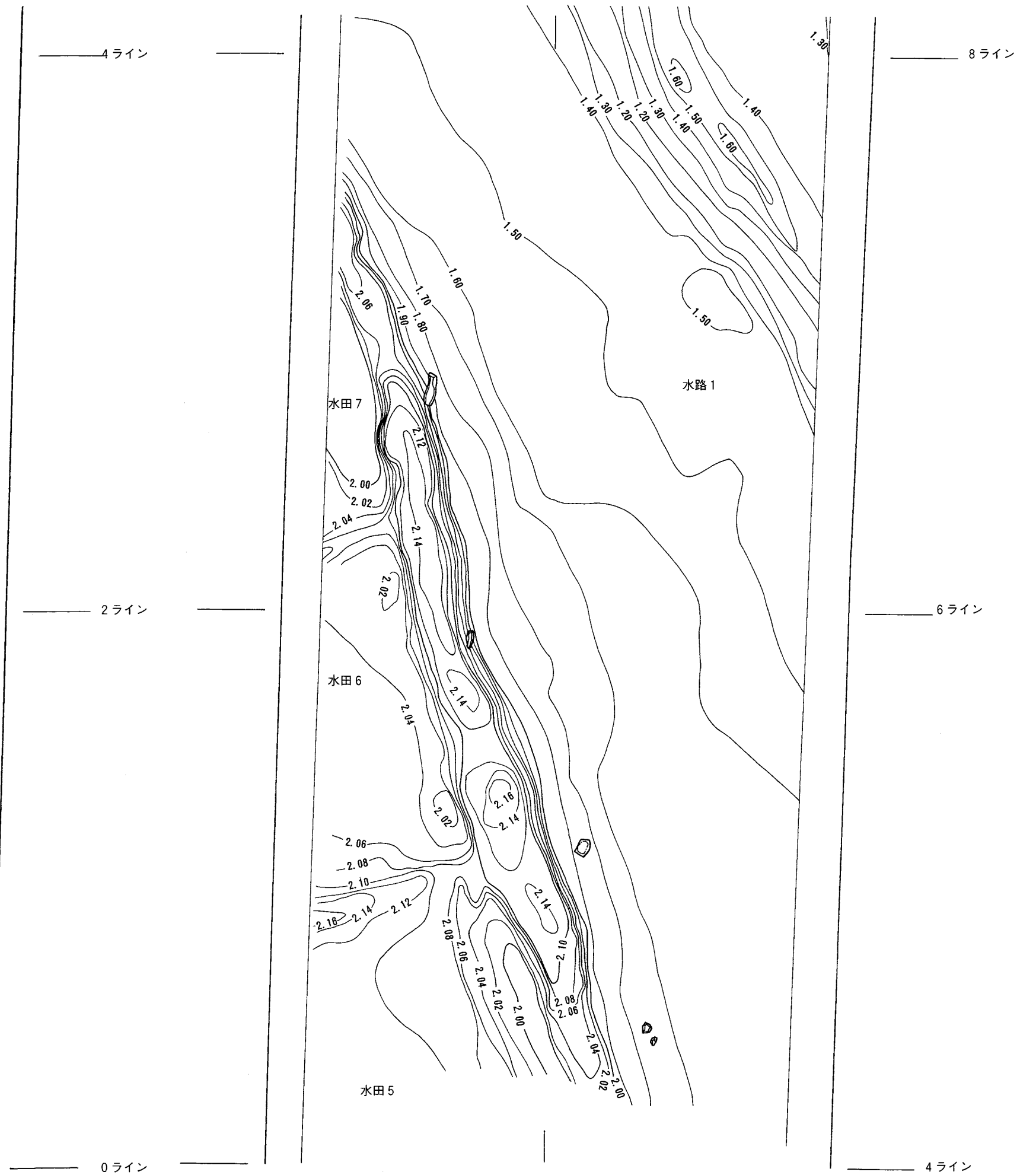
## 加茂川下流域の遺跡

**宗像前田遺跡**・・・この遺跡は加茂川の谷地に立地しており、ここから弥生時代中期の堰が検出された。堰は、河川の中に杭を打ち込んで作られており、平面形は馬蹄形を呈し、幅23m、奥行き10mである。構築された時期や埋没した時期は不明であるが、規模が大きいことから、加茂川流域の集落に伴うものと考えられる。

**東宗像遺跡**・・・加茂川右岸の丘陵斜面に立地する、数棟の堅穴住居によって構成される小規模な集落である。



第83図 弥生中期末水田のコンター図



時期は弥生中期。住居内から磨製石剣が出土しているほか投石用とも考えられる小礫が出土している。

**長砂第1遺跡**・・・加茂川左岸の丘陵先端の微高地に位置する水田遺跡である。弥生前期末～中期前葉の遺物が多く出土しているが、出土状況は目久美遺跡で確認されている土器溜りと同様の傾向を示す。水田遺構は、畦畔状の盛り上がりが見出されているが、保存状態が悪く全体の様子については不明である。水田の時期は明確にされていないが、弥生中期前葉以降のものであろう。

**長砂第2遺跡**・・・2時期の水田遺構が見出されている。上層水田は、3枚の水田が確認され、1枚の面積がそれぞれ30㎡、38.4㎡、25㎡と推定されている。畦畔の高さは6cm、幅40cm前後であり、形状は方形の区画を指向している。下層の水田は、残存状況が悪く、面積や広がりが見出されていないが、畦畔の高さは5～6cm、幅25～40cmである。水田面の傾斜は、上層、下層とも南から北へ緩やかに下降しており、この方向に取水されていたものと考えられる。また、下層水田では、河川内に杭を打ち込んで作られた堰状の遺構が見出されている。水田への水の供給を目的に作られていたものと考えられるが、粗砂によって被覆されており、大部分の構築物は流出しているものと考えられる。水田の時期は、下層が弥生前期末～中期前半、上層は弥生中期後葉～後期初頭の期間に営まれたものと考えられている。

**長砂第4遺跡**・・・加茂川右岸の丘陵裾に位置する、低湿地遺跡である。縄紋晩期から弥生前期の土器や弥生後期の土器、木製農耕具が出土している。分析の結果から水田遺跡の存在が推定されているが、分析の内容や結果について示されていないため詳細は不明である。

**長砂第3遺跡**・・・長砂第4遺跡に隣接する丘陵斜面に位置する。弥生前期と弥生後期の土器が多量に出土しているが、中期の資料が見られないことから、集落は一時断絶するものと考えられる。調査では竪穴住居1棟が見出され、埋土中から管玉の未製品が出土している。

**池ノ内遺跡**・・・目久美遺跡の東に位置する水田遺跡である。水田の時期は弥生後期から古墳後期に至る6面が見出されている。目久美遺跡の水田が中期末の洪水により、放棄された後に水田耕作が開始されるものと考えられる。このため、目久美遺跡の水田を管理していた集団と同じ集団が水田の経営に関与しているものと考えられる。水田の耕作土、畦畔には、シルト、砂を用いたものがある。周囲を丘陵に囲まれた盆地状を呈しており、湿地性の植物遺体の堆積層が広く分布している。

**四日市町遺跡**・・・加茂川右岸、砂丘の後背地に形成された弥生中期の遺跡で、多量の木製品が出土している。報告書未刊行。

**錦町第一遺跡**・・・加茂川右岸に形成された砂丘の後背地に位置する。この砂丘の形成時期は明らかではないが、縄紋後期の遺物が出土しており、これ以降に形成されたものと考えられる。弥生時代前期と弥生時代中期後半から後期の遺物が出土しており、当該期の集落遺跡と考えられる。明確な遺構は見出されていないが、土器の出土量が多く、規模の大きな集落ではないかと考えられる。遺跡の立地から、砂丘の後背湿地を水田として利用していたのではと想像されているが水田跡は見出されていない。

**米子城跡下層遺跡**・・・米子城は、加茂川の河口の南部に位置する湊山、飯山に築かれた近世城郭で、武家屋敷地は加茂川左岸の河口域の氾濫砂洲上に作られた。この武家屋敷の下層から、弥生時代の遺構や遺物が見つかっており、弥生前期から弥生終末にかけて、集落が展開していたものと考えられる。これまでの調査では久米第一遺跡、米子城跡1次、2次、5次、6次、7次、21次、25次、27次調査で弥生土器が出土しており、遺構については6次、21次、33次の各調査で掘立柱建物、土坑、水路などが見つかっている。見出された遺構が少なく、遺跡の性格については不明であるが、3次調査で、縄紋時代晩期から弥生時代前期の土器を含む粘土層からプラントオパールが見出されたことから、水田遺構の存在が推定されている。また21次調査では、畦畔状の遺構も見出され、微量ながらプラントオパールが見出されている。米子城跡の下層には、加茂川の堆積作用によってもたらされた砂層との間層に腐食を含む粘土の水平堆積層が分布していることが判明しており、27次、33次、36次調査でも見つかっている。いずれの調査でも畦畔や水路が伴う事例がないことと、農耕具の出土がないことから、水田遺構の存在を裏付けるものとはなり得ないが、将来的に水田跡が見出される可能性は考えられる。なお、弥



生終末期の資料には2次、6次調査で畿内系土器が出土しており、周辺の遺跡と比較しても異質な存在であり、遺跡の性格の解明が待たれる。

**遺跡の動向**・・・弥生前期の水田は今のところ確認されていないが、長砂第4遺跡において、石鍬と共に突帯紋土器と弥生前期の甕が出土しており、水田遺構が存在した可能性が指摘されているが畦畔などの遺構が確認されていないため断定は出来ない。确实なところでは、目久美遺跡1次調査で弥生前期の包含層上面から足跡の群集が確認されており、水田に伴うものと考えられている。また6次調査で実施された、プラントオパール分析の結果からも弥生前期層での水田の存在が推定されている。どちらの場合も、上層の被覆層が水田の耕作土と同質の粘土であり、砂による被覆が行われていないため、畦畔を検出することが困難な状況である。こうした状況は長期間継続して水田耕作が行われていたためと考えられることから、長期にわたって水田が維持されていたことを示すものと考えられる。また目久美遺跡では石鍬の出土が顕著に認められるが、木製農耕具の出土は少なく、どのようにして耕作していたのか不明である。むしろ整然とした水田区画は形成されず、自然の湿地帯を利用して耕作していたのではないかと考えられる。

中期には、弥生中期前葉に長砂第1遺跡において、畦畔と堰を伴う水路が構築されている。目久美1次調査第2水田、長砂第2遺跡の水田もこの時期に相当するものと思われる。このころに木製農耕具はほぼ全ての器種が出揃い、この段階で水田による農耕が行われていたと考えられる。中期中葉から後葉にかけては、宗像前田遺跡において大規模な堰が作られており、加茂川下流域への水の供給に関与していたものと考えられる。宗像前田遺跡には、東宗像遺跡が最も近い距離にあるが、小規模な集落であり、単独で管理していたものとは考えにくいいため、下流の目久美遺跡や米子城跡下層遺跡との関係を考慮しなければならない。中期段階の水田は目久美遺跡と長砂第2遺跡以外では検出されていないが、両遺跡は近接した位置関係にあり、水の管理において深い関わりをもっていたと考えられる。

後期には、目久美遺跡の水田が洪水で埋まり、放棄される。その代わりに隣接する池ノ内遺跡で水田が作られ始める。新たに池ノ内遺跡で水田を開拓した集団の集落は特定できていないが、自然災害によって集落の移動や再編成などの動きが想像され興味深い。周辺では長砂第3遺跡で中期末から後期初頭頃に集落の形成が見られるため、丘陵部への集落の移動が起こったと考えられる。なお弥生後期に至って農耕具の中でも3刃のナスビ形鍬の出土が増加し、古墳前期まで使用されていたことが確認できる。逆に広鍬や鋤などは減少するようで、農耕技術に変化が見られるようだ。また池ノ内遺跡では田下駄の出土が目立ち、かなりの湿田であったと考えられる。ここも弥生後期に3度にわたる洪水が襲い、その都度、被覆した砂層の上面を水田として利用している様子が確認されている。目久美遺跡では後期に大規模な水路が構築されており、度重なる水害に対して激しく抵抗していた証拠と考えられる。また目久美遺跡で見られたような大規模な水路の掘削から、この地域における水利や労働力の統率を行う支配者層の存在が推定される。目久美遺跡近辺では、今のところ傑出した墳墓や、環濠遺跡などは見つかっておらず、そうした支配者層の出現を裏付けることは出来ないが、こうした調査を積み重ねていくことで、解明される問題もあると考える。また、この地を襲った洪水について、自然環境の変化から読み取る試みもなされており、集落の移動、廃絶といった一連のプロセスが自然科学の分野から明らかにされる可能性もある。政治的な動向とも合わせて、今後解明すべき問題であろう。

**小結** 加茂川流域での弥生時代遺跡の調査事例はこの20年で増加し、次第に遺跡の様相が明らかとなってきた。特に水田跡の調査は当時の生産技術の解明のみならず、組織的な生産体制への転換を示す資料であり、今後水田を始めとする生産遺跡の調査を継続していく必要がある。水田遺跡の調査は発掘技術としても高度な技術と忍耐力が要求されるものだが、自然科学の協力も受けつつさらに技能に磨きをかけ、より具体的な様相を明らかにしていきたい。

## 第4節 現代の遺物

今回の調査では、拡張区3トレンチにおいて、肥溜めとして使用されていたと見られる石製水槽を検出し、この水槽の内部からビール瓶、汽車土瓶などの現代遺物が出土した。通常の調査であれば、こうした現代の遺構、遺物については、攪乱として処理し、報告しないのが実情であるが、近・現代の遺物については、あまりにも新しいが故に問題点が見過ごされ、意外に知られていないことも多い。特にビール瓶や汽車土瓶などは、近代社会の発展と共に器形や容量、材質などが変化してきた経緯があり、当時の暮らしを伝える物質資料でもあるため、ここで詳しく触れてみたい。

石製水槽は、全長1mを超える大形品で、3基が並んだ状態で検出された。その使用目的は、肥溜めと考えられる。こうした肥溜めを3基も並べて設置した理由については、よくわからないが、目久美遺跡の所在する国鉄米子駅の南側一帯には昭和40年代まで人家がまばらで、耕地も多かったことに起因するのであろう。水槽は、島根県安来市に産出する「荒島石」（あらしまいし）を用いて作られたもので、これと同形の製品は、米子城跡33次調査でも出土している。また現在も農村部には、水溜めとして利用されている石製水槽が残されているものがあり、農村部を中心にかなり普及していたものと考えられる。またこの他の荒島石製品としては、米子城跡の武家屋敷跡から井戸枠として利用されていたものが出土しているが、近代以前に遡るものはなく、明治以降に普及したものと考えられる。また、島根県宍道町に産出する「来待石」（きまちいし）は、久米第一遺跡のビール工場跡の排水溝に使用されたものが出土しているほかは数が少なく、報告例が少ないこともあって実態は不明な点が多いが、島根県産の石材を使用した製品は、神社の鳥居や石塔などに使われているものが西伯耆地方各地に分布しており、今後とも注意すべき遺物と考えられる。

上記の石製水槽内からは、ビール瓶、汽車土瓶が出土した。これまでに鳥取県内で見出されたビール瓶資料としては、米子市久米第一遺跡の明治時代のビール工場跡地から、コルク栓式の瓶が出土しており、ワインボトルを転用したものがビール瓶として使用されていたと考えられている。このビール工場は、稲田酒造によって明治20年頃に設立されたもので、当時のレッテルには、稲田姫の絵と共に「INADA BEER」のマークが描かれている。このビール工場は、明治後期には操業していなかったようで、どうやらこのビールは、明治の米子人の口には合わなかったらしい。また鳥取県会見町の鶴田中峯山遺跡から、「大日本麦酒」銘のビール瓶が出土している。大日本麦酒社は、明治39年から昭和24年まで存続しており、この期間に相当するものと考えられるが、実測図が公表されていないため詳細については不明である。

石製水槽内から出土したビール瓶は、瓶表面の肩部に「nippon☆beer」の文字が陽刻で書かれており、栓は王冠式を採用している。このビールは戦後、進駐軍により制定された、過度経済力集中排除法により、昭和24年に大日本麦酒会社より分割され誕生した日本麦酒社（昭和24～32年）製のものと考えられる。日本麦酒社の工場は、札幌、川口、名古屋、門司にあり、このいずれかの工場から出荷され、この米子の地にもたらされたものと考えられる。また、昭和34年には、ビールが国内で消費されたアルコール飲料のトップとなっており、ビール飲料の普及を具体的に示す資料といえよう。また、ビール瓶や牛乳瓶などのガラス容器は、使用後に回収、洗浄された後に再利用され、破損したものは、溶解してまたビール瓶として再生産されるのだが、今回の資料のように完形品のまま残されているものは数が少なく貴重な資料であるといえる。

もう一点の汽車土瓶については、型造りによって成型された陶器製のもので、四角形の体部に、2個所の取っ手用の穴がつけられており、口縁部の加工は粗く、端部はシャープである。表面には、山や花などの文様が描かれているが、ここからは、使用された駅や生産地などの情報は得られなかった。相伴しているビール瓶から昭和20～30年代頃の製品と考えられる。このタイプの汽車土瓶は、使用後リサイクルされることなく破棄されたものと考えられるが、これは、土瓶の生産コストの方が、回収、洗浄して再利用するよりも安かったためであろうか、もしくは衛生的な観点から使い捨てが義務付けられていたためであろうか。

また、これ以外の汽車土瓶の資料は、米子市陰田ヒチリザコ遺跡から、「鉄道局 御指定 御茶 富岡式茶瓶 製造元 大日本麦酒株式会社」と書かれた、ガラス製の汽車土瓶が出土しており、大正10年～11年の極短期間に使用されたものである。これは当時の衛生政策の一環として、鉄道省によりガラス製汽車土瓶の使用が決定されたものの、尿瓶チックな外見から不評に終わり、結局陶器製品へと逆戻りしたもので、飲料容器の使用に、公官による規制がなされていたことを示す資料である。なお、昭和30年代には、ポリエチレン製の汽車土瓶が出現し、安価で清潔、軽くて割れないという特徴から、陶製汽車土瓶は急速に廃れてしまった。こうした汽車土瓶の変遷から、衛生観念の普及や経済効率を重視した製品への転換を図るという一連の発展過程が読みとれる。

土器から始まり、木材、陶器、ガラス、紙、鉄、アルミなど様々な資源を利用してきた飲料容器は、近代化へと突き進んできた時代の世相を反映する遺物である。現代に立ち返って見るならば、10年前には考えられなかったほどのペットボトル全盛の昨今は、近代の飲料容器の変遷と比べてみても、目覚ましいほどの進歩を遂げてきたが、省資源という視点からみると、化石燃料を消費し続ける石油製品は、近代のガラス製品のそれとは比較にならないほど効率の悪い資源利用の方法となっている。近代から現代への飲料容器の歴史は、リサイクルの重要性を訴える素材として活用できる資料であり、未来に伝えていくべき遺物であるといえるだろう。



第84図 陰田マノカンヤマ遺跡出土汽車土瓶  
(報告書より転載)

目久美遺跡 8 次調査出土遺物観察表

法量の注記の無いものは残存高を示す。

遺物番号	出土地点	器種	法量(cm)	特徴	色調
Po1	2L	深鉢	4.1	口縁部外面を肥厚させ、外面に条痕を施す。	灰色
Po2	8R	深鉢	6.5	外面に刺突と条痕を施す。	濃黒茶褐色
Po3	4R	深鉢	2.9	外面に押引による沈線を施す。	黒褐色
Po4	4L	浅鉢	12.1	内外面とも条痕調整し、外面に粘土帯を貼付ける	黒褐色
Po5	3L	浅鉢	6.3	外面を条痕調整し、粘土帯を貼付ける。	黒褐色
Po6	5R	浅鉢	5.2	外面を条痕調整し、粘土帯を貼付け、刺突を施す。	黒褐色
Po7	3L	深鉢	9.5	外面を条痕調整し、円形の刺突を施す。	濃灰色
Po8	1L	不明	2.9	外面を条痕調整する。紋様帯有り。	淡褐色
Po9	1L	深鉢	5.4	外面に刺突を施す。	黒褐色
Po10	3R	深鉢	2.6	外面に刺突を施す。	褐色
Po11	3R	深鉢	4.4	外面に「3」字状の刺突を施す。	褐色
Po12	4R	深鉢	10.6	外面に貝殻状の工具による刺突を施す。	褐色
Po13	6R	深鉢	11.4	外面に貝殻状の工具による刺突を施す。	濃褐色
Po14	3・4区	深鉢	14.2	外面に貝殻状の工具による刺突を施す。	黒褐色
Po15	1L	深鉢	36(口径) 25	口縁は波状を呈し、外面にヘラ状工具による刺突紋が3列巡る。	黒褐色
Po16	2L	深鉢	35(口径) 11.5	外面に「C」字状の刺突が巡る。	黒色
Po17	1L	深鉢	4.2	外面に「C」字状の刺突が巡る。	黒褐色
Po18	1L	深鉢	5.1	器壁は薄く、外面に爪形の圧痕が施される。	黒褐色
Po19	5R	深鉢	5.8	器壁は薄く、外面に爪形の圧痕が施される。	黒色
Po20	1L	深鉢	5.6	横位に羽縄紋が巡る。	黒褐色
Po21	5R	深鉢	9.2	器壁は薄く、外面に斜縄紋が施される。	褐色
Po22	8L	深鉢	8.5	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。穿孔有り。	黒褐色
Po23	3L	深鉢	5.5	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。穿孔有り。	外:黒 内:灰褐色
Po24	6L	深鉢	10.9	内外面を条痕調整する。穿孔有り。	黒褐色
Po25	1L	深鉢	7.2	内外面を条痕調整する。穿孔有り。	褐色
Po26	2L	深鉢	5.9	内外面を条痕調整する。穿孔有り。	灰色
Po27	2L	深鉢	46(口径) 16	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	黒褐色
Po28	2L	深鉢	48(口径) 13	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	濃褐色
Po29	5R	深鉢	21.8(口径) 43	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	暗灰緑色
Po30	不明	深鉢	39(口径) 11.7	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	濃灰色
Po31	8R	浅鉢	24.4(口径) 15.6	口縁は波状を呈し、外面を条痕調整する。	暗濃灰色
Po32	2L	浅鉢	16(口径) 15.5	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	黒褐色
Po33	5R	深鉢	39.6(口径) 18.5	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	濃灰色
Po34	3L	深鉢	17	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	濃灰色
Po35	2R	深鉢	8.2	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	暗褐色
Po36	3R	深鉢	11	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	濃灰色
Po37	3R	深鉢	9.8	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	濃灰色
Po38	1L	深鉢	8.8	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	黒褐色
Po39	不明	深鉢	6	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	褐色
Po40	3R	深鉢	4.5	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	外:濃灰色 内:淡黄灰色
Po41	3L	深鉢	7.8	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	褐色
Po42	5R	深鉢	4.1	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	黒色
Po43	2L	深鉢	2.9	口縁は波状を呈し、内外面を条痕調整する。	灰色
Po44	3L	深鉢	38(口径) 20	頸部はくびれ、口縁は大きく外反する。	灰色
Po45	3L	深鉢	36(口径) 13.3	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	濃黒褐色
Po46	2L	深鉢	29(口径) 9.3	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	灰色
Po47	5L	深鉢	10.8	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	黒色
Po48	1L	深鉢	13	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	濃灰色
Po49	3L	深鉢	10.4	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	濃灰色

Po50	3R	深鉢	8.9	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	褐色・黄土色混じる
Po51	2L	深鉢	8.7	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	外:灰色 内:濃灰色
Po52	3L	深鉢	9	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	濃茶褐色
Po53	2L	深鉢	8.3	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	灰色
Po54	2L	深鉢	5.4	口縁はやや外反気味に伸び、内外面とも条痕調整する。	外:黒褐色 内:緑灰色
Po55	3L	深鉢	9.4	口縁は真っ直ぐ立ち上がり、内外面とも条痕調整する。	濃灰色
Po56	2L	深鉢	8.3	口縁は真っ直ぐ立ち上がり、内外面とも条痕調整する。	濃灰色
Po57	11R	深鉢	6.9	口縁は真っ直ぐ立ち上がり、外面に条痕調整する。	外:濃灰色 内:灰色
Po58	5R	深鉢	10.7	口縁は真っ直ぐ外反する。	黒褐色
Po59	6R	深鉢	30(口径) 10.3	口縁は真っ直ぐ立ち上がり、内外面とも条痕調整する。	外:黒灰色 内:濃灰色
Po60	3R	深鉢	7.7	口縁は波状を呈し、粘土帯を貼付ける。	黒茶褐色
Po61	3L	浅鉢	20(口径) 9	内外面を条痕調整し、粘土帯を貼り付ける。	濃灰色
Po62	3R	浅鉢	17.6(口径) 8.5	内外面を条痕調整し、粘土帯を貼り付ける。	褐色
Po63	2L	浅鉢	18.5(口径) 8.3	内外面とも条痕調整。	灰色
Po64	2L	浅鉢	18(口径) 5.2	内外面とも条痕調整。	濃褐色
Po65	2L	浅鉢	14.3(口径) 8	調整不明。	暗灰色
Po66	3R	浅鉢	14(口径) 3.7	外面を条痕調整する。	黒灰色
Po67	4R	浅鉢	13.4(口径) 4.9	内外面とも条痕調整。	濃灰色
Po68	1L	浅鉢	12.6(口径) 6.3	調整不明。	外:灰色 内:黒色(炭化)
Po69	土坑1	浅鉢	20(口径) 3.7	内外面とも条痕調整。	灰色
Po70	1L	浅鉢	19.6(口径) 2	内外面とも条痕調整。	褐色
Po71	3L	浅鉢	31.8(口径) 6.6	内外面とも条痕調整。	濃灰色
Po72	土坑1	浅鉢	30(口径) 7.5	内外面とも条痕調整。	褐色
Po73	2R	浅鉢	22(口径) 7.8	内外面とも条痕調整。	黒褐色
Po74	3L	浅鉢	12.8	内外面とも条痕調整。	褐色
Po75	6R	浅鉢	25.8(口径) 16.4	内外面とも条痕調整。	淡黒色に一部炭化物
Po76	5L	深鉢	7.6	縄紋を施し、粘土帯を張付ける。	濃灰色
Po77	3R	浅鉢	12.4(口径) 10	外面を条痕調整し、口縁外面に孤状の沈線を施す。	淡褐色と黒褐色混じる
Po78	3L	深鉢	4.7	内面を肥厚させ、縄紋を施す。	淡褐色
Po79	4L	深鉢	4.5	外面に縄紋を施す。	外:黒褐色 内:褐色
Po80	2R	深鉢	15.5	外面に縄紋を施す。	外:黒褐色 内:褐色
Po81	2L	深鉢	30(口径) 17.5	外面に縄紋を施す。	黒褐色
Po82	1L	深鉢	7.9	外面に縄紋を施し、口縁部に刺突を巡らせる。	黒褐色
Po83	3L	深鉢	5.2	外面に縄紋を施し、肥厚させた口縁部に刺突を巡らせる。	濃黒褐色
Po84	3L	深鉢	4.8	外面に縄紋を施し、肥厚させた口縁部に刺突を巡らせる。	茶褐色
Po85	1L	深鉢	4.7	外面に縄紋を施し、口縁部を肥厚させる。	灰色
Po86	3R	深鉢	3.4	外面に縄紋を施し、口縁部を肥厚させる。	黒色
Po87	2R	深鉢	5	外面に縄紋を施し、口縁部を肥厚させる。	黒褐色
Po88	2L	深鉢	4.1	整形時の痕跡を留める。外面に縄紋を施す。	外:黒褐色 内:灰色
Po89	2L	深鉢	3.3	外面に縄紋を施し、口縁部を肥厚させる。	黒色
Po90	3L	深鉢	2.7	外面に縄紋を施し、口縁部を肥厚させる。	灰色
Po91	3L	深鉢	4	整形時の痕跡を留める。外面に縄紋を施す。	灰色
Po92	3L	深鉢	3.3	整形時の痕跡を留める。外面に縄紋を施す。	濃灰色
Po93	1L	深鉢	3.5	整形時の痕跡を留める。外面に縄紋を施す。	黒色
Po94	3R	深鉢	4.5	外面に縄紋を施し、口縁部を肥厚させる。	淡褐色

Po95	2L	深鉢	6.2	外面に縄紋を施し、口縁部を肥厚させる。	黒褐色
Po96	3L	不明	10.6(底径) 3.5	外面を条痕調整する底部片。	濃灰色
Po97	2L	不明	10.8(底径) 3.8	外面を条痕調整する底部片。	灰色
Po98	2R	不明	9.5(底径) 2.4	外面を条痕調整する底部片。	黒褐色
Po99	1L	不明	10.4(底径) 2	外面を条痕調整する底部片。	灰褐色
Po100	1L	不明	8(底径) 2.5	外面を条痕調整する底部片。	暗灰色
Po101	1L	不明	9.5(底径) 3.5	外面を条痕調整する底部片。	黒褐色
Po102	1L	不明	7.4(底径) 5	外面を条痕調整する底部片。	褐色
Po103	1L	不明	6(底径) 5.7	外面を条痕調整する底部片。	灰褐色
Po104	1L	不明	8.6(底径) 2.5	外面を条痕調整する底部片。	灰色
Po105	1L	不明	6(底径) 1.7	底部片。	褐色
Po106	3L	浅鉢	5.5(底径) 6.8	浅鉢形土器の底部。外面に縄紋を施す。	黒褐色
Po107	2L	不明	7(底径) 3.9	底部片。外面に縄紋を施す。	灰色
Po108	2L	不明	8.5(底径) 3.6	底部片。外面に縄紋を施す。	黒褐色
Po109	2R	不明	9.4(底径) 2.5	底部片。外面に縄紋を施す。	暗灰色
Po110	2L	不明	8.7(底径) 1.2	底部片。外面に縄紋を施す。	暗灰色
Po111	1L	不明	8(底径) 1.2	底部片。	灰褐色
Po112	2L	不明	8.5(底径) 1.7	底部片。	灰色
Po113	2L	不明	9.6(底径) 3.4	底部片。外面に縄紋を施す。	黒褐色
Po114	3・4L	深鉢	5.6	深鉢形土器の底部。内外面とも条痕調整。	灰色
Po115	4L	深鉢	23	深鉢形土器の底部。内外面とも条痕調整。	黒褐色
Po116	4R	深鉢	25.9	深鉢形土器の底部。内外面とも条痕調整。	黒褐色
Po117	5L	深鉢	19.9	深鉢形土器の底部。内外面とも条痕調整。	黒褐色
Po118	3L	深鉢	24.1	深鉢形土器の底部。内外面とも条痕調整。	濃灰色
Po119	12R	深鉢	33(口径) 32	頸部がくびれる深鉢形土器。外面は粗い条痕を施す。	淡黄褐色
Po120	3R	浅鉢	3	外面にヘラ描きによる紋様を施す。	黒色
Po121		突帯紋土器	3.9	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。突帯に刺突を施す。	外:黒色 内:暗褐色
Po122		突帯紋土器	4.7	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。突帯に刺突を施す。	灰褐色
Po123		突帯紋土器	4	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。突帯に刺突を施す。	外:灰色 内:褐色
Po124		突帯紋土器	8	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。突帯に刺突を施す。	外:灰褐色 内:淡褐色
Po125		突帯紋土器	3.3	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。突帯に刺突を施す。	灰褐色
Po126		突帯紋土器	14.7(胴径) 2.7	突帯に刺突を施す。	暗灰褐色
Po127		突帯紋土器	4.7	突帯に刺突を施す。	暗褐色
Po128		突帯紋土器	4.2	突帯に刺突を施す。	褐色
Po129		突帯紋土器	3.7	突帯に刺突を施す。	褐色
Po130		突帯紋土器	5.3	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	暗褐色
Po131		突帯紋土器	4.8 16.8(口径)	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	暗褐色
Po132		突帯紋土器	6	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	褐色
Po133		突帯紋土器	5.2	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	暗灰褐色
Po134		突帯紋土器	5.3	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	暗褐色
Po135		突帯紋土器	6	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	外:黒褐色 内:暗褐色
Po136		突帯紋土器	6	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	灰褐色
Po137		突帯紋土器	3.7	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	褐色
Po138		突帯紋土器	3.2	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	外:褐色 黒灰色

Po139	突帯紋土器	2.8	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po140	突帯紋土器	3.6	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po141	突帯紋土器	7.5	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	暗灰褐色
Po142	突帯紋土器	7.5	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po143	突帯紋土器	7.1	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	灰色
Po144	突帯紋土器	3.7	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	褐色
Po145	突帯紋土器	1.5	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po146	突帯紋土器	5.6 23.4(口径)	口縁端部に接して突帯を貼り付ける。	暗褐色
Po147	突帯紋土器	4	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	外:暗灰色 内:暗褐色
Po148	突帯紋土器	5.2	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po149	突帯紋土器	5.3	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	外:灰褐色 内:暗灰褐色
Po150	突帯紋土器	4.9	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	外:黒褐色 内:暗褐色
Po151	突帯紋土器	5.3	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po152	突帯紋土器	1.9	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po153	突帯紋土器	2.5	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po154	突帯紋土器	8.3 31.8(口径)	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po155	突帯紋土器	6.4 32.2(口径)	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po156	突帯紋土器	15.0 24.7(口径)	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	暗褐色
Po157	突帯紋土器	2.4	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po158	突帯紋土器	4.6	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po159	突帯紋土器	2.7	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	淡灰褐色
Po160	突帯紋土器	5.5	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	黒褐色
Po161	突帯紋土器	5.3	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po162	突帯紋土器	4.9	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	外:黒褐色 内:暗灰褐色
Po163	突帯紋土器	3.1	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	淡灰褐色
Po164	突帯紋土器	5.9	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po165	突帯紋土器	5	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	暗灰色
Po166	突帯紋土器	3.7	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	暗灰褐色
Po167	突帯紋土器	9.5	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	暗褐色
Po168	突帯紋土器	6	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	暗褐色
Po169	突帯紋土器	8.6	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	外:赤褐色 内:淡褐色
Po170	突帯紋土器	5.6	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po171	突帯紋土器	4.4	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	暗褐色
Po172	突帯紋土器	3.2	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	外:暗褐色 内:褐色
Po173	突帯紋土器	3.3	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po174	突帯紋土器	2.7	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po175	突帯紋土器	2.5	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	淡褐色
Po176	突帯紋土器	4.4	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	淡灰色
Po177	突帯紋土器	3.5	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	外:暗褐色 内:褐色
Po178	突帯紋土器	6.6	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po179	突帯紋土器	4.9	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	外:褐色 内:暗褐色
Po180	突帯紋土器	3.5	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po181	突帯紋土器	4.3	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	褐色
Po182	突帯紋土器	5	口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。	灰褐色
Po183	突帯紋土器	5.3 31.8(口径)	口縁は波状を呈し、突帯が二条に分岐する。	淡灰褐色
Po184	突帯紋土器	5.2	突帯と胴部に刺突が施される。	褐色
Po185	突帯紋土器	4.8	壺形を呈し、口縁端部に突帯を貼り付ける。刺突有り。	灰褐色
Po186	深鉢	5.4	口縁はやや内湾気味に立ち上がり、外方に肥厚する。	淡褐色
Po187	深鉢	5.5	口縁は真っ直ぐ立ち上がる。	外:暗褐色 内:褐色
Po188	深鉢	3.1 29.5(口径)	口縁は外方に立ち上がる。	外:灰褐色 内:暗灰色
Po189	深鉢	4.5 27.9(口径)	口縁は外方に立ち上がる。	暗褐色
Po190	深鉢	4.7 22.7(口径)	口縁は外方に立ち上がる。	灰褐色
Po191	深鉢	4.7	口縁は真っ直ぐ立ち上がる。	外:褐色 内:暗褐色
Po192	深鉢	3.2	口縁は外方に立ち上がる。	暗褐色
Po193	深鉢	5.1	口縁はやや屈曲しながら、真っ直ぐ立ち上がる。	外:すず付着 内:褐色
Po194	深鉢	5.9	口縁は真っ直ぐ立ち上がる。	外:褐色 内:黒灰色
Po195	深鉢	3.3	口縁は真っ直ぐ立ち上がる。	外:暗褐色 内:褐色
Po196	浅鉢	6 18.6(口径)	口縁は外方に伸びる。	黒褐色 褐色
Po197	浅鉢	5 18.6(口径)	口縁は外方に伸びる。	暗褐色

Po198		浅鉢	3.4 18.6(口径)	口縁は外方に伸びる。	暗褐色
Po199		浅鉢	4.1 20.6(口径)	口縁は外方に伸びる。	暗褐色
Po200		浅鉢	4.8 14.1(口径)	口縁は外方に伸びる。	淡褐色
Po201		浅鉢	5.8 12.9(口径)	口縁は外方に伸びる。	外:暗褐色 内:褐色
Po202		浅鉢	4.5 16.4(口径)	口縁は外方に伸びる。	外:黒褐色 内:暗褐色
Po203		浅鉢	5.4 14.6(口径)	碗状を呈する。	淡灰褐色
Po204		浅鉢	5.1 23.8(口径)	碗状を呈する。	褐色
Po205		縄紋土器片	4.6	補修痕を残す土器片。	外:暗褐色 内:黒色
Po206		弥生土器、壺	5.1 15.2(口径)	口縁部は外方に屈曲する。	黒褐色
Po207		弥生土器、壺	6.1 16(口径)	口縁部は外反し、頸部に一条の凹線が巡る。	暗褐色
Po208		弥生土器、壺	5 16.6(口径)	口縁部は外反し、頸部に緩い段を持つ。	淡褐色
Po209		弥生土器、壺	17.2 18(口径)	口縁部は外反し、頸部と肩部に凹線が巡る。	淡橙褐色
Po210		弥生土器、壺	6.6 16.6(口径)	口縁部は外反し、頸部に緩い段を持つ。	褐色
Po211		弥生土器、壺	4.4 20(口径)	口縁部は外反し、頸部に一条の凹線が巡る。	褐色
Po212		弥生土器、壺	5 15.2(口径)	口縁部は外反し、頸部に二条の凹線が巡る。	淡褐色
Po213		弥生土器、壺	5.7 15(口径)	口縁部は外反し、頸部に二条の凹線が巡る。	淡褐色
Po214		弥生土器、壺	10.8 12.8(口径) 17.6(口径)	口縁部は外反し、頸部に三条の凹線が巡る。	暗褐色 淡褐色
Po215		弥生土器、壺	26.9 19.3(口径)	口縁部は外反し、頸部と胴部に凹線が巡る。頸部内面に突帯が付けられる。	褐色
Po216		弥生土器、底部	4.6 12.2(口径)	Po215と同一固体か	淡褐色
Po217		弥生土器、壺	5.6 15.6(口径)	口縁部は外反する	淡褐色
Po218		弥生土器、壺	5.2 17(口径)	口縁部は外反する	褐色
Po219		弥生土器、壺	9.3 30.2(口径)	口縁部は外反し、頸部に凹線が巡る。	淡褐色
Po220		弥生土器、壺	6.4 25.6(口径)	口縁部は外反し、頸部に凹線が巡る。	淡褐色
Po221		弥生土器、壺	6.6 35.5(口径)	口縁部は外反し、頸部に凹線が巡る。	淡褐色
Po222		弥生土器、壺	5.3 32.2(口径)	口縁部は外反する。	淡褐色
Po223		弥生土器、壺	3.9 28.2(口径)	口縁部は外反し、頸部に凹線が巡る。	淡褐色
Po224		弥生土器、壺	4.5 29(口径)	口縁部は外反し、頸部に凹線が巡る。	褐色
Po225		弥生土器、壺	5.6 25.4(口径)	口縁部は外反する。	淡褐色
Po226		弥生土器、壺	4.2 24.6(口径)	口縁部は外反する。	暗褐色
Po227		弥生土器、壺	4.3 23.8(口径)	口縁部は外反する。	暗褐色
Po228		弥生土器、壺	5.5 21.6(口径)	口縁部は外反する。	淡褐色
Po229		弥生土器、壺	3.6 18.5(口径)	口縁部は外反する。	淡褐色
Po230		弥生土器、壺	3.6 18.5(口径)	口縁部は外反する。	外:褐色 内:暗褐色
Po231		弥生土器、壺	3.5 15.4(口径)	口縁部は外反する。	外:黒褐色 内:暗褐色
Po232		弥生土器、壺	4.6 15.6(口径)	口縁部は外反する。	外:淡橙褐色 内:淡褐色



Po233		弥生土器、壺	5.4 15(口径)	口縁部は外反する。	淡褐色
Po234		弥生土器、壺	4.8 12.9(口径)	口縁部は外反し、頸部に一条の凹線が巡る。	淡褐色
Po235		弥生土器、壺	5 15(口径)	口縁部は外反する。	淡褐色
Po236		弥生土器、壺	5.2 11.6(口径)	口縁部は外反し、頸部に一条の凹線が巡る。	褐色
Po237		弥生土器、壺	6.8 13.4(口径)	口縁部は外反し、頸部に五条の凹線紋が巡る。	淡褐色
Po238		弥生土器、壺	1 17.6(口径)	口縁部は水平方向に伸び、端部は凹線と刺突が施される。	灰褐色
Po239		弥生土器、壺	1.4 24.8(口径)	口縁部は水平方向に伸びる。波状紋と円形浮紋により加飾される。	暗褐色
Po240		弥生土器、壺	2.2 27.8(口径)	口縁部は水平方向に伸びて下垂する。端部に斜格子紋が施される。	淡橙褐色
Po241		弥生土器、壺	5	頸部に突帯を巡らす。	淡褐色
Po242		弥生土器、壺	6.8	頸部に凹線が巡る。	褐色
Po243		弥生土器、壺	6.8	頸部に凹線が巡る。	淡褐色
Po244		弥生土器、壺	5.8	頸部に凹線が巡る。	淡褐色
Po245		弥生土器、壺	5.3	頸部に凹線が巡る。	淡褐色
Po246		弥生土器、壺	6.8	肩部に段と凹線が巡る。	淡橙褐色
Po247		弥生土器、壺	7.8	肩部に段を持つ。胴部に突帯の剥がれた痕跡有り。	暗褐色
Po248		弥生土器、壺	5.6	肩部に凹線が巡る。	淡褐色
Po249		弥生土器、壺	10.4	肩部に凹線が巡る。	茶褐色
Po250		弥生土器、壺	7.4	肩部に凹線と刺突紋が巡る。	淡褐色
Po251		弥生土器、壺	8.3	肩部に凹線が巡る。	淡橙褐色
Po252		弥生土器、壺	7.4	胴部に刺突を施した突帯が巡る。	淡褐色
Po253		弥生土器、壺	6.2 33.1(胴径)	胴部に刺突を施した突帯が巡る。	暗褐色
Po254		弥生土器、壺	11.2	肩部に凹線が巡る。	外:黒褐色 内:灰褐色
Po255		弥生土器、壺	3.7	肩部に凹線が巡る。	褐色
Po256		弥生土器、壺	6.8	胴部に凹線が巡る。	淡褐色
Po257		弥生土器、壺	3.6	肩部に刺突を施した突帯と凹線が巡る。	暗褐色
Po258		弥生土器、壺	3.8	肩部に刺突を施した突帯と凹線が巡る。	外:褐色 内:灰褐色
Po259		弥生土器、壺	4.9	肩部に刺突を施した突帯が巡る。	褐色
Po260		弥生土器、壺	4.2	頸部に刺突を施した突帯が巡る。	外:暗褐色 内:褐色
Po261		弥生土器、壺	3.4	壺の体部片。突帯に刺突を施す。	褐色
Po262		弥生土器、壺	3.8	壺の体部片。突帯に刺突を施す。	褐色
Po263		弥生土器、壺	5.2	壺の体部片。突帯に刺突を施す。	外:淡褐色 内:褐色
Po264		弥生土器、壺	3.8	壺の体部片。突帯に刺突を施す。	褐色
Po265		弥生土器、壺	4.2	壺の体部片。突帯に刺突を施す。	外:暗褐色 内:淡褐色
Po266		弥生土器、壺	4.1	肩部に木葉紋を施す。	外:黒褐色 内:褐色
Po267		弥生土器、壺	4	肩部に木葉紋を施す。	淡褐色
Po268		弥生土器、壺	5	貝殻状工具により綾杉紋を施す。	淡褐色
Po269		弥生土器、壺	5.7	貝殻状工具により綾杉紋を施す。	淡褐色
Po270		弥生土器、壺	4	貝殻状工具により綾杉紋を施す。	淡橙褐色
Po271		弥生土器、壺	3.4	ヘラ状工具により綾杉紋を施す。	褐色
Po272		弥生土器、壺	4.4 13(胴径)	ヘラ状工具により綾杉紋を施す。	褐色
Po273		弥生土器、壺	5.9	ヘラ状工具により綾杉紋を施す。	淡褐色
Po274		弥生土器、壺	5.1	ヘラ状工具により綾杉紋を施す。	褐色
Po275		弥生土器、壺	6	櫛描による紋様を施す。	褐色
Po276		弥生土器、壺	5.1	櫛描による紋様を施す。	暗褐色
Po277		弥生土器、壺	3.5	櫛描による紋様を施す。	淡褐色
Po278		弥生土器、壺	6.7 31(胴径)	櫛描による斜格子紋と突帯が巡る。	黄灰褐色
Po279		弥生土器、壺	5.9 29(胴径)	貝殻状工具による刺突を施す。	外:淡褐色 内:淡橙褐色
Po280		弥生土器、壺	9.8	貝殻状工具による刺突を施す。	外:黒褐色 内:黒色
Po281		弥生土器、壺	7.1	貝殻状工具による刺突を施す。	外:橙褐色 内:黒色
Po282		弥生土器、壺	4.2	壺体部片。波状紋と櫛描紋が巡る。	褐色
Po283		弥生土器、壺	5	壺体部片。波状紋と櫛描紋が巡る。	灰褐色
Po284		弥生土器、壺	10.4 10.5(胴径) 4.1(胴径)	肩の張る小形壺。	淡褐色 一部黒斑
Po285		弥生土器、壺	7.5	小形壺。	淡褐色
Po286		弥生土器、無頸壺	4.0 7.6(口径)	口縁部が内湾する無頸壺。	褐色
Po287		弥生土器、無頸壺	5.5 16.4(口径)	口縁部が内湾する無頸壺。口縁部に穿孔有り。	外:黒褐色 内:黒色

Po288	弥生土器、無頸壺	5.9 22.4(口径)	口縁部に指頭圧痕貼付突帯が巡る無頸壺。	淡褐色
Po289	弥生土器、鉢形土器	3.5 21.6(口径)	口縁端部が外方に突出する。	外面一部黒褐色
Po290	弥生土器、鉢形土器	3.3 16.8(口径)	口縁は外反する。ヘラ描きの線刻有り。	暗褐色
Po291	弥生土器、鉢形土器	2.9 8(口径)	口縁は外反する。	外:褐色 内:黒褐色
Po292	弥生土器、鉢形土器	4.4 14.8(口径)	口縁端部が外方に突出する。	外:暗褐色 内:褐色
Po293	弥生土器、鉢形土器	3.2 12.6(口径)	口縁はやや外方に伸びる。	橙褐色
Po294	弥生土器、甕	11.7 21.6(口径)	口縁部下に段を持つ。	外:暗褐色(黒斑) 内:赤褐色
Po295	弥生土器、甕	6.5	口縁部下に段を持つ。	外:灰褐色 内:褐色
Po296	弥生土器、甕	4.4	口縁部下に段を持つ。	淡褐色
Po297	弥生土器、甕	5.6	口縁部下に段を持つ。	暗褐色
Po298	弥生土器、甕	6.6 17.6(口径)	口縁部下に1条の凹線が巡る。	黒褐色
Po299	弥生土器、甕	6.1 15.8(口径)	口縁部下に1条の凹線が巡る。	外:橙褐色 内:淡褐色
Po300	弥生土器、甕	2.8 20.2(口径)	口縁部下に1条の凹線が巡る。	淡褐色
Po301	弥生土器、甕	5.7 24.7(口径)	口縁部下に1条の凹線が巡る。	褐色 外:煤付着 内:一部黒斑
Po302	弥生土器、甕	4.9 30.6(口径)	口縁部下に1条の凹線が巡る。	褐色
Po303	弥生土器、甕	7.8 24.6(口径)	口縁部下に1条の凹線が巡る。	淡褐色
Po304	弥生土器、甕	9.5 22.4(口径)	口縁部下に1条の凹線が巡る。	褐色
Po305	弥生土器、甕	2.6 16(口径)	口縁部下に1条の凹線が巡る。	褐色
Po306	弥生土器、甕	4.4 33.4(口径)	口縁部下に1条の凹線が巡る。	淡褐色
Po307	弥生土器、甕	5.8 20.3(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	淡褐色
Po308	弥生土器、甕	6 21(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	褐色 内部黒斑
Po309	弥生土器、甕	8.6 21.4(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	外:黒褐色 内:褐色
Po310	弥生土器、甕	6.8 24.8(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	外:暗褐色 内:黒褐色
Po311	弥生土器、甕	6.5 27.5(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	外:淡橙褐色、内:明灰褐色
Po312	弥生土器、甕	4.7 20(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	淡褐色
Po313	弥生土器、甕	4.5 19.6(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	褐色
Po314	弥生土器、甕	6 20.4(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	外:淡褐色 内:暗褐色
Po315	弥生土器、甕	8.9 19.2(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	淡褐色 内:黒斑
Po316	弥生土器、甕	6.2 20.8(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	外:暗褐色 内:淡褐色
Po317	弥生土器、甕	9.8 19.6(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	外:褐色 内:褐色
Po318	弥生土器、甕	10.8 24.3(口径)	口縁部下に2条の凹線が巡る。	暗褐色
Po319	弥生土器、甕	8 25(口径)	口縁部下に3条の凹線が巡る。	褐色
Po320	弥生土器、甕	4.8 18.2(口径)	口縁部下に3条の凹線が巡る。	橙褐色 黒斑有
Po321	弥生土器、甕	8.3 25.7(口径)	口縁部下に3条の凹線が巡る。	灰褐色
Po322	弥生土器、甕	5.4 28.8(口径)	口縁部下に2条の凹線と刺突紋が巡る。	褐色
Po323	弥生土器、甕	12.1	口縁部下に3条の凹線と刺突紋が巡る。	外:褐色 内:暗褐色
Po324	弥生土器、甕	6	口縁部下に9条の凹線が巡る。	褐色
Po325	弥生土器、甕	6・7 39.4(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	褐色

Po326		弥生土器、甕	8.5 39(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:褐色 内:淡橙褐色
Po327		弥生土器、甕	4.7 32.5(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	褐色
Po328		弥生土器、甕	9.6 31.2(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:暗褐色 内:橙褐色
Po329		弥生土器、甕	13.2 27.4(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:褐色 内:暗褐色
Po330		弥生土器、甕	5.9 29.6(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	暗褐色
Po331		弥生土器、甕	7.7 28.4(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	褐色
Po332		弥生土器、甕	9 28.2(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:黒褐色 内:褐色
Po333		弥生土器、甕	6.1 29(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:暗褐色 内:褐色
Po334		弥生土器、甕	4 27.6(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	淡橙褐色
Po335		弥生土器、甕	5.8 27.4(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:暗褐色 内:褐色
Po336		弥生土器、甕	23.8 25.4(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:暗褐色~橙褐色 内:褐色~黒褐
Po337		弥生土器、甕	17.4 24.8(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:褐色 内:暗褐色
Po338		弥生土器、甕	7.9 22.8(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	褐色
Po339		弥生土器、甕	4.7 20.7(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	淡褐色
Po340		弥生土器、甕	6.6 21.2(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	褐色
Po341		弥生土器、甕	6.3 22.2(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	褐色
Po342		弥生土器、甕	4.7 20.2(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	暗褐色
Po343		弥生土器、甕	4.9 23.4(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:淡褐色 内:黒褐色
Po344		弥生土器、甕	6 19.3(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	灰褐色
Po345		弥生土器、甕	5.3 16.0(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	褐色
Po346		弥生土器、甕	5.6 18.6(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:褐色 内:橙褐色
Po347		弥生土器、甕	7 16.6(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	外:暗褐色 内:褐色
Po348		弥生土器、甕	4.7 16.2(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	淡褐色
Po349		弥生土器、甕	4.7 14.2(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	褐色
Po350		弥生土器、甕	4.2 13.6(口径)	口縁部は緩やかに外反する。	淡褐色
Po351		弥生土器、甕	2.5 16.5(口径)	口縁端部は「く」字形に屈曲する。	褐色
Po352		弥生土器、甕	2.5 13.4(口径)	口縁端部は「く」字形に屈曲する。	暗褐色
Po353		弥生土器、甕	4.1 14.4(口径)	口縁端部は「L」字形に屈曲する。	淡灰褐色
Po354		弥生土器、甕	3.3 10(口径)	口縁端部は「L」字形に屈曲し、凹線が巡る。	外:淡褐色 内:灰褐色
Po355		弥生土器、甕	22.3 32.8(口径)	口縁端部は「L」字形に屈曲し、櫛描紋が巡る。	淡褐色
Po356		弥生土器、甕	3.5 17.8(口径)	口縁部は「く」字形に屈曲する。	淡褐色
Po357		弥生土器、甕	1.7 13.8(口径)	口縁部は「く」字形に屈曲する。	淡灰褐色 黒斑有
Po358		弥生土器、甕	7 49.6(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	淡灰褐色 煤付着
Po359		弥生土器、甕	5.6 29.4(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	暗褐色
Po360		弥生土器、甕	5.5 27(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	外:黒褐色 内:褐色

Po361	弥生土器、甕	5 23.4(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	灰褐色
Po362	弥生土器、甕	4.6 25.6(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	外:暗褐色 内:褐色
Po363	弥生土器、甕	2.9 24(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	淡褐色
Po364	弥生土器、甕	4.5 21.8(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	外:褐色,内:暗褐色 黒斑
Po365	弥生土器、甕	3.9 22.6(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	褐色
Po366	弥生土器、甕	6.5 23.6(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	外:暗褐色 一部炭化物
Po367	弥生土器、甕	7.6 23.8(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	外:暗褐色 内:褐色
Po368	弥生土器、甕	6.2 19.5(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	暗褐色 煤付着
Po369	弥生土器、甕	2.2 14(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。	淡褐色
Po370	弥生土器、甕	6 24(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に1条の凹線が巡る。	淡灰褐色
Po371	弥生土器、甕	3.4 25.8(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に1条の凹線が巡る。	外:橙褐色 内:褐色 一部黒斑
Po372	弥生土器、甕	24.6 7.3(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に1条の凹線が巡る。	褐色
Po373	弥生土器、甕	5.1 28.4(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に1条の凹線が巡る。	外:暗褐色 内:橙褐色
Po374	弥生土器、甕	4.9 21.8(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に1条の凹線が巡る。	外:暗褐色 内:褐色
Po375	弥生土器、甕	2.3 (19.2口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に1条の凹線が巡る。	淡褐色
Po376	弥生土器、甕	10.7 32(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に2条の凹線が巡る。	淡褐色
Po377	弥生土器、甕	3.6 26.9(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に2条の凹線が巡る。	暗褐色
Po378	弥生土器、甕	3.3 26.9(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に2条の凹線が巡る。	暗褐色
Po379	弥生土器、甕	21.4 6.3(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に2条の凹線が巡る。	外:暗褐色 内:褐色
Po380	弥生土器、甕	2.5 30.6(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に2条の凹線が巡る。	淡褐色
Po381	弥生土器、甕	34.8 3.7(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に2条の凹線が巡る。	褐色
Po382	弥生土器、甕	9.2 34.1(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に2条の凹線と刺突紋が巡る。	淡褐色
Po383	弥生土器、甕	5.8 21.3(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に2条の凹線と刺突紋が巡る。	暗褐色
Po384	弥生土器、甕	18.2 29.6(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に3条の凹線が巡る。	暗褐色
Po385	弥生土器、甕	6.2 25.5(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に4条の凹線が巡る。	外:黒褐色 内:暗褐色
Po386	弥生土器、甕	9.4 23.4(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に7条の凹線が巡る。	外:暗褐色 内:褐色
Po387	弥生土器、甕	27.6(器高) 25.6(口径)	口縁は外反し、端部に刺突を施す。口縁部下に8～9条の凹線が巡る。	淡褐色
Po388	弥生土器、甕	17.5 6.8(口径)	口縁は「L」字形を呈し、端部に刺突を施す。口縁部下に5条の凹線が巡る。	淡褐色 煤付着
Po389	弥生土器、高坏	3.7 20.8(口径)	口縁端部は内側に肥厚する。	灰褐色
Po390	弥生土器、高坏	3.5 21.3(口径)	口縁端部は内側に肥厚する。口縁に穿孔有り。	外:淡灰褐色 内:灰褐色
Po391	弥生土器、高坏	1.1 19.4(口径)	口縁は水平方向に伸び、刺突が巡る。穿孔有り。	褐色
Po392	弥生土器、高坏	2.2	坏部が段状となる高坏。	暗褐色
Po393	弥生土器、高坏	2.8	脚柱部に沈線が巡る。	暗褐色
Po394	弥生土器、高坏	4.5	脚柱部に沈線が巡る。	灰褐色
Po395	弥生土器、高坏	3.3	脚柱部に斜め方向の線刻が巡る。透かし有り。	褐色
Po396	弥生土器、高坏	2.7 12.6(底径)	脚端部が内側に肥厚する。	淡褐色
Po397	弥生土器、高坏	3.1 11(口径)	口脚端部は外方に伸び、刺突が施される。	暗褐色

Po398	弥生土器、高坏	10 10.2(底径)	脚端部は上方に伸びる。	淡褐色
Po399	弥生土器、蓋形土器	3.7 12.7(口径)	やや器高の低い蓋形土器。	暗褐色
Po400	弥生土器、蓋形土器	15.8 1.2(口径)	扁平な蓋形土器。	灰褐色
Po401	弥生土器、蓋形土器	0.8 11(口径)	口扁平な蓋形土器。	淡灰褐色
Po402	弥生土器、蓋形土器	0.9 14(口径)	口扁平な蓋形土器。穿孔有り。	淡褐色 黒斑
Po403	土製円盤	4.2(幅) 0.6(厚さ)	土器片を加工する。中央部に穿孔しかけた痕跡が残る。	灰褐色
Po404	土製円盤	6.2(幅) 0.6(厚さ)	土器片を丸く加工する。中央部に穿孔しかけた痕跡が残る。	外:淡褐色 内:黒褐色
Po405	土製円盤	4.7(幅) 0.7(厚さ)	土器片を丸く加工したもの。	外:黒褐色 内:淡褐色
Po406	土製円盤	4.2(幅) 1.2(厚さ)	土器片を丸く加工したもの。	淡灰褐色 一部やや赤み
Po407	土製円盤	5.3(幅) 0.7(厚さ)	土器片を丸く加工したもの。	淡橙褐色
Po408	土製円盤	6.1(幅) 0.6(厚さ)	土器片を丸く加工したもの。	外:黒色 内:暗褐色
Po409	土器片錘	5(幅) 1.1(厚さ)	土器片を四角く加工する。	外:黒褐色 内:褐色
Po410	土錘	4.8(長さ) 3(幅)	管状の土錘。	暗褐色
Po411	土錘	4(長さ) 3.2(幅)	管状の土錘。	暗褐色
Po412	匙形土製品	7.2(長さ) 4.9(幅) 5.8(器高)	スプーン状に整形し、取手を付ける。	淡褐色 黒斑
Po413	土笛?	6.4 5.8(口径)	口径は小さく、穿孔がある。土笛か。	暗褐色
Po414	土笛?	4.8	体部に穿孔有り。	淡褐色
Po415	漆塗土器	4.2	内外面に黒色の漆が塗布されている。甕片か。	黒色
Po416	土器片	3.2	同心円状の線刻を持つ。浅鉢の体部片か。	黒褐色
Po417	弥生土器、壺体部片	8.3	肩部に丸い突起を貼り付ける。壺の破片か。	外: 内:淡灰褐色
Po418	底部	7.3 9.2(底径)	底部片。	外:褐色 内:黒褐色

# 圖 版



1・基盤層検出状況（2区より東を見る）



2・基盤層検出状況（11区より西を見る）



1・波蝕台完掘（北より）



2・流木の出土状況（南より）





1・3区、13層の遺物出土状況（西より）



2・1～4区波蝕台検出状況（南より）



3・土坑1、検出状況（南より）



1・流木群の出土状況（南より）



2・6-R区、波蝕台の検出状況（南より）



3・4-L区、波蝕台検出状況（南より）



1・第2水田下層の土器溜り、3ラインでの検出状況（東より）



2・第2水田下層の土器溜り、2ライン調査風景（東より）



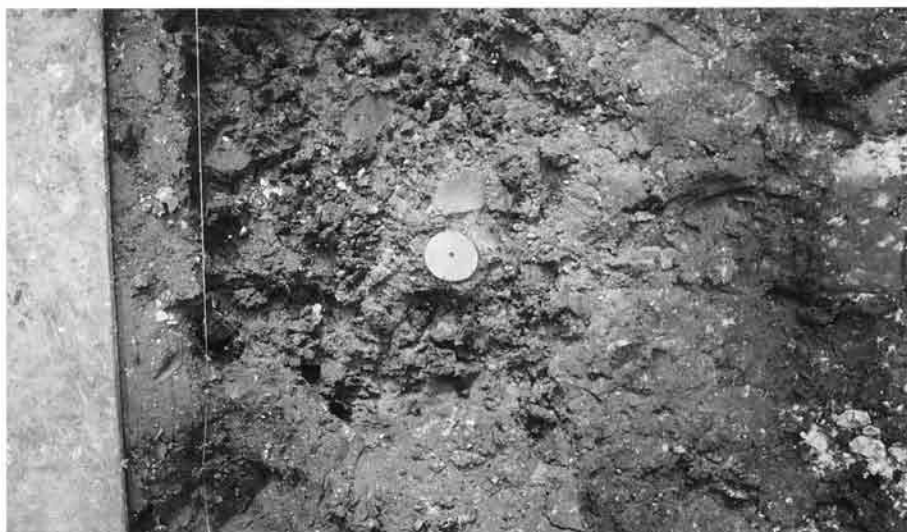
3・第2水田下層の土器溜り、1～4区での遺物出土状況（南より）



1・第2水田下層、Po626出土状況（東より）



2・11層、Po416出土状況（東より）



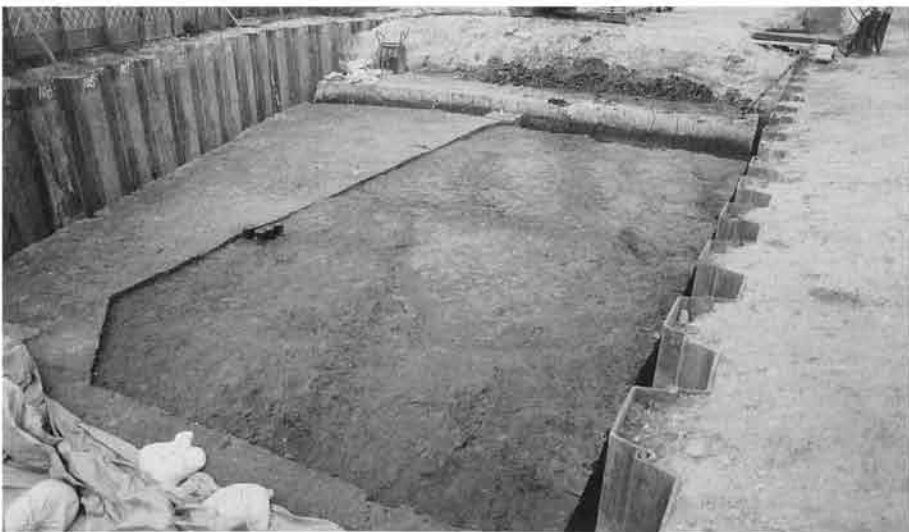
3・11層、S86出土状況（北より）



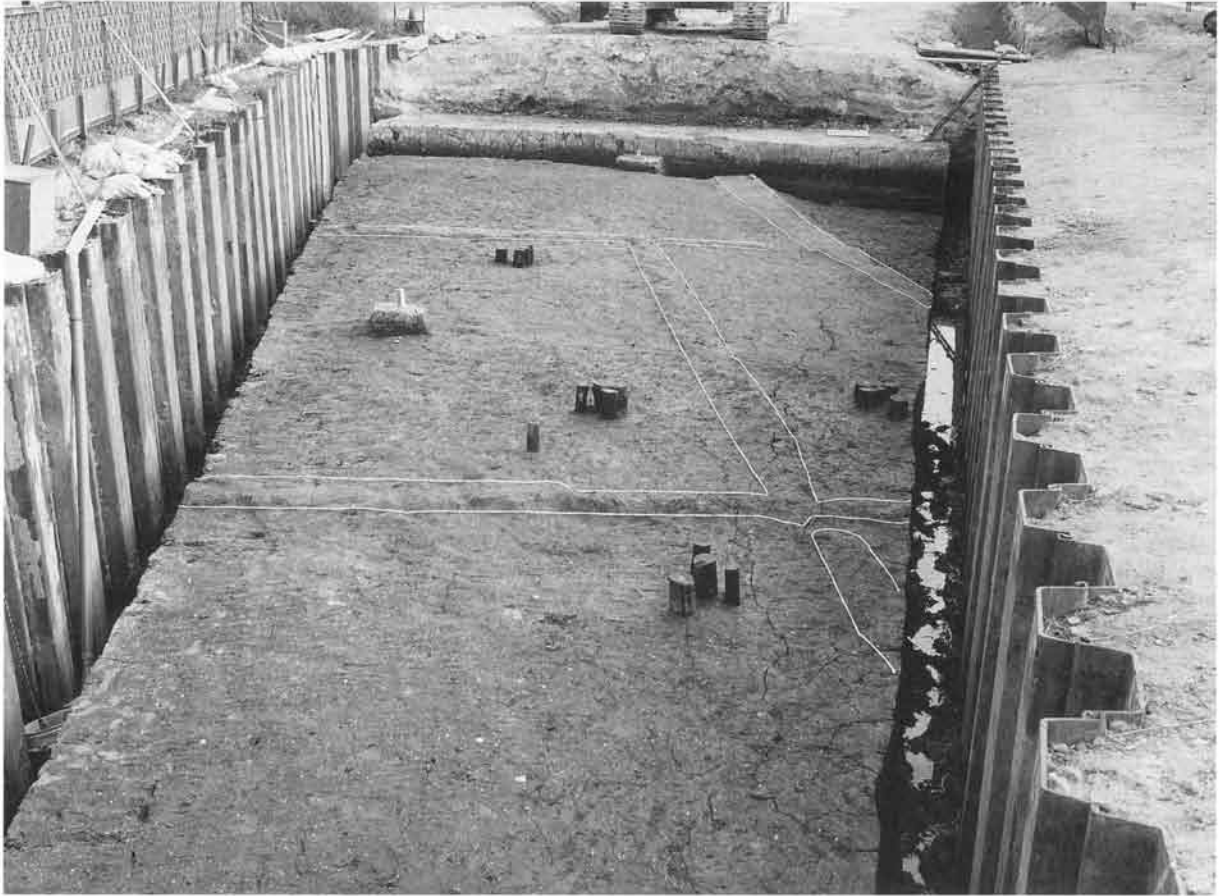
1・第2水田下層、S114、Po516出土状況（西より）



2・10区-Rライン、11層、W1出土状況（北より）



3・3～4区、第2水田検出状況（南より）



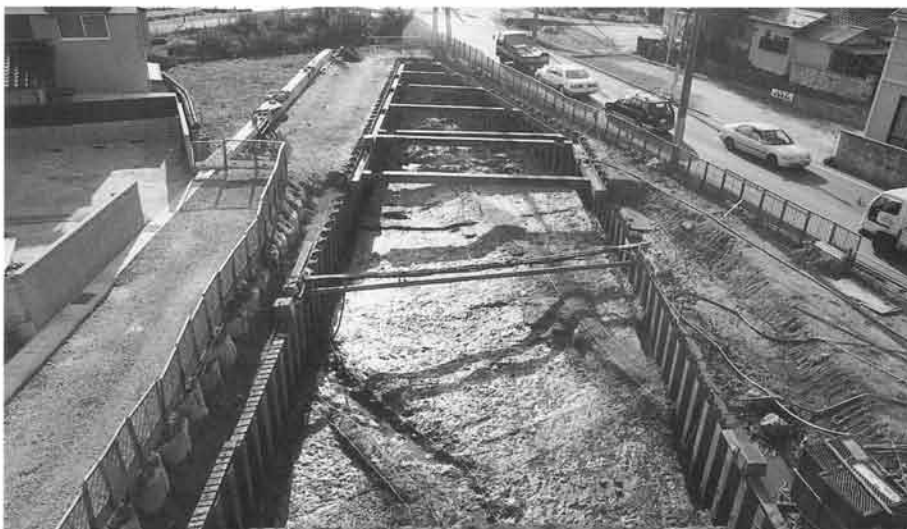
1・1～4区、第2水田（南より）



2・5～8区、第2水田と水路1（北より）



1・1～4区、第2水田（北より）



2・5～8区、第2水田と水路1（北より）



3・9～13区、水路1、水路2（北より）



1・第2水田、水田3と水田4間の畦畔（北より）



2・第2水田、水田4と水田5間の畦畔（東より）

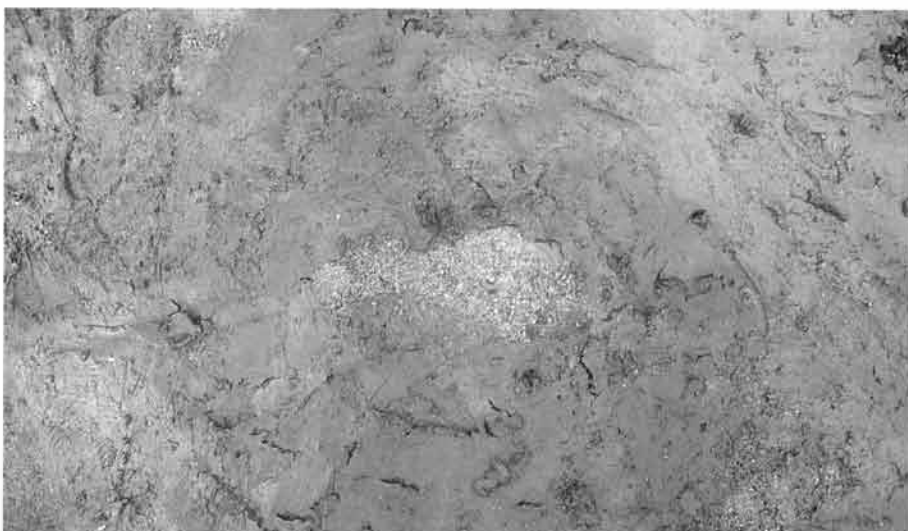


3・第2水田、2区の畦畔分岐状況（北より）





1・第2水田、畦畔のB-B'断面（東より）



2・水路1、足跡検出（東より）



3・水路1、足跡完掘（東より）



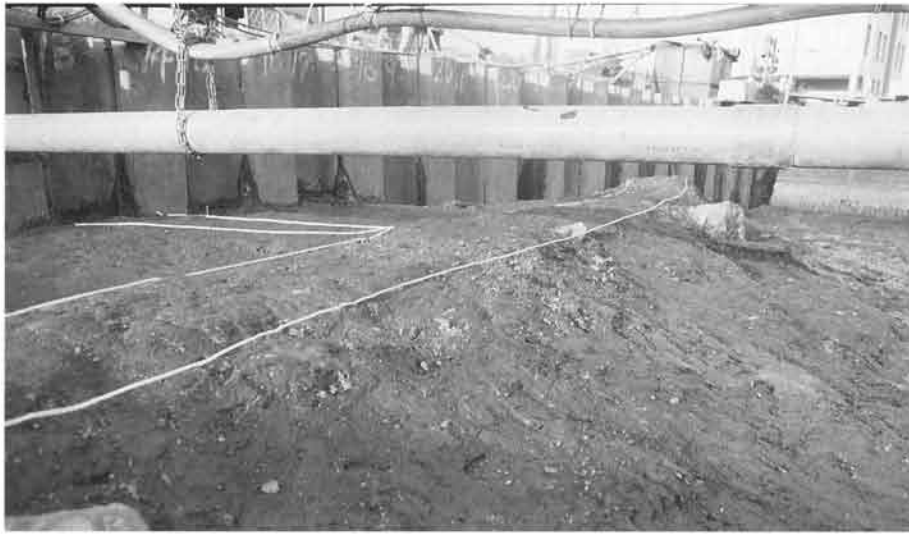
1・水路1、W13出土状況（東より）



2・大畦畔2、8ライン断面（南より）



3・5～8区、第2水田（南より）



1・5～8区、第2水田（南より）



2・8区、水路1と大畦畔2（南より）



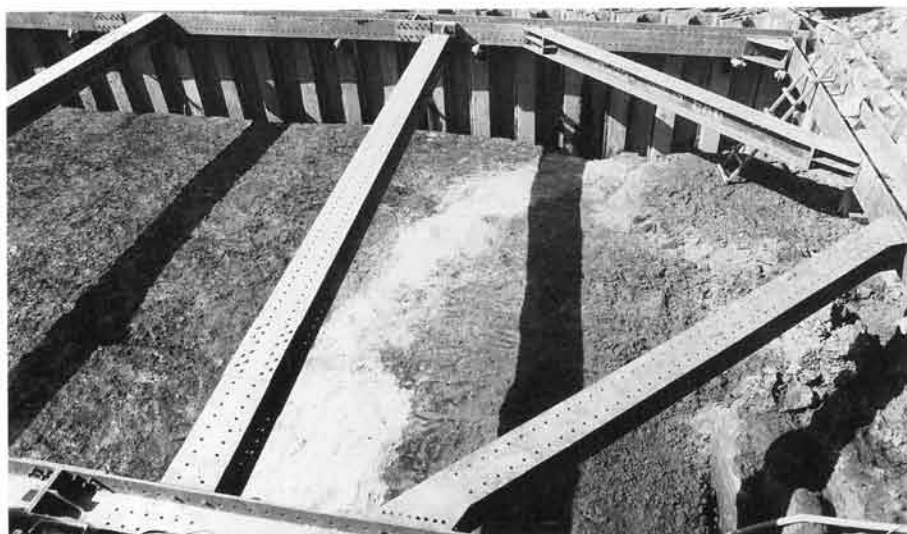
3・8区、水路1と大畦畔2（北より）



1・10区、水路1、大畦畔2（東より）



2・土手状遺構、サブトレンチの断面（東より）



3・水路2検出状況（東より）



1・水路2、完掘（西より）



2・4-1層調査風景（北より）



3・土坑5完掘（南より）



1・近世の暗渠状遺構（南より）



2・土坑6～土坑10、完掘（南より）



3・足跡群集3、検出状況（南より）



1・足跡群集 3、完掘（南より）



2・拡張区1 トレンチ、完掘（北より）



3・拡張区2 トレンチ、西断面（東より）



1・拡張区2トレンチ、完掘（南より）



2・拡張区3トレンチ、水路3の杭列（西より）



3・拡張区3トレンチ、石製水槽（東より）

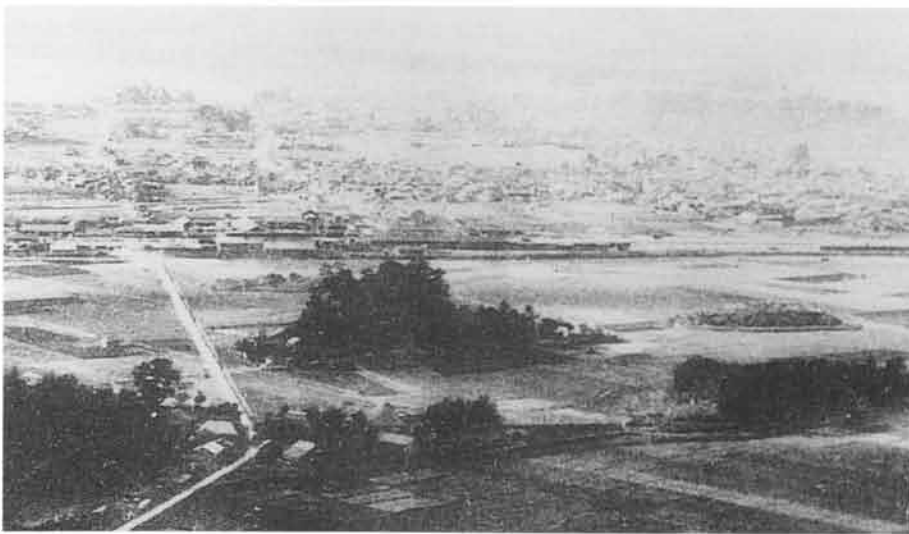




1・拡張区3 トレンチ、石製水槽の内部（西より）



2・拡張区3 トレンチ完掘（南より）



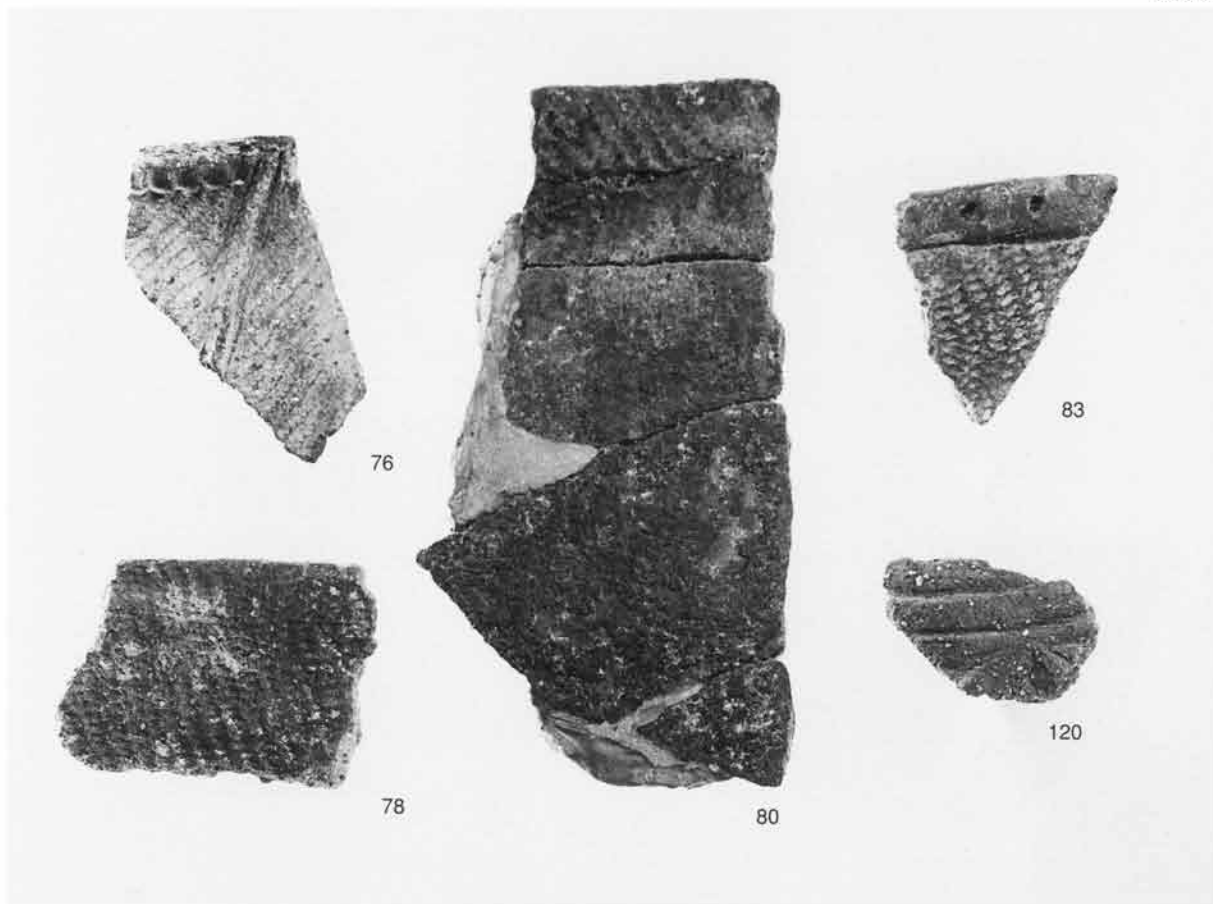
3・明治時代の目久美（中央の小山が足尾山）



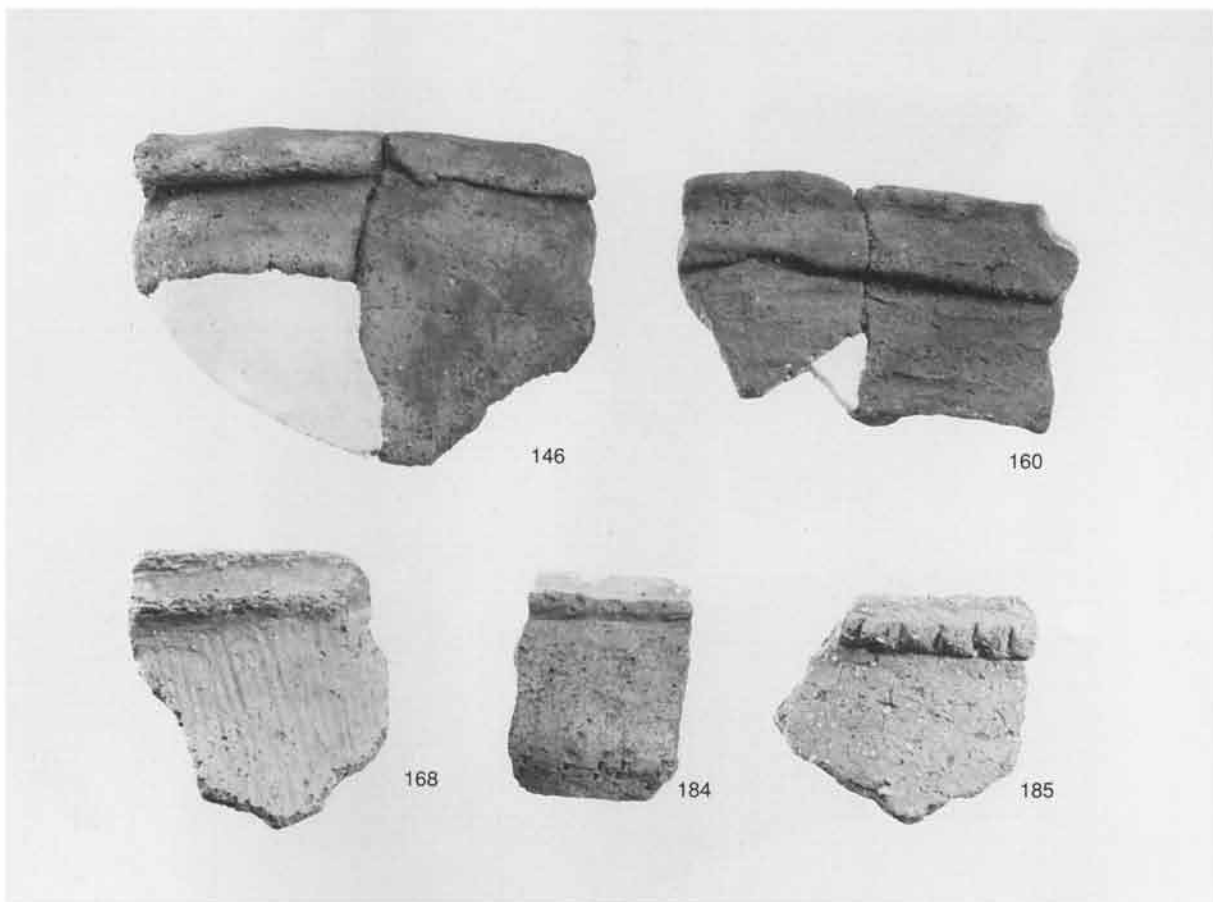
1・13層出土遺物



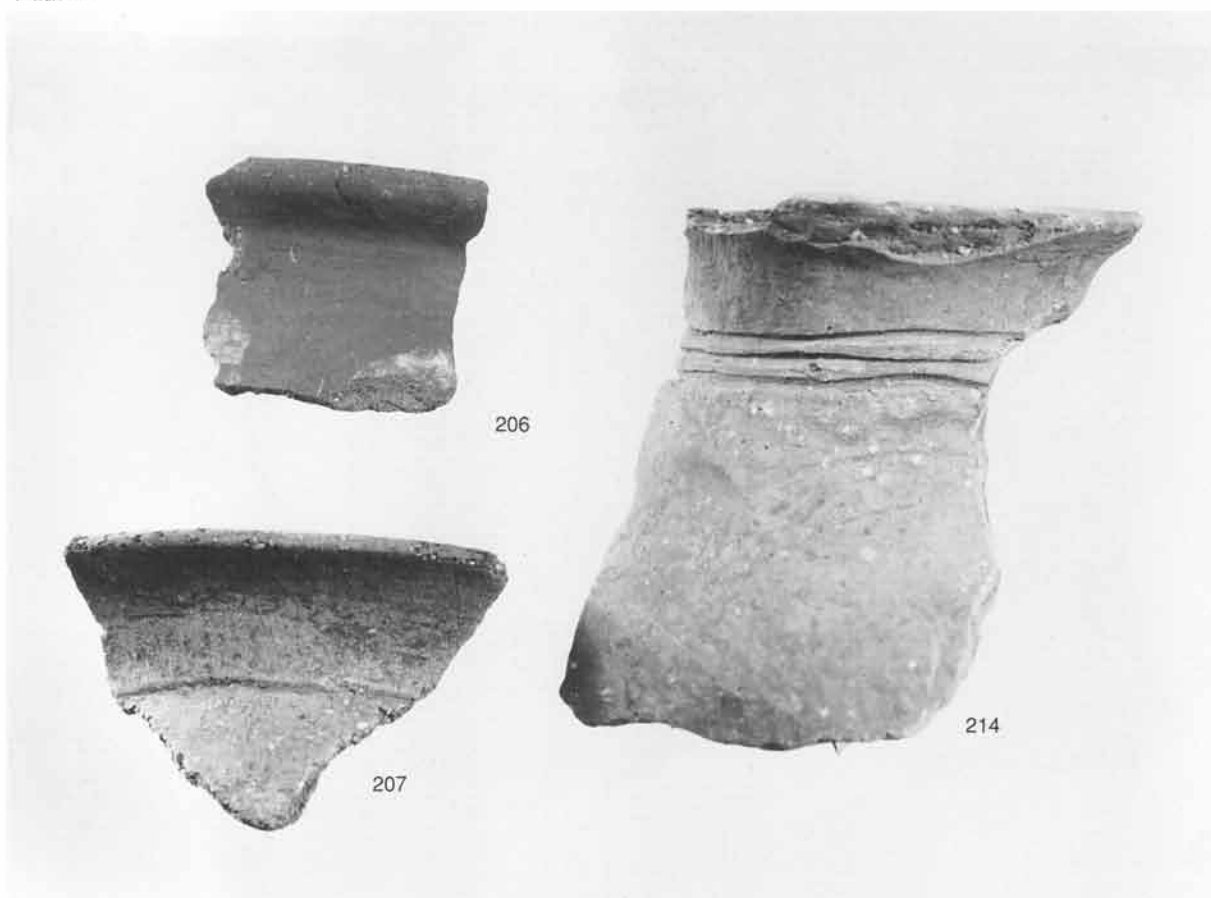
2・13層出土遺物



1・13層出土遺物



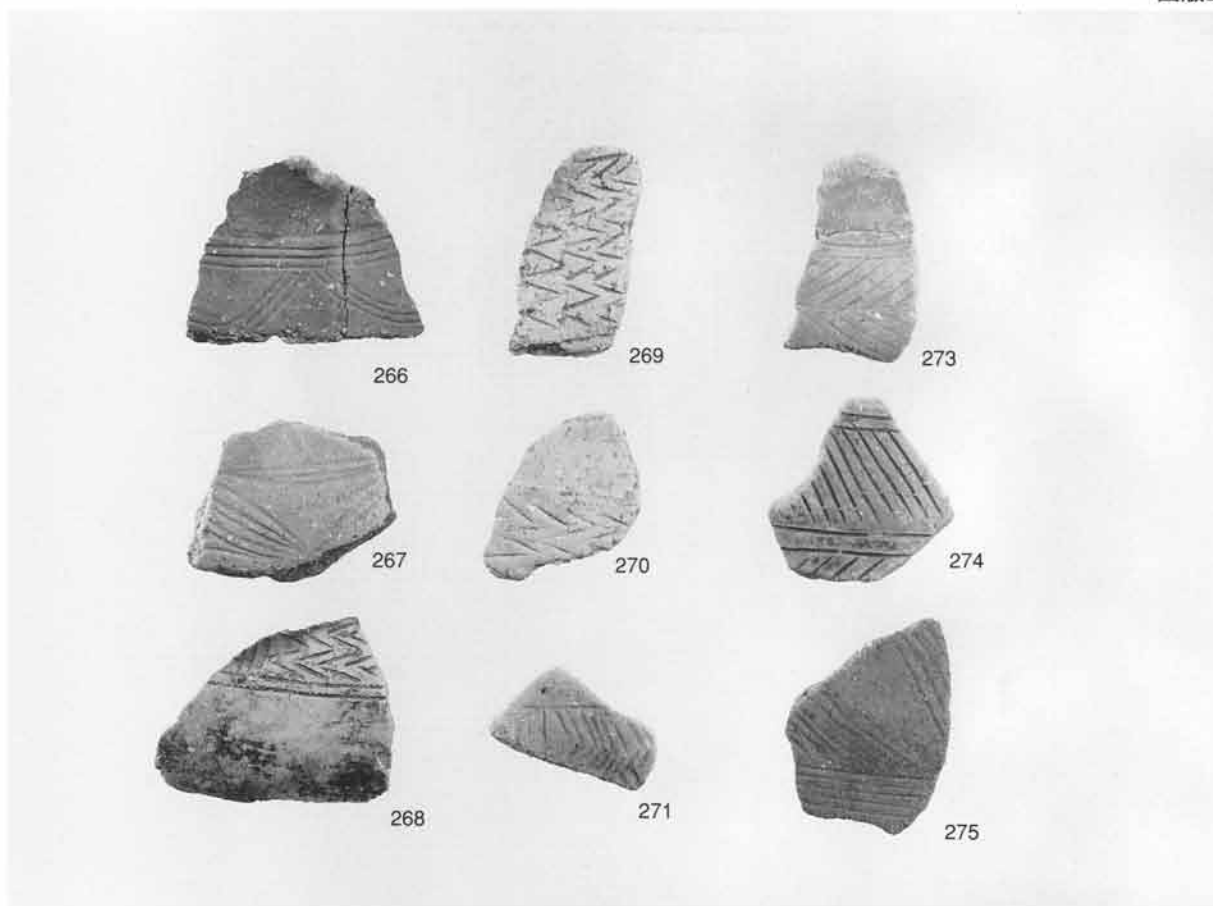
2・11層出土遺物



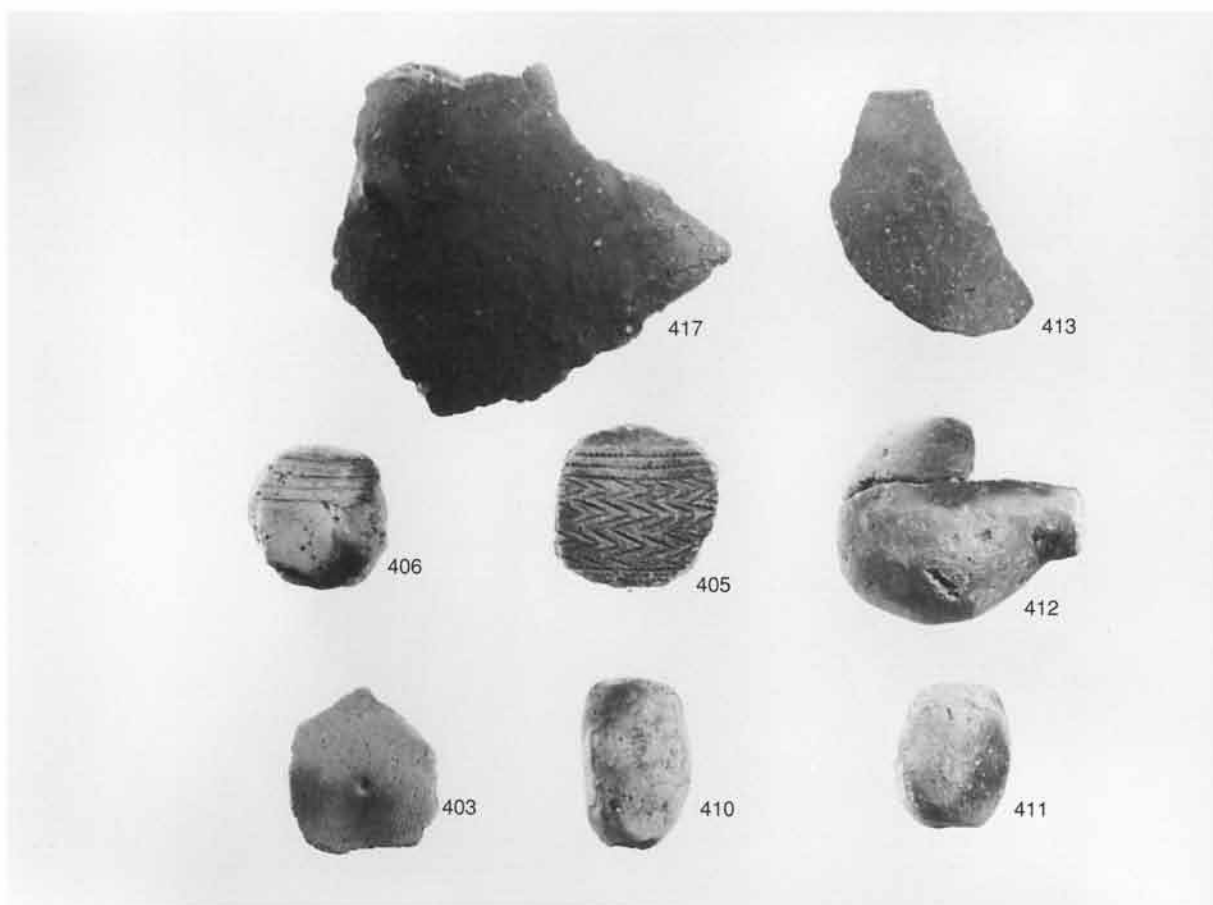
1・11層出土遺物



2・11層出土遺物



1・11層出土遺物



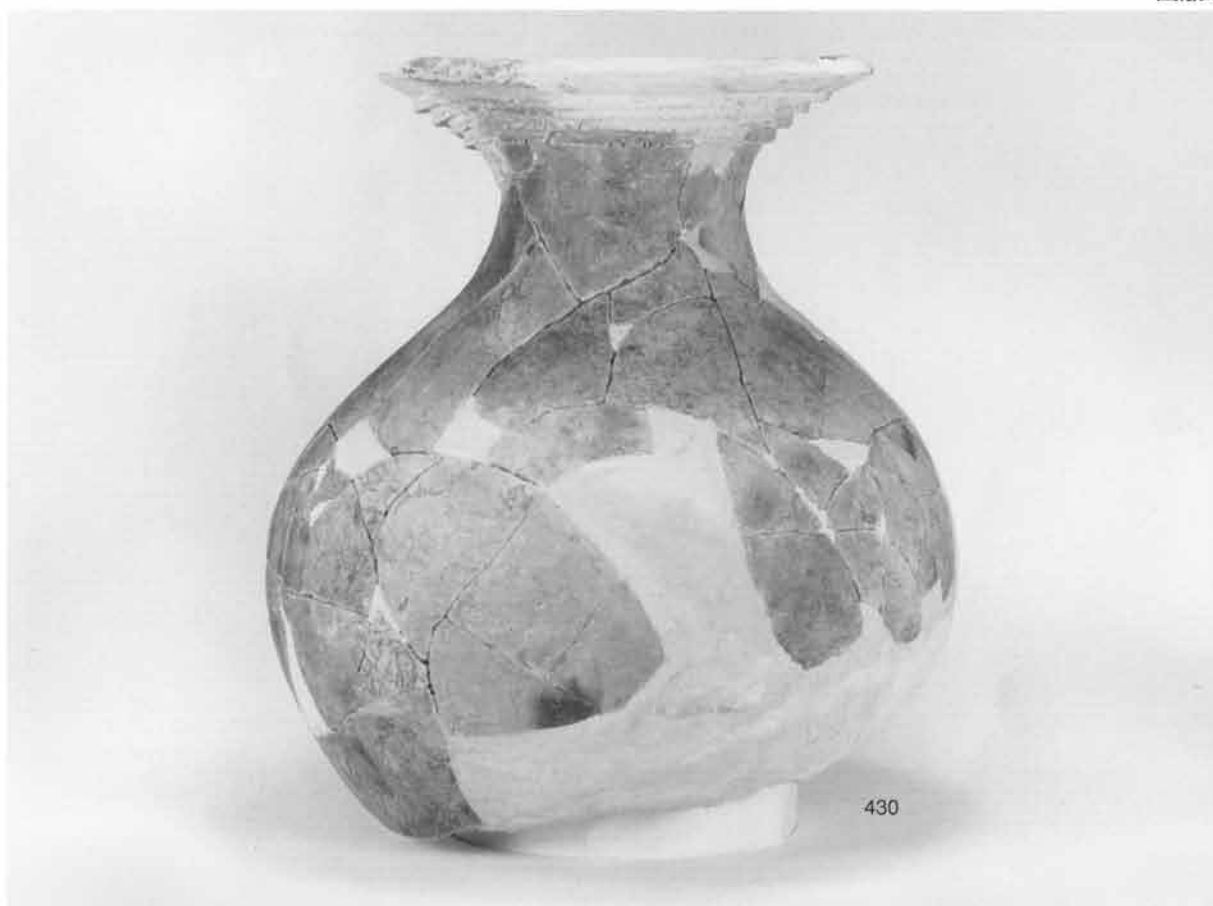
2・11層出土遺物



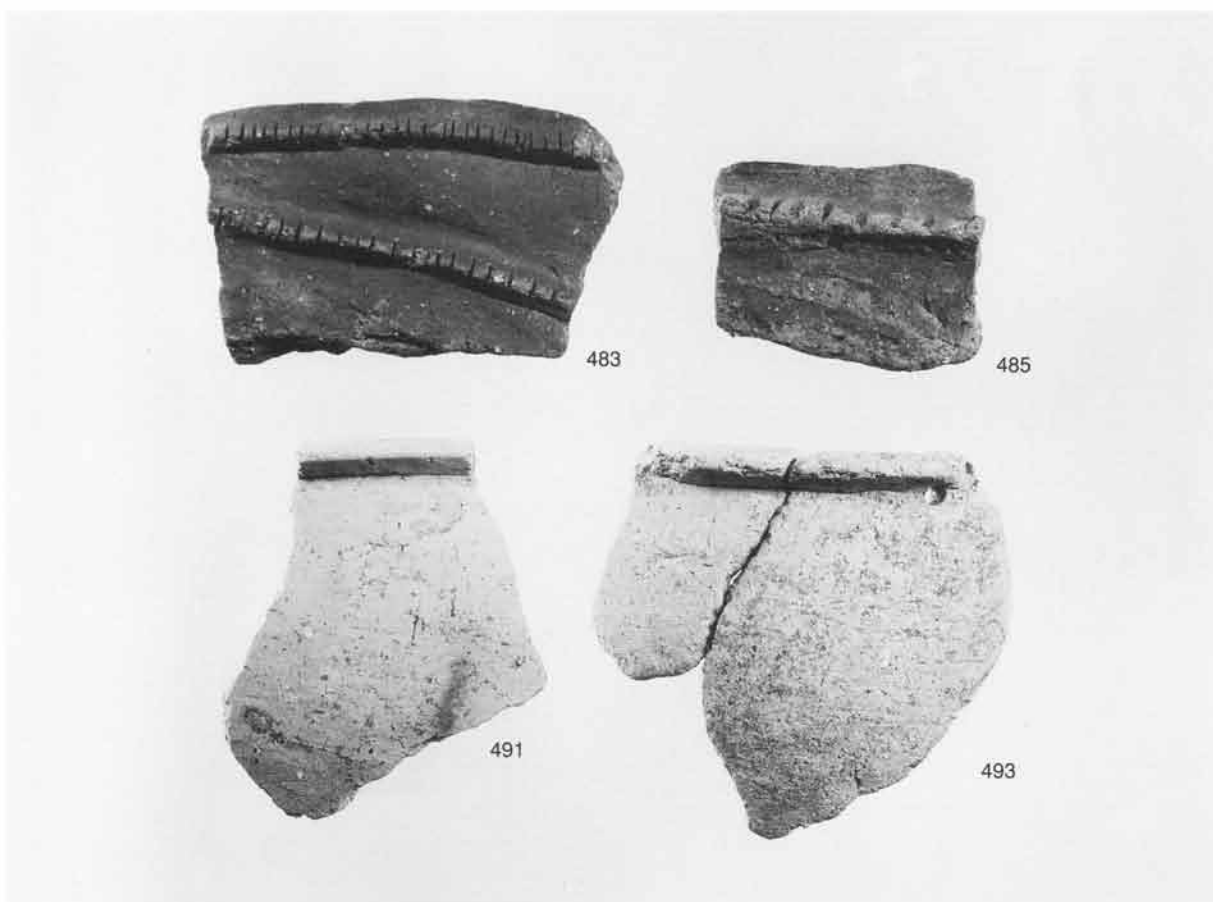
1・11層、水路1 出土遺物



2・第2水田下層出土遺物



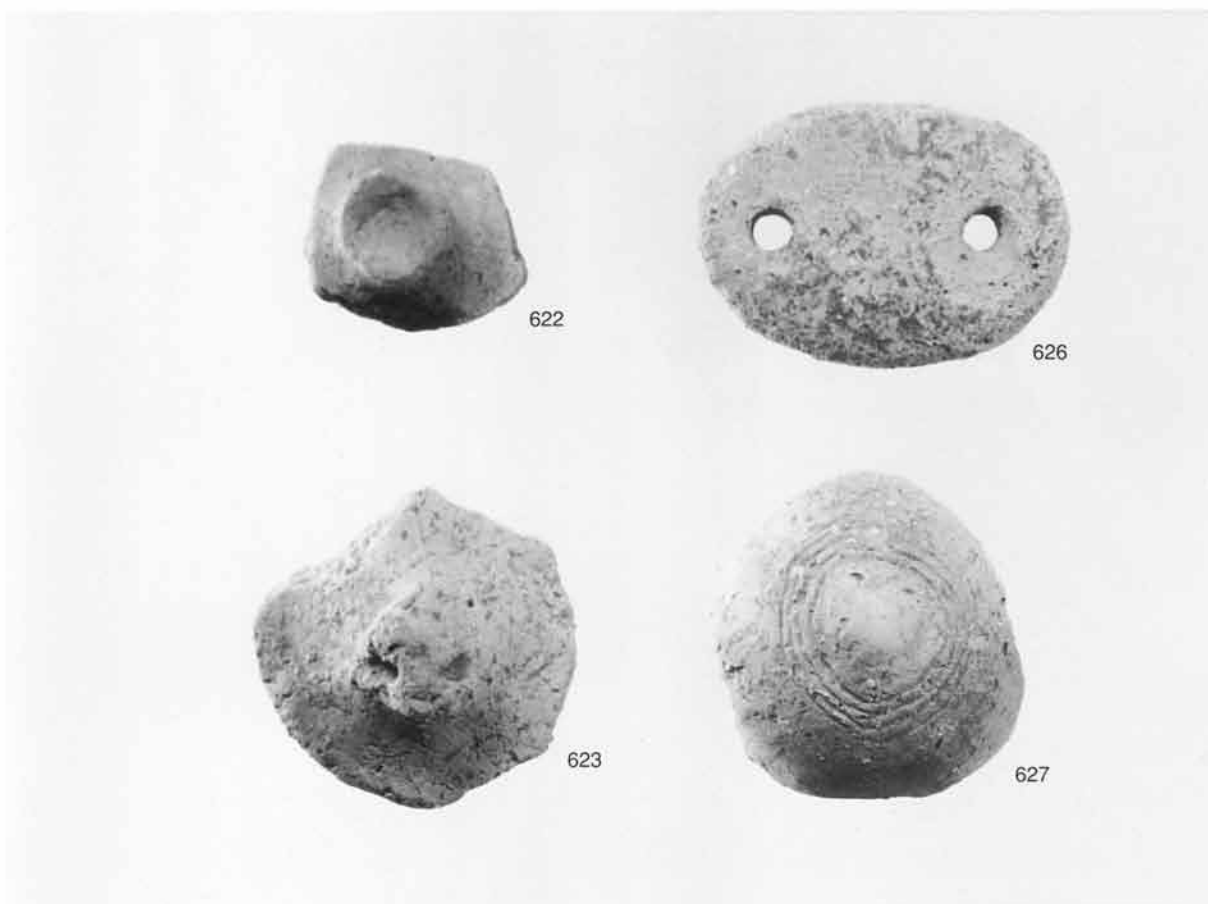
1・第2水田下層出土遺物



2・第2水田下層出土遺物

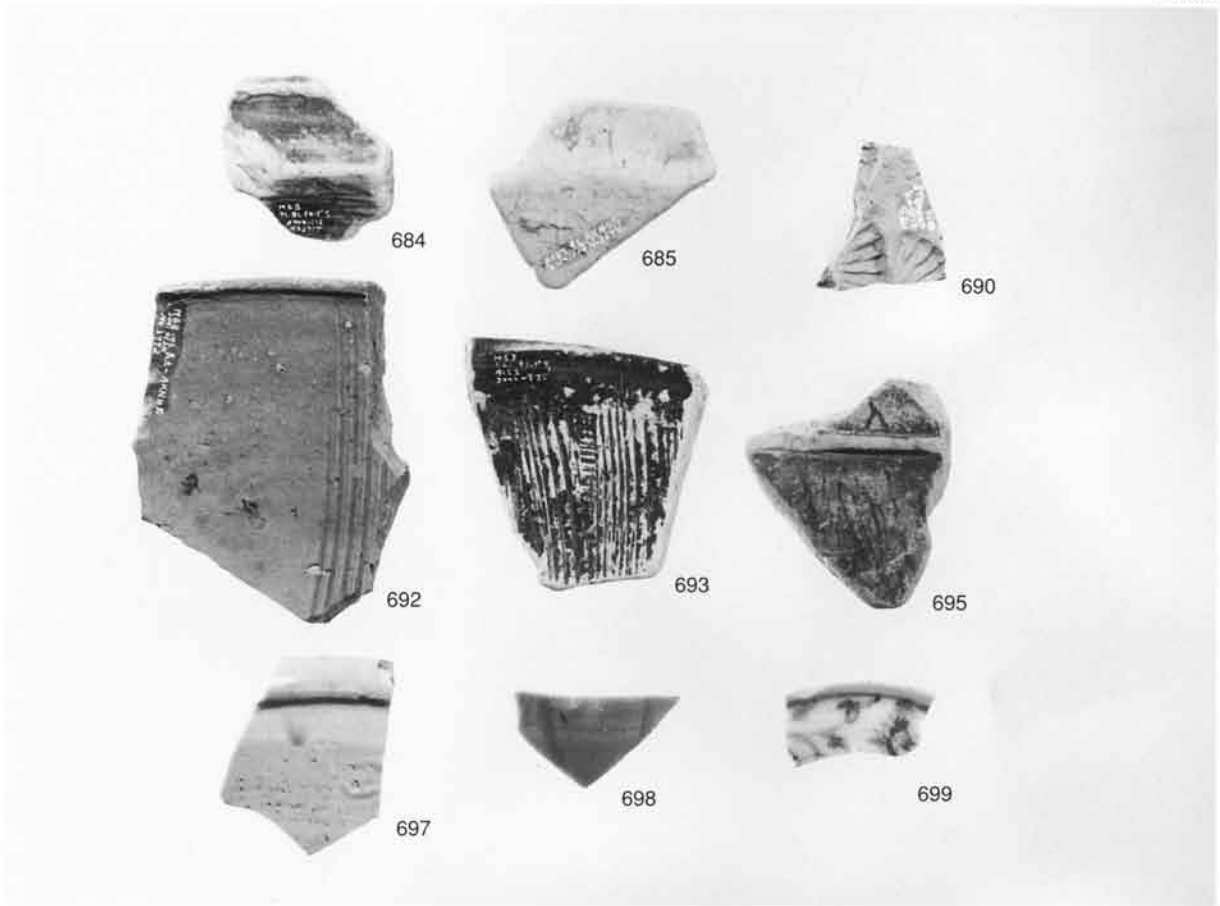


1・第2水田下層出土遺物



2・第2水田下層出土遺物

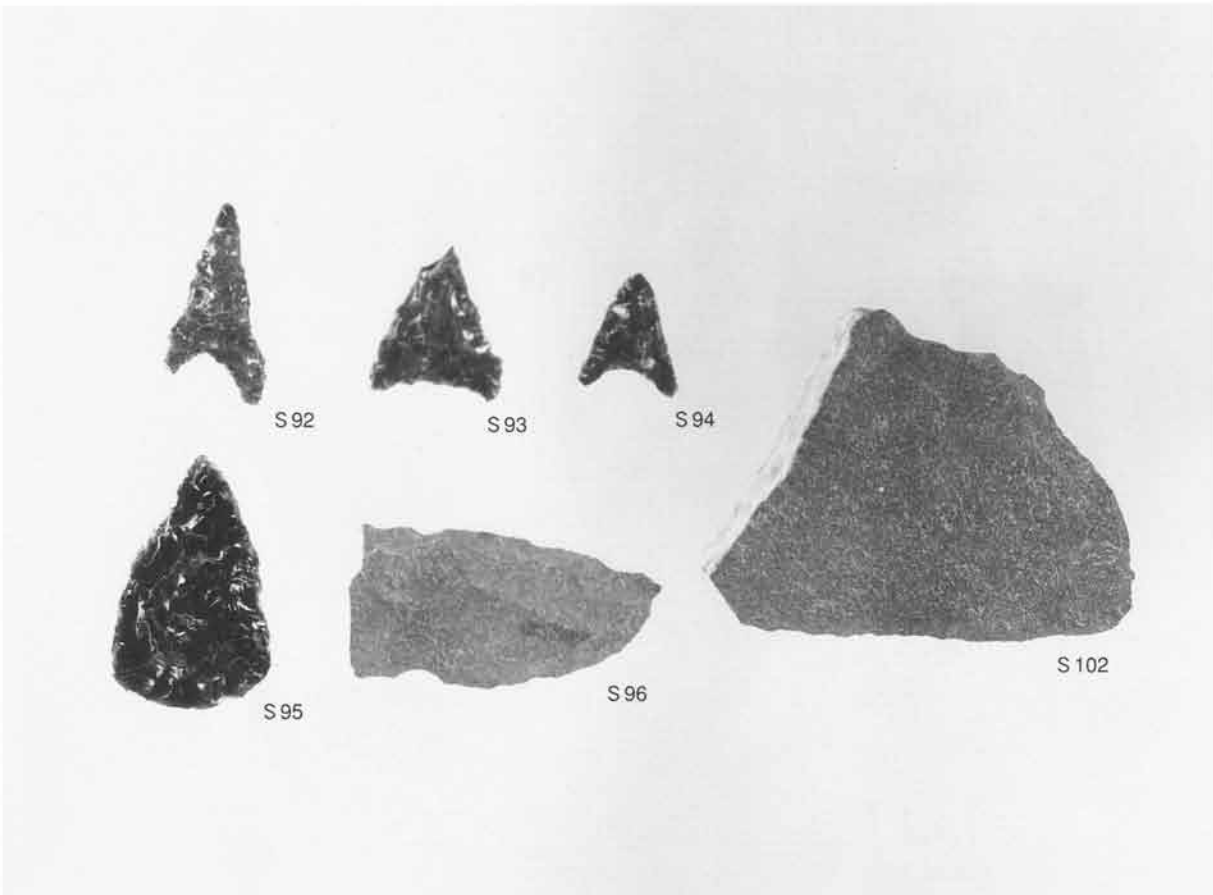




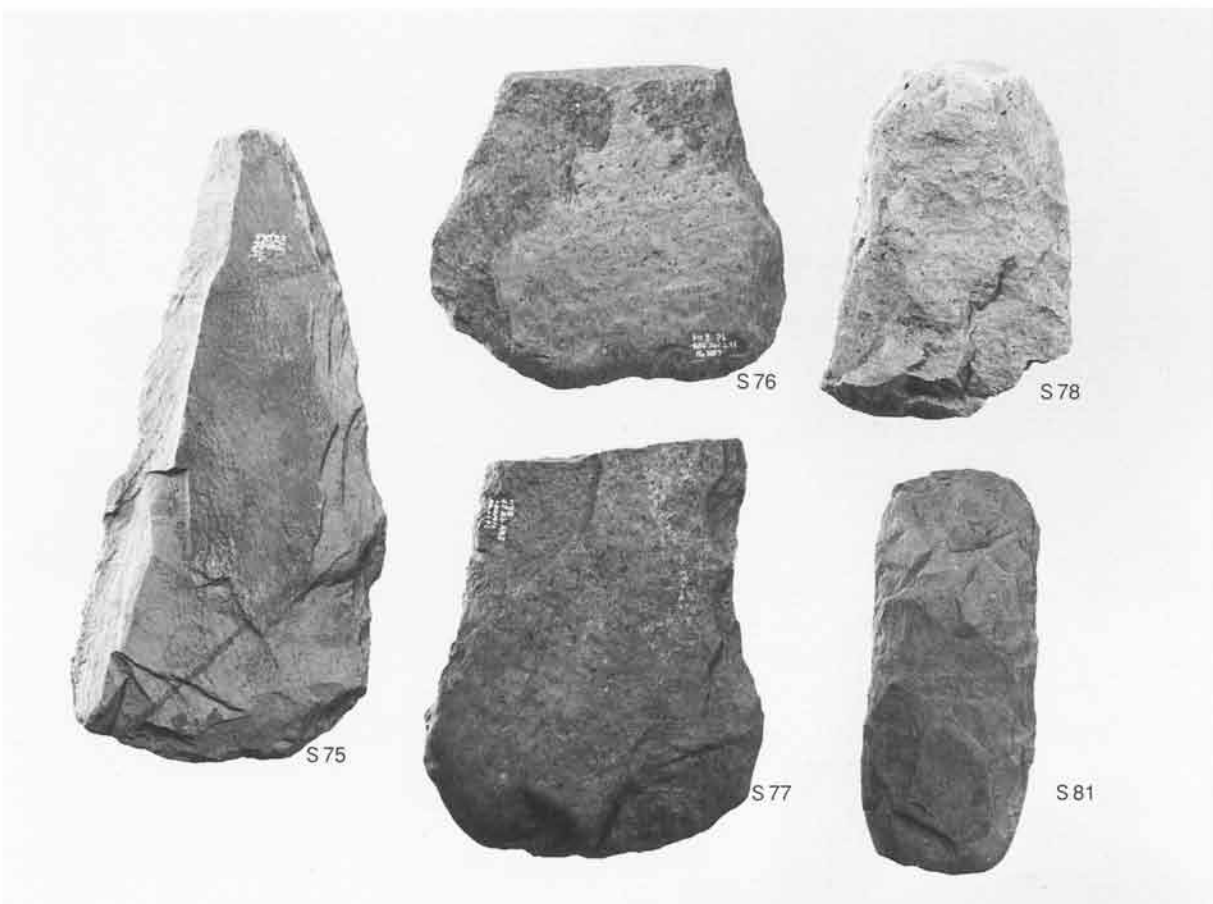
1・遺構外出土遺物



2・11層出土木製品



1・第2水田下層出土石器



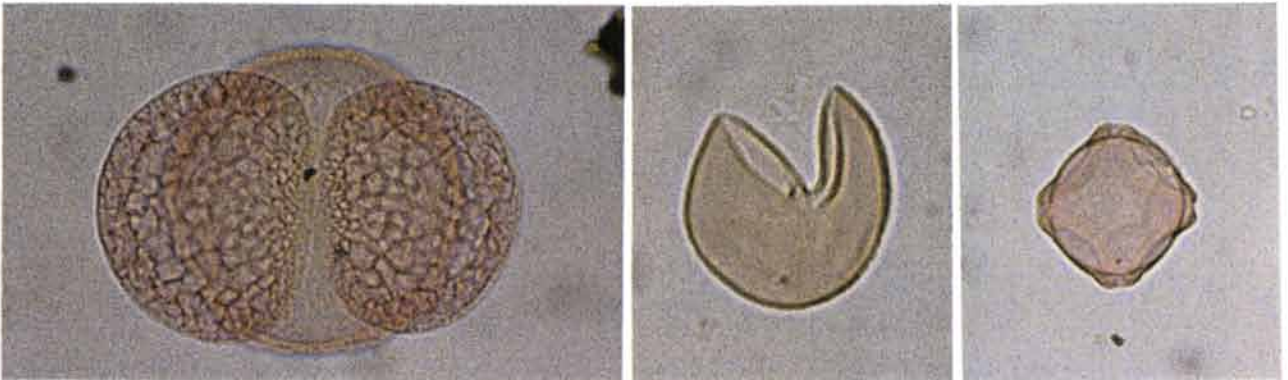
2・11層出土石器



1・11層出土石器



2・第2水田下層出土石器品



1 マツ属複維管束亜属

2 スギ

3 ハンノキ属



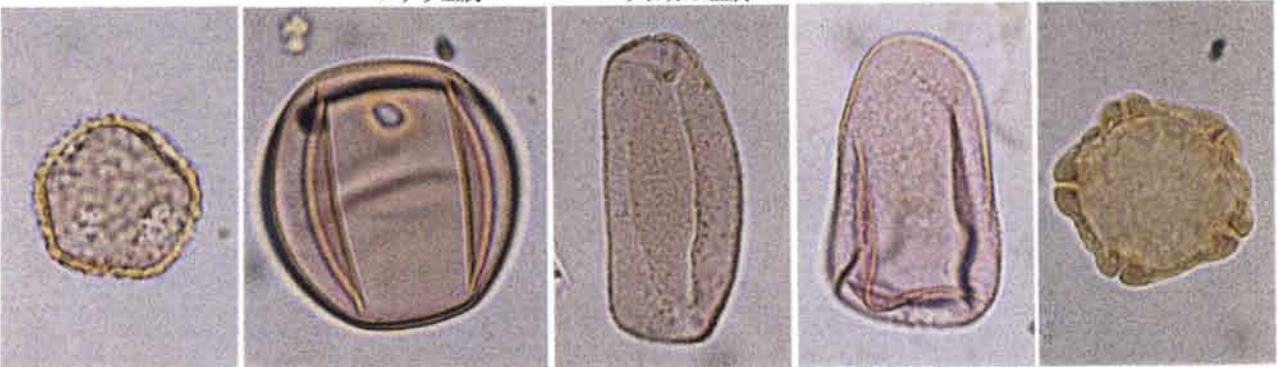
4 クマシデ属-アサダ

5 コナラ属  
コナラ亜属

6 コナラ属  
アカガシ亜属

7 ニレ属-ケヤキ

8 ツツジ科



9 オモダカ属

10 イネ属型

11 ミズアオイ属

12 カヤツリグサ科

13 アリノトウグサ属  
-フサモ属



14 ソバ属

15 ソバ属

16 アカザ科-ヒユ科

17 アブラナ科

18 ヨモギ属

10 μm



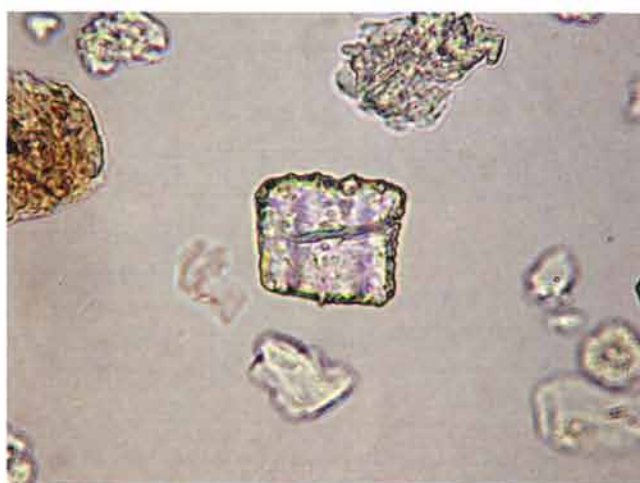
イネ  
試料6



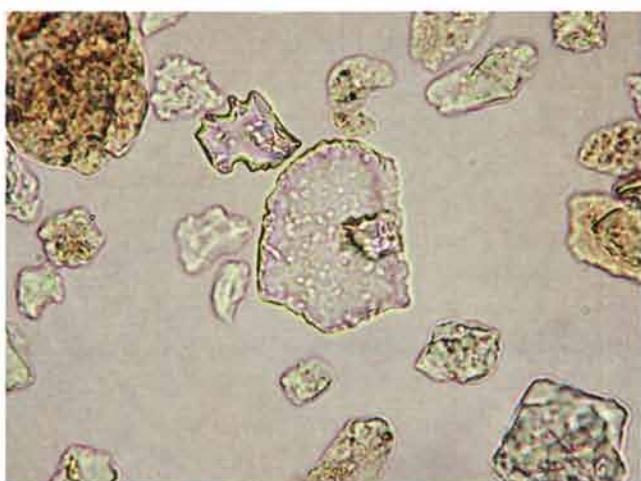
ヨシ属  
試料5



ススキ属型  
試料2



ネザサ節型  
試料5



クマザサ属型  
試料5



海綿骨針  
試料7

報告書抄録

ふりがな	めぐみいせきⅧ							
書名	目久美遺跡Ⅷ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書44							
シリーズ番号								
編著者名	佐伯純也							
編集機関	(財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1 TEL0859-22-7209							
発行年月日	2003年3月31日							
所在遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
めぐみいせき 目久美遺跡 第8次調査	とっとりけんよなごし 鳥取県米子市 めぐみいせき 目久美町	31202	2-13	35度 24分 1秒	133度 20分 34秒	20010530 ～ 20020323	800m <sup>2</sup>	道路建設
所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
目久美遺跡 第8次調査	生産遺跡 散布地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代中世 近世近代 現代	水田跡 水路 足跡 土杭		縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器木器 金属器 ガラス製品		縄文海進によって形成された波蝕台弥生時代の水田跡	

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書44

目久美遺跡Ⅷ

2003年3月

編集・発行 財団法人 米子市教育文化事業団

〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1

TEL 0859-22-7209

印刷 (有)米子プリント社